



Title	「観光創造学を考える」研究会録（全1冊）
Relation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会，「観光創造学を考える」研究会録．2013年11月23日，24日．北海道大学遠友学舎．
Citation	「観光創造学を考える」研究会録 / 北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会，2-182
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56558
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	conference proceedings
File Information	journal_cats_0.pdf



北海道大学観光学高等研究センター共同研究会

「観光創造研究会」 設立準備会

「観光創造学を考える」 研究会録



◆目次

開会にあたって～センター長挨拶	3
プログラム	4
研究会参加者（共同研究員紹介）	5
研究発表	6～143
1 石森 秀三	観光創造学へのチャレンジ ※研究会録には非掲載
2 西山 徳明	観光創造学体系化の試みと CBT/PPP 再考
3 敷田 麻実	地域資源戦略と観光交流による都市・田舎関係の再構築
4 宮下 雅年	現代社会と故郷 ～樺太『故郷』探訪ツアーにおける新しい『故郷』の像
5 山村 高淑	Japanese Contents Tourism and Pop Culture ～国際共同研究の立ち上げと今後の課題
6 池ノ上真一	観光を基軸とした地域のソーシャル・イノベーション
7 清水賢一郎	旅の時間論への助走
8 西川 克之	観光と近代～英国を例にとって
9 山田 義裕	観光創造の他者論～「他者との出会い」の観点から
10 臼井 冬彦	観光立国時代の観光の六次産業化と必要人材
総合討議	144～162
資料発表	163～180
11 内田 純一	日本の観光地域はサービス・イノベーションを創出できるか ～ディスティネーション管理論と サービス・イノベーション研究の統合に向けて

◆開会にあたって～センター長挨拶

観光創造研究会は、北海道大学観光学高等研究センターが主体となり、日本における観光研究のさらなる発展を目的に開催するものです。

今回は、2013 年度中に開催予定の第 1 回研究会に向けての「準備会」という位置づけです。2 日間にわたって、北海道大学国際広報メディア・観光学院の観光創造専攻で教鞭をとる先生方から、日頃の研究と観光創造学への貢献をテーマにしてそれぞれ発表いただき、2 日目の最後には総合討議の時間を設けました。この討議の時間で、今後の研究会の進め方について議論したいと思います。その内容は、研究会の名前はもちろん、どのようなテーマで今後の研究会を展開していくか、どのような開催形式にするべきかなどです。

この研究会には雛形となるものがあります。1999 年度から 2008 年度の 10 年間にわたって開催された「国立民族学博物館における共同研究会」です。合わせて 39 回開催されて、最初の 3 年間は石森秀三先生が座長を務められ、後半の 7 年間は私、西山が引き継いで客員教員として座長を務めました。日本中の観光に関連する研究者が一堂に会し、民博を舞台にして、あるいは南大東島、萩、白川郷などに赴いて、研究会を開催してきました。この 10 年間は、日本においては従来型にない観光研究が大きく展開されましたが、その中心に民博の研究会があったのではないかと考えております。その成果は、幾冊もの民博の調査報告書として著されています。本研究会は、基本的には民博の研究会を発展させる形で、場所を北海道大学という地に移し、日本の観光研究の中心として発展させていきたいと考えております。第 1 回研究会以降は、さまざまな研究者にご参画いただく予定です。なお本研究会には、北海道大学国際広報メディア・観光学院の博士課程の学生も共同研究員として参加しています。

各研究発表については、発表時間を 30 分、質疑応答の時間を 15 分設けています。質疑応答については、事前に指名させていただいたコメンテーターの方にコメントを短めに頂いた後で、残った時間でフリー・ディスカッションしたいと思います。また、本日は北海道大学観光学高等研究センター准教授の内田純一先生がやむをえない事情で欠席されていますので、資料発表とさせていただきます。コメントについては、学外からお越しいただいている、小林天心先生、真板昭夫先生、そして小林英俊先生から中心的に頂きます。

非常に盛り沢山な中身ですが、今後の観光創造研究と、本研究会の発展のために、皆さまどうぞよろしくお願いいたします。

北海道大学観光学高等研究センター長
西山徳明

◆プログラム

11月23日(土) (1日目)	13:15	開会挨拶と進行説明／共同研究員紹介	西山徳明
	13:30	観光創造学へのチャレンジ	石森秀三
	14:20	観光創造学体系化の試みと CBT/PPP 再考	西山徳明
	15:10	地域資源戦略と観光交流による都市・田舎関係の再構築	敷田麻実
	15:55	(休憩)	
	16:10	現代社会と故郷 ～樺太『故郷』探訪ツアーにおける新しい『故郷』の像	宮下雅年
	17:00	Japanese Contents Tourism and Pop Culture ～国際共同研究の立ち上げと今後の課題	山村高淑
	17:50	観光を基軸とした地域のソーシャル・イノベーション	池ノ上真一
	19:00	懇談会（於 遠友学舎）	
11月24日(日) (2日目)	9:00	旅の時間論への助走	清水賢一郎
	9:50	観光と近代～英国を例にとって	西川克之
	10:35	(休憩)	
	10:50	観光創造の他者論～「他者との出会い」の観点から	山田義裕
	11:40	観光立国時代の観光の六次産業化と必要人材	臼井冬彦
	12:25	(昼食)	
	13:30	総合討議「観光創造学と観光創造研究会のあり方について」	
	15:00	総括／散会	

◆研究会参加者（共同研究員紹介）



西山徳明

北海道大学観光学高等研究センター
教授

専門：建築・都市計画、文化遺産
マネジメント、観光開発国際協力



敷田麻実

北海道大学観光学高等研究センター
教授

専門：資源戦略論および地域ガバナンス



山村高淑

北海道大学観光学高等研究センター
教授

専門：コンテンツ・ツーリズム論、
観光開発論



白井冬彦

北海道大学観光学高等研究センター
特任教授

専門：観光ベンチャー、地域起業



内田純一（資料発表）

北海道大学観光学高等研究センター
准教授

専門：観光マーケティング、
地域ブランディング



池ノ上真一

北海道大学観光学高等研究センター
特任准教授

専門：地域イノベーション論、
地域計画論



宮下雅年

北海道大学メディア・
コミュニケーション研究院 教授

専門：北米地域等の地域文化研究



山田義裕

北海道大学メディア・
コミュニケーション研究院 教授

専門：メディアと
コミュニケーションの研究



西川克之

北海道大学メディア・
コミュニケーション研究院 教授

専門：社会文化学的観光研究



清水賢一郎

北海道大学メディア・
コミュニケーション研究院 准教授

専門：旅の思想論、中国メディア
社会文化（史）研究



石森秀三

北海道開拓記念館館長、北海道大学
観光学高等研究センター特別招聘教授、
北洋銀行顧問

専門：観光文明論



小林天心

亜細亜大学経営学部ホスピタリティ・
マネジメント学科教授、北海道大学
観光学高等研究センター客員教授

専門：国際観光論、観光マーケティング論



小林英俊

北海道大学観光学高等研究センター
客員教授、財団法人日本交通公社
シニア・V・フェロー

専門：観光原論、観光マーケティング、
エコツーリズム、CBT



真板昭夫

京都嵯峨芸術大学観光デザイン学科教授

専門：資源管理論、エコツーリズム論、
地域開発論



杓谷茂樹

中部大学国際関係学部国際文化学科教授

専門：マヤ遺跡観光における
イメージの生産と消費



遠藤 正

北海道大学観光学高等研究センター
客員准教授

専門：地域ビジネス、
スポーツツーリズム



花岡拓郎

北海道大学観光学高等研究センター
特任助教

専門：キュレーション論（博物館学）



麻生美希

北海道大学観光学高等研究センター
特任助教

専門：都市計画、特に世界遺産や
景観のマネジメント



松本秀人

北海道大学観光学高等研究センター
学術研究員

専門：観光文化論、図書館情報学



大迫理沙

北海道大学観光学高等研究センター
学術研究員

専門：観光社会学
（労働と余暇の視点を中心に）



高松郷子

北海道大学観光学高等研究センター
学術研究員

専門：パレスチナにおけるCBT、
観光と平和



石川満寿夫

北海道大学観光学高等研究センター
研究員

専門：観光資源としての農林水産業の
付加価値創造



平 侑子

北海道大学国際広報メディア・観光学院
観光創造専攻博士課程

専門：観光文化論（動物園研究）



鎗水孝太

北海道大学国際広報メディア・観光学院
観光創造専攻博士課程

専門：観光人類学、
コンテンツ・ツーリズム論

◆研究発表 2

観光創造学体系化の試みと CBT/PPP 再考

北海道大学観光学高等研究センター

西山徳明

現在の研究領域とプロジェクト

本日は、ご発表の先生方に 3 つの宿題を出して発表をお願いしています。1 つ目は、自分の取り組んでいる研究領域やフィールドについての短い説明、2 つ目は、自分の研究は観光創造学といかなる関係にあるのかについて、そして 3 つ目は、現在取り組んでいる研究テーマの中で、話題＝トピックスとして本日議論してほしいものを挙げる、というものです。自分の出した宿題ですから、私もそれに沿って発表します。

まず取り組んでいる研究領域についてです。私は工学部建築学科の出身で、民博（国立民族学博物館）の研究会では、当時まだ若い中で石森研究会に出るのは本当に恐れ多く、いつも隅っこに座っていました。ときどき張り切って発言すると、使っている言葉の定義がよくわかりませんか、どういう概念に基づくのですかというようなことばかりだったため、石森先生から後でよく叱られました。「なんで工学部の人間はそんな定義だの枠組みだのにこだわって、せっかく広がりつつある豊かな議論を狭い方向に持っていくのか、黙って聞いておれ」と。そういうことを言われたのを覚えています。しかし、これは我々工学系の使命でもあります。今日も石森先生からは、「ああ言っていたのにまた・・・」と思われるだろうと視線を感じつつ、本日の観光創造学体系化の資料（図 2）も書いている次第です。

私自身の研究テーマは、資料にもあるように、文化財、町並みなど、多種多彩の文化遺産のマネジメントに関するものがメインです。たった今やっていることを羅列しているだけですが、1 つは文化遺産マネジメントに直接関わることで、世界遺産があります。そこに並べて書いているよ

うな遺産を、どう価値づけたら世界遺産として説明できるかということを、実際に相談を受けてやっています。阿蘇の文化的景観や北海道の北の縄文遺跡群に関しては、遺産そのものの全体の価値づけについて、そして長崎や九州・山口、岩国に関しては、構成資産となっている地域のマネジメントや価値づけの相談に部分的に関わっています。それから、世界遺産にすでになっているところの計画をつくるという話では、今日出席している麻生美希先生と共同して、白川郷の世界遺産マスタープランというものを作りましたので、回覧させていただきます。

同じように、JICA との共同で取り組んでいるヨルダン、エチオピア、ペルー、フィジーの事業でも、すでに世界遺産になったもの、あるいはこれからなるもののマネジメント計画や観光開発計画を作るということを専門として依頼を受けています。

あるいは、世界遺産だけではなく日本の文化財保護法に基づく文化的景観の調査研究についても取り組んでいます。これについて今日はお話しできませんが、お手元の資料に書いてあるとおりです。それから文化庁で、文化審議会の企画調査会という文化財行政の方針を決める特別な会議を、石森先生の座長の下でやらせて頂いたときに、発議したものが、その後「歴史文化基本構想」という文化財行政の政策になっておりまして、この施策を展開している地域に対してアドバイスや調査をしています。それから、リビング・ヘリテージの保護や観光マスタープランの作成ということも、白川村以外にも、平取町や美瑛町でも今後、観光創造専攻として学生さんたちも巻き込んでやっていこうと思っています。ここまで観光の話があま

り出てきませんでしたが、文化遺産とツーリズムの関係ということでは、民博の研究会の最後に報告書が出ています。私は 1992 年、民博の共同研究会でエコミュージアムという概念に出会いました。それまでずっと地域で「これがまちづくりだ」と信じて一生懸命にやってきたものが、このエコミュージアムというアイデア、概念に結実していると思い、これを一生懸命に勉強しました。その概念を、ここに書いているような地域で今まさに展開する研究をしています。そして後ほどお話しする CBT/PPP の話です。それから地域の景観、これも私の 90 年代からのメインのテーマですが、景観の保全と形成、近年では景観法という法律に基づく、景観計画の策定と運用に関して研究をしています。それから CATS に来てから取り組み始めた研究として、まさに石森先生が提唱された観光創造士、及び観光認証制度に関して、観光庁や文部科学省から北大が受けている期待に何とか応えたいと考え、慣れない分野ですが CATS の先生方と協力してやっているところです。以上が、私が現在行っている研究の全体像です。

観光創造学体系化の試み

～観光イノベーションと観光デザイン

続いて、ここからは話すのが恐ろしい内容なのですが、今日奇しくも、石森先生から、観光創造学とはある意味、人間観光創造学、あるいは地域観光創造学、基礎観光創造学／応用観光創造学があるのではないかということ、それから観光創造とは何か、innovation か invention か revelation かというお話をいただきました。私はずっとこのことを考えていて、今日少し、この 1 年間で閃いたこと、荒唐無稽かもしれないし的外れかもしれませんが、ぜひ皆さんにお話をして叩いていただきたいと思います、勇気を振り絞ってお話しします。実は、観光創造学を建築学とのアナロジーで考えると分かりやすいと思い立ちました。お話ししたように私は建築学出身ですが、建築学は工学の中でも最も分野が広くてわかりにくいと一般的に思

われています。土木学とか農学であればわかるのですが、建築というのは、建物を建てるといえばそれだけですが、実は建物を 1 軒建てるというのは、いろいろと大変なことです。その建築学というものと観光創造学というのは、実は言葉の発想として似ているなと考えました。まさに形態が似ていると思うのです。建築学というのは、建物（たてもの）学とは言わず建築（けんちく）学と言います。建築学というのは建物を築造するための学問体系を指し、その意味で言うと、観光学という言葉がこれまで tourism study の訳語として使われてきましたが、石森先生がご提唱の「観光創造学」という言葉を見てみると、これはまさに「観光」を学問するのではなく「観光」をいかに「創造」するかを考える学問なのですから、建築学と似ているかもしれないと思ったわけです。

そこで次に考えたのは以下です。科研費に今年から大変嬉しいことに、観光学という分野が種目に入りました。これは大変なことです。しかし資料の表を見るとわかるように、並べられたキーワードを見ると分かりにくいですし幅が狭くなっています。もちろん観光学は出来たばかりですから仕方ないのでしょう。一方で建築学会というと会員で 15,000 人くらいいます。それに比べると規模が小さいのは仕方ないのですが、比べて見てもらいたいのは書かれている内容です。建築というのは、一番上に建築構造・材料という細目があって、建築環境・設備、都市計画・建築計画、建築史・意匠とあります。大きく分けると、建築学というのは、建物が壊れないように、壊れて人を殺してしまうことがないように、構造力学という建物の構造を考える分野がまずあります。次に、建物自体を設計する時は、一番下の方にある建築計画とか都市計画が必要です。建てる建物は都市のどこに位置するのか、建つ建物はどのような姿であるべきかを考える、言い換えればどんなデザインであるべきで、それは地域や都市の文化の中にどう表出していくべきかを考えるのが、下の意匠とか建築史に当たる分野です。要は、下の 2 つを総称

して計画分野と呼び、この分野で設計されそれを構造という分野が支えて具体的な安全性を確保する。そして環境というのは何かというと、建築・環境・設備というのは、光とか音とか熱とかを設計します。要するに、人が住むためのより快適な空間をつくる学問分野です。こういう分野ごとの役割が確立し、この3つの分野が寄り集まってはじめてひとつの建築ができるのです。これが欧米に行くとは異なります。お話しした計画という分野がいわゆるアーキテクチャー（＝建築学）という学問分野であって、それ以外の構造と環境の分野はエンジニアリングであると分類されますが、日本ではこれを全体としてまとめて1つの学問体系として扱い、これを建築学と呼びます。これは非常にわかりやすいのです。見事に分担されていて、専門家も綺麗にこの枠ごとに全部別れます。ところが一方の観光学のキーワードを見てみると、(1) ツーリズム（観光学原論）、(2) 観光資源、(3) 観光政策、(4) 観光産業、(5) 地域振興、このあたりはまだ分かるのですが、(6) 町づくり、(7) 旅行者、(8) リゾート、(9) 景観、そして果ては(10) 世界遺産です。これは誰がどういう風につくったのかわかりませんが、これではどうすれば観光学の体系化につながるのやらさっぱりわかりません。そこで体系化を観光創造学の名のもとにやってみようと思いはじめたのがこの1年くらいです。次の資料(図1)は、先ほど真板先生が言及された石森研究会から10年間続いた民博共同研究会の初期の頃に、SER（国立民族学博物館調査報告）の中で私が提示した自律的観光の枠組みです。今見るとかなり恥ずかしいもので、いかにも工学的なところも多々ありますが、一応はここからスタートしているということをご理解頂けます。私は当時、観光という活動をデザインするということは、観光客を迎え入れる空間を設え、そこで演出（パフォーマンス）を準備し、そのアクティビティが展開する空間に人を誘致することであると思っていました。これは別に間違っていたというわけではなく、この枠組みはいろいろな論文に引用され、とくに

批判的なコメントはなく、結構使えたと評価されています。またこの枠組みを、地域の観光の発展状況の評価フレームとして使えるという意見も頂きました。いまだに引用してくれる方もあります。しかしやはり今見ると言葉も古いと感じます。この試案を示した後に、さらに民博の共同研究会で学び、様々なフィールドで勉強したことで視野が広がり、さらに観光学高等研究センターにきてからの3年半の学びから、私の視野の中に見えていた観光すなわちかつての「自律的観光の枠組み」は、本来の観光あるいは「観光創造学の体系」という世界の半分にしか過ぎないということがわかってきました。今回提案する資料(図1,2)で言うと、「自律的観光の枠組み」の部分は、図の下方の「観光デザイン研究」に相当します。つまり従前の空間設計が「資源マネジメント」、演出設計が「インタープリテーション」、そして誘致設計が「観光マーケティング」という言葉に置き換えられています。もちろん、ここでは説明されていませんが、その内容も当然、拡大、改変されることになります。

私はよく石森先生に、「観光創造って英語でなんて正式には言うのですか」と問うことがあります。すると「いや、ちゃんと決めとらんな……, creation ではないし、やっぱり innovation かな」というような返事が返ってきます。今日のお話まさに、innovation だけではない、invention や revelation もあるということでした。同時に池ノ上先生の地域イノベーション研究の博士論文に関する議論に参加していくうちに、たぶん innovation という考え方のもとにある理論的な研究と、応用研究というか、ある程度確立した理論や方法論、モデルを地域で実際に展開し観光をつくりだしていくような研究と、2つの大きな流れがあるように思えます。ここでは、前者を「観光イノベーション研究」、後者を「観光デザイン研究」としています。この「観光イノベーション研究」というのは、石森先生の言葉で言えば「基礎観光創造学」であり、すでにある地域の社会や資源、仕組などを、先ほど

「新結合」というお話がありましたが、新しく結びつけてそこに革新を見出す理論研究です。一方の「観光デザイン研究」というのは、石森先生の言葉では「応用観光創造学」です。下の3つは、私は creation ではなく design という言葉を使っていますが、意図された方法論をもってモノや空間をつくりだしていくというのは、まさにデザイン行為であると考え、今回は「観光デザイン研究」という名前を提案しました。

まず、イノベーション研究には、小分類として、一番上に、まったく偶然ですが石森先生が最後に「乞うご期待」と言われたライフスタイル・イノベーションを入れました。「ライフスタイル・イノベーション研究」と名付けています。それから「ツーリズム産業イノベーション」と「地域イノベーション」と提案しました。そして研究テーマというところ書いているキーワードは、実は観光創造専攻ご担当の先生方のシラバスを盗み見て、そこに書かれている先生方のキーワードをなるべくもれなく取り出し、振り分けたものです。もちろん当てはまるキーワードが全く無いというのも困るので、私が勝手に追加しているものもあります。たぶん観光創造の先生方は、「あ、これは自分のキーワードだ」と一目でわかると思います。これを見ると、ずっとイノベーション研究の方が充実しています。ただし、ツーリズム産業イノベーションについては、私が追加したものはあまりありません。それからインタープリテーション研究も、エコミュージアムなどがありますが、言葉として観光創造の先生方のキーワードからはあまり見いだせませんでした。一方で、ライフスタイルに関わるもの、地域イノベーションに関わるものは非常に充実していることがわかり、我が観光創造及び CATS の得意不得意の分野がわかってしまいます（笑）。私の考えでは、個々の研究者が、この観光イノベーション研究と観光デザイン研究のどちらかに所属しているということではなく、常に両方を行き来する方が学問の発展によいと考えます。一人の研究者がどちらかにいるというわけではな

くて、イノベーション研究、理論研究をやりながら、それを地域なりフィールドに応用します。デザイン研究の中で共同研究などしながらやっていて、それがまたイノベーションというか基礎理論に戻ってき、それが社会に還元されていったときに、右側の方に進みます。たとえばライフスタイル・イノベーション研究というものは、社会に対して何を還元できるのかということ、新たな旅、ツーリズム、ライフスタイルの提案や、新たなコミュニケーションの提案、人生や文化や社会の新たなものの見方の提示、それからツーリズム産業はここに書いてあるようなもの、そして地域イノベーション研究は、まさに観光創造士制度の設計や、地域における新たな観光マネジメント組織の提案やベンチャー・モデルの提案ということになり、こういうものが右側へ進み、観光政策・都市政策の提言につながっていくのではないかと考えられるわけです。

そして下の方、従来私が観光活動設計と呼んで考えていたようなものは、ここにあるように資源の価値の発見、評価、マネジメントが相当し、先ほど石森先生が言及された、invention あるいは revelation、発展というものが出来るかもしれない。こうやっていろいろなシステムや制度、それからハード的な環境を、どうすべきかということを提案していくことも社会への還元と思います。インタープリテーションや観光マーケティングにおいても、まだ考えきれていないのですが、あくまでもここでは枠組みないしフレームとして見ていただきたいということで、こういう社会への還元の方法があるのではないかとというのが、私のアイデアです。つまりこのへんは、観光地域づくりを具体的に支援するというかたちで社会へ還元していくことなのではないかと考えています。これが、私の研究と観光創造学との関係を説明する代わりの提示です。今回はこういう枠組みを提示させていただき、これはこんなことが漏れているのではないか、あるいは重複しているのではないか、言葉がおかしいのではないかなど、今からの議論の

ネタとして皆さんに議論いただけないかと思っています次第です。私はこれまでずっと、石森先生や皆さんと議論していく中で、自分は観光研究のどこにいるのだろうと悩んできましたので、それを無理やり今回はこういう枠組みで考えてみたわけです。

CBT, PPP の再考と SCC

次は、私の方からトピックとしてお話しさせていただきたい内容です。CBT や PPP などアルファベットの羅列で申し訳ありません。最近 JICA の仕事で国際協力に取り組み、アフリカのエチオピアやヨルダン、ペルーといったところに通っています。エチオピアやペルーは特に貧しい地域で、本当に貧しい農村地域、しかしその周辺に世界遺産や、世界遺産級の資源があります。そうしたある意味特殊な環境ですが、そういう場所に入り込んで、集落で観光開発の支援をし、その地域に住んでいるコミュニティの力を遺産保護につなげていくという目論見です。途上国において、政府の力やお金がないところでは、地域住民やコミュニティの力を使って遺産を保護し、結果として住民が豊かになる、またその結果、遺産の価値が守られる、こういう関係をなんとか作りたいということを大きな目標として、いま国際協力に取り組んでいます。

しかし、エチオピアに2年前に入り、最初にぶち当たったのは、地域に住んでいる方々からの強烈な批判、というか海外ドナーに対する批判でした。その内容は何かといえば、ドナーは皆、コミュニティの発展のための国際協力といってやってくるけれど、結局彼らアメリカやオーストリア人は、集落に来て支援をするよと言いつつ、結局、器用な（めざとい）住民、つまりすぐに飛びついて、使える住民、有用な住民を、一部引っ張り上げて、そいつらと組んで観光をやって、そいつらだけが金を儲けて、結局集落の中は貧富の差が激しくなるだけで、ほとんどの住民は置いてけぼりであると言うのです。お前ら JICA の人間、日本人

がやってきて、集落みんなが豊かになる観光をやりたいと言うけれど、なんでそんなことがお前たちだけにできるのだ、そんなことは綺麗事で、お前らがやる協力というのがコミュニティに裨益するというのなら、なぜ裨益するのかちゃんと説明しろと、お爺さんもいれば、若い男性も、女性も、老若男女問わない村人たちから、青空の下での住民集会で突き上げられました。貧しい農村に行ったときに、みんなが口々に言うそういう批判に晒されたというのが、このレジュメの発端であるということをまず説明させてください。私は、ここに書いてあるような、CBT＝コミュニティ・ベースド・ツーリズムというのは、こういう人たちをも説得できるものであるべきだ、そうしたいと、強く思って今研究に取り組んでいます。そのテーマについて先般、科研費の申請を出したのですが、その申請書の一部を持ってまいりましたので、読みながら説明します。

私は、エコツーリズム、エコミュージアムという民博の研究会でまさに勉強した内容を、方法論として、中心的な理念として使っていますが、それらを実現するためには、CBT や PPP というものの考え方と組み合わせなければ、先ほど言ったようなことは出来ないということを書いています。エコツーリズムとは、本来、一般に理解されているような、単に自然を保護しながら経済利益をあげる観光開発手法ではありません。その根本的な理念というのは、訪問者に遺産価値へのアクセスを保証し、真正なるインタープリテーションを行うこと、それによって適切な対価も得るし、訪問者が価値に対して正しい理解をし、結果として自然遺産などのファンとなって、それを愛して理解した結果として遺産保護を実現していこうとするものと考えています。この基本的な考え方、すなわち柵を作って遺産を守るのではなく、価値へのアクセスを保障することで、遺産を守るという考え方が、20世紀に起きた大きなパラダイム・シフトであると私は考えますし、こうした考え方が、21世紀においても遺産と観光開発を考える肝心な

パラダイムになっていると考えています。ですから、エコツーリズムを、便利で使いやすい打出の小槌と勘違いして使い潰してほしくないという思いがあります。それから、エコミュージアムについては、世界で様々な人が様々な解釈で使っているので、実は非常に難しいのですが、その誰に言っても納得するのは以下の5つかなと思います。まずテリトリーがある。それからテーマがある。屋根のない博物館として現地で本物を保存する。そして最初のお客さんは地域住民自身でなくてはならない。誰かを迎え入れて金を取るためのものではない。まずは地域住民が楽しめなくてははいけない。そして、正式な博物館活動である。科学の目に晒され、キュレーターがきちんと関わるものである。こういう共通原則があります。これは上に書いた本来のエコツーリズムの理念を、コミュニティ基盤の遺産管理として展開する際に、非常に具体的かつ理想的なシステムである、と私はエコミュージアムを捉えています。それから、CBTというのは、小林先生と山村先生が中心となって取り組まれてきたものとして、CATS 叢書に CBT の報告書がありますが、この中には、「CBT とはコミュニティを基盤とし、コミュニティが主体性をもって自律的に観光振興を進めていくあり方」として定義されています。しかし先ほど申し上げましたように、これまた途上国の現場では、CBT を標榜していても、実際にはほとんどの場合で一部の住民にしか裨益せず、その結果、貧富の差の拡大や共同体意識の希薄化、崩壊まで引き起こしているという現実があります。CBT というのは、言うは易しですが、遺産観光に関わるコミュニティがこうした事態に陥らないように、コミュニティの利益を守る仕組みを構築し、コミュニティ全体への裨益、これはもちろん全体へ同じお金を配るという意味ではありませんが、しかしコミュニティ全体が関わり方の濃淡を理解したうえで、全体に裨益が生じるようなあり方を考える必要があります。そのため、エチオピアで私が考えているのは、みんなで相談して、決断する。どんな観光を

やっていくかを、コミュニティみんなで考えるというのが1つ。それから、頑張って現場でやる人は一部であっても、得られた収益は必ず公的な財布にプールされて、それが集落全体の、たとえば小学校の修繕費用とか、橋の修繕費用とか、1台のトラックが必要なら買うとか、そういうかたちで、公で担保した収益のファンドをつくるなど、そういうことも必要だと考えています。

それから、PPP というのは、ちょっと理屈っぽいですが、もともとはイギリスで生まれた PFI という考え方が発展したものです。また PPP は、60~70年代のアメリカで生まれた成長管理というものの考え方の展開・発展形としてあるものでもあり、要するにヨーロッパ、アメリカ双方から生まれてきているのですが、いずれをルーツとするものも理念は一致しています。すなわち、これは普通の解釈とはちょっと違うかもしれませんが、従来は公共の役割と思われていた公益目的の事業、例えば貧困削減や自然環境保護、遺産保護などの事業を、公的機関（パブリック・セクター）の権限と民間部門（プライベート・セクター）の事業遂行ノウハウやファイナンス力などを相乗効果的に活かすことで、より合理的かつ高品質なレベルで事業を実現することを目的とする取り組みで、その目的達成のために官民が構築する相互尊重の関係です。したがって本研究では、途上国での CBT 開発に必要な組織をこの PPP 理念に基づいて提案しています。つまり、公益目的を掲げる非営利の地域運営組織を立ち上げ、運営を行うことで、従来は public の役割とされてきた公益目的の事業を、この理念に基づいて官民協働で実現するということを考えています。

しかし、官民協働という言葉は今、非常に安易に使われています。何か官がやりたいことを民間と協力してやれば官民協働だとか、地域のまちづくりを協働でやりますとって、要するに昔でいうところの「共同」と同じ使われ方をしたりと、本来素晴らしい意味、厳しい意味をもっている言葉が安易に使われています。これはエコツーリス

ムと同じだと思います。そういうことを私は非常に嫌います。そうではなくこういうきちんとした定義でやるということが求められます。

そして最後ですが、この CBT を持続的に展開していくには、strategic carrying capacity=SCC が必要という考えです。従来は carrying capacity というと、環境が受け入れ得る絶対的な受け入れ容量や、観光客が満足を感じる限界などを指標とした限界受け入れ容量のことをいっていましたが、私はこの strategic carrying capacity という考え方をとらないと、この CBT は実現できないと考えています。これも簡単に言うと、地域社会がまず PPP によって一定の公益目的に基づく組織を作ります。それが観光客受入のための準備をし、開発をし、受け入れていくわけですが、住民が主体となるそうした組織が成り立っていくためには、一定程度以上のお客さんが来てくれなければ困ります。そのためには、その組織が、マーケティングやプロモーション部門が頑張れるような DMO (destination management organization) になる必要があります。その DMO がちゃんとお客さんを確保してくれなければなりません、それが最低どれだけないと、CBT は潰れてしまうかというコミュニティが求める持続的な CBT ビジネス実現のための必要集客数あるいは CBT が逆に遺産保護や貧困削減に取り組む場合に、求められる予算や経費がどのくらいなのかを事前に計算して、それに従来の限界受け入れ容量をミックスした SCC という考え方を科学的に設定せねばなりません。それを実現していくことが必要であるということが、私が一生懸命考えて悩んでいるものです。早口で申し訳ありませんでしたが、以上で私からの発表を終わります。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（英）

石森先生に続いて西山先生で、頭がほとんどパニック状態なんですけども（笑）。まず、観光創造

学体系化、これは是非みんなで考えていかなければいけない、非常に大事な部分だと思うのですが、最初に石森先生がおっしゃったように、我々は何のために観光創造をやるのかということが、ここに現れてくると思います。この表で気になったのは、ツーリズム産業イノベーション研究が、ライフスタイルと地域と同じ並びでいいのかということなのです。観光を何のためにやるのか、石森先生の話に戻れば、要するに世のため人のためだとすれば、ライフスタイル・イノベーション研究と地域イノベーション研究はマストですよ。ではツーリズム産業イノベーションは何のためにあるのか。我々のスタンスが産業振興ではなく、世のため人のためであれば、それは観光イノベーション研究と観光デザイン研究の間を繋ぐ役割としての産業研究でしかないのではと考えるのですが。観光イノベーションをちゃんとやって、それを橋渡しする機能、産業としてツーリズム産業間イノベーションするというのも大事なことなんだけど、この図のように3つ並んでいるのか、その下の置くのか、もう1つ少し研究の余地があると思って聞いていました。

それから、CBT というのは、私と山村先生と石森先生とで3年間研究しましたが、私は以前、真板先生と一緒にエコツーリズムの普及をやっていたのですが、ちょっと日本のエコツーリズムに限界を感じるようになっていて、結局 CBT をしっかりやらないとエコツーリズムは地域に根づかないと考えたからです。先ほどの西山先生のエチオピアの話でいうと、地域全体にいかにお金が戻ってくるかとか、頑張っている人にも相応のお金が入るという二重構造を地域に作らねばならないと考えていて、調べてみると、その仕組みを中国とかNZ でかなり上手くやっているのです。たとえば、間に入ってそのお金を分配する仕組みを作ろうという話がありましたけど、マオリ・ツーリズムでは、各地域にチャリタブル・トラストのようなものを作っていて、そこに一旦利益が上がっていったら、それを地域全体で使おうと。この仕組みはち

よっと使えるなと思っているのと、中国と NZ で研究した結果でいえば、外からのアイデアや考えを受け入れる仕組みが地域に芽吹いていないところに行っても無理だなと。それを受け入れる地域の賢さがないと、外から作っていても結局難しいというのが、その研究で感じたことですね。それは結構、マオリ・ツーリズムをやっている中で一番感じたのは、なぜ観光をやっているのか？と問うと、みんなが観光は vehicle だろって答えるのです。これは手段という意味で、石森先生の世のため人のためと同じで、観光を使って何をやるかを見えていないと CBT も難しい。観光で稼ぐためなのではないと。その理解がなかなか難しく、かなりレベルが高くないとそこを割り切って考えられなくて、金儲け観光に走ってしまう。そのために何が大事かという、彼らは生業だといっているんです。生業をしっかりしないと観光はダメなんだと。そういう意味でいうと、CBT による必要集客数とか、限界受け入れ容量も、生業を守るということを前提にして考えていかないと、いくらならビジネスとして成り立つかという発想は絶対にしちゃいけないと思うんです。ここは結構大事なところで、意見が分かれると思うので、ここの考え方をもう少し整理していかないといけないと思います。つまり、石森先生の話に戻りますと、最初にすごくいい質問をされたなと思っていて、「観光ルネッサンスは可能か」という先生の問いに私なりに言葉を足すと、観光による、人や地域を変えていけるルネッサンスはどうすれば可能かを考えなさい、という投げかけだと思っています。我々は観光創造の観光と創造の間に言葉を足さなくてははいけません。観光で「〇〇」を創造する、という、「〇〇」が自分たちの研究分野やフィールドであると考えるときに、初めて観光創造は成り立つというふうに先生の話をお聞きしました。めちゃくちゃ面白い学問を我々はやらせていただいていると思っています。本当にありがとうございました。

コメンテーター2：遠藤

私は観光創造学の体系化のところについて私の感想を述べたいと思います。これを見て、かなりすっきりしたところがあって、先ずは西山先生の案に感謝いたします。たとえば今、私は臼井先生と大迫学術研究員とニセコプロジェクトに関わっています。(西山先生ご提案の) 研究テーマのところでニセコプロジェクトをあてはめていくと、上の二地域居住ということはニセコでのロングステイと同義と考えます。実際の現場では約 400 組の人たちが首都圏などから夏にニセコに来ていると聞いています。次のツーリズム産業イノベーション研究という分類でいうと、LCC などでは冬には外国人スキーヤーがニセコに来ます。また、ファイナンスという点では、コンドミニウムの建設や所有を中心に投資が行われています。それから地域イノベーションという点で、キーワードにもある観光の 6 次産業化があります。代表例がニセコの道の駅で、売上は年間数億円にのぼっています。また、ご提示いただいた資料の資源マネジメント研究のところでは、国立公園というキーワードがあります。ニセコのスキー場は国定公園になっているので、これもまさに分類に合致しております。

このように、現在のニセコプロジェクトを本資料にあてはめると、こういう整理の仕方があるのかと思ったところです。また、自分のやっている研究が多岐に亘っていることが改めてわかり、今回の西山先生ご提案のような枠組みにより、私自身の行っているものの分類もクリアになったところです。

それから、社会への還元という部分。これも今自分たちがやっていることが、どういうことかなと振り返って見てみると、資料の上から 3 つ目の部分にあると考えます。観光ベンチャーモデルの提案ということで、ここはまさにニセコで臼井先生が起業の講義をされているように、いろいろな生業を起こそうといろいろな人が頑張っています。資料の中の資源の部分でいいますと、資源マネジメントを支える法制度ではないですけど、実

は雪崩に対して新雪をどう滑ったらいいかというニセコ・ルールという、1 つのローカル制度的なものが出来ています。これも 1 つのマネジメントの姿であります。このニセコ・ルールに関しては CATS は特に関わりを持っていないのですが、地域でビジネスを行うためには、このルールを踏まえた観光ベンチャーモデルの立案が重要であります。そこで、今回ニセコで行っている CATS の講義が少しでも役に立てば、社会への還元に寄与しているのではないかと考えております。先ほどの建築分野の分類のお話では、材料であるとか、建築環境であるとか多岐にわたっています。たとえば私が家を建てるときに「良い家をください」といっても、建築家でない一般の人の発言の真意は、素材が良いのか、あるいはデザインが良いのか、適切に表現できないものです。同じように観光も、地域では、やっぱり観光を良くしたいとか、観光をしっかりとしたいとかのニーズがあります。しかし、その「しっかりとしたい」というのが、どこかの部分の、何を「しっかりとしたい」のかということを具体的に説明できない現場は少なくありません。

観光デザインの部分なのか、観光イノベーションの部分なのか、どの区別が良いかは持ちえていないのですが、今回の西山先生のご提案のような分類ができれば、共通の物差しをもって、地域の方と観光のお話しできるのではないかと思います。

いずれにせよ、私の思いとしては、観光をする側であるお客さん側と、観光を受け入れる側であるその仕事をしている側、両方が幸せになるような、そんなことを目指して行きたいです。そして、こういう課題に対して、自分はどこのどの部分を解決しているかということ、自分なりにここからは意識したいと思います。さらに、小林先生もおっしゃったように、(観光研究には) 基礎と応用があり、さらに両者を橋渡す部分に何かあるのではないかと思います。それについては、ビジネスマンとしての目線から、私なりにいろいろ考え

てみたいと思います。ありがとうございました。

コメント：白井

先ほど小林先生が指摘されたように、この体系化の試案の中で、もちろんこういう表が出来たので、これからの議論の叩き台として、いろいろな専門の方々からいろいろなコメントがあるだろうと思うのですが、先ほど小林先生が上の 3 つを並列にしているのかと言われた中で、1 つの解釈として、真ん中の部分だけが少し違和感があると感じています。この中の問題として、「従来の狭義の観光研究」とした部分で、ちょっと違和感があるのかなと。ライフスタイル・イノベーション研究の領域、ないしは地域イノベーション研究ということになると、たぶんそこで考えられる産業面というのは、従来のツーリズムの定義よりも広い分野だと思うんです。あえてここで「狭義の」としたことによって、上と下からすると外れているのかなと。産業的な部分での研究が要るだろうという考えだとすると、狭義の観光研究よりも、もっと広い分野の産業研究ということになると、この 3 つで収まるかなと感じました。

コメント：山村

小林先生からマオリ・ツーリズムのお話がありました。小林先生、石森先生と世界各国をまわらせていただいて、私も一点感じたことがありました。それは、先程 PPP という話がございましたが、官と民の協力体制についてです。中国貴州省の少数民族集落を調査していて気付いたことがありまして、CBT が非常に上手くいっている集落に共通する要件があったんですね。それは、行政のリーダーと、地元の伝統的な宗教的リーダーの関係が非常に良く、前者によるトップダウン的な政策の上意下達と、後者によるボトムアップ的な民意の反映とが非常に上手くバランスが取れている点でした。そういう関係性が築けているところでは観光開発は上手くいっていて、上手くいっていないところはそこがギクシャクしていたのです。非常

に興味深いと感じました。

回答：西山

ありがとうございます。まず、小林先生と臼井先生からご指摘いただいたコメントへの回答ですが、観光イノベーション研究を観光デザイン研究と分けるということが、今回の私の中での発想の飛躍でした。要するに、それまでは観光創造は innovation なのか creation なのか悩んでいたこと自体が違ったのだと思ったということです。むしろ、私はいろいろな機会で石森先生の講演を聞かせていただきながらも、私が担って超えていける部分が1つもないなと感じていました。要するに、石森先生と、全く分野やスタンス、社会に対する考え方が違う。その私が先生の跡を継いで観光学高等研究センターを担うというのはどういうことなのかと、今でも悩んでいます。そういう中で、むしろそれを発展的に解消する考え方、という意味が1つあります。

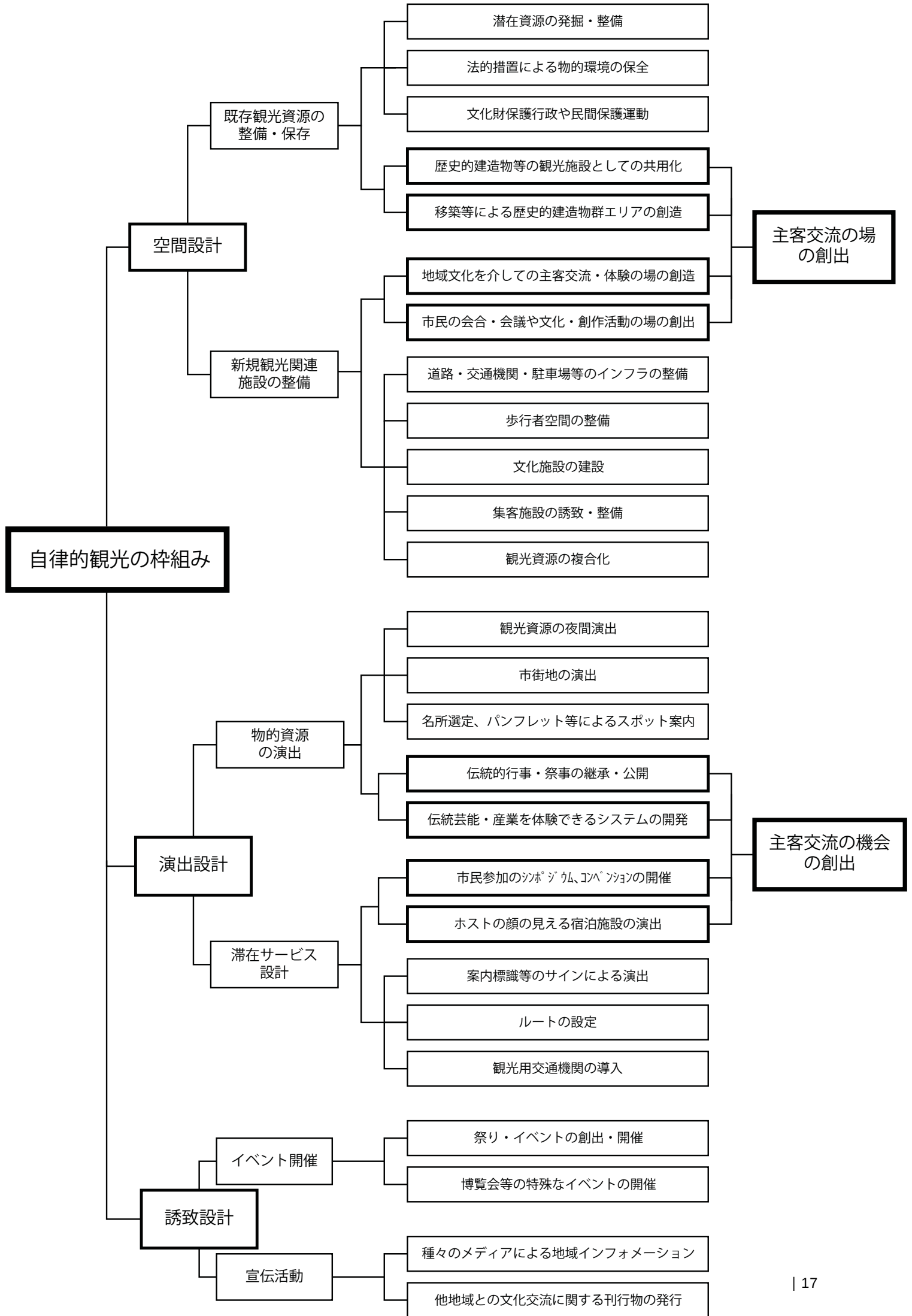
観光イノベーション研究という場合に、世の中の観光ってどうなっているのかということを、常に、イノベーションを意識して考えるというのが、ダイアグラム（図 2）の上の部分なのです。そこである程度確立した観光のあり方、たとえば CBT とはどうあるべきだとか、エコツーリズムとはどうあるべきだとかを考えます。しかしそういう理念が確立したとしても、地域はそういうことに未経験ですから、どんな確立した理念や方法論も、地域に入る度にそれは新しいわけです。常に問題が発生し、課題がある中で、またそれを新たに解決しなければならない。これは注文一品生産です。それをやるのがダイアグラムの下の部分、すなわち観光デザイン研究です。そこで理念や方法論を適用してみて、何かが起きたら、今度はどうすべきか地域が教えてくれます。その新たな課題をもう一度観光イノベーション研究に持ってきて、従来の考え方ではダメだから、そこで新たな課題を克服する理論を検討します。小さいか大きいかわかりませんが、これは明らかにイノベーション

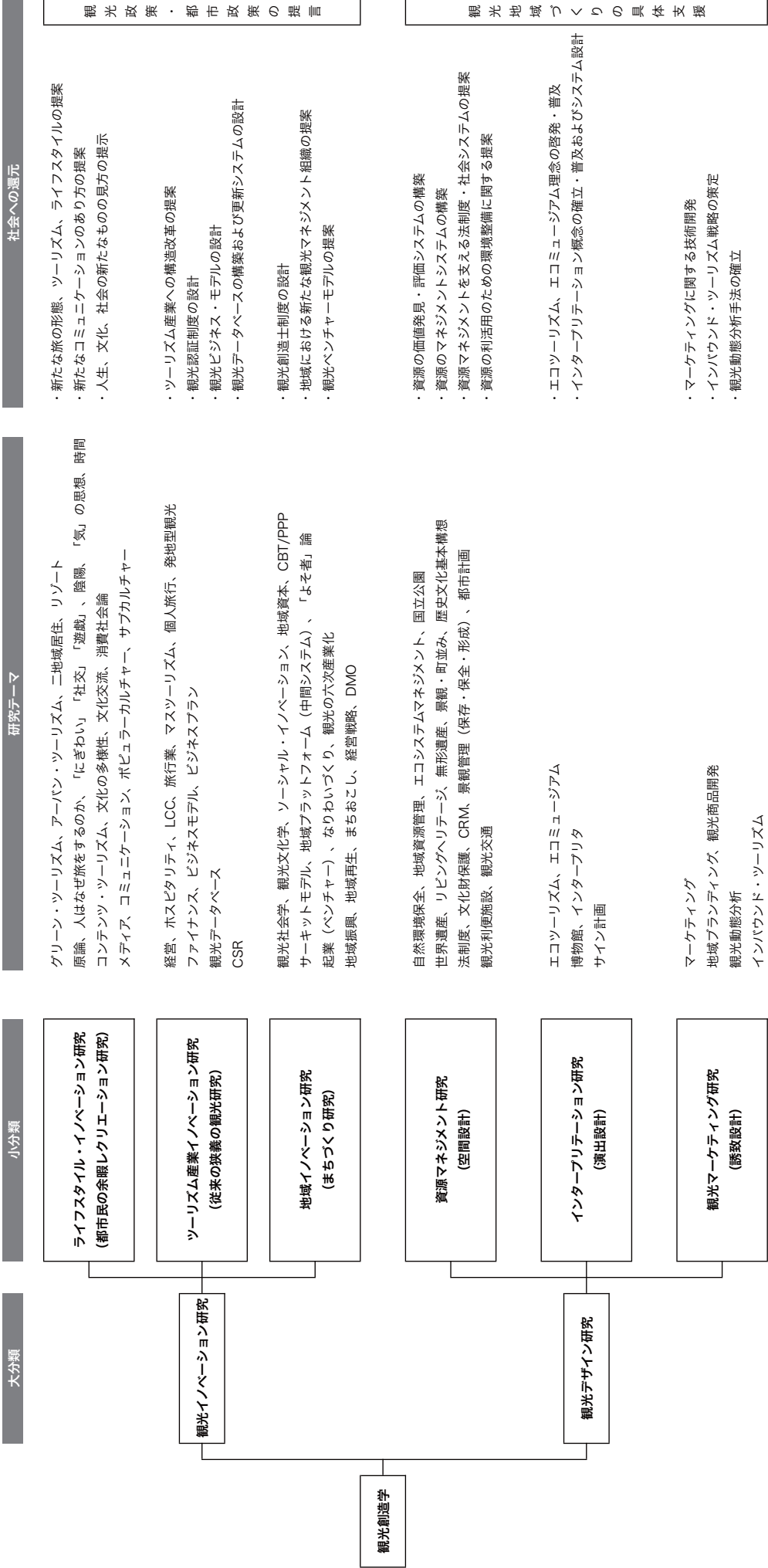
の繰り返しだろう、と考えたときに、どこでイノベーションが起きていくのかと考えました。確かに臼井先生が言うように、() の中身はどうでもいいのですが、当初のライフスタイル・イノベーションという、昔でいえば都市民の余暇レクリエーション研究であったわけです。大都市民を、労働政策として、余暇を充実されるために観光されるという政策的発想があって、それを西山卯三先生や三村浩史先生などがやっていました。これが今や発展して、ライフスタイルになってきたのだなと思います。これは発地サイドの研究と言ってもよいと思います。一方で地域イノベーションは着地型、受け入れ地域において、観光というものを、まさに小林先生がおっしゃったような、生業、これまでの生業や社会構造を、そこに導入すべき新たな観光という、都市との繋がりとか、いろいろな難しい関係がある地域はどのように観光というものを同化して、自らの中に取り込んでいくか、ということをするのが地域イノベーション研究でしょう。これは地域で答を出すことよりも、地域ではいったい何が起こっていて、それがどういうイノベーションに繋がるのかに取り組む研究です。これは地域における研究、地域を素材とする研究です。しかし今までの観光研究は、狭い意味で捉えれば、結局は旅行業者のための、旅行業界のための研究であったという部分が大きいと思います。それを何とかここに入れたかったわけです。() で、こんなことを言ったら怒られますが、() は取っていいと思うのですが、ぜひともいい言葉をこの辺りに嵌めていただきたいのです。一番私が責任を持てずに書いたところなので、皆さまから指摘を受けたのかなと思います。小林先生から、ここに置いていいのかというお話がありましたが、私はそういう意味でここにこの四角を置いたのです。この四角をどう描けばいいのか、またご相談させていただきたいと思います。

CBT に関しても、私にとっても発展途上で、一生懸命に試行錯誤していますので、中国での事例などもさらに具体的に勉強しながら、出来れば皆

さんと一緒に、またフィールドに出ていきたい
と思います。

どうもありがとうございました。





() 内は小分類に含まれる旧来の内容の例示

系	分野	分科	細目名	キーワード
理工系	工学	建築学	建築構造・材料	(1)荷重論、(2)構造解析、(3)構造設計、(4)コンクリート構造、(5)鋼構造、(6)木構造、(7)合成構造、(8)基礎構造、(9)構造材料、(10)建築工法、(11)保全技術、(12)地震防災、(13)構造制御、(14)耐震設計、(15)耐風設計
			建築環境・設備	(1)音・振動環境、(2)光環境、(3)熱環境、(4)空気環境、(5)環境設備計画、(6)環境心理生理、(7)建築設備、(8)火災工学、(9)地球・都市環境、(10)環境設計
			都市計画・建築計画	(1)計画論、(2)設計論、(3)住宅論、(4)各種建物・地域施設、(5)都市・地域計画、(6)行政・制度、(7)建築・都市経済、(8)生産管理、(9)防災計画、(10)景観・環境計画
			建築史・意匠	(1)建築史、(2)都市史、(3)建築論、(4)意匠、(5)様式、(6)景観・環境、(7)保存・再生

系	分野	分科	細目名	キーワード
人文社会系	人文学	観光学	観光学	(1)ツーリズム（観光学原論）、(2)観光資源、(3)観光政策、(4)観光産業、(5)地域振興、(6)町づくり、(7)旅行者、(8)リゾート、(9)景観、(10)世界遺産、(11)祭礼・行事

◆研究発表 3

地域資源戦略と観光交流による都市・田舎関係の再構築

北海道大学観光学高等研究センター

敷田麻実

地域をめぐる再編プロセスとしての観光創造

これまで大枠のお話がいくつかありましたが、ここでは私が取り組んでいる話題を入れたテーマでお話したいと思います。地域資源戦略と観光交流による都市・田舎関係の再構築です。主に、私が授業でも取り上げている地域資源戦略と都市・田舎の関係についてお話したいと思います。発表内容は3つに分かれており、①自分がやっていること、②観光創造学に対するスタンス、③現在のトピックです。

現在やっていることは、統合的地域ガバナンスといい、資源を使っていく時に、どのような人が関わるかという研究であります。マネジメントというのは what to do, 「何をするか」ですが、ガバナンスは who what to do, 「誰がするか」という違いがあります。この「誰が」が、私の研究では非常に大きな部分を占めています。

参加しているプロジェクトは資料のとおりです。今日お話しする内容は、主に国連大学で研究者と一緒にやっている「都市と生物多様性プロジェクト」の中の研究成果であります。このプロジェクトでは生態学、社会学、経済学と、多様な研究者が参加しています。あとは、科研費プロジェクトや、知床の自然科学委員会でのプロジェクトからの成果です。

最初の話に戻りますと、「創造」とは何かです。日本創造学会で創造の定義が整理されていますが、いずれも似たようなことが書かれています。資料の一番下に「創造とは、人が異質な情報群を組み合わせ統合して問題を解決し、社会あるいは個人レベルで、新しい価値を生むこと」とありますが、最後に「新しい価値を生むこと」と社会との関係が明確に書かれています。観光創造についてそれ

と対比して、創造と付く単語を比較してみるとヒントになるのではないのでしょうか。環境創造、知識創造、価値創造、前者2つと後者は少し種類が異なります。前者はきわめて産業化された分野であるということです。環境創造は環境に関する産業や仕事といえます。知識創造もナレッジ・マネジメントや、企業のマネジメントということで産業と結びついています。この2つに共通するのはまた、科学に結合していること、たとえば環境科学や知識科学と結合して産業化されてきたということです。この意味での科学というのは、おそらく数量化とほぼ同義であると思います。

このように考えてみますと、創造のプロセスはまず、おそらく不定型なものを実体化するためのシステム、仕組みをどのように作っていくかだと思います。次に、自分以外の他者との相互関係による、従前なかったものの創出、創発です。そして最後がポイントですが、プロセスというものの重要性が非常にあるだろうということです。

一方、生態学には面白い考え方があります。生物は種から芽が伸びて開いて花が咲いて終わるという考えが普通の人の見方です。花が咲くところが終着点であり、花が咲くという創造がある、という考えをします。しかし、生態学では、そこで止まっているのではなしに、花が咲いた後にそれが枯れて分解されて土に戻ってという輪廻のような考え方をします。資料の図は、生態学者のHollingが1987年に示したモデルで、3番を見るとCreative Destructionと書かれています。これは破壊的創造と訳して良いと思いますが、組み替えたところからまた新しいところへ戻っていくプロセスです。戻っていく時のポイントは、ゼロになるのではなく、もう一度組み替えが起きていま

す。つまり、環境創造とは、既存の環境を全部ひっくり返してお払い箱にしているというよりも、組み替えたことでエネルギーをより有効に使える1つの方法だと考えられます。

このように考えると、観光創造とは、先ほどから議論も出てきておりますが、資源をめぐる地域内外の組織とコミュニケーションの再編プロセスというふうに考えていくことができます。ここでの大きなポイントは、プロセスは繰り返していくかということです。一回だけのものを見るというのはおそらく観光創造としては不完全で、プロセスがなぜ必要か、どのようになっているかということが重要になると思います。

地域構造の変化と統合デザイン型地域づくり

さて、話題になっているエコツーリズム、エコツアーについてですが、面白いグラフがあります。日経テレコムで調べた、新聞記事にエコツーリズム、エコツアーが出てきた頻度です。右の方が最近で、2008年にエコツーリズム推進法が施行されていますが、そのあたりをピークにして逆に記事数は減ってきています。どういうことかといいますと、人気がなくなったのではなく日常化していった、無理に説明をしなくても、要するにニュース性のない現象になったということです。残念ながら、私がエコツーリズムの本を出したのは2008年で、慌てて2011年にエコツーリズムと資源の本を出さなければいけなかったのはこういうこともありました(笑)。

もう1つの疑問は、エコツーリズムだけで存在できるのだろうかという点です。エコツーリズムは一般に、自然を楽しむ観光と単純に翻訳されたり、また環境に優しい観光といわれたりしてきましたが、おそらく環境と人との関係に対して十分な魅力を提案できなかったために、普通のエコツーリズムという言葉になったのではないだろうかと考えています。

実はこのような変化のように、私たちの社会は大きく変化しています。ここからは、私がこの半年

くらいで見えてきた、いろいろな変化に関する資料です。まず、「激しく移動する」と書いてありますが、1960年に私たちの1年間の移動距離は2,358kmでしたが、2005年になると4倍近くに増えています。とにかく私たちは、移動することを前提にして生活をしていると考えられます。

さらに社会の構造が変わってきており、資料にあるのは非常に大雑把な図示ですが、X軸は社会の閉鎖性について概念的に示しており、左側は閉鎖性が強く、右側は開放性が強い社会と考えてください。Y軸は、上は関係者の結びつきが強い、下は結びつきが弱いことを示しています。このようにシンプルに考えてみますと、これまで日本社会が馴染んできたのは、①の、地縁・血縁、男性や有力者が中心で、規律と統制によって維持されてきた社会といえます。これはこれで理由があって維持することが出来たわけです。ところが、社会変動によって地域資源や地域そのものに対する関心が失われてくると、外に向かつては閉じているが、地域に関心がなく結びつきが弱い②の状態になる可能性が出てきます。一方、地域に愛想を尽かした人や仕事を求めて都市に出た人は③で、個人化が進みます。②と③が、この何十年かの間に増えてきたということが、私たちが直面している地域の問題ではないでしょうか。

実は、②と③は維持が非常に難しい社会です。②は、私たちがよく地域の問題を考えるときに聞きするように、誰も意欲を持って地域に取り組まない、バラバラである状態です。さらに③は、バラバラではありますが、さらに相互無関心も加わった拡散型の社会で、一般には都市社会といえます。②は、シャッター街と私たちが揶揄しているような地域になるのではないかと思います。

そこで④のような、外に向かつてある程度解放はされているが地域の中の結びつきも最低限維持できるような、新しい仕組みを用意しなければなかなか解決ができないのではないだろうか、というのが1つの提案であります。

都市と田舎の関係性の再構築

さてそういう中で、観光地域づくりやまちづくりが期待されていますが、エコツーリズムと違ってこちらは記事数が順調に伸びています。おそらくニーズがあるのでしょうし、グラフの赤色は道新の記事ですが、北海道地域においても同様の傾向で記事数は増えているのでやはりニーズはあると思われます。

しかし、この「地域づくり」は、私たちが単純に地域づくりというほどシンプルなものではありません。おそらく私の父が考えている地域づくりと、私の考える地域づくりと、私の娘の考える地域づくりは意味が違っているだろうと思います。

国内で最初に行われた地域づくりは、ほぼ合意ができていたところだと思いますが、インフラの整備の地域づくり。ところが、一村一品のように何かテーマをもった地域づくりが 1980 年代以降に現れます。これは、インフラの整備が行き渡ったために出てきた地域づくりだと思います。さらに、2000 年代以降になると、地域だけではなく自分の生活も、つまり自分の満足も欲しいし、地域の良くなればと両方欲しいというスタイルに変わってきたのではないのでしょうか。ここに、今私たちが観光の中でも取り上げようとしている問題があるのではないかと考えています。

地域づくりの定義は、これまでも出てきましたし、これからも触れられるでしょうから、ここでの説明は省略したいと思います。地域づくりは持続可能であることが 1 つの条件ですが、4 ページのグラフは、持続可能性についての研究がどれくらい行われてきたということを示しています。単純に見てわかりますように、右肩上がりです。特に 80 年代後半からは、急激に伸びた時期がありまして、これは社会の現象と連動しているのではないのでしょうか。

さて、この持続可能性ですが、もっとも問題となっているのは都市部の持続可能性です。今の世界人口のほぼ半分は都市部に住んでいると推定されています。1950 年には 3 割しか都市部に住んで

いませんでした。今は、先進国だけでいうと 8 割が都市部に住んでいます。推定で毎日 17 万人が都市部に流入している世界です。このような社会の構造変化が起こっています。

Bettencourt による面白い研究がありまして、都市人口が 2 倍になると都市機能が 15% 増加するという統計的な分析です。都市の人口が倍になると、例えば札幌市の人口の 2 倍が横浜市ですが、札幌市の平均給与の 15% 増の平均給与が横浜市では支払われているし、レストランの数も 15% 増になるということです。つまり、都市は拡大することによって効率を上げて成長する。そして発展方向にどんどん向かうのが普通であるという研究です。一方、ロスも増えまして、犯罪率も 15% ずつ人口が倍になるにしたがって増えていくと研究は指摘しています。

そこでこの都市の反対になる部分というのが田舎です。田舎という言葉を使っているのには理由があります。OECD 25 か国の 75% は、私たちが農村と呼んできた田舎の土地です。そのうち 96% が農地で占められています。しかし、ここで活動している人、農業就業者は全体の 13% しかいません。田舎の総生産、農村といわれる場所の総生産は、OECD 地域のたった 6% しかないのです。この現状を見て OECD の各国が考えたことは、「新しい田舎」というものが存在しているのではないかとということです。

この「New Rural Paradigm」は 2006 年に出た OECD の報告書で、従来の田舎は農村地域で、補助金がないと成り立たない地域といわれていたが、実際にはよく見てみると、田舎は農村というのはなくて田舎であり、補助ではなく投資で成り立つという考えが示されています。この投資の対象として経済活動がいくつかあげられているのですが、この中にツーリズムという言葉が使われていて、1 つの田舎という場所・空間を支える 1 つの重要な産業だと位置づけられています。

この「都市と田舎」の関係では、繰り返しヨーロッパの研究者によって指摘されている言葉です

が、disconnectedness という問題があります。つまり、作り手と食べる人たち、これはそのまま田舎・生産地と消費地というふうに分けることができますが、この 2 つに大きく分離された構造社会が起きつつあるという指摘です。これを別の視点から整理しますとどうなるか、資料の図をご覧ください。左にあるのが田舎・農村で、右が都市と位置づけます。そうすると、田舎に私たちが期待しているのは伝統文化であり生き物が豊かな場所、つまり生物多様性のある場所ということになります。一方、都市が伝統文化や生物多様性ではなく、現代文化と創造性を担えばいいのだと。都市の中では人工的に自然を作ることができます。これを都市内自然といいますが、これは環境創造だというふうに位置づけられ、大きな産業になっています。このような分離というか、田舎の担うものと都市の担うものは別々で、これをうまく組み合わせれば良いのではないかという考えが 1 つの捉え方であるのは事実です。

ここで、伝統文化が都市にないはずはない、都市にも伝統文化があるという指摘があると思いますが、それはもともと、私たちが田舎に期待しているのは伝統文化が多いし、たとえばいろいろな生物がいるけどそれを維持するためにいろいろな風習や習慣があって維持されるだろうという言葉がそれにあたります。つまり、生物多様性とリンクした伝統文化というのが、私たちが田舎に期待をするものになっているということです。

生態系サービスと文化サービスの関係

この田舎の問題を考えるときに、最近注目されている概念が 1 つあります。生態系サービスというもので、これはおそらく近いうちに新聞などのメディアでも日常用語になっていくと思います。それは生態系から来るメリットは計測できるという 1 つの概念です。昨年に出されました「生物多様性国家戦略 2010-2020」の中でも、明確にこの生態系サービスを私たちは社会として認めなければいけないと示されました。このサービスを計測

して効果的に活用することで、私たちの社会がつくられていくということになっていますが、残念ながら、その中では文化的サービスが一緒にたにされて、他の、基盤サービス、供給サービス、調整サービスと比べると、はるかにあいまいな位置づけにされてしまっています。つまり、私たちの社会で持続可能であるために生態系サービスを使用し始めていますが、その中で文化的なサービスがよくわからないまま、何かあればいいものくらいに位置づけられているということです。

ここで、生態系と文化との関係はどうなっているのかを考えてみます。これはまだ研究会で議論をしている資料ですので、いろいろ異論があると思います。私たちはもともと生態系とお付き合いをすることによって何かモノを得ています。たとえば、生態系、川へ行行って餌を釣り針につけて下ろすことで魚が釣れる。これは川へ働きかけて生態系サービスとして食料としての魚を得たということです。この関わりがあるからこそ、私たちは生態系サービスを受け取れるということになります。この関わりとは、よく考えると川とお付き合いで、生態系との関係を作ることになるので、これを大胆に文化と考えても、大きく外れはしないと思います。文化の原初形態は、おそらく私たちが何らかの自然環境と出会ったときに形成されました。生態系サービスをどのように使うか、どのように付き合うことで、文化が形成されたと考えることができます。

このように自然環境と一般にいつている生態系の中に私たちが存在していると考えれば、この自然環境・生態系と私たちの関係を文化と捉えることができます。

さて、生態系とお付き合いの中で生じた文化は、文化から文化を生成することも可能です。つまり、文化同士が交流することで、新たな文化を生むことができるのです。これがよく出来るのはおそらく都市側であり、田舎側ではおそらく生態系と人との地道な付き合いから文化を生成していくことになります。

また、文化というのは形が出来上がると、例えば、文化遺産の形になると、消費することが出来るようになります。文化サービスとあえて呼びますが、サービスとして文化を意識することが出来るという意味です。先ほどの生態系サービスと同様に、文化サービスも私たちが何らかのメリットを得ているときに使うことが出来ます。

ところが、ここに大きな問題があります。先ほど、生態系と文化を別々に説明しましたが、この間には行ったり来たりの関係があるということです。皆さまのお手元にカラーの資料がありますが、その一番後ろのページにコウモリを食べる習慣の例が出ています。そこにコウモリの写真がありますが、これは石川県金沢市のコウモリを食べていた集落のことについて調べたものです。コウモリを食べるときコウモリを捕まえないければいけません、この集落では、自分たちが作った石切り場にコウモリが集まってきていた。つまり、私たちが自然に働きかけて作った新しい環境にコウモリが来て、そのコウモリを人が食べるということでやり取りが行われてきたのですが、単純に自然の中からコウモリを獲ってきたのではなく、人が加えた変化にコウモリが反応して、そこが住み場所になって、そしてコウモリを人間が食べた。コウモリの食べ方にも工夫が見られ、いろいろなコウモリの食べ方が生み出されています。つまり、自然環境とのお付き合いは単純な直線ではなく、自然環境と付き合うときにいろいろな食べ方、すなわち文化のバリエーションであり、これを創り出していると考えられます。

生物文化多様性を軸にした都市と田舎の橋渡し

このように、生物多様性や生態系や文化を実は一緒に考えても良いのではないかという提案が、すでに 1988 年に出ています。ブラジルのベレンで行われた学会の宣言文で、biological and cultural diversity という表現がすでにされています。最近では、2010 年に UNECSO のワーキング・ドキュメントが出ており、この中での Loh と

Harmon の定義では、それは世界の中の違いの大きさを表現しているのだと理解されています。つまり文化と生態系を一緒に扱っても良いのではないかと提案です。実はこの考え方は、観光を考えるときに一番重要なポイントといいますか、自然や生態系と文化を分けて考えずに、一緒に考える方が良いのではないかと提案につながっていきます。

さてここで話を戻しまして、なぜそうなのかということ、結論としてお話ししたいと思います。先ほどお話ししたように、農村部・田舎は非常に生物多様性が高く、伝統文化で成り立っているという私たちの暗黙の期待があります。一方、都市部では現代文化と創造性で成り立っていて、この関係というのは 2 つに分かれて別物だと考えて暮らしています。ですから、都市にいる人たちは田舎から生態系サービスを貰って、そのために支払いをしていることになります。観光で考えますと、都市から田舎に観光客が行って体験をするときにお金を払って戻るというパターンであります。この関係を維持していると、役割分担が非常に明確になって、都市は消費者、農村は提供者という関係から逃れることはできません。

この問題を解くために、先ほどの生物文化多様性を考えてみてはどうかということです。この 2 つの地域、田舎にある生態系と都市にある現代文化を橋渡しする役割を観光は負えるのではないかと。都市と田舎が分離したものを再結合する役割というのは、観光以外ではおそらく非常に難しい。物量を運ぶ限りは、たとえば田舎で作られた作物を食べることで食べている限りでは、気持ちは理解することができるけども、実際に田舎に行っているのではないので、おそらくこの分離は解消できないのではないかと。観光というのは交流によって分離したものを再結合する 1 つの大きなツールになっていくのではないかと考えられます。

一方で課題もありまして、一方的にこのような交流を進めると、地域にある資源を都会の消費者が一方的に使ってしまうことに繋がるのではない

かという問題が起きます。たとえば、田舎側の資源利用に関する 1 つのパターンですが、資源を直接利用している場合、これは行ってそのまま体験するというスタイルの観光のことです。分かりやすくするためにスターバックスの例でいうと、コーヒーを飲むために店に入ることです。目的はコーヒーを飲むことであり、コーヒーの消費が目的となります。

ところがそうではなく、上手にイメージだけを取り出すことが出来ます。この場合には、直接の消費せずに田舎のイメージだけを上手く使うのです。これはグリーン・ツーリズムやエコツーリズムでよく行われる手法で、スターバックスの例では、コーヒーではなくスターバックスの雰囲気を楽しむために仕方なくコーヒーを飲む、スターバックスを使うためにコーヒーを頼んでしまうというような利用方法になります。

それがもっと高度になると、背景的に使われてしまう。つまり、田舎側が背景の 1 つとして認識されてしまう可能性があります。スターバックスの例では、スターバックスが登場する恋愛小説みたいなもので、恋愛小説の方が大事なのでスターバックスはそのための 1 つの背景となってしまうということです。

田舎が、直接利用されているときはお金を取ることが出来ます。グリーン・ツーリズムでお客さんを呼んで、それに対してお金を支払うというのがやり方で、ある意味では見えるお金のやり取りです。しかし、イメージの利用では、上手に使われてしまう段階に入ってきている。最終的に、背景的な利用をされてしまうとどこの田舎でも同じと。つまり都合良い田舎を選んで使われてしまうという状態になります。先ほど示した、田舎と都市の関係をうまく観光によって結ぶということだけを考えても、簡単ではないということがわかります。

さて、伝統料理も田舎のもっている 1 つの特徴だとすれば、この伝統料理のイメージのように形だけを抜かれてしまう。資料でお見せしているの

はスッポン料理の調理過程ですが、こうした生々しい現場を通り越して、田舎はこのような伝統に基づいた食を食べているところだというイメージだけを抜き取られるという可能性が依然としてあります。

これを防ぐためには、この現象は「生身」と「切り身」という考え方で、すでに整理されているわけですが、全体を体験するのではなくて、良いところだけを食べてしまう考え方、これは常にエコツーリズムやグリーン・ツーリズムが抱えているリスクです。一方で、都市と田舎の関係を結んでいくと主張しながら、こうしたリスクを説明するのは矛盾するように思われるかもしれませんが、当然これを解消するための防衛策を、観光の中にも考えなければいけないだろうと。これが地域のためになる 1 つの貢献だと考えていいと思います。

社会変換装置としてのツーリズム

最後の資料では、今のような仕組みをおさらいしたいと思います。ツーリズムは、都市と田舎の地域資源を新たに結びつけていく 1 つの仕組みですが、おそらく田舎の生態系サービスは、都市の住民にとって消費対象でしかないと思います。一方、都市住民に対して、もっと資源に対して配慮した利用をしなさいということは、都市住民に対して行動を正しくしなさい、つまり田舎をもっと理解して田舎を考えて行動しなさいということです。

しかし、観光客に田舎のことを考えてエコツーリズムやグリーン・ツーリズムに参加しろということ、つまり個々の観光行動において田舎への配慮は不可能だと思います。皆さんの日常の行動を考えても、地域のことを考えてから観光に行くのではなしに、自分が楽しむために観光に行くことが基本だと思います。つまり、自己満足のために投資をする観光行動が日常的に行われています。

例えば、エコツアー、グリーンツアーですが、これを都市の住民の自己満足ではなしに、農村にとって意味のある行動に変換をする必要があります。

す。ですから、ツーリズムというのは、個々の観光客が持っている自分のための投資、観光行動を、ある意味で社会的に役に立つ行動に切り替えていく仕組みを持つ必要があると考えられます。

もう 1 つ、先ほど補助から投資へというお話をしました。そのためには自分たちの価値を説明する必要があります。つまり、地域資源を持っている側は、自分たちの地域資源の価値を外の消費者、都市住民に向かってきちんとした意味のあるものだと言明をしなければならない。自分たちにいくら価値があると思っていっても、その価値が伝わらないようでは、お客さんは来ません。そのためには地域イメージの変換が必要であろうと思います。つまり、ツーリズムというのは地域が持っている価値を社会化する変換をしなければいけないし、社会のニーズに対して説明ができるようにしなければいけない。また同時に、都市住民の一方的な行動、自分が楽しみたいという行動を何らかの形で地域に役に立つように変換をする仕組みを持つ必要があります。

このように、双方向の変換をツーリズムが持ったときに、都市は現代文化、地域は生態系サービスという二分した状況が改善できるのではないかと考えています。それが、今私が大枠で研究で考えていることです。ここでいうツーリズムとは、一種の「社会的変換装置」と考えることができます。単純にお客さんが満足することも入っているし、社会的な意味を観光が生み出すことも同時に実現することができる。

もちろん、これを別々に議論するという考え方もあります。楽しむための観光と、楽しみのためではない観光、つまりエコツーリズムと、環境のためになる観光は別々に存在するのだという議論はありますが、最終的には統合が図られることが、観光創造という考え方では重要になってくるのではないのでしょうか。以上で終わります、ありがとうございました。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：真板

敷田先生らしい、フレームワークからしっかり説明されたお話だったと思います。

実は、研究会は違いますが、先生と同じような研究を私たちもやっています。都市部と田舎の交流ということでは、京都で 1 つの実験をしています。都市の人たちと田舎の人たちの交流が、具体的にはどのように実現可能なのか。観光という 1 つの仕組みの中での実験をしています。そのやり方を、私たちが「一料亭一地域主義」と呼んでいます。例えばナスやキュウリは、1,000 個、2,000 個と作られます。それは市場の原理の中で、市場を通じて京都にも、1 日 1 万個、2 万個と入ってきます。こうしたものではなく、ある地域の中で、先ほど先生もおっしゃった地域の自然多様性と結びついた、少数少量型の地域を代表する食材が存在します。たとえば、香茸というキノコがあります。これは、江戸時代に松茸の 10 倍くらいの値段で取引されたといわれています。それを、ある人間が間に入って、京都の料亭に持って行って売るわけです。料亭は料亭なりにお客さんをもてなすために、それを料理にしてある程度の値段で出す。すると、有名な料亭でその料理が食べられたとして噂になって、なんとか料亭で香茸を食べたと自慢するわけです。しかし、他のところにも卸せるか、市場に出せるかということとそれだけの量がない。先ほどのお話での田舎に住んで、多様性や文化を守ってきたおじいちゃんやおばあちゃんに、そのような生活体系の中における 1 つの誇りを持たせることにつながります。

ところで、これですべて上手くいくかと考えたときに、地域資源の利用を巡って大きなギャップが存在することがわかったんです。それは「価値」です。すなわち、生産をする立場の人たちが、人を喜ばせようとする価値と、おもてなしをして人を喜ばせようとする人の価値は違うんです。例えば、タラの芽があります。私はある有名なてんぷ

ら料亭に話をし、田舎のおばさんたちからタラの芽を出してもらったんです。しかし、後で料亭の女将から電話がかかってきて「先生、申し訳ないけどそれは捨てました」というんです。それで地元聞いてみたら、ちゃんと美味しく食べてもらえるように、丁寧に処理して送ったというんです。つまり、「美味しい」の意味が違う。田舎のおばさんたちは、できる限り大きくして多く食べてもらいたいと思っているので、1つ1つが大きい。しかし、京都の料亭のおもてなしの消費文化における価値は、3口で食べられなければならない。要するに商品としては成り立たないんです。そういうギャップがあります。このギャップをお見合いさせて、消費文化圏の人には、生産地の文化の価値を知らせる。同時に生産している人には、消費地の価値を知ってもらう。相互がそれを交流することによってお互い自慢しあう関係をつくる必要があるだと考えました。

今は、第2段階に入っています。京都の中で100の料亭でやろうとしている。東北の小さな、80人から100人くらいの地区と1対1で結びつけて、そこと直接取引をしてもらうとしています。そこで、料亭に来たお客さんに、ここを作ったおばさんたちの所でお祭りがあるから見に行きませんか、という感じで行ってもらう。先ほど先生は、田舎を考えるために都市民が行動するのは不可能かもしれないと言われましたが、僕は不可能じゃないと思います。逆に、そこに惚れた人間が、それを理解した人間が田舎に行って、田舎の価値を知る。そこでいわゆる一見さんお断りのツアーが成立して、そこにその地域と地域のお見合いが成立することで、価値の交流を通してサステイナブルな観光が成り立ってくるのではないかと。料亭が客集めをすると同時に、その自分たち田舎の方はモノを送ることで、価値を高めることができるのではと思いました。そういう意味では、田舎と都市の関係性という分野で一番重要な論点は、価値をお互いどのように理解していくかその仕組みづくりだと思いました。

コメンテーター2：大迫

ありがとうございます。都市と田舎の間に仕組みとしてツーリズムが働くということで、再結合ということもそうですが、融合という意味合いを持っているのかと思いました。都市の中で効率的に消費されるということに重きが置かれていた時代から、ツーリズムを通しての、田舎との交流の重要性が受け止められる局面にあるのだと考えていました。そして、西山先生が観光創造学の分類をされていましたが、敷田先生のお話はそれを貫くようなかたちのお話で、観光創造学の幅広い分野を網羅していて、非常にわかりやすいお話でした。どうもありがとうございます。

コメント：小林（英）

いつもながら、すごく面白いお話でした。ただ、よくわからなかったのが、1つはスターバックスの例です。「イメージを高度化していくことはいいんですよね？」という話なのかと思いますが、その点がよくわかりませんでした。

その点はさておき、資料9ページのこの図ですが、言っていることはよくわかります。しかし、石森先生と西山先生のお話の中に出てきたように、これからは発地側の意識の変化と、着地側の考え方を換えようという、これがイノベーションでしたね。その間をつなぐツーリズム産業のイノベーションの必要性というお話もありましたが、この模式図のように都市と農村の間にツーリズムが機能として、繋ぎ役として常に間に入るという考えは、もしかしたら我々は捨てた方がいいのではないかという気がしています。要は、都市住民の中に新しい考え方を入れていって地域とダイレクトに繋いでいく、地域側も変わっていったダイレクトに都市と繋がっていく、そういう3つの形を考えると、私の考えでは、これを担うツーリズム産業の人々の意識がかなり高くないと現実的に無理だと思うのです。少なくとも日本の観光を担ってい

る旅行・観光産業の現状では、こういう意識はなかなか持てない。そういう新しい考え方をどこに入れていけばいいのか。先ほどのイノベーションの研究の中では、都市住民の中でも発想を変えていく、ツーリズムサイドも変えていく、地域サイドも変えていく。この3つが新しい考え方を入れて変われるとしたら、この模式図のようにあまり綺麗に分けすぎず、それぞれのパーツも「もしかしたら変わる」ということを想定すべきではないか。「表現だからわかり易くしたらこのような図になった」というのはわかりますが、現状の機能から分けて考えると、社会を変える発想は出てこないで、もうちょっと突っ込んで、たとえば、都市住民でも直接社会貢献して何かやりたいという若い人はどんどん増えていて、それは、ツーリズムだからという話ではなくて、結果的にツーリズムになっているという人がたくさんいるわけですね。地域住民側でも、意識が変わっていくことによって結果的にツーリズムになっている。だから、都市と農村の間にツーリズムこうやって入っていった変換させるんだよと、いう発想からだけだとなかなか変えられないのではないか。結果として、日本の観光産業の意識が低いなというだけで終わってしまうことを危惧しています。今の状況を変えていくにはいくつかの方法があるというのが、先ほど西山先生がおっしゃったイノベーションの3つの分野だと思うんです。それをもっと入れたら、面白くなると思いながら聞いていました。

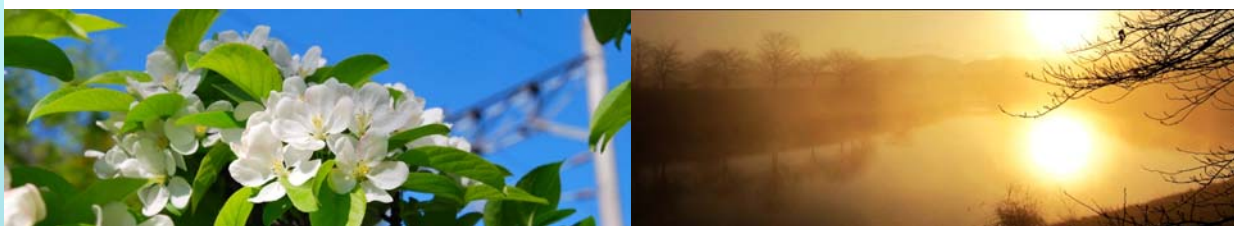
回答：敷田

コメント、ご指摘ありがとうございます。小林先生のご指摘に対しては、実はこれは考え方が、逆で都市住民の人は自己満足投資ししかしないのではないかと。レベルの高い方もいらっしゃると思いますが、比率からいえば、たとえば自分の身体を改造するためにエステに行くとか、自分の教養を高めるために旅行に行くとか、楽しむために行くというのが圧倒的多数だろうと。そういう人たちと地域がちゃんと渡り合うためには、それはそのま

ま残した上で、こっちが良いところを取る工夫をする仕組みを組み込むしかないということです。逆にいえば、都市は勝手に発展する存在であり、田舎はそれに対して戦略的に対応していかなければならないということを考えております。後でまたゆっくりとお話しできればと思います。



地域資源戦略と観光交流による 都市・田舎関係の再構築

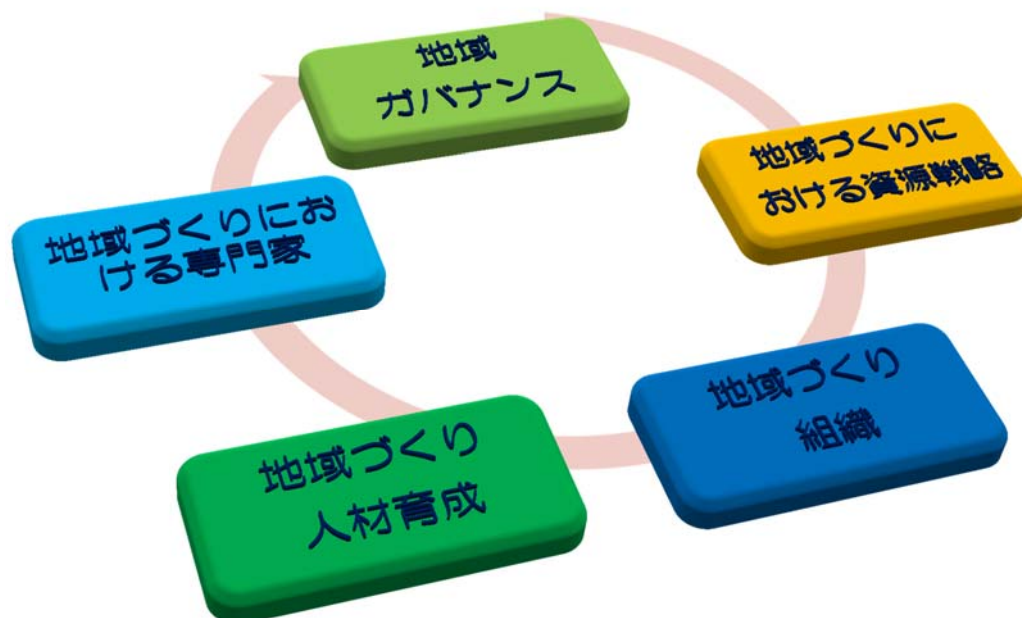


敷田麻実(北海道大学観光学高等研究センター)

発表内容

- 自分の現在の研究領域やプロジェクトに関する概略
- 観光創造学に対する考え、あるいは自らの貢献の可能性、スタンスなど
- 現在、取り組んでいる研究トピックで、特に議論したい内容

資源活用戦略に基づく統合的地域ガバナンス研究



参加しているプロジェクトなど

- 「都市と生物多様性プロジェクト」
国連大学高等研究所主催 (2012-2014)
- 「観光の効果を地域社会へ還元する中間システムの研究」
科研費プロジェクト (2011-2013)
- グローバル人材育成の教育システム構築プロジェクト
学内 (2013-)
- 知床世界遺産自然科学委員会(エコツーリズム検討会議)
環境省・林野庁・北海道庁 (2010-)

創造とは何か

- 伊東俊太郎（麗澤大学）
「創造とは、問題を解決する、素材の新しい組み合わせ、新しい理論への変換を可能にする新たな視点の発見である」
- 恩田 彰（東洋大学）
「異質の情報や物を今までにはない仕方と結合することにより、新しい価値あるものをつくりだす過程である」
- 江川 朗（総合経営研究所）
「創造とは、きわめて異質の発想を実現した社会的成果。発想とは諸情報の変形、加工、組み合わせによる異質の意味化」
- 川喜田二郎（鎌川喜田研究所）
「なすに値する切実なものを、おのれの主体性と責任において、創意工夫を凝らして達成すること」
- 國藤 進（北陸先端科学技術大学院大学）
「ある主体にとって既知のことがらを組み合わせ、その主体にとって、ある観点からみて有用な未知のことがらを構築すること」
- 西 勝（明治学院大学）
「平凡に新しいことがら、ものが生まれること。消滅をも含め、全生物に喜ばれ、できれば定義不要にまで自然と」
- 比嘉佑典（東洋大学）
「創造とは、個人の中に、事物の中にある古い結びつきを解体し、新しい結びつきにつくりかえることである」
- 星野 匡（㈱ブランネット）
「何らかの価値を有する、新しいアイデア・思想、その表現、あるいは表現としての事物を、意図的に生み出すこと」
- 師岡孝次（東海大学）
「現実を理想に近づける活動をいう。対象は"もの"でもシステムでもよい」

日本創造学会の創造の定義 （日本創造学会HPから転載）

「創造とは、人が異質な情報群を組み合わせ統合して問題を解決し、
社会あるいは個人レベルで、新しい価値を生むこと」

【出典】高橋 誠(2002)新編創造力事典—日本人の創造力を開発する 創造技法 主要88技法を全網羅!、日科技連出版社、482p.

観光創造について

- 創造とつく単語の比較
- 環境創造？
- 知識創造？
- 価値創造？
- 不定型なものを実体化するためのシステムの存在
- 他者との相互作用による創発の存在
- プロセスの存在

Creative destructionという創造

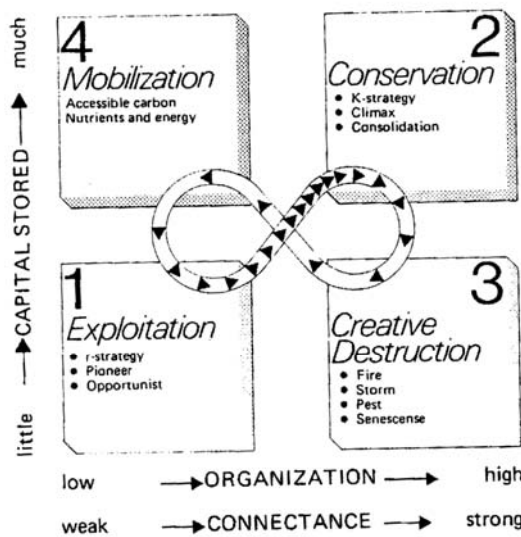


Figure 4. Diagrammatic representation of the four ecosystem functions and their relationship to amount of stored energy and capital (y-axis) and degree of connectedness (x-axis). The arrowheads show an ecosystem cycle. Interval between arrowheads indicates speed — short interval = slow change; long interval = rapid change.

Holling, C.S. (1987) 「Simplifying the complex: The paradigms of ecological function and structure」, 『European Journal of Operational Research』, 30, pp.139-146.

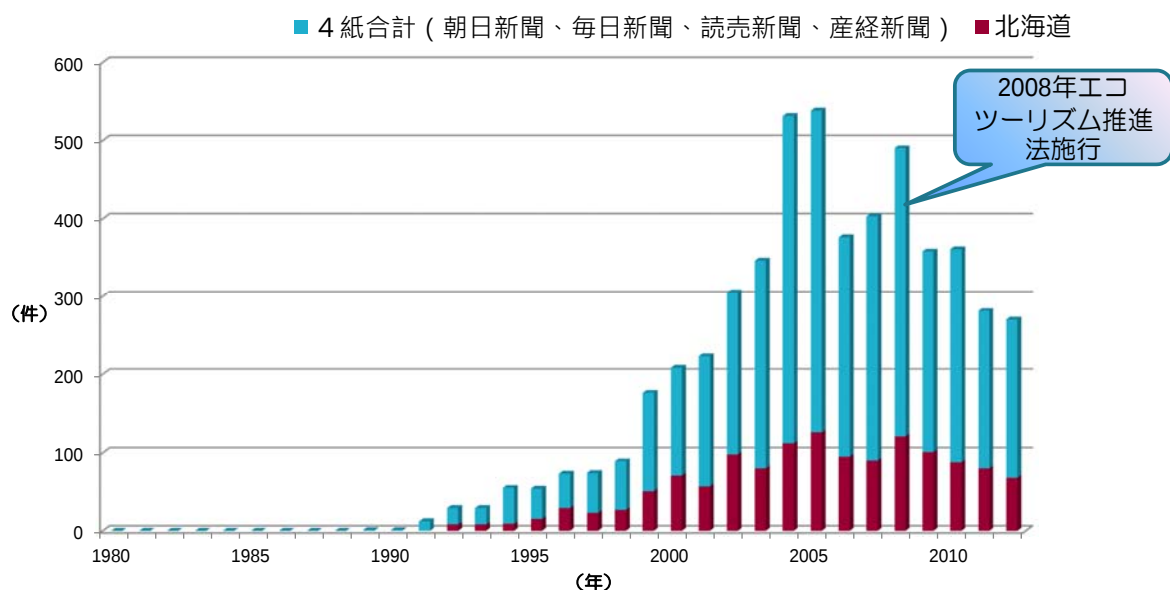
- 観光創造とは、
「観光(または地域)資源をめぐり、地域内外の組織とコミュニケーションの再編プロセス」

(生態系ではエネルギー資源をめぐり、構造化と破壊プロセス)

- プロセスの繰り返しが前提

日常化するエコツーリズム

「エコツーリズム」「エコツアー」に関する新聞記事件数



出典：日経テレコン21 より作成

※「エコツーリズム」「エコツアー」のいずれかの語を含む記事を抽出

私たちは激しく移動する

表－1 交通機関を利用した年間1人あたりの移動距離

(単位：km/人・年)

年	合計 ①+②+③	マイカー①	乗合バス②	鉄道③
1960	2358	68	336	1955
1970	4811	1548	504	2759
1980	5648	2606	355	2687
1990	7937	4529	273	3135
2000	8946	5704	213	3029
2005	8962	5683	217	3064

注) 国土交通省「陸運統計要覧」のデータより作成

マイカー＝自家用乗用車

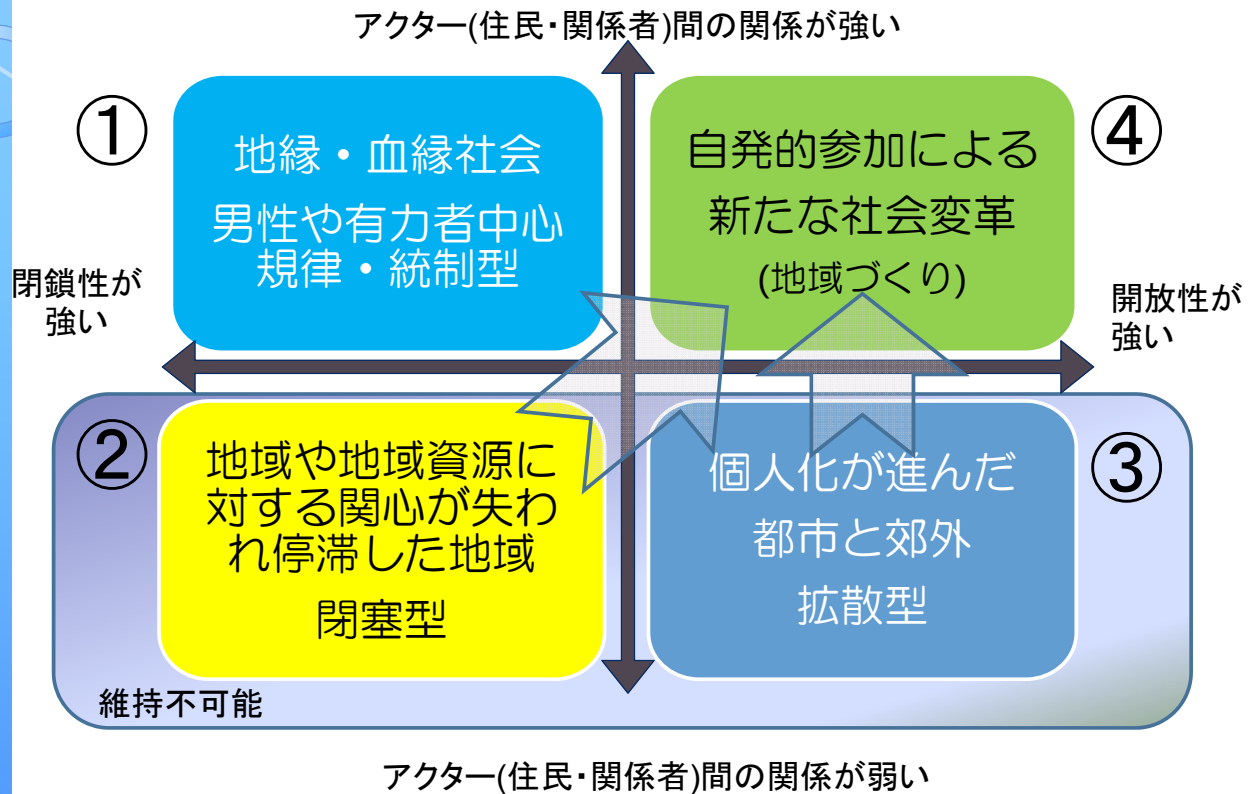
各輸送機関の総輸送人キロを総人口で除して算定

出典：新田保次(2008)「地域交通について考える～新たな交通価値と低速交通システム～」、『マッセOSAKA研究紀要』,11, pp.7-18.

地域づくりも変わった

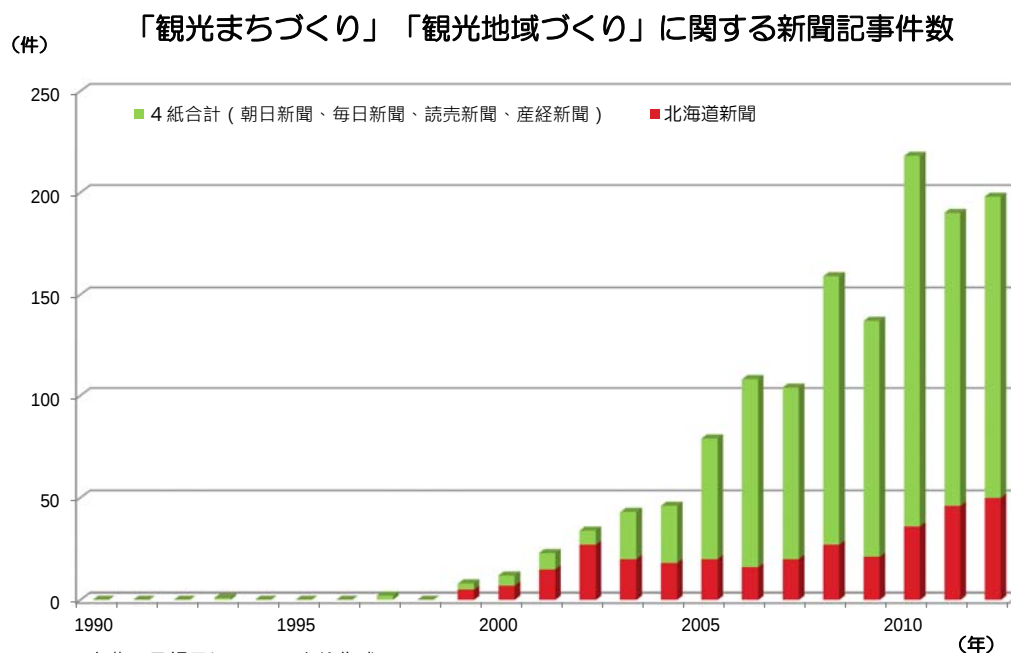
区分	地域づくりの目的	地域づくりの主体
地域振興型 (1980年代まで)	地域経済の活性化や地域内のインフラの整備、生活空間の利便性の向上	国と地方自治体などの行政組織、およびそれを実務面で実行するコンサルタント
テーマ型 (1980年代以降)	地域資源活用し、住みやすい地域を実現するための特定のテーマを掲げた、地域外との差別化	主に地方自治体と地縁組織、NPO活動やボランティア団体
統合デザイン型 (2000年代以降)	地域環境やアメニティも含む地域社会の充実と個人の生活の質向上を統合的にデザインする	地方自治体とNPO、企業(社会的企業なども含む)など、多様なアクターや組織の対等な参加による協働、ガバナンス

地域の構造が変わってきている



数田麻実・森里昌之・中村壯一郎(2012)「中間システムの役割を持つ地域プラットフォームの必要性とその構造分析」、『国際広報メディア・観光ジャーナル』,14, pp. 23-42pから転載。

観光地域(まち)づくりの拡大



出典：日経テレコン21より作成

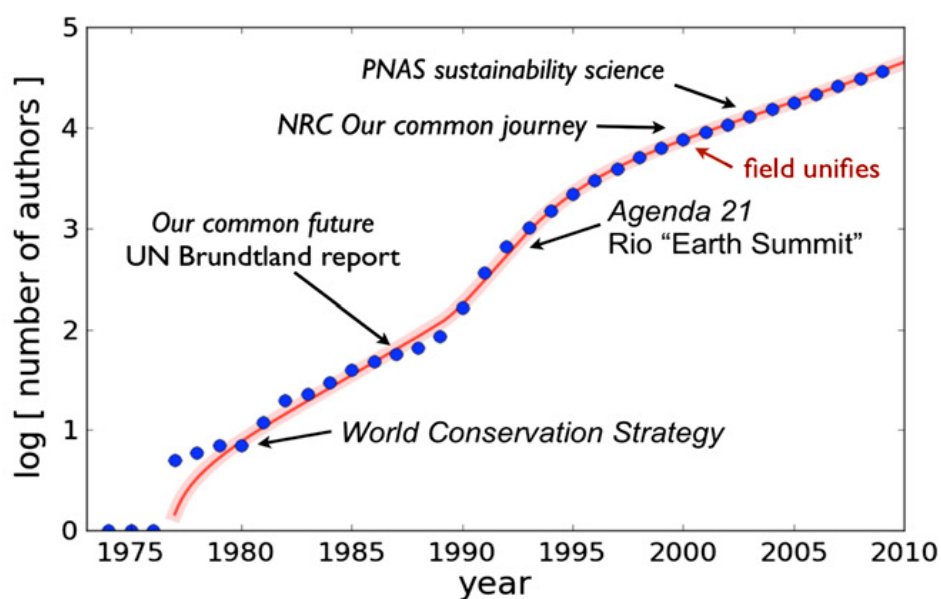
※「観光まちづくり」「観光地域づくり」のいずれかの語を含む記事を抽出

観光地域づくりとは？

- 「観光を地域課題の解決手段として用いる地域づくり」
 - 望ましい地域を維持してゆくための活動
 - 観光という手段を用いて行う活動
 - 行政だけでなく、地域住民やNPO・企業など多様な地域内外の関係者が主体的に参加する活動
 - 活動やサービスの効果を考え、地域課題解決を実践してゆくプロセス
 - =「地域活性化」「地域(まち)おこし」「地域再生」



持続可能性を考えてはいるが



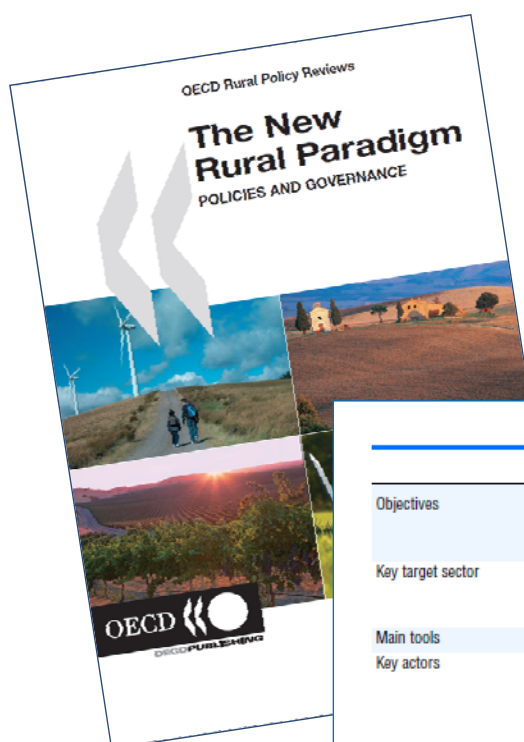
世界の3.7万人の著者の2万本の論文の分析
持続可能性に関する論文数は8.3年で倍になっている
1980年代後半から発表数が伸びた

都市の人口増加と機能拡大

- 世界の都市人口は50%を超えた
 - 1950年には30%だった
 - 日本を含む先進各国では80%近い
- 毎日17万人が都市に流入する
- 都市人口が2倍になると、都市機能は15%増加する
 - 平均給与、地域GDP、レストラン数など都市機能は15%増加する
 - 一方、犯罪も15%増加する

Bettencourt, L. and West, G. (2010) 「A unified theory of urban living Nature」, 『Nature』, 467 (7318), pp. 912-913.
 グラットン＝リンダ (2012) 『ワーク・シフトー孤独と貧困から自由になる働き方の未来図(2025)』, プレジデント社, 386p.

新たな田舎： New Rural Paradigm



- OECDカ国の土地の75%が田舎
- そのうちの96%が農地
- しかし、農業就業者は全体の13%
- そして、田舎の総生産の6%しか担っていない

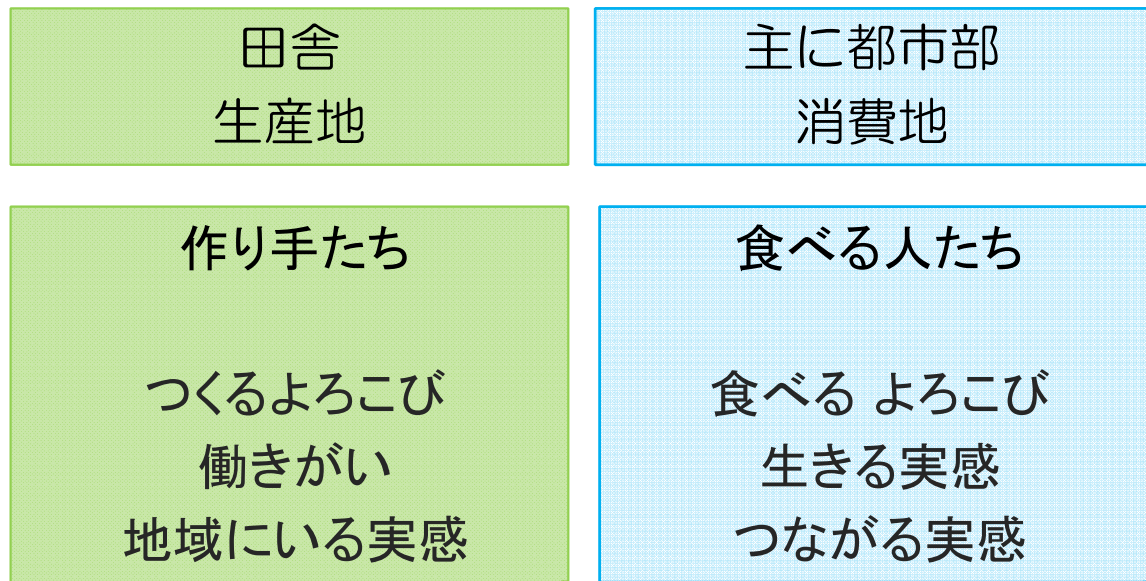


Table 0.1. The new rural paradigm

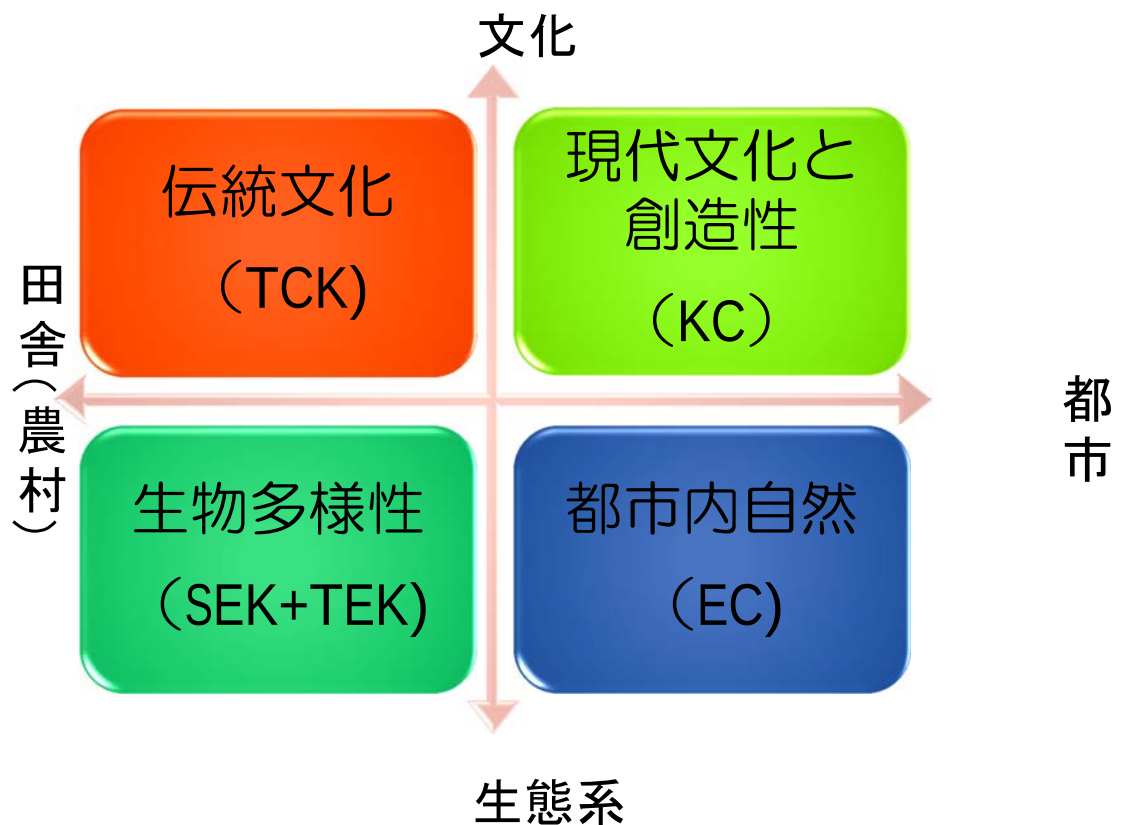
	Old approach	New approach
Objectives	Equalisation, farm income, farm competitiveness	Competitiveness of rural areas, valorisation of local assets, exploitation of unused resources
Key target sector	Agriculture	Various sectors of rural economies (ex. rural tourism, manufacturing, ICT industry, etc.)
Main tools	Subsidies	Investments
Key actors	National governments, farmers	All levels of government (supra-national, national, regional and local), various local stakeholders (public, private, NGOs)



作り手と消費の分離 (disconnectedness)



Horlings, L.G. (2012) 「Place branding by building coalitions; lessons from rural-urban regions in the Netherlands」, 『Place Branding and Public Diplomacy』, pp.295-309.



SEK=Scientific ecological knowledge TCK=traditional cultural knowledge
TEK=traditional ecological knowledge KC=knowledge creation EC=ecosystem creation

用語の定義

- 生態系とは

- 無機的環境と生物群集の総体で、エネルギー流によって特徴付けられる栄養段階や物質循環がつくりだす自然系

『生態学事典』, 巖佐庸・菊沢喜八郎・松本忠夫・日本生態学会編, 共立出版, 東京都, 682p.

- 文化とは

- 文化とは社会或いは社会集団の精神的・物質的・知的・感情的特性の組み合わせであり、芸術・文学に加えて生活様式・共生の仕方・価値体系・伝統・信念が含まれる

(「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」第31回ユネスコ総会採択 2001年11月2日、於パリ)

用語の定義

- 生物多様性

- すべての生物の間の変異性をいうものとし、種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含む

(生物多様性条約 第2条)

- 文化多様性

- 集団及び社会の文化が表現を見い出す多様な方法をいう

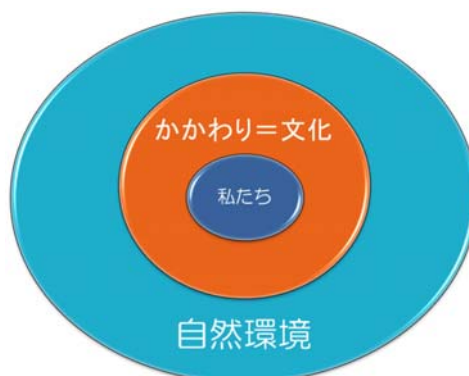
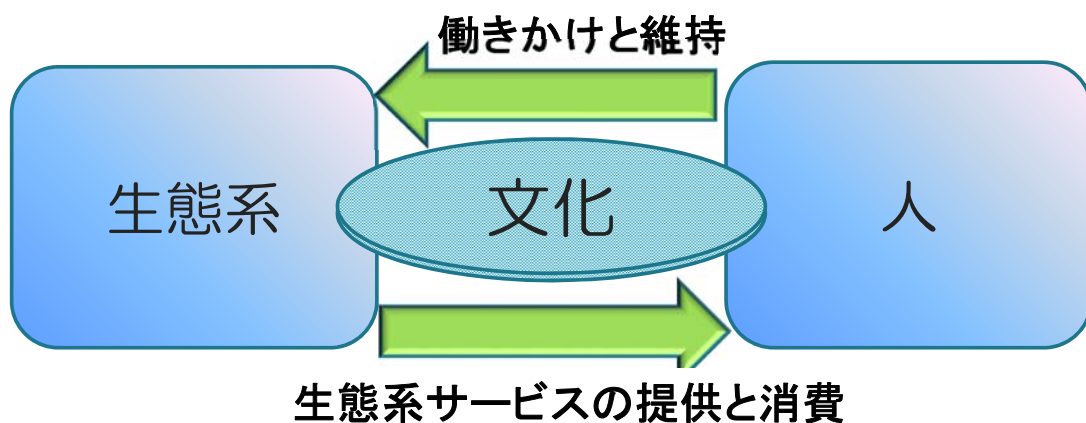
(文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約、第4条第1項 2005年採択)

田舎が担う生態系サービス

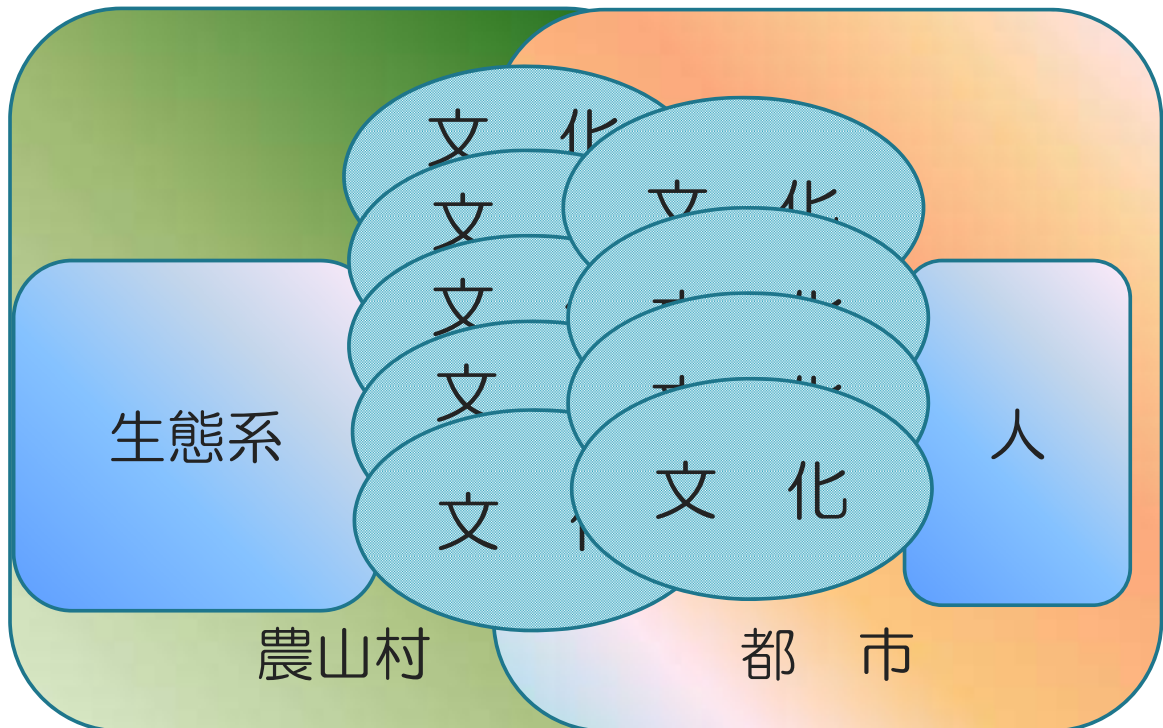


Millennium Ecosystem Assessment(2007)『国連ミレニアム エコシステム評価 生態系サービスと人類の将来』, Millennium Ecosystem Assessment編, 241p.

生態系とのかかわりが文化を生む

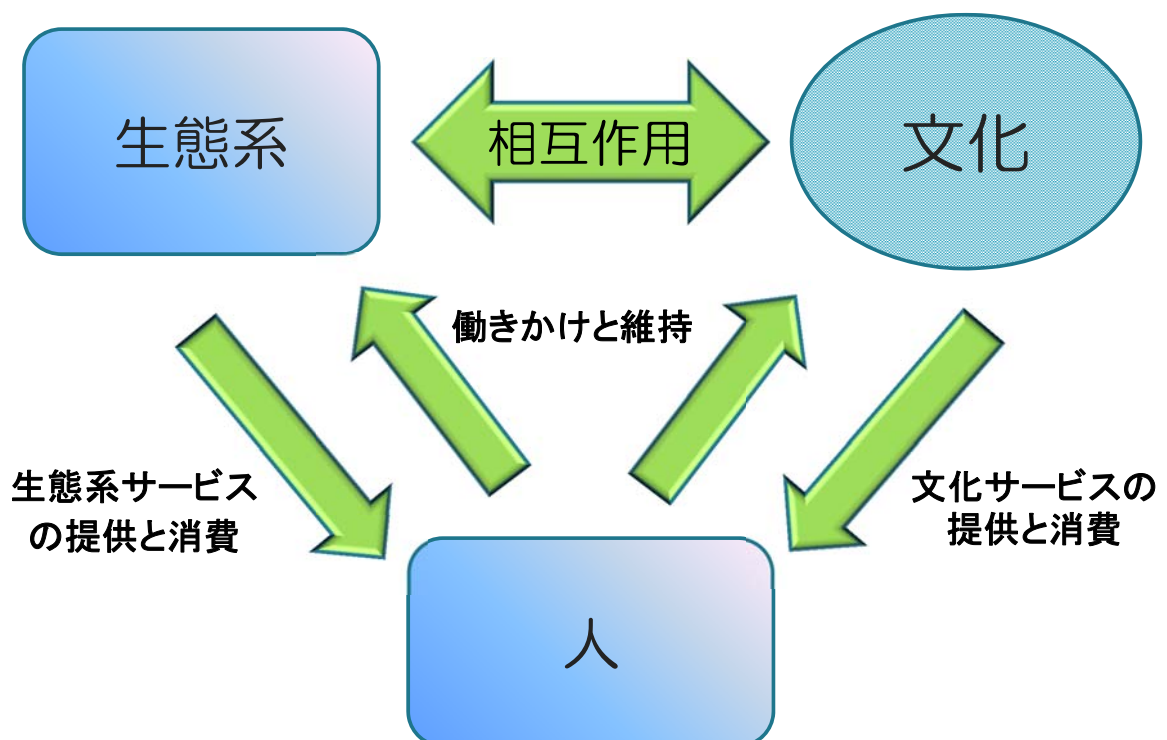


文化の相互交流から新たな文化が生成



都市では、文化交流から新たな文化が生成し、自然環境がなくても文化が効率的に生み出されていく

文化も自然環境と同じく対象化される



生物文化多様性への言及

- 1988年にブラジルのベレンで行われたInternational Congress of Ethno biology における宣言文
 - 宣言では「biological and cultural diversity」として表現された
- 2010年6月 International Conference on Biological and Cultural DiversityのWorking Document(モントリオール)
- 「Biocultural diversity as the total sum of the world's differences, no matter what their origin」

Loh and Harmon (2005)

- Biocultural diversity (BCD) is the total variety exhibited by the world's natural and cultural systems

Harmon and Loh (2004)

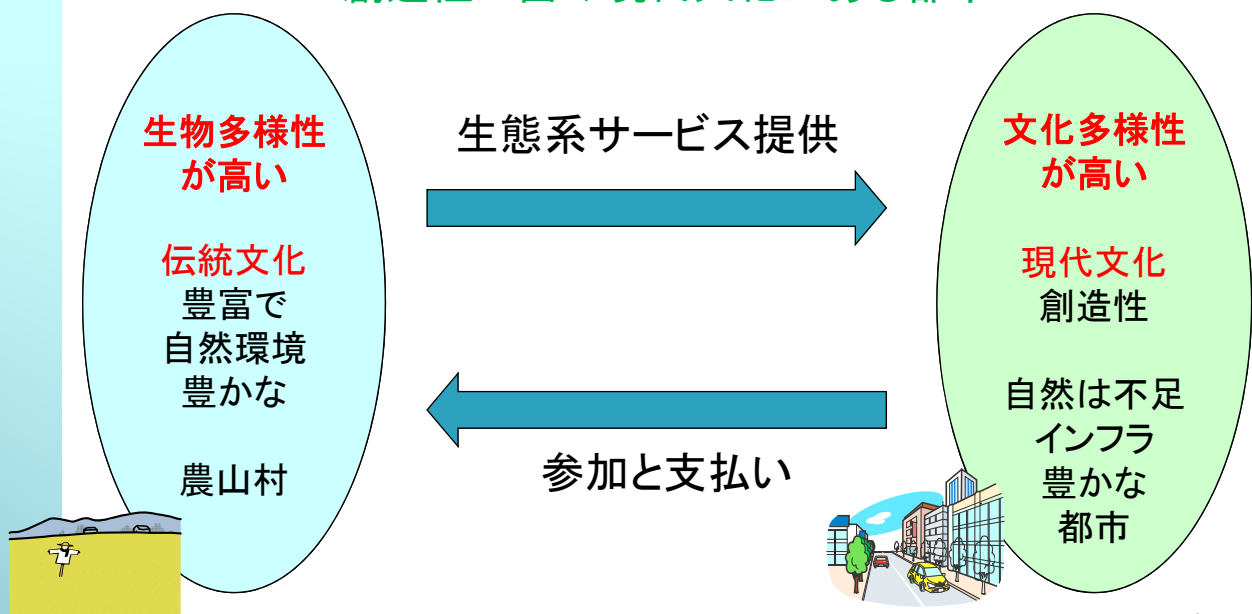
Harmon, D. and Loh, J. (2004) 『A global index of biocultural diversity』, 80p.
Loh, J. and Harmon, D. (2005) 『A global index of biocultural diversity』, 『Ecological Indicators』, 5, pp. 231-241.

提供者と消費者の関係で満足か

自然環境が豊富で伝統文化がある農山村

×

創造性に富み現代文化がある都市



観光でなぜ生物文化多様性？

- 生態系と文化を橋渡しする交流
- 都市と田舎に分離したものを再結合
- 伝統文化だけではなく現代文化に注目

【課題】

- 地域資源管理をどのように進めるか
- 社会（地域）と個人（都市）のニーズの調整
- 自然か開発かという難問

地域資源の高度利用と観光

直接利用

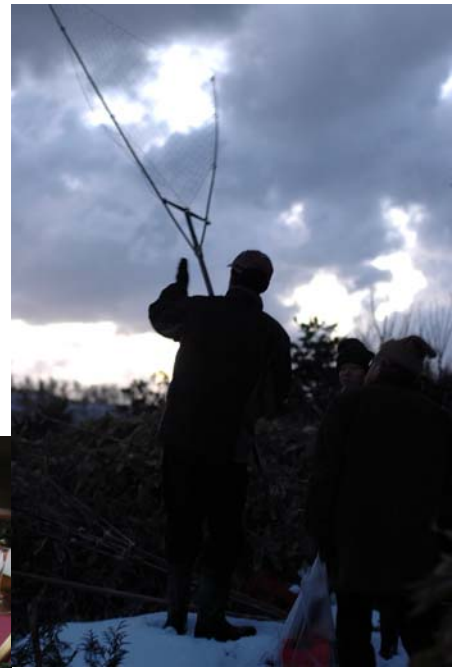
- 地域にある資源をそのまま利用（消費）する。
- 【例】 コーヒーを買って飲むためにスタバに入る

イメージ利用

- 地域にある資源のイメージだけを利用する。
- 資源は直接消費せずに、その意味だけをイメージに変換して利用する。
- 【例】 コーヒーの味より、スタバの雰囲気を楽しむ

背景の利用

- イメージを別の目的のための背景として利用する。
- 目的がないと利用しない。目的が変わると入れ替え可能である。
- 【例】 スタバが登場する恋愛小説



伝統料理も

生々しい調理プロセスがあるはず



避けられない「切り身化」と対応戦略

- 【生身】

生態系や文化は生身として地域に存在

- 【切り身】

その部分だけを取り出して観光対象にする

鬼頭秀一(1996)『自然保護を問い直す：環境倫理とネットワーク』, 筑摩書房, 254p.

- 地域資源の複雑化

- 複雑な承認が必要(例：地域「官僚」主義の再導入)

- 地域資源のネットワーク化

- 土地と切り離せなくする(例：食文化、ワインツーリズム)

- 地域資源を不定形化する

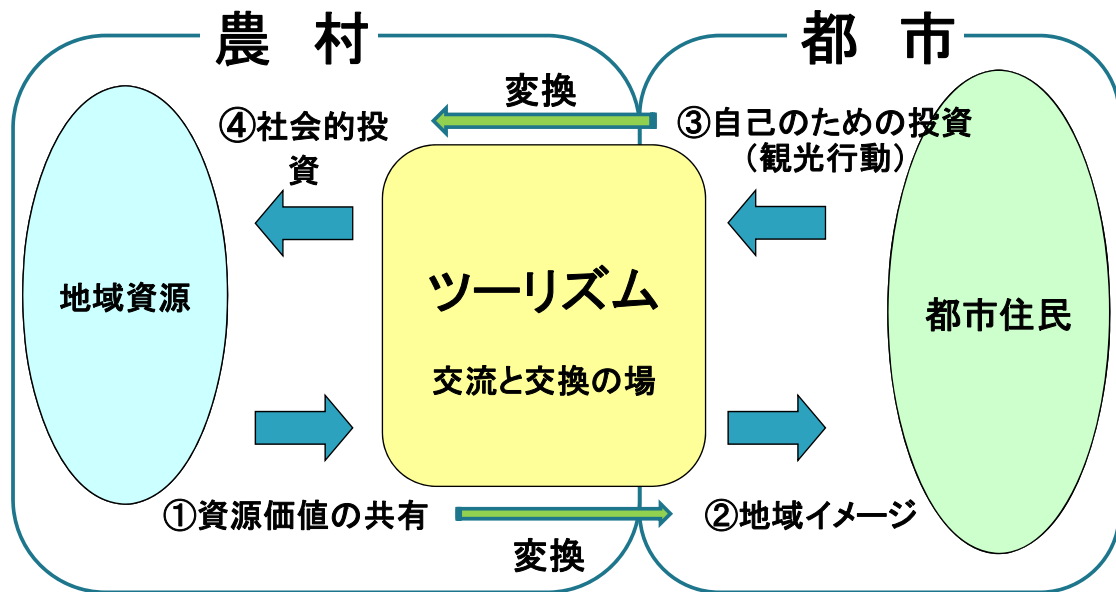
- わかりにくい設定にする(例：慰霊祭など祭事の設定)



慰霊祭で資源を不定形化



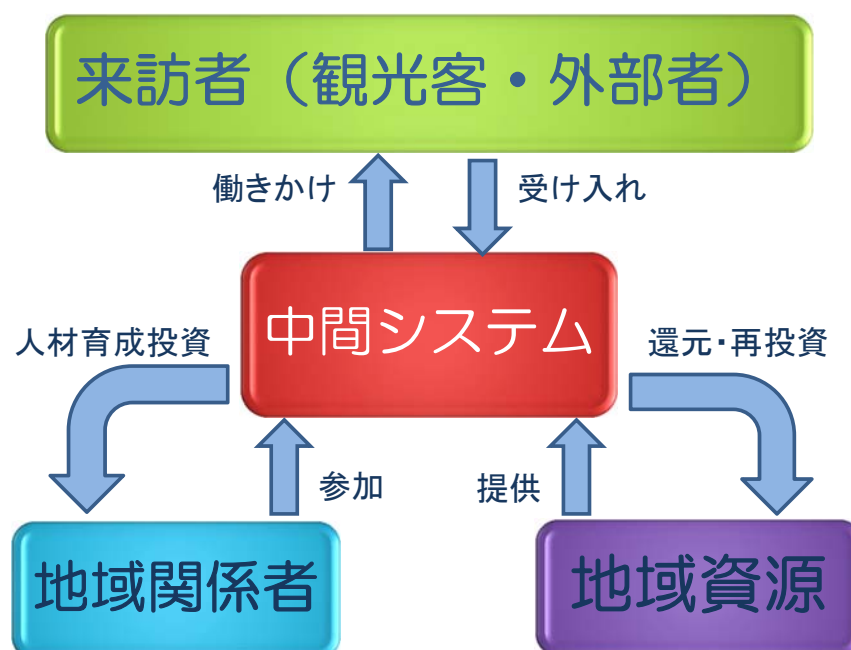
観光による 自己実現と地域社会のニーズの調整



上記の「中間システム」を含むモデルは、敷田 麻実・木野 聡子・森重 昌之(2009)「観光地域ガバナンスにおける関係性モデルと中間システムの分析ー北海道浜中町・霧多布温原トラストの事例からー」、『地域政策研究』,(7),pp. 65-72pから転載し一部改変し作成した。

橋本努(2007)『自由に生きるとはどういうことかー戦後日本社会論』, 筑摩書房, 東京都, 269p.

地域資源戦略と人材育成の関係



END



北海道大学観光学高等研究センター 敷田麻実
ホームページのご案内

<http://www.cats.hokudai.ac.jp/~shikida/>

「敷田」で検索すると見つかります

参考および引用文献

浜野保樹(2003)『表現のビジネス』,東京大学出版会,322p.

橋本努(2007)『自由に生きるとはどういうことか-戦後日本社会論』,筑摩書房,東京都,269p.

佐藤仁(2008)「今、なぜ「資源分配」か」,『資源を見る眼—現場からの分配論』,佐藤仁編,東信堂,東京都, pp.3-31.

敷田麻実(2010)「援農という希望」,『東白川都市交流促進事業 農的暮らしセミナー実績報告書』,pp. 19-24p.

敷田麻実(2011a)「ボランティア・ツーリズムで地域づくりを支える仕掛け」『新たな地域と都市の連携による地域活性化の実現を！-ボランティアツーリズムによる箱根・小田原・足柄地域の活性化の可能性を探る』発表資料.

敷田麻実(2011b)「交流による持続可能な地域資源戦略—都市と地方の新たな関係性構築は何を生み出すか」,『第73回全国都市問題会議論文集』,pp. 160-166p.

敷田麻実・森重昌之・中村壯一郎(印刷中)「中間システムの役割を持つ地域プラットフォームの必要性和その構造分析」『(北海道大学)国際広報メディア・観光ジャーナル』14.

敷田 麻実・木野 聡子・森重 昌之(2009)「観光地域ガバナンスにおける関係性モデルと中間システムの分析—北海道浜中町・霧多布湿原トラストの事例から—」,『地域政策研究』,(7),pp. 65-72.

依田真美(2011)「ボランティアツーリズム:「機会」という無形資源についての考察」『第10回記念全国研究大会(北海道第5分科会「地域における観光資源の活用とマネジメント」分科会報告)』.

◆研究発表 4

現代社会と故郷～樺太『故郷』訪問ツアーにおける新しい『故郷』の像

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

宮下雅年

唱歌「故郷」にみる日本の故郷観

今日は、こういうタイトルで、樺太における故郷訪問の旅に触れながら、現代社会に生きる人びとはどのように故郷に向き合っているか、そこに新しい芽生えというか、創造性の萌芽が認められるとすればそれはなにか、こういうことをお話しして、皆さんからご批判を頂きたいと思います。

手順としては、資料にありますように、概念としての故郷、故郷のイメージの普及とその綻びについて述べてから、その修復の例を挙げます。修復、復元とは、あくまでも過去に固執するものですが、はて、未来を指向する方向性を見いだせないか、そういう展望にこそ、何か可能性が宿っているのではないかと私は思いますので、その例をいくつか挙げて締め括るというかたちにしたいと思います。

故郷という概念が、明治の日本、国民国家の創成期に、国というものを補完するかたちで、「我が国」をより身近に引き寄せるための補完物として創り出されてきたというのは、もう定説といっていいのか、疑いようがありません。そういう故郷について語る際に、定番として出されるのが、この文部省唱歌「故郷」なんですけども、いろいろと言われている中で、研究の主流というのは、この歌がつくられた 1914 年（大正 3 年）、その時代診断というものから、この歌の問題点を洗い出していく、そういった歴史学の作業が主流なんですけども、とりあえず私の関心事はそこになく、むしろ問題は、この歌がその背景にある自然観なり倫理観が本当にあるのか、その実在性や普遍性について疑問視されながらも、この 100 年間歌い続けられている、この事実こそ、問うべきことがあるのではないかと考えますので、とりあえずこ

の歌の特性について一瞥しておきたいと思います。

まず、この歌は故郷を歌いながら、民謡とは違って固有名詞が欠如していますので、そこがどこなのか分からないという抽象性を帯びています。その意味では内容的には空疎なんですけど、だからこそ逆に、広く通用するという面があります。また、幼年期の純粹無垢な遊戯、あるいはその遊びの舞台である山や川、これも同じく汚れないものとして賛美されている。さらに、もう 1 つの倫理性ですが、親孝行なり友情の重要性が示唆されている。そして、故郷というのはいつの日か帰るべき場所、そして帰還する者を優しく迎え入れてくれる、永劫不変の場所であると示されています。だけでも、「石をもて追はるるがごとくふるさとを出しかなしみ消ゆる時なし」と歌われるような苦い故郷の思い出と対比してみると、この唱歌がいかに優等生ぶった望郷歌であるということは歴然としているわけですね。それはともかく、私が同行した樺太故郷ツアーの旅仲間も、道中この歌を歌うんですね。歌いながら、昔は山でフレップの実を摘んで口の周りが紫色になったんだとか、浜でぬるぬるしたシシャモを掬って採ったんだ、そういう回想をして、この歌の抽象性を乗り越え、解消して、それぞれ具象化していく。そういう意味では、この歌は、それ自体は抽象的なんですけど、とても大きな器であって、しかも強い求心力をもっているというところがあるといえます。とはいっても、当地では、今じゃフレップも一フレップというのは、アイヌ語の「赤い実」ということなんですけど、ブルーベリーみたいなものなんですけど、そのフレップもなかなか見つからない。ましてやカラフトシシャモなんていうのは浜に寄せてこない。山や川、これは相変わらずあるかという、

この山も今では植林によって微妙に姿を変えている。川は、川幅だけでなく川筋も変わっている、同じ川とはとても思えない。そこは到底、帰郷者を昔ながらに優しく迎え入れてくれる場所ではなくなっている。だけでも歌わずにはいられない。なぜか？ この唱歌が私たちの故郷イメージを 1 世紀にわたってがんじがらめにしてきた、そういうところがあるからですね。その威力は、まさに故郷を奪われ、その麗しさなんていうのは幻に過ぎないとよく分かっている樺太引揚者も、この歌を歌ってしまう、そういうところに端的に示されています。

樺太探訪～恵須取への道程と慰霊

前置きは以上にして、樺太、恵須取、あるいは塔路という町なんですけど、そこに向けてスタートします。私が同行した樺太故郷訪問ツアーなんですけど、2 回参加しているんですが、一行はだいたい 15 名です。平均年齢は 70 歳の前半、ただ、お孫さんも加わったりで、その分、平均年齢も若くなっているのですが、80 歳くらいの方が多いです。最高齢は 85 歳の女性、もちろんそのほとんどは、かつてこの地に住んでいた方々で、私のような無関係な者は例外ですね。

さて、サハリン島全体は、面積としてはほぼ北海道と同じ。ご存知のようにこの北緯 50 度から南が、1905 年から 1945 年まで日本が領有、統治していたいわゆる樺太です。1941 年の時点で、約 41 万人が住んでいました。稚内からフェリーで 5 時間半、大泊という、現在のコルサコフですね、そこに着くんです。その昔は 8 時間くらいかかったそうです。このコルサコフから、ここがユジノサハリンスク、豊原といったところですね、43km くらい、40 分くらいで着きます。ここを発って、ドリンスク（落合）という町を経て、オホーツク海の海沿いを北に進んでいきます。島を最短で横断できる山あいの道を通って、西海岸に出て、それから延々と、北緯 49 度まで北上していく。そうするとやっとここ、ウクレゴルスク、恵須取に着

くわけです。サハリン州の州都はユジノサハリンスクー現在、サハリンの人口は 50 万人を僅かに割るくらいなんです—このユジノサハリンスクに 20 万人住んでいて、いわゆる一極集中型、近年はここだけが都市化しているというところがあります。ユジノサハリンスクを出て、ウグレゴルスク、これは「石炭の山」という意味なんですけど、その名のとおりに、かつての恵須取は炭鉱と製紙業のまちでした。こういう山道も雨が降ると手がつけられなくなるんですが、ここを抜けるとまっすぐな道になるんですね、そしてやっと辿り着くんです。で、人口は 1920 年には僅か 600 数名の北限の小さな集落だったんですけども、1930 年代、樺太の石炭の需要が高まるにつれて、飛躍的に人口が伸びていきます。1940 年の国勢調査で、豊原市の人口は 3 万 7 千人でしたけれど、恵須取の場合は 3 万 9 千人、さらには塔路という町、これは恵須取から分町したところですが、1938 年に独立し、1940 年には 3 万人が住んでいる。合わせて、この 2 つの町だけで、樺太全島の 6 分の 1 にあたる 7 万人近くが住んでいたということになります。

ユジノサハリンスクを発って 8 時間あまり、やっとウグレゴルスクの街が見えてくるわけなんですけど、まず目を引くのは旧王子製紙の煙突なんです。工場内は今では荒らされ放題、廃墟とされているわけです。その中に入ってみると、鉄骨やボイラーなどの残骸があちこちにあり、凄みを帯びて私たちを待っているわけです。この種の廃墟と化した、産業遺産というんですか、樺太の拓殖というのは、工業が主体でありましたから、恵須取だけでなく、こういった廃墟というのは、樺太各地にあります。ともあれ、放置されたまま、語られない建造物というのは、工場跡だけではなくて、例えばこのようにポツンと場違いに佇む大鳥居も、解体にお金がかかるというそれだけの理由で、70 年もそのままのところに建っています。これもまた、沈黙を強いられたランドマークです。故郷は面影だけを残して変わり果ててしまいました。

ツアーの時期は、ちょうど月遅れのお盆で、墓参りをする頃なんですけど、私たちの1つの目的もそれです。とはいっても、樺太の日本人墓地は今ではほぼ原野、山林になっているわけです。恵須取では、かつての共同墓地から日本人の墓石を撤去して、その上にロシア人の墓が点々と作られています。その一角に、かつてこの地に住んで没した日本人の霊を慰める鎮魂の碑が、1989年に有志によって建立されました。それ以後、訪問者はいってみればここを聖地として、この場でそれぞれ、積年のこみ上げる思いをつぶやきながら合掌し、肉親や友人の霊よ安かれと祈るわけです。しかしそうはいっても、鎮魂碑は墓ではなくて、いふならば遺骨のない墓、ある種の抽象的、代理的な表象であるわけです。ちょうど唱歌「故郷」に相当する、それ自体は空っぽの大きな器といえます。そこにあれこれと思いが注ぎ込まれるわけですが、それでは思いの丈は打ち明けられない。心のつかえを解きほぐすことができない、そんな場合があるわけで、この抽象性と対比される慰霊のもう1つの模様をご報告します。

「私」固有の故郷の復元

今回の旅の仲間の一人、仮にAさんとしておきます。1942年1月に恵須取近郊の農家に生まれました。現在71歳。Aさんは生後11ヶ月の1942年12月にお母さんを亡くします。自家の農地の外れに埋葬したそうです。敗戦後、ソ連側には食糧の調達源の確保という狙いがあった、農家だったAさん一家は4年間抑留されて、Aさんが7歳の時、1949年に父、兄、姉とともに引き揚げて函館に上陸しました。そういう経歴の持ち主で、今回ご母堂の慰霊のために、このツアーに参加したんですけども、ゆかりの地といっても、開墾した所は今や跡形もない。それでも、このあたりと思われるところで手を合わせたい、そんなやむにやまれぬ気持ちから、Aさんはいってみれば道端に塚を拵えて、文字通り御霊に呼びかけ、御霊を招き寄せるんです。霧がかかる山の向こうから、ピン

ク色の、ヤナギラン（あるいは盆花）と呼ばれるんですけど、そうした草花の群生を越えて、母の御霊が寄りつく。このようにして、素朴ともいえるような神祇信仰に支えられて供養が行われました。それは即席の招魂、慰霊の儀式でしたけど、出来合いのものではない分、生々しさを帯びていて、鎮魂碑を中核とするような公式の墓参の抽象性、万能性が醸し出すものとは、いささか違う、Aさん固有の故郷がここに出現した気がしました。

制度化された故郷の表象とは対照的な、「私」に固有の故郷の復元、その例をもう1つ挙げます。旅の仲間が唱歌「故郷」を好んで歌うと申し上げましたが、面白いことに「塔路小唄」というローカルな歌も、バスの中で大声を出して歌うんですね。

胸の氷も春吹く風に
とけて想いも塔路ぢゃないか
名なし草さえ花咲くところ
咲いて実らぬ花はない

乙女心をネオンの影で
思い暮らすか末廣通り
強いばかりが男ぢゃないと
濡れて咲いてる岩桔梗

霧に抱かれて間宮が明けりゃ
黒いダイヤの積取船も
炭都（たんと）想いを出船のドラに
こめて朝日の沖へ行く

1928年、「波浮の港」が大ヒットします。それ以来ローカル・カラーが商品化されて、ご当地ソングというものが続々と出てきます。この塔路小唄もその1つです。1941年、敗戦直前なんですけども、ポリドールから発売されました。唱歌「故郷」の曲調と突き合わせてみると、当然のことながら固有名詞を盛り込んで、具象的です。それも極めて地域限定的です。このあたりは半年ほど厳

しい冬が続きました、その間、海も凍結します。「間宮が開けりゃ」というのは、春になって間宮海峡の氷が溶けて、船の往来が可能になるということです。「岩桔梗」とか「黒いダイヤ」とか、そこに住んでいる人にはすぐ分かることですが、独特の風物が散りばめられています。ここに、何か無垢なものがあるとしたら、炭鉱夫の男に思いを寄せる、カフェの女給の純真さでしょうか。倫理性、強いていえば、一途に待ち望めば、氷の海も開けるように思いも通じるということかもしれません。ご当地ソングとはいっても、炭鉱のまちを舞台にした男女の愛がテーマです。このような唄を、早熟な子どもたちが、門前の小僧よろしく、聞き覚え、10歳の頃に親に隠れて歌ったように、80歳を過ぎた今、これを歌うわけですね。そうやって、唱歌「故郷」の優等生ぶったものを中和していく。そうやって解消して、故郷を手元にぐいっと引き寄せようとしたんだと私は思います。

日本は、近代化の過程で、殖産興業の旗印を鮮明にしつつ、国民を生まれ故郷から追放するということを、大なり小なり繰り返してきたと思います。たとえば、冷害や凶作によって農村が疲弊し、口減らしのために娘を身売りすることもあったでしょう。農業だけではやっていけなくて、兼業化した、あるいは出稼ぎに出た、ということもあったでしょう。それでもだめで、一家を挙げて、農業を諦めたり、村を引き払ったりするということもあったでしょう。ダム建設で村が水没する、そのために村そのものが遺棄されたということもあったでしょう。こんなふうにして100年にわたって徐々に、故郷喪失が浸透していきます。

これとは対照的に、樺太ではいきなり、何かなんだか分からぬうちに、島民は故郷を奪われてしまいます。1945年8月9日、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して、ひたすら領土の奪還を目指して樺太に攻め込んできました。恵須取などはあっという間に灰燼に帰してしまいました。そういうわけで、北の住民たちは、取るものもとらず、ソ連の爆撃機に追い立てられながら、山越

えをしたり、海沿いをぬったりして、南の豊原を目指すんですけども、この逃避行の過程で、まあ、足でまといになる子どもや老人が山中で棄てられたり、絶望のあまり一家心中したり、そういったさまざまな悲劇が頻発するわけなんですけども、それはともかく、ソ連の攻撃は8月15日の天皇のいわゆる玉音放送の後も行われ、23日まで続きます。この間、樺太庁は、緊急疎開と称して、女性、子ども、高齢者を北海道に避難させるわけなんですけども、この疎開船に乗れず密航したという人もいて、合わせて8万人ほどが避難しましたけども、その後ただちにソ連側は、日本人が島を離れるのを禁止します。そのため、30万人あまりが島に抑留されてしまいます。ソ連としては、当面、社会の基盤を担わせる日本人が必要だったわけで、島から日本人が引き揚げることができるようになったのは、1年以上経った、1946年12月です。これが1949年7月まで続いて、結果的に、先ほど申し上げたAさんのように、長い人で終戦後4年間もロシア人と生活したのです。

あの故郷はもうない、破綻してしまった。破綻した故郷観をどうやって修復するのか、これは高齢の樺太引揚者にとっては、急を要する課題であるわけです。これまで挙げた例からも察しがつくように、故郷の修復にはいくつかの方向性が観察できます。まず、故郷が商品化されているということと言わなくてははいけません。私が参加したこのツアーも、一種のパック・ツアーで、便利な旅行商品であるわけですね。そうでなければ、不在の故郷を探訪するという、矛盾の前に多くの人はただ立ちつくすだけです。どうすればいいか分からない。この商品を消費しながら、制度的な聖地としての故郷、恵須取の場合はその中核を為すのが鎮魂碑ですが、それに向かって巡礼の旅を行い、長い間心につかえていたものを解きほぐし、一区切りつけて、帰還する。そういう方向性があります。しかしそれだけでは済まされない、言ってみれば実存的な問題が付きまといます。この方向性というのは、Aさんのご母堂の招魂と慰霊の例が

そうでした。あるいは、我にもなく塔路小唄を歌ってしまう、そういったこともその表れかもしれません。

生活世界の断片を縫い合わせる

もう1つBさんの話を紹介します。Bさんは、81歳の男性で、子どもの頃は祖父母と一緒に住んでいて、お祖父さんは炭鉱の共同浴場の管理人でした。Bさんは遥々塔路までやってきたのはいいのですが、幼少時のことを思い出そうとしてもほとんど手がかりがない。せいぜい道路くらいしか、回想のよすがになるものがない。しかし、ふと、コンクリート製の煙突の残骸を発見した時、Bさんは、自分がその昔住んでいた家の間取りや、寸法までが分かったというんですね。これだけは自分のものだったと思った。

そうすると、「故郷」の修復は結局のところ、人それぞれの故郷の再発見ということになるかもしれませんが、大きな器に喩えることができる、そういう意味で、定式化された故郷—それに収まりきらない、あれこれの、それ自体はちっぽけな、しかし、確かに生きていたんだと言える、私の生活世界の断片、これが聖なるものとしてパッチワークのように縫い合わされていくといえます。これは単純な話に聞こえるかもしれませんが、軽視できないことなんです。というのも、このツアーの参加者たちは、その喉元まで出かかっている、ロシア人への恨みつらみ、これをぐっと堪えて、あるいは逃避行、抑留生活、引揚げの悲惨さ、辛さを語ることに終始する、そういうことじゃなくて、何か心底誇るべきものを彼の地に探索しようと努めているからなんです。修復、復元となると、過去を指向するものなんですけども、個人の心の底に大切に秘匿される「故郷」だけかという、そればかりではなく、もう一度、ある意味で共同性に関わっていくというケースもあります。これこそが、今後の希望であるように思われるんですけども、そういった例として、Cさんの例を出しますね。

Cさんは71歳の男性で、サハリンに工事用の機械や機材を輸出する商売をしています。恵須取までの道中は、先ほど申し上げましたように、未舗装の穴ぼこだらけの道路が続くんですが、あちこちで道路工事をしている。その現場でCさんは、自分が売った機械が現に使われているのを目撃します。まるで行方不明だった我が子を偶然探し当てたようなCさんの喜びようでした。商売というのは結局のところ、売った買ったの世界かもしれませんが。確かに儲けになる限り、誰が生産しようと誰が仲介しようと、誰が消費しようと構わない。そうかもしれませんが、モノ・カネの流れの中で当事者の顔が浮かび上がる、そういうこともあるわけですね。この樺太山中の工事現場で、過去の故郷と自分のつながりを探し求めてきたCさん、そのCさんはそれだけではなくて、現在生きられている故郷と自分のつながりを見つけたわけです。

故郷を未来に向けて開く

もう1つ、Dさんの話をします。Dさんは84歳の男性で、子どもの頃、一家は恵須取で農業を営んでいました。Dさんの畑は、恵須取川に架かる橋の袂にありました。その橋が運良く元の場所に架かっていた。そのため、住居の所在が分かりました。周りは牧草地になっていて、Dさん曰く、手入れされていることに安堵した。父母や、一兄が切り開いた土地は、今やロシア人が受け継いでいる。牧草が豊かに実っていて、かつての苦労が無にならず、継承されていることに、Dさんは喜びを隠しませんでした。もちろんこれは、幸運で稀有な例です。けども、島、あるいは土地をめぐる国家間の争奪戦、それを超越したところで、あるいはそれに付随するある種の怨念を払い除けたところで、未来に目を向けている点、これは特筆すべきだと思います。

最後に、樺太で感じる日本語の魅力をお話して締めくくります。樺太に残留した、朝鮮半島からみの家族が、お母さんが日本人、お父さんが朝鮮人、そういった家庭が多かったんですが、樺太

に残留した家族の一人である E さん、この人と塔路で会って話をした折のことです。洗濯物が「ばふらめく」そういった風の強い日のことでした。「ばふらめく」って分かりますか？ はためくということなんですね。北海道でもそう言います、あるいはそう言いました。仕事は何かと聞いたら、E さんは「してから、昼は店でバンペイしてる」と言います。「してから」は「そういうわけだから」ですね。「店番をする」というのは分かりますが、「バンペイしてる」って久しぶりに聞いて、ああ日本語は今もこの地で生き延びているというふうに思いました。

樺太の旅における故郷探訪は、まずはみんなのもの、公共的で公式的な故郷の像をいったんなぞるわけです。いったん受容しながら、そこから一步踏み出して、旅行者それぞれが親密な像を作っていく、そういう傾向があります。そういう個人の思いに収束するだけではなく、あるいは過去に遡るだけではなくて、今ここで、再び人と人のつながりを発見し、それを喜ぶ。それを喜んでもう一度、共同的なもの公共的なものについて位置づけていく、そのような傾向を見落としては、あるいは見逃してはいけません。私は、西山先生の課題3つに、1つひとつ区分けして答えるわけにはいきませんでした。これから在職期間2年あまりで、自分には観光創造学に貢献できることがあるとは思いませんけども、この種のツアーに創造性の芽が何かあるとしたら、将来的に期待できることがあるとすれば、このように親密圏から再び公共圏へ、恨みがましさを乗り越えてつないでいく、そこに新たに期待できることがあるのではないかと考えています。独りよがりかもしれませんが、ご批判を頂戴したいと思います。ありがとうございました。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（天）

大変興味深いお話をありがとうございました。

私は以前に小笠原の仕事をしていたことがあります。今回は、樺太という北の事例ですが、南の事例としての小笠原と対比しながら伺っていて、非常に面白かったです。

まず1つ反論がございます。半分冗談で申し上げていますが、唱歌「故郷」と似たようなトーンで「朧月夜」という歌がありますね。作詞家は同じですが、彼は長野県人、信州人です。唱歌「故郷」を事例にした、イメージとしての『故郷』の固定と普及というお話でしたが、「故郷」は長野県人のDNAに訴え掛ける場所があって、さらに「朧月夜」を聴くと、時と場合によっては涙腺を刺激されることもあります。長野県人だけでなく、山間地の田舎、つまり菜の花が咲き乱れ猿が出るような所、こうした所に住む者には極めてリアルに感じられるのです。

宮下

先生が仰っているのは、唱歌「故郷」や「朧月夜」がリアルだということですか？

小林（天）

決してそうではありません。歌全体のもたらすイメージ、雰囲気が我々南信州出身の人間の心をくすぐるところがあるということです。そして、立身出世という分析がありましたが、まさにその通りです。唱歌「蛍の光」には「身を立て、名を上げ」というフレーズがあります。文部省唱歌が意図したものは、宮下先生がおっしゃった効果をまさにあまねく引き起こしたと感じました。部分的な反論で申し訳ありませんが、私にとっては極めて具体的で強烈なイメージがあるということを前段で申し上げてから本題に入ります。

先ほど申し上げた、北の事例と南の小笠原の事例を対比についてです。小笠原は1830年に25人のハワイからやって来た人たちが住み始め、1872年から日本の領土になります。その時の人口は50人くらい。それが、1940年には7,700人にまで増えています。とても豊かな南洋性の農産物をベ-

スに、あるいはウミガメやサングなど海の産品も交え、日本の平均所得の10倍くらいの収入があったといわれます。それが、1944年に、米軍の進攻に備え、陸軍の方針のもとで硫黄島も含めて7,700名の住民が強制疎開させられました。朝に通知して、午後一人2つの荷物だけ持って港に集まるというあっという間の出来事でした。ですからほとんどの住民は、庭に大事な物を埋めることしかできませんでした。その後の23年間は、ほぼ米軍関係者しか住まないような状態で、歴史の空白が生じます。

明治以降の帝国の拡大の中で何が起きて、その後はどのような状況なのか。北の方は、墓参団、忠魂碑というものがありますが、これは望めば自由に行けるのですか？

宮下

いや、なかなか。ペレストロイカ以降ですね、だいぶ楽になりました。21世紀になってから、民間人の渡航は増えてきました。それまではなかなか大変で、軍事基地でしたから、鉄のカーテンの向こうは見えないと。墓参は、1972年から北海道庁が要請して行くというかたちが34回くらい続いて、それ以後、旅行会社が手配して、というかたちが生まれました。ロシアの場合、招待というのがベースになるんですね。だから個人ではなかなか行けません。

小林（天）

なるほど。小笠原の場合、父島、母島、硫黄島という3つの地域がありますが、父島と母島には2,500人ほどが住んでいます。7,000人を超える人びとが強制疎開させられ、アメリカから日本に返還されたのは1968年。その時に小笠原に戻ったのは、わずか1割の600人から700人ほどでした。ほとんどは本州で生活基盤ができてしまっていた。農地も、現在は戦前の5%くらいしか活用されず、他はジャングルに戻ってしまっています。

現在は、父島と母島の間は自由な行き来が可能

です。しかし、硫黄島には戦後まもなく米軍基地ができて、日本に返還された後も自衛隊の基地に移行しました。硫黄島では22,000人が亡くなっています。民間人については、小笠原には健康な男子だけ800人が軍の補助要員として残されましたが、1%しか生き残らなかった。8人しか生き残らなかったんです。合わせて2万数千人が亡くなったのに、遺骨処理がほとんど為されていません。

宮下

樺太も同じ状況です。

小林（天）

日本の政府は何をしているのかというと、政治家が忠魂碑だけを建てる。忠魂碑を建てる予算と時間があれば遺骨を収集すべきだと、私は腹が立ちます。そうした、帝国の拡大と消失に伴う後処理は、結局は民間の誰かが細々とやるしかないなというところに放置されています。

こうした現実をどう考えればよいのでしょうか。つまり、国家、軍隊、兵士、そして後始末、これらは将来につながってくるポイントです。しかし、そのまま戦後70年もの間、ほとんどの人が忘れていくというか、なかったことにしようとしている。まさに記憶と喪失の問題で、どんどん記憶が薄れていくのを放っておくわけにはいかないだろうと思います。骨を拾わないという行為の問題ではなく、考え方として、そうした国のあり方はどうなのだろうと。もう一度この点をしっかり考えないと、どんどん情けないかたちで、悲劇が喜劇として演じられるのではないかという懸念を感じています。

話が違う方に向いていると思われるかもしれませんが。しかし、ツーリズムを我々が考えていく際に、皆さんが異口同音におっしゃっているように、平和というキーワードがあります。私は亜細亜大学のホスピタリティマネジメント学科を、総合観光学部というものに格上げしたいと考えております。そのためのスローガンは tourism for peace で

す。そこからバックキャストして、今のお話にはとてもインスパイアされるところが多かったです。ありがとうございました。

コメンテーター2：鎗水

私はどのようにお話を聞いていたかという、自分の故郷と自分の関係はどうなんだろうかと考えておりました。私はまだ26歳ではありますが、もう実家を離れて10年くらいになり、その間も5、6回くらいしか帰っていないという状況でして。自分と故郷との関係というか、皆さまにもそれぞれ故郷があるとは思いますが、その故郷に「帰る」ということも1つの旅なんだろうと思います。ちょうどその帰省の旅とはどういうものなのかとちょうど修士1年の頃に先生の講義のレポートで書いた覚えがあります。その旅はいったい何なんだろうと、まだ考えがまとまらないんですが、帰省というものはなんだろうか、1つの旅の形として考えているところです。それとまた話は変わって、自分が帰ったときに、だいぶ街なみが変わり寂れてきたなと感じると、その時には自分がもっている昔のイメージでアニメを作りたいなどと、自分の研究もあるでしょうが、自分の中で美しかった街をそういう形で残してみたいと思ったりもするんですが、そういうアニメと「故郷」ということだと、これはいつも山村先生とも話していることなんです。日本のアニメの中での田舎のイメージは、やはり信州だねと。信州は実際に舞台として使われることも多く、この2年ほど2人で2、3度長野へ行って、やっぱりアニメの中で表象される「田舎」は信州だよねという話をしていたら、天心先生から信州というお話が出てきて、こんなところできれいに繋がったなという感じで驚きながら天心先生のお話を聞いていました。

コメント：白井

ずっと話を聞いている中で、今の鎗水さんの話も含めて、故郷の中で、自分たちがどうしてもできない、外的な要因で故郷を出なければいけな

い人たちの故郷の思いと、ある程度の選択肢があった上で、たとえば家族で引っ越すなどで故郷を出た人たちの故郷の見方、まったく自分の事情で故郷を出た人の故郷の見方、というような分類をすると、今日の話は一番過酷なケースなのですが、このあたりの違いをどう考えたらいいのか、ということ聞きながらずっと考えていました。あとは言葉尻のようなところもありますが、怨念の超克という言葉があり、唱歌と啄木の話が出ました。その流れで言うと、室生犀星の「ふるさととは遠きにありて思ふもの、そして悲しく歌うもの」は、超克の方向かなと。こう思いながら聞いていました。

回答：宮下

天心先生、鎗水さん、白井先生、ありがとうございました。peaceということ、最後に怨念を超えてということは、ある意味、和解ということですね。悪態をついて溜飲を下げたいのは山々かもしれないが、それを超えるためには何か、自分が納得するものを見つけなければならないわけですね。しかも足元に。鎮魂碑に寄り添うのではなく、自分の足元にそれを見つけなければならないのは、それは大変なことだと思うし、1つひとつ評価して、旅とはこういうものをもたらしのだと、報告していく必要があるのだなと思いました。どうもありがとうございました。

◆研究発表 5

Japanese Contents Tourism and Pop Culture
～国際共同研究の立ち上げと今後の課題

北海道大学観光学高等研究センター

山村高淑

コンテンツ・ツーリズムを通した

平和や文化的安全保障の構築

山村でございます。これから 30 分間頂戴しまして、いただきました宿題をプレゼンテーションさせていただきます。よろしくお願い致します。

宮下先生の次に私という順番で続きました。タイトルからすると、一見全く関係無い内容の発表が並んでいるように見えるかも知れませんが、「平和」と「ツーリズム」について考えるという意味においては、共通している部分が多ございます。私はこのような順番にして頂いて、本当にありがとうございます。

タイトルには“Japanese Contents Tourism and Pop Culture”と掲げておりますが、これは私が勝手に作ったタイトルではなく、ある書籍に掲載された一章のタイトルです。これまでの国際共同研究の成果のひとつが、この度、英国で出版された書籍に 1 章として掲載されたのです。お手元にお配りした資料の最後のページをご覧くださいませでしょうか。

昨年、国際地域文化論講座の先生方主催で、オーストラリアのラ・トロブ大学からスー・ビートン先生をお招きして、「コンテンツ・ツーリズムと地域社会」というテーマで国際シンポジウムを行いました。その後、ビートン先生と、同じく同シンポジウムにご登壇頂いたフィリップ・シートン先生、そして私の 3 人で、この 1 年かなり突っ込んだ議論を続けて参りました。その成果を、この度ご縁あって書籍のひとつの章として掲載していただいた次第です。この本のタイトルは“Mediating the Tourist Experience”です。従来から観光学では“image of destinations,” すなわち、目的地のイメージがメディアを通して如何に作ら

れるのかが重要なテーマのひとつでした。そのメディアが現在多様化の一途を辿っている。それをどう捉えていくのか。様々な分野から研究者が寄稿する形でその可能性と課題を論じたのがこの本なのです。その中で、日本におけるコンテンツ・ツーリズム——ポップ・カルチャーをきっかけ、あるいは資源としたツーリズム——の課題と可能性について我々がまとめさせて頂きました。

そういったわけで、私の最近の関心はポップ・カルチャーというものが、きっかけ、動機あるいは資源となったツーリズムが、果たしてどのような現象として現れているのかというあたりにあります。そして、今後、さらにこの国際共同研究を発展させていきたいということで、スー・ビートン先生、フィリップ・シートン先生、それから、西川先生、山田先生にもお力添えをいただきまして、企画を進めているところです。そこでは大きく 2 つの目的を掲げています。1 点目は、コンテンツ・ツーリズム、後ほど定義をしたいと思うのですが、コンテンツ・ツーリズムをポップ・カルチャーの伝播と受容の側面から捉え直すことを通して、そうしたツーリズムが他者理解に果たす役割を明らかにすること。2 点目はそういった他者理解という現象を踏まえ、日本が置かれている地政学上、とりわけ国際的な相互理解が求められている東アジア地域に着目し、日本のコンテンツをきっかけとしたコンテンツ・ツーリズムが日本の文化的安全保障の構築に向けてどのような可能性と課題を有しているのかを考察することです。

詳細は後程触れたいと思いますが、まずはコンテンツ・ツーリズムの定義をしておきます。ポピュラー・カルチャーのコンテンツ——コンテンツというのはテーマ性、物語性、登場人物などと幅

広く捉えたいのですが——がきっかけ、動機となる旅行行動で、そのコンテンツと関わりのある地域や場所を訪れ、登場人物の人生や感情を追体験したり、印象に残る場面を再現・再演したりすることで、作品世界と自分の一体化、あるいは作品の内部化を図る行為である、とまずは押さえておきたいと思います。先程触れたビートン先生との共著章の中では、コンテンツ・ツーリズムの特徴をよりわかりやすく表現する言葉として「ポップカルチュラル・ツーリズム」という語も用いています。

さて、コンテンツ・ツーリズムを通した平和や文化的安全保障の構築というテーマを何故我々チームは設定するに至ったか、その背景には大きく3点あります。1点目は、この数年間、特にアジアを中心に日本のポップ・カルチャーがどのように受容されているのか、現場取材を続ける中で、予想以上に好感を持って受け入れられていることが明らかとなり、私自身衝撃を受けた点。2点目は、実は前任校の京都嵯峨芸術大学で、芸術を志す若い学生さんたちと交流する中で、ポップ・カルチャーの持つ可能性を強く感じさせられたこと。3点目は、これは全く私的な理由なのですが、中国の麗江を中心とした文化遺産調査を進め、現地の様々な方と交流する中で感じるがあった点です。特に90年代、江沢民政権のときに反日教育が進んだ時期がありまして、私自身、現地でいろいろな反日的な議論をふっかけられました。いろいろと感情的に悩んだ時期もありましたが、そういう一見交流できないような相手とも日本のポップ・カルチャーを題材にした途端に仲良くなれた、という実体験が少なからずありました。それはひょっとしたら大きな可能性をもっているのではないか感じたわけです。

世界における日本のポップ・カルチャーの受容

まず、皆さんに写真をご覧頂きたいのですが、これは私が先ほど申し上げた、1点目の背景、世界で現実に行っている現象に衝撃を受けたひと

つの例であります。

これはどこの街でしょう？とある街の地下街です。皆さんにも考えていただきたいのですが、これはアニメグッズショップです。そして、メイドカフェ。これが執事喫茶です。これが地下街の休憩所です。これが神社、賽銭箱です。神社の横に日本風のアニメキャラクターのボードが立っています。ここで観光客が記念撮影をしています。絵馬掛け所もあります。この絵馬を見ると台日和平と書かれています。そうなんです、これは台北の地下街、台湾新幹線の駅の真下にある地下街なんです。日本で言う八重洲の地下街というイメージの場所です。これは台北市内の地下鉄への入り口の階段です。ここにも日本のアニメーションのPRポスターがずらっと並んでいます。これもアニメーションのキャラクターの名前が日本語でずらっと並ぶ形で地下鉄の階段の入口横に貼られています。そしてこれも、台北の町中なのですが、秋葉原と書かれた看板がかかっています。ここは知る人ぞ知る、台湾のメイド喫茶有名店。そして台湾では最近こんな本も出版されました。『次元突破』とありますけど——これはおそらく2次元から3次元に行こうという意味だと思うのですが——ガイドブックです。何のガイドブックかというと、まさに我々がこれまでテーマにしてきたアニメ聖地巡礼のガイドブックなのです。ここに書かれているものは日本人のアニメファンであればみんな知っている最新の作品。で、そのロケ地、舞台について詳細な情報が書かれている。更に単なるガイドブックというよりは、本当に筋金入りのファンが書いているのがわかる。例えば「日本でコスプレをするときはこういうマナーにしたがってやりましょう」とか、ここに「巡礼攻略」と書かれています。ある作品の舞台に行くにはこういう交通を使って、宿泊はこうしましょう、みたいなことが書かれていたり。さらにこれはすごいなと思ったんですが、マナーに関する注意書きです。日本のアニメ作品の現地に行くときは、住宅地ではこういう行動を慎みましょう、そして一般の人

たちの写真を取るときはこういう声をかけなければいけない、公共の場で大きな声でファンにしか通じない単語を叫んではいけない、というようなことが書かれているわけです。

そしてこれはまた別の街の写真です。これも一見日本かなと思うのですが、よく見ると日本で出版されているマンガ本の現地語版です。ズラっと売られています。香港のクーロン半島の旺角というところにある、知る人ぞ知る「オタクビル」、香港のオタクの人達が集まるビルです。そのビルの近くには、これまたメイド喫茶があります。「香港の癒しの隠れ家メイド喫茶」と日本語で書かれています。ここには博士課程の張君と一緒に取材調査に行ったのですが、お客さんはほぼ現地の若者でした。

そして、3 つ目の例です。これはもう非常に有名ですので、皆さんお聞きになったこともあるかもしれませんが、フランスのパリで行われている Japan Expo です。この 7 月に 13 回目を迎えた、年に 1 回、4 日間を使って行われる、日本文化の見本市的なイベントです。4 日間で 20 万人以上の人が集まるイベントです。こちらでも今年取材に行ってきたのですが、その時の写真をご覧ください。これはシャルル・ド・ゴール空港を降りたところです。日本ではありえないのですが、コスプレをしたまま電車に乗ってしまう現地の方々が多くいらっしゃいます。こんな感じで、かなり気合が入っています。これは開場前の会場。国際展示場で行われるんですが、会場前の駅を降りるとこんな感じですよ。そして会場に入るためにはこういう列に並んで…会場のなかでもこんなに活気がある。さらに、我々取材陣が一番感動したのはこういうコスプレ広場があるのですが、そこでは日本の今流行の作品の格好をした地元ヨーロッパの皆さんがいらっしゃって、我々と共通の話題で盛り上がる事ができる。この真ん中にいるのが博士課程の張君なんですけど、とある作品のいわゆる敵役の格好をして行ったら、その作品のキャラクターに扮している現地の皆さんに取り囲まれてこういう写真

を撮ろうと、あっという間に仲良くなってしまった。この辺にも非常に面白い可能性があるのかなと思います。これも北海道発のキャラクター・初音ミクを現地の男性がやっているという写真です。日本からも自治体がこういうブースを出しております。これは彦根市の「ひこにゃん」です。

と、こういった状況になっていて、やはりこれを見た時に、こういう非常に温度の高い現象を冷静に分析する必要があるのかなと思っています。先ほど西山先生の方からご提示頂いた、観光創造の模式図があったと思うのですが、私自身あれは真ん中より上は現象を分析する現象分析のジャンルかなと捉えました。そして、真ん中より下は、具体的にプランニングやマネジメントを行う、青写真を描いていくというデザインの部分かなと思っています。どちらも重要なわけで、今日お話しするのは、前者の、現象を冷静に捉えていく部分に当たると思います。

国家政策における

コンテンツ・ツーリズムの位置づけ

さて、目を転じて、国内ではこういった現象がどう捉えられているのか、政策論的に見ていききたいと思います。先程石森先生からも国家政策としての観光立国というお話がありましたが、それをコンテンツ・ツーリズムという観点に着目して整理してみたいと思います。その後、今後の可能性としてどういう研究の方向性があるのかについて私なりの今の考えを申し述べたいと思います。

お手元にお配りした資料を御覧ください。実は先程述べたような海外における日本のポップ・カルチャーブームを受け、我が国の観光政策の中でも、ここ数年来、ポップ・カルチャーが頻繁に取り上げられるようになってきました。皆さんご存知だと思いますが、1990 年、ジョセフ・ナイ教授が“soft power”という、非常に有名な概念を提示しましたが、その著書の中で、日本のポップ・カルチャーの例をあげています。そのあと、ダグラス・マ格雷イという人が“Japan’s Gross National

Cool”と題した記事で GNC という考え方もあるのではないかと問題提言をしたわけです。私自身非常に注目しているのは、こういった海外での日本のポップ・カルチャーに対する注目を受けて、2005 年に出された「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」報告書です。この中で初めて国の施策として、コンテンツ・ツーリズムという言葉が出てきます。

その後、外務省が中心となって、ポップ・カルチャーの文化外交における活用が行われました。まさにこれなどは文化的安全保障を構築するために何ができるのか、外務省が——当時麻生太郎氏が外務大臣だったということもあるのですが——いろいろと考えて実施した内容です。その後、レジュメのその下に掲げておきました、2012 年の 2 件、2013 の 1 件、この 3 件が最新の動向なのですが、よく見ると、「アニメ」だとか「聖地」だとかいう言葉がざらっと普通に使われるようになっていっています。これを詳しく見て行きたいと思います。

次のページを御覧ください。まず 2-2 として、先ほど申し上げました 2005 年に国交省・経産省・文化庁が共同で提示したコンテンツ・ツーリズムの定義を抜粋しておきました。これは非常に狭い意味で定義されたものだ我々は考えているのですが、映画・テレビ・ドラマ・小説・マンガ・ゲームなどを地域に関わるコンテンツと位置付け、それを活用して観光と関連産業の振興を図る、そういうことを意図したツーリズムがコンテンツ・ツーリズムである、と定義しています。

その翌年、2006 年の 11 月に外務省がポップ・カルチャーの定義を行っております。これは、非常に重要な定義だと私自身は感じておりますのでここで取り上げておきます。私自身がこれまで体験したことと照らしあわせて、重要性を痛感しています。どういう内容かと言いますと、ポップ・カルチャーとは「一般市民による日常の活動で成立している文化」であると。そしてそれを通して、「日本人の感性や精神性など、等身大の日本を伝

えることができる」。さらに、こう言っています。この考え方によれば「浮世絵、焼き物、茶道などは其々の時代における当時のポップ・カルチャーである」と。そして、こうしたポップ・カルチャーの中で、特に新たな時代の流れを切り開く最先端の分野で、そして強い浸透性と等身大の日本を表す思想性を有するものを対象として政策的に展開していくと言っています。具体的にアニメ、マンガ、ゲーム、J-pop、ファッション、食文化をあげています。

更に続きますが、2-4 をご覧ください。2012 年、皆さんご存知の『観光立国推進基本計画』が出ます。この中でニュー・ツーリズムの項目をよく見てみますと、エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、文化観光、産業観光、ヘルスツーリズム、スポーツツーリズムときて、その後に「ファッション・食・映画・アニメ・山林・花等を観光資源とした」——まあ残ったものを全部集めた感じになるんですが——ニュー・ツーリズムの推進とあります。その中に、アニメについては、「作品の舞台となった地域への訪問」というようなことが書かれています。

そしてレジュメの次のページをご覧ください。これも非常に重要な報告なのですが、経済産業省がコンテンツ産業というものを具体的に定義しています。

そして、注目すべきなのは、こうした流れの中で、経済産業省が「観光」とか「聖地」というような概念を扱うようになってきた点です。まず、コンテンツ産業について経済産業省はこう定義しています。「映像（映画、アニメ）、音楽、ゲーム、書籍等の制作・流通を担う産業の総称」。そして、我が国のコンテンツは「クール・ジャパン」として海外からも高く評価されていて、コンテンツ産業は海外展開を通じた成長を見込めるとしています。さらに、大きく稼ぐクール・ジャパン戦略の全体像ということを掲げていますが、その中で、「観光」という語を具体的に出しています。「日本発のコンテンツ・ファッション・食・観光等を海

外の消費者に周知し、現地で日本ブームを創出」として、それによって、「物販やサービス提供を通じて現地で収益を上げる仕組みを構築」する。更に「本場（聖地）」——これは原文のままです——「本場（聖地）にファンを呼び込み、日本で消費に結びつける仕組み」を構築する。日本イコール聖地へのインバウンド観光客を増加させようということを経産省が謳っているのです。

そして、これはつい最近なのですが、今年の 6 月に観光庁と JNTO、経産省、JETRO が共同で、「訪日外国人増加に向けた共同行動計画」というものを出しました。そのなかに具体的な項目として、「クール・ジャパンコンテンツから想起される観光地（総本山、聖地）への訪日を促す」と掲げられています。こうして中央省庁が連携してクール・ジャパンを押ししており、その中でいわゆるジャパン・コンテンツというものを重要な資源として位置づけているわけです。私も何度か霞ヶ関でお仕事をさせていただく中で、現場の担当者が非常に若くなってきた、という感じを受けました。今の 30 代 40 代の方々が係長クラスでこのような施策を次々に打ち出しているわけです。そうした世代が普通に感じていることを普通に中央の政策として打ち出だしている。

観光研究におけるコンテンツ・ツーリズム

～国際共同研究の必要性

一方で、観光研究の分野に目を転じて見るとほとんど具体的にこういった研究がなされていないわけです。あるとすれば、観光社会学のような分野で、旅行者行動を分析するような分野で研究が若干行われ始めているということと、もう 1 つは観光まちづくりに関する研究の中で、ジャパン・コンテンツ、とりわけアニメコンテンツを活用した自治体の観光振興事例の分析が行われるようになったこと、があります。ですが、依然、体系立てられた研究はなされていません。このあたり、国の施策の中で具体的に位置づけられているということも含め、また海外からのこうした高い評価

それから熱気というようものも踏まえ、単なるドメスティックな研究ではなく、国際共同研究というものが必要ではないか、と強く感じた次第です。長くなりましたが、そのような背景で、今後国際共同研究を進めていきたいと強く考えております。

次の 5 ページをご覧くださいませでしょうか。これが来月出版されます書籍で我々チームが担当した章の重要なポイントをまとめたものです。これまでビートン先生を含め、研究チームで話した内容を簡単に総括しますと、まず、スー・ビートン先生が 2000 年に“Film-Induced Tourism,” フィルムが誘発する、映像が誘発するツーリズムという概念を提示しました。それまで、フィルム・ツーリズムであるとか、シネマティック・ツーリズムであるとか、セット・ジェッツィングだとか、TV・ツーリズムだとか、いろいろな概念が欧米で出されてきました。それを、映像、映画、TV シリーズ、アニメなど、広くカバーする形で包括的に論じていこうというのが、ビートン先生が 2005 年に出された本の画期的だった点です。

その一方で、コンテンツ・ツーリズムという概念もひょっとしたら有効なのではないか。具体的に言いますと、中央省庁での議論にもありますように日本におけるコンテンツ・ツーリズムという語は、ツーリズムに関するポピュラー・カルチャーの様々な側面を含む概念として提示されています。そういう中で、ポピュラー・カルチャーのテーマ性、物語性に関するコンテンツというコンセプトが日本では定着し始めているわけです。現状では、コンテンツ・ツーリズムは日本における若者の新たなツーリズム様式を指すと狭く捉えられがちなのですが、国際的なツーリズム研究の流れに当てはめてみれば、より一般化させた議論が可能なのではないか。以前からの様々な観光スタイルの分析があり、それぞれの世代の、それぞれのポピュラー・カルチャー、大衆文化というものを持っていることがわかっている。であれば、世代は関係なく、そういったものへの思い入れ、魅了されるといった部分をコンテンツ・ツーリズムと

いう枠組みで捉えられないか。とくに「ツーリズム」と「他者の現代文化」との関係性を考える際、この観点は重要になる。そういう枠組みの1つの切り口として、コンテンツ・ツーリズムという概念を、日本を超えて適用できないかと考えています。

コンテンツ・ツーリズム研究の論点

～その本質的観点と課題

さて、具体的にどのような論点が必要になってくるのか、整理をしてみたいと思います。次のページ・6ページを御覧ください。3-3に「論点整理の必要性」という見出しでまとめています。実は先ほど、コンテンツ・ツーリズムについてあまり研究がなされていないと申し上げましたが、特に若い世代の大学院生さんを中心にこういった分野に興味を持ってくれる方々が増えてきました。そのなかで、今研究されているテーマを私なりに分類してみますと、大きく5つくらいあるのかなと。さらにその5つは2つに大別できるかと思っています。1つ目は、「A. Domestic な視点」、日本の国内での現象として捉えた研究です。このカテゴリーに含まれるのは、①国や自治体における地域振興策としてのコンテンツ・ツーリズム、②日本におけるファン文化、ファンカルチャーとしてのコンテンツ・ツーリズム。同人イベントですとか、コスプレイベント、聖地巡礼に関する研究に関してはこのあたりに入るのかなと。博士課程の鎗水さんの研究などはここに当てはまると思います。それから③著作権者におけるライセンス・ビジネスの展開としてのコンテンツ・ツーリズム。③については、観光研究において実はほとんど研究がなされていません。今後大いに発展の余地のある研究分野だと思います。

それから「B. International な視点」です。④ジャパン・コンテンツをきっかけとした外国人旅行者の訪日旅行実態。これに関しては、実はこの10月からJSPS（日本学術振興会）特別研究員としてCATSに滞在されているフランスのClothildeさん

が研究を進めていますし、我々の国際広報メディア・観光学院のもう1つの専攻、国メ専攻の杜海川さんという方が中国人の日本へのアニメ聖地巡礼ツアーの研究をしています。

そして⑤として、これも実はあまり研究がなされていないのですが、海外におけるジャパン・コンテンツを資源としたイベントの実態です。実はこれがここ数年、急激に増えています。かなりの大きな人の動きが生まれています。例えば、Japan Expo。先ほど申し上げましたように4日間で20数万人。それから中国の杭州で毎年行われている「動漫節」では、地元発表で50万人～60万人来ているという報道もあります。それから台北、韓国のソウル、プサン、香港、台湾、などでもこうしたイベントが行われています。こういった動向の調査分析も必要です。

ざっと課題に考えていることを申し上げましたが、最後に締めといたしまして、一見全く新しい現象のように見えるコンテンツ・ツーリズムと、従来の観光研究とで、共有できる本質的観点について触れておきたいと思います。レジュメ6ページの下の部分、3.4を御覧ください。

まず、こういった事例、特に国内の事例を中心に取材をしていて感じることは、従来の観光研究で言われてきた地域文化の再発見——先ほど石森先生からも“Invention of Tradition”という言葉の紹介もありましたが——誇り、アイデンティティの確立、強化というようなことに非常に関係するテーマであります。まず、地域住民にとっての観光の本質というものがそこから見えてくると思うのですが、これは、他者からのまなざしを通して、自分たちが持っている資源、歴史や文化、自然などなどの資源の価値を再認識、再評価するところにあると思います。他者、旅行者との交流を通して、こうした認識はさらに強まり、地域に対する誇りが育ちうるわけです。そして、旅行者にとっての観光の本質は、メディア等によって構築されたある地域のイメージを、実際に現場を訪れることで確認する。そして、そうしたイメージが投影

された現地の風景や人々を通し、自分の存在理由を肯定する。私がいても良いのだ、という感情なのではないかと私自身は感じています。さらに重要なのは、ある場所と自分との特別な関係性を作り出すことによって、自分をその場所と不可分な存在とし、そうすることによって、聖地というのが生まれてくるのではないだろうかと考えています。こういったプロセスを通して地域の伝統や文化が再発見され――まさに“invention”――再発見され、再評価、再構築されていくということを、これまで観光文化論のなかでは論じられて来たわけです。実はアニメやマンガあるいは先ほど申し上げたような広い意味でのコンテンツ、ポピュラー・カルチャー・コンテンツがきっかけとなった観光においても、全く同様の現象が起こっている。例えばアニメというフィルターを通して描かれた風景は、まさにこの他者からのまなざしと捉えることが可能である。そうした場合、全く同様な構造を当てはめてみるができるのではないかと考えています。

さらに先ほど写真でご覧頂きましたような、海外での Japan Expo などでの盛り上がり。そういったものを我々日本人はテレビの報道等で見ることによって自国のポピュラー・カルチャーの価値を改めて再認識する、これもまさにさきほどの観光文化論で論じられてきたことと本質的に同様のことです。

観光創造論の本質

さて、最後に「観光創造論」についてなのですが、私自身の考えをここで2つのポイントにまとめて申し述べたいと思います。が、残念ながら、私自身の言葉ではなくて、私が非常に良い文章だなと思った過去の国際的な文言から抜粋したものです。

まず1点目。1975年にダグ・ハマショールド財団が出したリポートでの内発的発展に関する議論なのですが、そこにこういう文章があります。「発展とはその集団が持っているもの、自然環境、文

化遺産、集団構成員の創造性、に依拠し、集団内や、他地域の集団と交流することによって、これらをより豊かにしていくこと」。まさに交流という部分がツーリズムの持つ1つの非常に大きな可能性です。それによって自分たちがすでに持っているものをより豊かにしていくということが論点として重要になってくる。

そして、2点目。これは UNDP による“Human Development Index”に関する言葉なのですが、「人々が各自の可能性を十分に開花させ、それぞれの必要と関心に応じて生産的かつ創造的な人生を開拓できるような環境を創出すること、これこそが開発である」と。「経済成長は、開発にとって重要ではあるものの、人々の選択肢を拡大するための1つの手段にしかすぎない」。ここは先ほど小林先生のご指摘にもありましたように、観光というものをビジネスとして捉える前に、観光を通して何をを目指すのか、そのあたりを考えるうえで非常に重要な概念になってくる。創造的な人生を開拓できるような環境を創出するという意味でのクリエイティブという言葉がここで出てくるわけです。この辺りを観光創造論の本質的な部分として私自身は考えています。

そして、政治的な国家間の関係ではなかなか交流が進まない、いがみ合っている人々が、ポピュラー・カルチャーというものを通して共通言語を持つことで交流を進めることができる。その辺に私自身は、特に近隣のアジア諸国との関係改善の可能性を見出したいと強く思っています。それは私自身の考えと言うより、こちらで大学院の教育に携わせて頂いて、留学生の皆さんと交流する中で、非常に大きな啓発を受けた点です。

以上、簡単ではありますが、私の発表とさせていただきます。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（英）

私が北大に異動するという話をした時に、都内

の観光に力を入れているある大学の准教授が、「あそこはコンテンツ・ツーリズムで有名ですよ」と言われました。私的には、やはり石森先生でしょう、といって欲しかったのですが、若い研究者にとっては今やコンテンツ・ツーリズムが北大を代表しているようです（笑）。その意味でも、今日は楽しみにしていたのですが、山村先生から体系的にいろいろなことを教えて頂いて、参加した甲斐があったなと思っております。私自身はこの分野に、全然明るくないのですが、最近、富山県のある市でまち歩きセミナーを2日間やったのですが、まちのお宝探しやガイドの養成といった地道な作業よりも、その市はアニメで人呼ばばいいという感じになっています。市内の各観光案内所ともアニメのビデオを流していて、実際アニメファンが結構来ていて、ええっ？と思ったのです。今日話し聞いていて、こんなにすごいことになっているのか、あの市での現象も少し理解できたところでは。私自身は、前にゲームと旅行との関係を調べていて、ゲームのことでいろんな所にヒアリングして回ったのですが、それまでオタクっていうと、なんかこう1つのことに暗く関わっている人と思っていたのですが、みんな全然もっと普通の人で、たまたまそういうことが好きな人であって、あんまり偏見持って見ないほうがいいと気づかされました。その時に若い人がなんで、ゲームをきっかけに旅行するのかということで調べたんですが、自己表現とか社会との関わりというのがキーワードだなと思ったのです。そのゲームの作者が作った世界観に賛同して、それを自分なりに消化し表現する、そこが面白いのであって、単にゲームの世界に入っているだけじゃない。そこから自分なりのものを見つけるということにヒントがあるなと思ったのです。今日は先生の話聞いていて、そこが共通していると感じました。我々のような古い観光研究者は、観光というものはある具体的な目に見える目的地があって行くものだと思っ込んでいたけれども、そうじゃない世界がすでに存在している。つまり、意味的な景観とい

うか、現実の景観にある意味をオーバーラップしてその場所を見ている。その意味づけされた仮想的な景観を楽しむために移動している、結果として観光しているということにもっと目を向けないといけない。それは、考え方によっては、エコツーリズムもそうであって、現実に見えている森にエコシステムという意味を重ねること、ガイドがその意味を語ることによって仮想としての意味的景観を楽しんでいるわけです。産業観光もそうで、昔どうだったかという意味や価値をオーバーラップして見るから面白いのです。そう考えると、現実に見えている景観に意味や価値を重ねて仮想的な意味的景観を楽しむというのは、この10年、古くても20年の間に観光全体に起こっている1つの現象と捉えたほうが、今日の先生のお話になったコンテンツ・ツーリズムにも通ずるように思えるのです。それを短絡的に、なにかアニメでオタクな人が動いている、という捉え方してはいけないのでは、というのが感想です。

それと絡めて質問というか、お願いというか、なぜアニメが出かけるきっかけになるのか、という理由についてもっと突っ込んだ研究をやってほしいなということです。ゲームではゲームを作る人がすごく勉強していて、自分の世界観を持っている。ゲームの研究の時に関係者といろいろ話をしたのですが、なぜ若い人が旅行に行かないかといえば、行く気はあるのにゲームの方が面白いからだと言われたのです。それでなんで、ゲームの方が面白いのですか、と聞いたら、ゲーム作者の人が『神話の世界』とかいろんなものを読んで、人間が共通に持つ生き方を学び、それを作品の中に表現する。そういうことを旅行業ではやっているのかねといわれて、ちょっとがくつきたので。そういう意味で、もう一度質問を整理すると、アニメの中の何に惹かれて移動するのかということです。アニメ作者の世界観というものに本当に共感を持ったから、来ているのか。その世界観に共通して人を惹きつけているものは何なんだ。多分、共通するというもの、人間そのもののなかにあっ

て、心の琴線に触れるものではないかと思うのです。それが何なのかというものを是非研究して欲しい。なぜそんなことを聞いているかという、最近どこも観光地もアニメで人集めをやり始め、非常に危険だと思っています。その琴線に触れる部分なしに、手段、手法としてのアニメを使って、本当に人が動くのだろうか。なにか今のゆるキャラブームみたいに全国に何百とできちゃったけど、本当にあれでいいのかということになりはしないか。折角おもしろい本質的なことをついているのに、形を真似することによって本質が見失われているのではないかと危惧しているのです。山村先生は今の流れをどのように捉えているんだろうなとお聞きしたいのです。これは我々が地域の観光とどのように向き合うかを改めて問われていることでもある、という気がします。

最後にもう 1 つ、ゲーム研究のときにわかったのですが、まずは「移動すること」が結構大事なことだということです。移動をすることによって、新しい場所に対して心が動いて結果として観光になるという考え方もあるということです。観光より前に移動があって、その移動のモチベーションをゲームやアニメで創ってやる。観光をあまり理屈っぽく考えなくていい気もしています。今日の山村先生の話聞いて、アニメが非常に有効な手段なのだろうなという気がしてきました。

コメンテーター2：高松

いろいろありがとうございました。まず、今回 1 日参加させて頂いて、観光の意義と観光創造という定義に関して非常に考えさせられる機会を頂きました。このような会議に参加させて頂きましてありがとうございます。また、やはり、今起こっている現象として日本のコンテンツ・ツーリズムについて、山村先生の講義を聞く度に、理解が深まりまして、それらの素晴らしい内容が、わかってきました。どうもありがとうございました。なんです、どうしてもお話を聞くときには自分の

研究に引きつけて考えてしまうものです。私はパレスチナの占領地における観光を研究していますが、観光を使って、パレスチナの独立を支援できないかという大それたことを研究しているのですが、そこでの環境を考えますと、コンテンツ・ツーリズムで出てくる「聖地」とか、「巡礼」「安全保障」または「平和」という言葉が、現実のパレスチナで起こっていることとは全くかけ離れた観点で取り上げられているのではないかと感じます。例えば本山に行くとか聖地に行くということを、現場や現地を訪問するという意味で、言っているのだと思いますが、パレスチナの現状とは離れてしまっているのではないかとということに、自分としては違和感をもちながら聞いていました。

平和や安全保障についても言及されていますが、平和というのは、(アニメの世界で言う)仲良くなるということと、現実の世界での状況はかけ離れていて、パレスチナにおいて、人が血を流さず、死なない状況で、人権侵害を行われない状況をまず作らなければ実現できないのではないかと思います。ちょっと前までは、イスラエルとパレスチナで、お互いが理解することを促進する活動をやっていた時代がありました。そのような時代であれば、このように、例えば文化的安全保障という考え方が合うと思うのですが、今は非常に状況が悪化してしまっていて、平和運動家などが活動できない状況になっているということを考えたいと思っていて、挙げさせて頂いています。しかし、本日繰り返して出ている、何のために我々が観光創造をやるのかというところで、やはり先生が挙げていただいたような人間が人生を開拓し、集団と集団との交流を促すことによって、パレスチナのように人が自由に行けない、人が行こうと通常は思わない地域に行って、帰ってきてパレスチナの状況を他の人に伝えるとか、そういうことが求められている現状があります。それらの観点から見れば非常に共通した話題をしているのですが、その観点と現実の世界、つまりパレスチナにおいて行われていることが異なりますので、今後その

辺りのギャップを埋めるような議論ができれば、更に観光を創造していくための議論が深まるのではないかと思います。

回答：山村

小林先生、高松さん、ありがとうございました。まず、高松さんのお話、非常に大きな課題だと思います。もちろん観光は平和産業というような言い方がありますが、平和な状況でなければ観光は成立しない、というような条件的な基板というものもあると思います。ただ、国際的な交流とか平和構築に関しては、様々な状況の地域があるということ、まずは踏まえてこれから体系を構築していく必要があると強く感じた次第です。ありがとうございました。

それから、小林先生からご提示頂いた質問、論点は私も非常に重要だと思っております。私自身が現場を回って感じた、なぜアニメかという点なのですが、これは先ほど宮下先生がお話し下さった「故郷」という概念とも関係すると思うのです。図らずも鎗水くんがコメントの中で「最近のアニメのロケ地の中で長野が多い」と言っていました。これが非常に重要なポイントだと思うのです。確かに、2000年以降アニメの舞台になっているのは長野が非常に多く、かなり写実的な描かれ方をしています。そして、そこを訪れるファンの多くが東京から来ているわけです。東京から来ている20代～40代は東京生まれ東京育ちなわけです。彼らにとっての故郷は東京なのですが、彼らがイメージする故郷ではない。そういう中で、第二の故郷あるいは擬似故郷と言っていいかもしれませんが、そういうものをアニメを通して構築しているのとは私は考えています。そういった東京、名古屋、大阪といったような、大きなマーケットから90分から120分でいけるような場所にこういうアニメのロケ地が多いという事実もありますので、そのあたりも見えていく必要があるのかなと。

逆になぜ小説とか漫画ではなくアニメなのか。このあたりも非常に興味深いところで、私自身2

つ考えていることがあります。1つは、風景を現実以上によりイメージ化して描くことができる。それが単なる絵ではなくて、そこに音が入り、キャラクターの声が入り、複合的なイメージが形成される。例えばテーマソングを聞くだけで、その風景をぱっと思いつくことができる。これは総合芸術としてのアニメというものを持つ可能性かなと感じています。

それからもう1つ、これはよく関係者の方と話すのですが、アニメの聖地巡礼は疑似恋愛なんです。キャラクターへの感情移入の度合いが他のメディアと比べると非常に深い。実写の俳優さんに恋するより、アニメのキャラクターに恋する方が、リアリティがある。メディア表現の手法としても分析可能なのではと感じています。まだまだ課題はたくさんあると思います。これからもご教示宜しくお願いします

コメント：西山

私、司会ですが質問してよろしいでしょうか。日本の文化で海外に行って展開したものとして、例えばお寿司とかいろいろありますが、そういったものは全部アレンジされてしまいますよね。ところがアニメは、マンガのキャラクターが日本でのまま向こうにいても変質せずに使われている、というか享受されています。アメリカのコミック誌のスーパーマンなどは見るからに日本のアニメ・キャラクターのテイストと違う、日本のマンガとは違うとなんとなくわかります。なぜ日本のアニメ文化とかこのマンガ文化とかは変質せずに、100%の形で受け入れられ続けるのか、というようなことは意識されたりしますか。僕はこれが非常に不思議なのです。

回答：山村

よく言われるのは、日本のコンテンツは無国籍性を持つ、故に受け入れられやすい、ということです。ただ、近年は非常に日本的な文化表象

が多く盛り込まれた作品も受け入れられています。海外の現場で見ていると、彼らなりに日本のコンテンツをアレンジしているんですよね。日本のコンテンツはどちらかというと、消費者がアレンジしやすいというか、消費者が変えていく、パロディや2次創作を作りやすい土壌があることは確かです。まさに参加型、体験型の消費、そういったカルチャーがあるのかなと思います。作品を享受しているというよりは、2次創作、3次創作的な文化そのものを彼らが楽しんでいる感じを受けます。ちょっと答えになっているかわからないのですが。

コメント：西山

一言だけよろしいですか。日本のマンガ文化は非常に幅広く、いろいろなキャラクターや描き方が作家によって様々で、巨人の星みたいなものやゴルゴ13のようなものなどいろいろあります。ただ、海外に出て行っているキャラクターが少女マンガではないですが、ある一定の枠に収まったものであるということが、ある意味、少し気持ち悪いのです。私たちのように普通にあまり興味のない人間からすると何となく不思議なのですが、もっと本当だったら日本人が持っている様々なものが多様に受け入れられても良さそうだと思いますが、そう見えないのはなぜなのでしょう。それが現実なのでしょう。

回答：山村

実はフランスに行って感じたことは、日本よりも幅が広い点でした。日本のファンが享受しているものと比べてかなり広い。最新のコンテンツから古典的なコンテンツまで楽しんでいる様子が見られました。これには、作品が放映されている時期の問題だとか、どういうメディアで視聴しているのかとか、彼らがいつその情報を仕入れて、それにどのような形で共感しているかというあたりが影響しているように思います。

コメント：真板

ちょっと聞きたかったのは、さっき先生無国籍っていったでしょ。とするんだったら、日本のアニメがむこうに行つてですね、国際交流のなかでどういう働きを果たすかといった時に彼らが日本のアニメを通じて、交流の中のイメージというのは、日本なのか、あるいは地域なのか、あるいは日本人なのか、ある特定の地域を創造することによって、国際協力としてのマンガ・アニメが観光誘致と観光地のイメージ形成の役割を果たしていると思ったんですが、全くそういうものに対して効果がないということですか。

回答：山村

非常にいいご質問だと思います。私はコンテンツそのものに日本文化のエッセンスみたいなものを詰め込むかどうかは実はそれほど重要ではないのかも知れないと思い初めています。それより重要なのは、対話の際の共通言語というか、お互いに共有できるお話であるかどうかではないかと。それがきっかけとなって一緒に楽しめるかどうか。そのあたりがすごく重要なポイントなのかなと思っています。そして、そうしたコンテンツがきっかけになって、如何に日本の文化や、日本人の本当の生活というところにアクセスさせるのか、ここがその次の段階の課題としてあるのかなと思っています。

コメント：真板

どの部分に共感しているんですか。ちょっとわからないんです。

回答：山村

そうですね。そこは今後しっかり調査していく必要があるのではないのかなと。日本で事例を見ているのと、海外で事例を見ているのとでは、どうもやはり共感しているものが違うような感じを私も受けます。今後の課題としたいと思います。ありがとうございました。

コメント：小林（天）

最近でもっとも話題になっている分野ですので、私も注目しているところです。

先ほどの高松さんがパレスチナについてお話しされていました。私も先日パレスチナの人と話をする機会があり驚きました。欧米人を中心に 200 万人以上の聖地巡礼者が、あれだけ際どいニュースが報道される中で、毎年詰めかけているらしいのです。私たちは、囲いの中で爆弾が落ちてくるようなシーンしか想像しませんが、ヨルダン川西岸では大きなツーリズムが動いているんですね。

同じ聖地巡礼という言葉を使いながら、山村先生はアニメの世界を事例に研究されています。ポップ・カルチャーの現象の洗い出す、その方向を探るのはとてもおもしろいテーマだと思います。しかし、ポップ・カルチャーに対抗する概念はトラディショナル・カルチャーというのでしょうか。

西川

ハイ・カルチャーでしょうか。

小林（天）

では、ロー・カルチャーというものもありますか。

西川

高級文化に対して大衆文化という一般的な区分けにすると、そういう言い方になります。

小林（天）

地域文化に立脚する本来のトラッドな文化があるとすると、その一方では、先ほど小林英俊先生もおっしゃっていたように、全国に 1500 も「ゆるキャラ」ができています。「くまモン」の成功を受けてのことですが、いかがなものでしょうか。私は、実に愚劣なものだと思っています。そしてややもすれば、トラッド・カルチャーを切り離し無視したところで、「ゆるキャラ」ブームに乗っていればいいという風潮が加速されるのではないか

という危惧を覚えます。文化現象を取り上げ、これはおもしろいムーブメントだと分析するのはよいのですが。昨年に出版された『メインストリーム』という本は、アメリカン・カルチャーが世界をどう席卷していくかという興味深い内容でした。では、日本のポップ・カルチャーはどう対抗していくのか。あるいは、オリジナルもしくはベーシックなトラッド・カルチャーとどう連動させていくのか。ポップ・カルチャーを切り口としてトラッドな部分への引っ張っていくというお話がありましたが、それは 1 つ面白い視点だと思います。しかし、私が常に危惧しているのは、浮ついてふわふわとしたバーチャルな部分だけが、一人歩きをしてしまうことです。特に日本の田舎のナイーブな人たちが影響されるのではないのでしょうか。現実には、山村先生のテーマの一部分だけが一人歩きをしている感があり、非常に気になっていますので、あえて申し上げた次第です。

コメント：西山

司会の特権ですみません、もう 5 分過ぎているのですが、今日は皆さんが厳密に時間を守られているので、感謝しつつ発言します。私が先ほど言い損なったのは、要するに日本人の美意識、何を美しいと思い、可愛いと思い、かっこいいと思うか、美意識が通じているところに面白さがあると思うのです。私はゆるキャラはちょっと違うと思います。小林先生が危惧されているゆるキャラとは違って、私は一見見ただけでは、さっき否定的に言ったのではなく、ああいう日本人が可愛いと思ったり、かっこいいと思う美意識、価値観のようなものが、実はフランス人が最も強く感じたり、近隣の非常に近い考え方や環境と経験が近い人たちが感動したりするといった、その辺を抑えるといいのではと思った次第です。

回答：山村

ありがとうございます。西山先生がおっしゃるとおり、何が共有されているのかというあたりは、

やはりすごく重要な課題だと思います。説明が足らず失礼しました。日本のアニメーションに関しては無国籍と、よく一般に表現されるんですよね。ただ非常に日本的な作品も多い。この辺りも、何が海外で共有されているのか、非常に興味深いテーマです。それから、小林先生、ありがとうございます。私もそこは自治体の方々と話していて危惧しているところです。事あるごとに警鐘は慣らしていきたいと思っています。特に、今のゆるキャラの状況など見てみると、以前関係者と話をしているときに「萌えバブル」という言葉を使ったことがあるのですが、そうしたバブル的なものはじける危機を感じるくらい安易に考えている自治体が多い。そういった面も今後しっかり整理していく必要があると思います。

Japanese Contents Tourism and Pop Culture ～国際共同研究の立ち上げと今後の課題～

山村高淑

1. Japan contents を巡って海外では何が起こっているのか

→スライド資料

2. 研究の背景の整理

日本においては、2003年の小泉内閣による観光立国宣言、2006年の「観光立国推進基本法」の成立など、21世紀の国家政策の柱の一つとして「観光」が位置付けられ、産官学をあげて観光産業の育成や観光を通じた地域づくりの取り組み・研究が進められてきた。そうした中で、マストツーリズムに代表される従来型の観光のあり方が、時代・社会の要請に十分対応できていないことが指摘されている。こうした議論の中でも、筆者は、情報社会化の進展に伴い、モノから情報＝コンテンツへの価値のシフトに伴う、観光資源のあり方、観光という仕組みのあり方の再定義に注目したいと考えている。そして近年、こうした文脈から国が新たな観光のあり方を提言した代表的な報告として、2005年に国土交通省・経済産業省・文化庁が共同で作成した「映像等コンテンツの製作・活用による地域振興のあり方に関する調査報告書」がある（詳細は第3節参照）。

こうした国による提言や、驚宮に代表されるアニメ・マンガを活用した地域振興例の登場などによって、2000年代後半から、日本では、コンテンツツーリズムの創成と振興に向けた様々な取り組みが各地で推進されるようになってきた。しかしながら、こうした取り組みは各自治体が試行錯誤を繰り返している段階で、情報共有や、成果の分析・評価、汎用性の高いモデル化等はほとんど行われていない。また、観光研究分野はじめ関連する学術分野においては、地域開発・観光まちづくり分野や観光社会学分野で、コンテンツツーリズムが研究対象として取り上げられるようになってきたばかりであり、学術的研究蓄積はほとんどないのが実態である。さらにこうした数少ない先行研究も、国内事例を対象に、地域振興論やまちづくり論、旅行者行動論としてアプローチされているものが大半であり、日本のコンテンツが海外へどのように伝播し、当該国民に受容され、そして日本への旅行行動を誘発しているのか、そしてそうしたツーリズムが他者理解をどのように促進し得るのか、というコンテンツの国際伝播・受容、文化的安全保障の観点から論じたコンテンツツーリズム研究は筆者の知る限り皆無である。

また、海外においても、これまで映画やドラマゆかりの地（ロケ地や映画スタジオなど）を巡る旅を、film induced tourism（映画によって誘発される旅）と呼んで取り扱うことが多かったが、近年ではfilm tourism（フィルムツーリズム）という呼称も普及し、日本の「観光立国推進基本計画」（2007年）でもニューツーリズムのひとつとして取り上げられている。しかしながらコンテンツツーリズムという観点から体系的になされている研究成果は、内外いずれにおいても、新たな概念ということもあり存在しない。また、コンテンツツーリズムに含まれるアニメやマンガ、ゲームなどを活用したツーリズムと、従来のフィルムツーリズムとの類似点と相違点についても、未だ本格的な議論がなされていない。

広く海外に目を転じると、日本のポップカルチャー・コンテンツは高い評価・支持得ており、

作品の舞台となった場所等、そうしたコンテンツとゆかりのある日本の土地を訪れる外国人旅行者は増加傾向にある。とりわけ、東アジア地域からのこうした旅行者が増えていることは、近隣諸国と様々な政治的懸案を抱えている日本にとって、文化的安全保障を構築していくうえでコンテンツツーリズムが果たし得る役割を示唆しており、極めて重要な政策的意義を持つ。

こうした学術的、社会的背景を踏まえ、筆者らは2011年より、小規模ながらも国際共同研究を進めてきた。今後はこの共同研究の枠組みをより発展させ、コンテンツツーリズムが、文化的安全保障の観点から極めて重要な役割を果たし得る交流活動であるとの仮説に基づき、国内外の具体的事例を通して実証研究を行っていきたいと考えている。

なお、日本の政策論的観点から言えば、こうした研究は、外務省や経産省、国交省等が進めてきたコンテンツ関連政策、とりわけ文化外交政策と情報コンテンツ産業支援政策、インバウンド誘致政策等と大いに関連するテーマであり、これら異なる領域における関連テーマを、文化的安全保障という観点から、新たな研究領域として統合化していく試みともなる。

3. 国の政策としてのコンテンツツーリズム

【2-1】日本国政府によるポップカルチャーを活用した文化外交・経済振興政策の流れ

✓ 1990	Joseph S. Nye, Jr. “Soft Power”
1990年代	当時の英国を表現する語として“Cool Britannia”が広く使われるように。
✓ 2002	Douglas McGray “JAPAN’S GROSS NATIONAL COOL”
✓ 2005	国土交通省・経済産業省・文化庁『「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」報告書』
✓ 2006	外務省『「ポップカルチャーの文化外交における活用」に関する報告』
✓ 2007	外務省「国際漫画賞」
✓ 2008	外務省「アニメ文化大使」
✓ 2009	外務省「ポップカルチャー発信使（通称「カワイイ大使」）」
✓ 2010	経済産業省製造産業局「クール・ジャパン室」設置
✓ 2010	観光庁「JAPAN ANIME TOURISM GUIDE」
✓ 2011	JNTO「JAPAN ANIME MAP」
✓ 2012	『観光立国推進基本計画』→ニューツーリズムの欄に、観光コンテンツのひとつとしてアニメが記載される。
✓ 2012	経済産業省が『コンテンツ産業の現状と今後の発展の方向性』の中でコンテンツの「聖地」という表現を用い、そうした地へのインバウンド観光客増を戦略として掲げる。
✓ 2013	観光庁・日本政府観光局（JNTO）・経済産業省・JETROが『訪日外国人増加に向けた共同行動計画』を発表。「クール・ジャパンコンテンツから想起される観光地（総本山、聖地）への訪日」

（出所）筆者作成

【2-2】国交省・経産省・文化庁による「コンテンツツーリズム」の定義（2005年3月）

「地域に関わるコンテンツ（映画、テレビドラマ、小説、マンガ、ゲームなど）を活用して、観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズム」。その「根幹は、地域に『コンテンツを通して醸成された地域固有の雰囲気・イメージ』としての『物語性』『テーマ性』を付加し、その物語性を観光資源として活用すること」

※ 下線筆者。なお、この時点では具体的に「アニメ」が例示されていないことに注意。

出所（『映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査』報告書、国土交通省・経済産業省・文化庁、2005年3月、p.49。

【2-3】外務省による「ポップカルチャー」の定義（2006年11月）

「一般市民による日常の活動で成立している文化」として捉え、「庶民が購い、生活の中で使いながら磨くことで成立した文化であって、これを通して日本人の感性や精神性など、等身大の日本を伝えることができる文化」。

「この考え方によれば、浮世絵、焼物、茶道などは、其々の時代における当時の『ポップカルチャー』であったとすることができる。」

「文化外交への活用にあたっては、こうした『ポップカルチャー』の中で、特に新たな時代の流れを切り開く最先端の分野で、広く国民に受け入れられ、強い浸透性と等身大の日本を表す思想性を有するものを対象にすべきであり、具体的には、アニメ、マンガ、ゲーム、J-POPのほか、ファッションや食文化等の分野が対象になると考えられる。」

出所：『「ポップカルチャーの文化外交における活用」に関する報告』，外務省ポップカルチャー専門部会，2006年11月9日。

【2-4】『観光立国推進基本計画』におけるニューツーリズムの位置付け（2012年3月30日）

（五）新たな観光旅行の分野の開拓

②各ニューツーリズムの推進

ア エコツーリズムの推進

イ グリーン・ツーリズムの推進

ウ 文化観光の推進

エ 産業観光の推進

オ ヘルスツーリズムの推進

カ スポーツツーリズムの推進

キ ファッション・食・映画・アニメ・山林・花等を観光資源としたニューツーリズムの推進

スポーツや医療のほか、ファッションや食、映画、アニメ、山林、花等についても、国内旅行のみならず、最近では訪日旅行の動機にもなる観光コンテンツであるため、これらを活用しながら観光につなげる地域の取組を促進する。…（中略）…

アニメについては、作品の舞台となった地域への訪問など、参加者に対して周辺観光を促す地域の取組みを支援する。

※下線は筆者。

出所：『観光立国推進基本計画』平成24年3月30日閣議決定，pp.55-57。

【2-5】経産省による「コンテンツ産業」の定義と「観光／聖地」に関する記述（2012年12月）

- ・ 「コンテンツ産業」とは、映像（映画、アニメ）、音楽、ゲーム、書籍等の制作・流通を担う産業の総称。
- ・ 我が国のコンテンツは「クールジャパン」として海外からも高く評価されており、コンテンツ産業は、海外展開を通じた成長を見込める有望な産業。
- ・ また、コンテンツ産業は経済波及効果が大きい。コンテンツ産業の市場規模に対して、製造業等非コンテンツ産業への波及市場は約1.7倍になるとの民間試算が存在（出典：デジタルコンテンツ協会試算）。

出所：『コンテンツ産業の現状と今後の発展の方向性』経済産業省商務情報政策局メディア・コンテンツ課，2012年12月，p.3。

「大きく稼ぐ」クールジャパン戦略の全体像

- ※ 日本発のコンテンツ・ファッション・食・観光等を海外の消費者に周知し、現地で日本ブームを創出→
- ※ 物販やサービス提供を通じて現地で収益をあげる仕組みを構築（店舗、EC、TVショッピング等）→
- ※ 本場（聖地）に日本ファンを呼び込み、日本での消費に結びつける仕組みの構築
- ※ 日本（＝聖地）へのインバウンド観光客増

※下線は筆者。

出所：同報告書，p.27-29。

【2-6】『訪日外国人増加に向けた共同行動計画』における「聖地」（2013年6月20日）

- Ⅱ クールジャパンとビジット・ジャパンの連携による訪日観光促進
- 2-1 クールジャパンとビジット・ジャパンの国内（海外メディア、バイヤー招聘事業等）における連携
- 観光庁・JNTO は、クール・ジャパン事業実施地域に関連する情報発信を行い、クール・ジャパンコンテンツから想起される観光地（総本山、聖地）への訪日を促す。

※下線は筆者。

出所：『訪日外国人増加に向けた共同行動計画』，観光庁・日本政府観光局（JNTO）・経済産業省・JETRO，2013年6月20日，p.2。

4. 国際共同研究の展開に向けて～その可能性と課題

3-1 “From Film-Induced Tourism to Contents Tourism”

Film-induced tourism has been variously defined and described as movie-induced tourism (Riley et al. 1998), cinematic tourism (Tzanelli 2010), film tourism (Roesch 2009), set jetting (Grihault 2007), TV tourism (Reijnders 2011) and so on. Beeton (2000) initially applied the term ‘film-induced tourism’ to encompass the range of terms that have emerged over the past 15 years. For this chapter, **we continue to apply Beeton’s inclusive and broad use of the term ‘film’ to cover fictional movies and TV series as well as animation, but we also are expanding the whole concept into ‘contents tourism’.** …

…我々はBeetonが提唱した、映画、TVシリーズ、アニメなどをカバーする“film”の包括的用法を継続して適用する一方で、同時にこうしたコンセプト全体を“contents tourism”へと拡大していく…

As noted in the introduction of this chapter, **the term ‘contents tourism’ is a Japanese concept that has been in use for over ten years, referring to all aspects of pop culture in relation to tourism. The concept of contents (kontentsu) in relation to theme and narrative in popular culture** emerged in scholarly and business circles in the 1990s. …

…日本におけるコンテンツツーリズムという語は、ツーリズムに関するポピュラーカルチャーのあらゆる側面を含んでいる。ポピュラーカルチャーのテーマ性、物語性に関して「コンテンツ」というコンセプトが1990年代に登場してくる…

However, **‘contents tourism’ is not only a form of tourism for young people in Japan, with older visitors continuing to demonstrate a fascination with their own (and others’) versions of popular culture** and the layers of meaning this can provide. **By looking at popular cultural tourism in terms of its content and meaning, we can take the notion of ‘contents tourism’ beyond Japan, using it as a framework from which to consider the relationship between tourism and culture of the day in other cultures and parts of the world.**

コンテンツツーリズムは日本における若者のツーリズム様式を指すだけでなく、より昔からのスタイルも含み、それぞれのポピュラーカルチャーによって継続して人々を魅了し続けている…ポピュラー・カルチュラル・ツーリズムをそのコンテンツと意味するところから見ることで、ツーリズムと他者の現代文化との関係性を考えると、我々はコンテンツツーリズムという概念を、日本を超えて適用することができよう。

出所：Beeton, Sue, T. Yamamura and P. Seaton. 2013. “Chapter9: The Mediatization of Culture: Japanese Contents Tourism and Pop Culture”. In Lester, Jo-Anne and Caroline Scarles (eds.) *Mediating the Tourist Experience: From Brochures to Virtual Encounters*. Ashgate Publishing, Limited.(2013.11) .

以上を踏まえた暫定的「コンテンツツーリズム」の定義（筆者による）

ポピュラーカルチャーのコンテンツ（テーマ性や物語性、登場人物など）がきっかけ・動機となる旅行行動で、そのコンテンツと関わりのある地域や場所を訪れ、登場人物の人生や感情を追体験したり、印象に残る場面を再現・再演したりすることで、作品世界と自分との一体化（作品の内部化）を図る行為（山村）。

3-2 二つの目的

- ① コンテンツツーリズムをポップカルチャーの伝播と受容の側面から捉え直すことを通して、そうしたツーリズムが他者理解に果たす役割を明らかにすること。
- ② これを踏まえて、日本の置かれている地政学上とりわけ国際的な相互理解が求められている東アジア地域に着目し、日本のコンテンツをきっかけとしたコンテンツツーリズムが、日本の文化的安全保障に向けてどのような可能性と課題を有しているのか考察を行うこと。

3-3 論点整理の必要性

【A】: Domestic な視点

- ① 国や自治体における地域振興策
- ② 日本におけるファン文化
 - ・ 同人イベント
 - ・ コスプレイベント
 - ・ 聖地巡礼
- ③ 著作権者における「ライセンス・ビジネス」（著作権者主催のイベントから、著作権者と自治体との「共同タイアップ」まで）

【B】: International な視点

- ④ Japan contents をきっかけとした外国人旅行者の訪日旅行実態
→ Clothilde さん（JSPS 研究員）、杜海川さん（国メ M2）など
- ⑤ 海外における Japan contents を資源としたイベントの実態
→ Japan Expo (France)、動漫節（中国杭州）、台北国際動漫節（台湾・台北）、Comic World（韓国、釜山、香港、台北など）など

3.4 従来の観光研究と共有できる本質的観点

(1) 地域の文化の再発見、誇り・アイデンティティの確立・強化

- ・ 地域住民にとっての観光の本質は、他者からの「まなざし」を通して、自分たちが持っている資源（歴史や文化、自然等々…）の価値を再認識、再評価するところにある。他者（旅行者）との交流を通して、こうした認識はさらに強まり、地域に対する誇りが育ちうる。
- ・ 旅行者にとっての観光の本質は、メディア等によって構築されたある地域のイメージを、実際に現場を訪れることで確認すること。そしてそうしたイメージが投影された現地の風景や人々を通して、自分の存在理由を問い、肯定することにある（私がいても良いのだ）。これは、ある場所と自分との特別な関係性を創り出し、自分をその場所と不可分な存在とすることでもある（居場所、聖地）。

- ・ 地域住民も旅行者も、双方、観光という現象の中で、アイデンティティを再確立し、自分の存在や生き方を肯定していく。
- ・ そしてこうしたプロセスを通して、地域の伝統や文化が再発見、再評価、再構築されていく。いわゆる「観光文化」論。

(2) コンテンツツーリズムの現場で起きていることも同様

- ・ 「他者からのまなざし」「メディア等によって構築されたある地域のイメージ」
 - アニメ作品（アニメは他のメディアと比べても、デフォルメや純化によるイメージ化作用が強い。風景＋キャラクター＋声＋音楽＋…）
 - 歴史的にも、パロディがオリジナルの伝統を再発見させる例は多い…「源氏物語」「真田太平記」等々
 - Japan Expo など、海外からのまなざしで自国のポップカルチャーの価値を再発見した日本人
 - 木崎湖（2002）の例
- ・ 「地域のイメージを、実際に現場を訪れることで確認すること」
 - 舞台探訪、聖地巡礼…「再演」「再現」
 - 作品世界の内部化、登場人物の足跡の追体験
 - 宗教的巡礼行為も同様。四国八十八箇所…弘法大師の足跡の追体験。
- ・ 「ある場所と自分との特別な関係性」
 - これを創り出す媒介となっているのが作品でありキャラクター。
 - 伝統が再構築された形での究極の形態が地域の「まつり」と作品との融合。

(3) 観光創造論の本質

- ・ 「…発展とは、その集団が持っているもの——自然環境、文化遺産、集団構成員の創造性——に依拠し、集団内や他地域の集団と交流することによってこれらをより豊かにしていくこと…」（The Dag Hammarskjöld Foundation 1975 “Dag Hammarskjöld Report on Development and International Cooperation ‘What Now’”）。
- ・ 「人々が各自の可能性を十全に開花させ、それぞれの必要と関心に応じて生産的かつ創造的な人生を開拓できるような環境を創出すること」、「人々こそがまさしく国家の富」であり、「各々にとって価値ある人生を全うすることを人々に可能とする、選択肢の拡大こそが開発」である。「従って、経済成長は、開発にとって重要ではあるものの、人々の選択肢を拡大するための一つの手段にしかすぎない」。（国連開発計画東京事務所）¹

（了）

¹ <http://www.undp.or.jp/hdr>（参照2013年10月16日）。

◆研究発表 6

観光を基軸とした地域のソーシャル・イノベーション

北海道大学観光学高等研究センター

池ノ上真一

昨日まで竹富島の種子取祭に、9 日間の日程すべてに参加していました。竹富島のお酒の種類は、みしゃく、ぐし、しまー、オリオンビールの 4 種に増え、それらすべてを堪能してきた次第です。本日は、その竹富島の空気とアルコールとを背景にお話しさせていただきます（笑）。

研究領域や研究プロジェクト

～交流を基軸にした地域の再評価

最初に、現在取り組んでいる研究領域や研究プロジェクトに関してまとめます。私は、観光地域づくり・地域計画をテーマに、地域が抱えている矛盾を明確化しながら、地域課題を解決するための地域づくりを研究しています。具体的には、例えば今回竹富島の種子取祭に参加しましたが、現在の竹富島の人口は 350 人です。種子取祭を支えるためには 500 人が必要だと試算されていますが、足りない 150 人分は何十年前前から郷友会という組織が補っています。竹富島出身で石垣島、沖縄本島、東京に住んでいる人がそれぞれ郷友会に所属し、祭りの時期に島に戻ってきます。特に、石垣郷友会は「長男」とも呼ばれており、奉納芸能の演目まで担っています。島出身ではあるが島に帰ってこれない人は寄付で参加するなど、なんらかの形で参加できる仕組みを作りながら祭りの運営をしています。それに加え、わが観光創造専攻の学生にも現地集合現地解散という条件で参加してもらいましたが、同様な外部からの応援団がいます。常連客をはじめ、今年は獨協大や東京農大などの学生が祭りの手伝いをしていました。それ以外にも去年開業した「星のや」も総支配人を筆頭にお手伝いとして参加しています。そのように竹富島では、地域を 1 つの軸にして人々が集ま

り、地域が持つ仕組みであり、地域が大切にする祭りという場を維持する方法が何十年も続いています。この島を見ながら、そういった外部との交流を柔軟に捉えた地域コミュニティづくりをテーマにした研究をしています。

前職の日本ナショナルトラストにいたとき、そういった話を様々な人たちと重ねて、「第 2 のふるさとづくり」の仕組みづくりができないかと構想していました。今後のナショナルトラストのひとつの活動テーマとして立ち上げる取り組みを行っていたのですが、その延長線上で取り組んでいるのが、これから説明するいくつかの仕組みづくりです。それが資料の(2)の②、気仙沼市内湾地区と釜石市での取り組みです。どちらも東北の三陸沿岸地域であり、カツオ漁やサンマ漁をとおした様々なつながりの中で形成されてきた地域です。釜石であれば、鉄鉱石・砂鉄を原料として、近代では大きく製鉄所を中心に発展しました。それらを産業の遺産をなんらかの資源として生きていくのですが、単なる遺跡・遺産としては生きていけない。これまで形成した生活スタイルはすでに破たんしているのは確かです。例えば、九州・山口を中心とする世界遺産の候補に挙げられる産業革命遺産のリストの中に、実は飛び地で釜石も入っています。しかし忘れられがちであり、リストに入っている釜石の産業遺産も地味なものです。世界遺産も 1 つのツールとして使えるかもしれませんが、従来の山や海と人との関わりを見直し、再評価をとおした新しい仕組みづくりを考えています。特に、第 2 のふるさとづくりをテーマとし、地域がこれまでにつくりあげてきたライフサイクルを根拠とし、これからつくり上げていくライフサイクルを軸として、外部の人たちといろいろな

交流機会を創出して、その中で新たな地域の仕組みづくりをしていきたいと考えています。特に、先ほど話が出た長野や山間地のふるさとという話とは逆で、交流によって成り立ってきた地域をテーマとして、その中でツーリズムの可能性を探っていきたいと思います。それが(3)の「海の道」の研究です。陸地から見れば海との境界地域であり、島であり半島であり、竹富島や礼文島もその例であり、国としての境界地域もあります。そのようなところには、多様な地域や文化を背景としてもつ人々が、いろいろな形で交流することで、地域として新たな融合が生まれ、独自の文化を創造しています。その中で、気仙沼市内湾地区をはじめ、留萌、小樽、釜石などのみなとまちを事例地として研究を進めています。先ほどの島をはじめ、それらを含めて大きく捉えた「海の道」の可能性に期待した研究を行っています。それは、陸地とは違う移動時間や移動のための労力があり、しかし一方で海峡や海流は地域を繋げたり、文化圏を作る1つの大きな要素としても捉えることができます。特に現在は、津軽海峡文化圏や対馬海流圏などに取り組んでいます。

例えば対馬海流圏では、先日、五島列島に行ってきたところです。その中で、いろいろなつながりを見ることができました。また、礼文島では島の北端の船舶地区に縄文遺跡があります。最近、出土品が文化庁に重要文化財に指定されました。その出土品から、縄文時代にアクセサリー工房があったと推測されています。アクセサリーに使われていた素材は、南の島でしか採れないイモガイをはじめ、島にはいないイノシシ、おそらく新潟から来たと思われます。また、それらを加工する技術をどのように得ていたかという点、それはオホーツク人からの文化ではないかと推測されています。海獣を捕まえるため、いろいろな針や槍などの固いものを加工する高い技術がオホーツク人からもたらされました。また、南から来た縄文人が使う素材と技術とが相まって、新たなアクセサリーの加工文化が生まれ、それを文化庁が認めて

文化財としての評価がなされました。礼文島では、地政学・地理学的な価値を再評価し、これからの生活スタイルや地域づくりをどのようにしていくかを大きなテーマであると考え、研究に取り組んでいます。

また一昨年前からは、UNWTOからの依頼で海のシルクロードについての調査研究に取り組んでいます。本来、シルクは海を渡っておらず、陸地である草原や砂漠、オアシスを通っていたのはご存じのとおりです。しかし、海域に目を移すと、ユーラシア大陸の東と西をつないでいた道があったということを前提として、これからの観光を切り口とした地域づくりという視点でどのような可能性があるのかという調査をしています。

さらに、(4)にもありますとおり、観光庁や文科省と連携し、それに必要な人材育成とはどのようなものかという研究も行っています。

観光創造学への貢献

～ソーシャル・イノベーションへの挑戦

以上の取り組みをとおり、観光創造学に関する考えや、私の貢献の可能性についてお話ししたいと思います。1つは、地域に発生している矛盾を解消することです。特にそのために、実現段階についてどうすればよいか、学術的な立場からどのような貢献ができるのかを考えています。「海の道」に含まれる地域は、外的、内的なものをすべて含めて、様々な環境の変化をとおり、地域にいろいろな矛盾が発生してきたと考えられます。現在は、それがより複雑化し、さらにグローバリゼーションへの対応も求められている中で、より学術的な貢献の必要性が強くなっていると感じています。しかし、これまでの地域社会は、そういった地域矛盾に対して、いろいろな取り組みの中で対応してきたはずです。現在における課題解決の取り組みの方法を導き出すため、特に観光に着目することが意味あることとして捉えています。そこで(2)①では、地域が矛盾を解消するため、地域の仕組みを変え、地域の社会的な仕組みを変える

という形で行われてきたソーシャル・イノベーションをいかにおこすか、いかに遂行していくかに着目しています。例えば、イノベーションの構成要素についての研究に取り組んでいます。これまでの地域を考えたときに、気仙沼や釜石のようにカツオが来たから人々がやってきました。山で金や鉄が取れるから人がやってきて、交流が生まれました。つまり、仕事という視点で説明がされてきています。現在のみなとまちを見ていると、いろいろなつながりの中で見られる、例えば人々の祭りといった遊びに関する生活文化も重要と考えています。その2つの観点から地域の生活への評価ということに取り組んでいきたいと思っています。なぜならば、地域で人々がいかに生き続けられるか、地域そのものがいかに存続できるかについて考える営みであるからです。

改めてまとめます。前提として、観光を基軸とした地域課題の解決を目的とした実現のためのプロセスが、私が対象とする研究のもっとも重要な観点です。特に地域生活をいかに持続させるかが重要です。観光の交流を創出することにより、地域力をいかに再生するか、あるいは発展させるかが大きなテーマとなります。観光という現象の定義として、人の交流・モノの交換であると捉えています。その中で、発生した仕事あるいは経済の仕組みといったような交易の機会をも含め観光を捉えていくこととしています。目標としては、観光地域づくりのモデル化に取り組んでいます。またその前提として、必要な地域の力とは何なのか、「地域資本」の考え方を持ち出しながら取り組んでいます。地域において、いかにその資源を評価できるか、さらに発展、再生させるにはどのような方法論があるかについて開発していきたいと考えています。

特に私は、すべての地域が対象ではなく、まずは「海の道」に関連して形成した地域を対象とし、観光の可能性について研究していく方針です。そのために、今後議論する枠組みとして、次の4つのこと（配付資料（3）参照）を考えています。

1 つ目は、地域力や地域資本などをとおして、地域をいかに捉えるかについてです。その地域資本の構成としては、文化、社会、経済といった観点から、構成要素とその構造について捉えるべきだと思っています。その中で、現在地域で発生している矛盾の解決のために、いかに地域力を捉えるかを考える必要があると考えています。そして、観光をいかに地域のために使うか。直接的効果はもちろんのこと、地域の生活のためのインフラをいかに維持するか、あるいは発展させるのか、生産活動をはじめ、生活のための商売、文化を維持、発展させるのかといった間接的効果についても検証していくことが重要と考えています。

特に「海の道」というものに着目することが、地域力の解明方法の開発の近道と考えています。また、地域の特性に合わせた体制とはいかなることか、人材、役割分担について考えていきたいと思っています。また、地域の中だけではなかなか捉えきれなかったり、獲得することのできない新しい考え・方法をどのように獲得するかも重要と考えています。それを地域のために融合させ、地域のものにする方法とはどのようなものなのか。例えば竹富島でいうと、なぜあの島に人が移り住んできたかということはほとんどわかっていない。カツオや海産物を追いかけてきたのか、あるいは平家の落武者伝説が由来など諸説あります。しかし、琉球王国、アメリカ、日本といったいろいろな主体がやってきて、その中でもたらされた新しい考え方や方法を、島として獲得し、取り込んできた。それを現在ではどのように実現できるのか。この中では外の交流と農業とをやってきた中でつくりあげてきた、融合のための独特の仕組みがあったと思います。それを現在では、観光という現象を中心としながら、むしろ農業を捨てた地域として、どのように融合させていくのが大きなテーマです。そういった中で「星のや」は、地域の資源の活用者として期待はできます。ただし、新たに資源を生み出すことはできない。そこで役割分担が求められます。島と「星のや」であったり、移住

してくる人たちや、移住まではいかないが郷友会などと連携できる仕組みづくりができると良いと思います。それが私の考える「第2のふるさとづくり」の根底となる考え方です。③にあげているゲスト側にとって地域はどういった役割なのかというところも考えるべきだと思います。その中で地域の社会的な構造をどのようにつくるかが課題です。そして、それを進めるための観光戦略も必要です。

時間も迫ってまいりましたので、その他につきましては資料をお読みいただければと思います。以上で終わります、ありがとうございました。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：真板

大きなテーマが3つあると思います。1つは、種子取祭が未来に向かって島おこしの軸とするならばどうやって持続化していくかストーリーではなく仕掛けの面です。なぜ何百年も種子取祭が続いてきたかという、その仕組みがどのように形成継承されてきたかポイントだと思います。似た話で京都の祇園祭があり、それは商人が作った祭りで、その原型の嵯峨の祭りは500年近く今日まで続いており、続けるために嵯峨野の人々は排他性と人を受け入れるという両面を実施するために教育委員会と嵯峨学区、町内会と商店街、神社と結びついていると思われる運営委員会的な仕組みを、維持しながら観光客を応援団として受け入れる仕組みを作っています。もう1つは、文化の交流に関して、竹富島を含め、ストーリーがないとだめで、人は飽きが来るので、どういうストーリーのなかで位置づけて内と外の人を繋げていくことが重要で、ロマンやストーリー性を共有していくべきだと思います。3つ目は、池ノ上先生が考えている仕組みストーリー地域活性化は誰が誰のためにこの研究を進めようとしているのか教えて頂きたいと思います。

回答：池ノ上

ありがとうございます。取り組みは、主体は、誰が、というところについては、地域に住んでいる人々、何かをするためにはその人たちが集まってできるパブリックがあり、そこが行うでしょうが、そのあたりは悩んでいる点でもあります。竹富のNPOで働いた経験がありますが、文化や生活をつくっている人であり、地域で役割を担っている人が、地域住民の総体的な考え方です。単純にパブリックを固定的に考えることは難しい。地域に人が住むのは一人では難しく、ある程度文化的な生活を営むには、地域社会の仕組みが必要であると思います。地域が形成され、地域に住みたいと思っている人を原点と考えながらその中で出来上がっていく仕組み、地域というコスモス、いかにあるべきか考えていきたいと思います。

コメンテーター1：真板

地域の人は地域の仕組みを変えたいと思っているのでしょうか。西表では、東北大震災のゴミを受け入れなかった。西表は関係ない自分たちが良ければいいという理由で自分たちの文化を守っていけばいいからというものでした。徹底した地域主義であるといえます。かたくなに今持ってきている地域の仕組みを変えたいのでしょうか。星のやの場合は、竹富の人は受け入れているのではなくしたたかに思っていると捉えられます。この研究で地域のソーシャル・イノベーションをどの立場で変えられるのが課題ではないのでしょうか。

コメンテーター2：石川

とても面白い研究だと思います。観光創造の分野で海や港町や水産に関連した研究をしている人はまだ少ない。北大の観光創造として地域を考えるにあたり、その切り口から取り組むことは希少性、先行性もあり自分自身も取り組んでいることもあり応援したいと思います。観光のためではなく、四方を海に囲まれている北海道、日本がなぜ生きているのか。港町であれば水産業が基礎にあ

りますが、地域産業が生業（なりわい）として成り立つにはというテーマを観光創造の立場で研究することで地域再生の糸口が見えるように思います。さらに地域再生にあたり地域自身が儲かるためにどのようなことをすれば良いのか、一緒に考えていく立場になれば北大の観光創造という存在が認識され重要視されるでしょう。北大には水産学部もあり連携をとることも考えられます。道東の話ですが、旅行会社の要請で漁獲資源保護のため自主規制をしている休業船を活用し沿岸からエトピリカ（海鳥）の観察観光を始めたら海外からも多くの観光客が増え続け、自分らの地域資源の再発見をした事例もありますので、ご参考になればと思います。

回答：池ノ上

ありがとうございます。真板先生に対して、私は地域計画や地域研究を通した計画案みたいなことをしていると地域の再構築や活性化を求めているのかということですが、その点は私も感じている課題です。その中で海の道に着目しており、西表のケースの地域主義、例えば、日本とか中国のケースで、日本を日本的中華世界というか国家主義かもしれないがそのようなものに対して、地域だけ、島だけで生きていくとか、西表でもいろいろな性格があります。また同じ西表島でも、西部地区と東部地区、あるいは北部地区もまったく違う文化があります。そのような地域が、それぞれ自立しながらそこからの変化をしたたかに上手に利用して、生き続けていく世界も面白いと感じています。海のシルクロードについても、東南アジアの海域世界に着目しながら、そこも国家というのは近代とか現代に無理やり名乗っているだけで、それぞれ違う文化や民族、これまでの文脈も地域が成り立っています。さらに地域が違う中で、海域世界の中で交易交流を通じて発展し形成されてきた。その中で、石川さんのおっしゃる観光にこだわらないという点に関してですが、現在において地域を再生、イノベーションという形で再構

築する手段としては、とくに観光という現象がツールとして使えるのではないかと捉えています。北海道のアイヌの世界を知り、礼文島に調査に行って改めて感じました。国家や大きな民族ではなく、小さな地域の集まりや多様性の中で横につながって成り立ってきた世界が、今後の地域づくりの研究をすすめるために注目していきたいと思います。その延長線上にみなとまちの研究を位置づけています。地域同士が横のつながりの中でネットワークをもち、どこが一番というよりは、それぞれの多様性の中で成り立ってきたフラットな地域のつながりに期待と魅力を感じています。

コメント：西山

さきほど私が提示したダイアグラムですが、上の部分は現象を分析するもので下の部分はマネジメントが関わっていくものでしたが、計画系の人間は、誰が誰のためにやるのかということを常に意識しなければなりません。自分は、現象を分析するのかマネジメントを研究するのか、計画者として私たちは、それをはっきりさせて研究に臨まなければいけません。観光創造学には、この上部と下部の両方が必要なのではないか。重心をどこに置くかはありますが、そこから乗り出していくべきです。そのような行き来が観光創造というものの可能性を広げるものと考えます。

1. 現在の研究領域やプロジェクトに関する概略

- (1) 研究領域：観光地域づくり（地域研究、地域計画）
 - 地域が抱える矛盾の明確化
 - 地域課題の解決としての地域づくり
- (2) 「第2のふるさとづくり」をととしたライフスタイルの変革に関する研究
 - ① 地域のライフスタイル・生活スタイルの再評価と交流機会の創出
 - 竹富島における「おすそわけ」としての観光
 - 交流人口の創出、地域ファンの創出のための戦略策定
 - ② 観光を基軸とした新たな地域の生活スタイルづくり
 - モニターツアーをととした地域の「受け皿」づくり
 - （気仙沼市内湾地区、釜石等）
- (3) 「海の道」をととした境界地域の可能性に関する研究
 - ① みなとまち+後背地（おもに気仙沼市内湾地区、留萌、小樽、釜石、他）
 - ② 島（礼文島、竹富島、他）
 - ③ 津軽海峡文化圏、対馬海流圏
 - ④ 海のシルクロード（UNWTO）
- (4) 地域課題解決に貢献する人材育成に関する研究
 - ① 観光庁、文科省等との連携
 - ② 地域社会および関連団体の活動への貢献
 - （公財）日本ナショナルトラスト、北海道遺産協議会、竹富島、気仙沼市風待ち復興検討会、等

2. 観光創造学に対する考え、あるいは自らの貢献の可能性、スタンス

- (1) 地域における課題の共有をととした実証的研究
 - ① 地域の矛盾解消のための実践
 - ② 実践促進のための学術的貢献
- (2) ソーシャル・イノベーションの意義と観光創造への期待
 - ① 地域矛盾の解消のために地域社会はいかに対応するか
 - ② ソーシャル・イノベーションに貢献する観光

- ③ イノベーション（新結合）する構成要素（仕事、遊び＝地域の生活を構成する要素）と観光をきっかけに獲得する新たな考え方や方法

3. 観光を基軸とした地域のソーシャル・イノベーション

(1) 前提となる考え方や背景

- ① 観光を基軸とした地域課題解決の実現過程が対象
- ② 観光地としての成功ではなく、地域生活の持続が目的
- ③ 地域力（地域資本）の再生、あるいは発展のための観光
- ④ 交流、交換、交易の機会として観光を捉える

(2) 実践、研究の目標

- ① 「観光地域づくり」のモデル化（ソーシャル・イノベーションの考え方と方法）
- ② 地域力（地域資本）の評価と発展のための方法論の開発
- ③ 「海の道」に関連して形成した地域特性の明確化と観光活用モデルの構築

(3) 今後の議論のために

- ① 地域をいかに捉えるか：地域課題の解決のために
 - 地域力（地域資本：文化、社会、経済）の構成要素と構造について
 - 地域課題の解決と地域力との関係について
- ② ホスト側のツーリズム・インパクトの捉え方と活用について
 - 直接的効果、間接的効果について
 - 地域力の特性との関係について
 - 地域における体制、人材、役割分担等について
 - 新たな考え方や方法の獲得あるいは融合の方法について
 - ソーシャル・イノベーションの実現について
- ③ ゲスト側にとっての地域について
 - ゲストのライフスタイルにおける地域の役割
 - 観光形態の趨勢等について
- ④ 地域のソーシャル・イノベーションのための観光戦略について
 - 地域力の発展を目的とした構成要素の活用について
 - 地域がめざす観光形態と移行方法について
 - 公共と民間との役割分担について

◆研究発表 7

旅の時間論への助走

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

清水賢一郎

取り組んでいる研究領域・プロジェクト

今日は西山先生の宿題に沿ってお話したいと思います。まず一番上です。取り組んでいる研究ということですが、恥ずかしながらあまり取り組んでいません。そこには以前取り組んでいたものも含めて書いてあります。初めてお話しさせていただく方もいますので、昔の話から始めています。(1)は博士論文です。もともと中国研究、今でも捨ててはいませんが、特に中国の近代文学を専門にしております。かつてのいわゆるオーソドックスな文学研究というのは作家論と作品論が主流でした。私はどちらでもなく、タイトルにありますように、ノルウェーの劇作家イブセンが、明治時代の日本と中華民国期、清朝終焉後から 1945 年までの中国で、どう受容されたのかを比較研究しました。特定の作家や作品ではなく、イブセンに関わるものは全部やる、そういうスタンスで、しかも受け手側のことをやりましたので、文学作品が生産されて流通し消費されるという流れでいうと、生産の部分にはあまり目を向けず、流通と消費の部分をやりました。そこで必然的にメディアの研究に向かうことになり、メディア文化論ないしメディア社会史のような研究をやりました。サブタイトルが「恋愛、貨幣、国民国家のドラマ」と三題嚆のようになっていますが、男女関係あるいはジェンダーといいますか、特にイエを中心とする生命の存続継承という問題と、ここでは貨幣としていますけども資本主義システムの問題、贈与経済が資本主義システムに変わっていく過程、それから近代になって中国にも明治日本にも国民国家が出来上がってくるわけですけども、その 3 つが連動していたという様相を、イブセンという劇作家の特に 1870 年代に書かれた劇作品を中心にそ

の受容プロセスを跡づけるというのが私の博士論文でした。今日の発表は時間論とタイトルに掲げておりますが、博論の特にこの資本主義システムといいますか、貨幣の問題は時間の問題に深く関係しており、その意味で、いまだにほとんど同じような問題圏の中に相変わらずいるなと自分ながらそう思っています。

それから(2)ですけど、これは観光創造専攻に参画してから、中国研究を専門とする自分が観光と絡めて何ができるかということで、中国旅行社という、1920 年代に上海で出来た近代中国最初の旅行会社と、そこが出していた『旅行雑誌』というズバリそのもののタイトルの雑誌がありまして、1927 年創刊で、1954 年まで出ていた雑誌で、今は後継誌がありますが、そういう雑誌の研究を科研費をとって 2 年間行いました。(3)は今年からですが、所属しているメディア・コミュニケーション研究院内部の共同研究プロジェクトで、実際には山田先生のご発案だったんですけど、幹事役として私が研究代表になりまして、「拡張現実の時代における<場所>と<他者>に関する領域横断的研究」というテーマで、もう 1 つの専攻、国際広報メディア専攻の先生方、大学院生にも加わってもらっています。ここでは「拡張現実の時代」という言い方をしていますが、これは今現在ということです。私は歴史研究をずっとやってきましたが、ここでは現在のコミュニケーション、今進行中のところに踏み込み、場所と他者を切り口に考えようとしています。(4)はまだ始めていないにも等しいのですが、今年の 9 月から西山先生に引き込まれて、宇治の文化的景観の保護計画プロジェクトにも携わることになりました。萬福寺を中心に黄檗地区に関する文化的景観の価値づけをこれ

から一生懸命にやろうと。もともと文化的景観に興味はありまして、中国文化研究の視点から風水に関心があり、実はこの黄檗山萬福寺、行ったことのある方はご存知だと思いますが、一歩中に入ってみると、日本のお寺じゃないんですね。伽藍から建物まですべて中国風、明代の中国をそのまま持ってきたような空間になっていまして、完全に風水の考え方にのっとってつくられている、面白いお寺なんですけど、ここを宇治の文化的景観の中にきっちり位置づけたいという野心をもっております。これは私にとっては初めての実践的デザインに関わる仕事でして、西山先生のマップでいえば私はこれまで上の方のことばかりを、理論研究なんていうと偉そうですけども、やってきたんですが、今回初めて現場といいますか、そちらの方に踏み込みつつあるところです。

観光創造学への考えと貢献の可能性

～時間・語り・自己に着目して

続いて2番目に移りたいと思います。観光創造学に対する考え、あるいは自らの貢献の可能性。これは悩み続けていまして、今は旅の時間論をメインにしようと考えています。ただ時間論というのは、物語論とも絡めて考えてようとしていまして、同時に生命論にもつなげていきたい。もともと中国研究が専門ですので、中国の生命観、世界観、自然観、人間観から、今、日本で世界で行われている観光研究を捉え直したいと思っています。これは野望なんですけども、観光研究というのはどうしてもユーロセントリック（Eurocentric）というか、あるいはアメリカも含めて、欧米中心のなところがあるように思えまして、中国で行われている観光研究も、なぜか非常に西洋的といいますか、中国的な観点に立った観光研究というのは私のみる限りではほとんどやられていない。そこを問い直したいと。たとえば風水という考え方は、カッコして「社会」と書いたところが実はかなりのポイントではないかと思っていまして、中国では社会という概念が伝統的にはなかったし、今で

も基本的にその点は変わっていないのではないかと中国研究者はそう見ている人が多いのです。日本人がイメージするようなコミュニティとは違うコミュニティのあり方があると。昨日、山村先生が仰っていた貴州省のコミュニティ・ベースド・ツーリズムで、上手くいっているところは、その宗教的な組織、祭りの集まりというのか、そのトップと共産党が上手くオーバーラップしているところが成功しているというお話がありましたけれども、中国では往々にしてそういうことがありますね。つまり、いわゆる社会というものとは違うかたちで宗教が機能している。それを社会だといえそうかもしれませんが、中国には「社」とか「会」とかいうものはありますが、「社会」というものはちょっとどうなんだろうと、そのあたりも含めて中国的な視点から観光を考えていくと、従来とは違う図柄が出てくるのではないかと考えております。

旅の時間論に戻りますと、観光の議論では従来「場所論」は非常に重視されてきた。たとえば発地とか着地とかいいますし、聖地巡礼にしても場所という問題が論じられます。それはむしろその通りなのですが、ちょっと私はひねくれていまして、場所の問題は非常に重要だとわかっていながら、自分の立ち位置をどう切り開くかというので、やや無理やりなところもありますが、時間ということを考えたい。というのも、旅の研究はたくさんありますが、時間の問題を正面から論じたものは極めて少ないようです。そこになんとか食い込みたいと。レジュメに手書きで生命と情報と書いておきましたが、たぶん今、私たちの時代で、生命と情報は非常に重要なキーワードというかテーマだと思います。これを掛け合わせたところで今注目を浴びているのは、たとえばゲノム、iPS細胞。まさに生命と情報を取り扱う生命工学とか分子生物学がありますが、そうした研究の一方で、目に見えない部分で生命と情報が掛け合わさると、そこに昨日から話題になったキーワードとして価値というのが出てくるのではないかと。そこに「語り」

というものが機能することで、生命と情報の間のところに価値というものが生じてくるのではないかと考えております。これを時間論とも関連づけて理論的に展開したい。固有名詞でいうと、ドゥルーズとレヴィナスが時間の問題を論じており、微妙に二人のいうことが噛み合っていない部分もあるんですが、その二人の議論をなんとかつなげられないかと模索しています。日本人の名前を2つ挙げていますが、木村敏は精神医学の領域から時間と自己の深い考察を展開しており重要な論者です。吉田健一は作家で、ほかならぬ『旅の時間』という表題の短編集を出していますが、これが実にいいんです。これで旅の時間をすべて書き尽くしているとは思えないけれども、ある重要なアスペクトは見事に小説に結晶化させていると、何度読んでもぐっとくるいい本です。これをなんとか読み解きながら、旅の時間論を考えてみたいと思っています。前置きに時間を取りすぎましたが、3番に移ります。

空間移動から時間移動への反転と「語り」

こちらは、講義や公開講座ですでに話していることをまとめ直したものです。(1)に浦島太郎の話の挙げています。浦島太郎の話はすごくおかしな話、不思議だなと思うんですが、亀を助けて竜宮城でご褒美をもらって来る、という話に一見みえますが、実は亀を助けたとかご褒美をもらうというのは、後から加えられた要素だと専門の研究で明らかにされています。最も古いバージョンから一貫しているのは、戻ってくるとお爺さん、あるいは死ぬ、つまり一気に時間がぱっと経ってしまう、その話だけが共通のモチーフとして続いているわけです。要するにこれは、恩返しの話とか、宝物を得て英雄として故郷に錦を飾る話ではなく、時間の不思議さを描いたおとぎ話だと思います。そこで空間移動していくわけなのですが、空間移動の話、途中の景色はまったく書かれず、一気に竜宮城に行ってしまうと、帰ってくると時間が反転する。ですけど、皆さんおそらく納得されるん

じゃないかなと思うのですが、旅に出ると時間軸といいますか、時間の流れがぐにゃっと曲がりませんか？たぶんそういう経験は皆さん大なり小なりされると思うんですが、そのところをやりたいと思っています。しかもそれを私たちは「語り」を通じて、おそらく旅の時間を、目に見えないものを、見えるかたちにするということをやっているのではないかと。なぜそこで語りになるのかというと、(3)にも関わっていますが、語り、あるいは物語は、2つの世界を分離すること、語るこちら側と語られるあちら側と、視点が二重化することが必然的に起こるでしょうし、それから物語はアリストテレスが言うように始め・中・終わりがあるというふうに、区切るということが起こる。ここで、文化人類学で、たとえばヘネップがいう儀礼の問題とも密接に関わっているのですが、そういう時間的な構造化が必然的に、何かを語ろうとすると生じるということであり、それからもう1つ、物語は一人では成り立たず、必ずや複数性によってになられる。いわゆる独り言をつぶやくような場合であっても、それは自分が聞く。つまりどこかに必ず聞き手がいないと物語は成立しません。必ず他者に投げかけられるものであり、逆にいえば必ず他者からなんらかの応答が返ってくる。昨日、真板先生が価値観のギャップ、それはゲストとホストの間で起きているというお話でしたが、語り手と聞き手というふうに言い換えることもできると思いますが、価値観のギャップみたいなものがそこに必然的に生じてくる。そのように、物語というものはどうしても聞き手を想定しますから、原理的に他者を指向するということ。ただそこで問題になるのが、そこで想定されている他者はいったい誰なのか、そこで語っている私は誰なのか、ということで(4)に入っていきます。

<あいだ>としての自己の揺らぎと時間の隔時性

おそらく語っている自己、あるいは自分で自分の旅の土産話をする場合には、語っている自己と語られている自己の間に、微細かもしれないです

がズレが生じる。これは木村敏がハイデガーを参照しながらいっていることです。語る自己と語られる自己の間に、葛藤といいますか揺らぎといいますか、距離感というか、時間的なズレが生じる。そこからいろいろなものがズレていく。それは良くも悪くもズレていく。そうしたズレというものが、石森先生も注目していましたが旅におけるエクスタシーの問題につながっていくのだろうと思います。たとえば詩人のランボーは「わたしは一個の他者である」といっていますが、おそらくそういうことが生じてくる。繰り返しになりますが、土産話、旅の物語は、私が私自身の出来事を語るということになる、しかもその出来事は必ず境界線を踏み越えていくときに生じるものだと、いわゆる物語論ではほぼ定説になっていますが、境界を踏み越えて行って、またその境界を踏み越えて帰ってくる。その行って帰ってくるというのが、一番基本になる物語であり、たとえば子どもの遊びで「花いちもんめ」というのがありますけど、あれは行って帰ってくるだけなのに、なぜか子どもたちは嬉々としている。あるいはシーソーも、パタパタやっているだけで何が面白いのか、と思うのは大人で、やっぱりパタパタやるのが人間の根源的な欲求のどこかにあるような気がする。それはいろんな人がいっていますが、今日は資料を読んでいる時間がないのですが、児童文学者の瀬田貞二などがいっています。いずれにせよ、境界を踏み越えるとき、その場に発生する物語はいわば象徴的な<死>と<再生>の道行きだといえる。それがたとえば浦島太郎の話に典型的にあるいはミニマムなかたちで出ているわけです。しかもその土産話というのは、皆さんもそうじゃないかと思いますけども、聞いてくれる人によって土産話の中身や語り口が変わるというのもごく普通のことではないでしょうか。あるいは同じ人に話していても、別の機会に話すと変わる。そういうふうに、たえず語り直され、上書きされるような、そういうもので、その度に、自分というものがいい意味でも悪い意味でもズレていくということが起

こるのだろうと。その自己変容は、宗教的な体験でいえば、回心、救済とも重なり合ってくる。宗教はまさにいろいろな決まり事、しきたり、社会的な仕掛けとして自己変容を導き出すようなシステムを整備していて、たとえば伊勢参りやお遍路さん、今年度のCATS公開講座でテーマにしている聖地巡礼も、そういうものとしてあったはずで

す。最後(6)で、ここまでかなり駆け足でしたが、「同行二人」の話に移ります。「同行二人」というのは、ご存知のようにお遍路さんの笠に書いてある。辞書を引くと、旅というのは自分一人ではなく、お大師さま、弘法大師空海と一緒にあなたと歩いてくれているという意味だと書いてあるし、一般にそう思われていて、それで間違いなのですが、私自身は、一緒に歩いてくれているのは、(4)に書いてあるような、<あいだ>としての自己、<あいだ>としての他者、自己と他者とが重なりつつ、未決定な状態で緩くつなぎとめられているようなそういう自己であり他者、おそらくそれが同行二人の意味なのではないかと思っています。今日はこういう場なので思い切ってこういう話をしましたが、まだ全然考えがまとまっていなくて、きちんと資料や研究の蓄積の上での話ではなく、思いつきの頭に押しつけてしまいましたが、いずれ同行二人論をしっかりとまとめてみたいと構想しています。

最後に、同行二人の問題を、レヴィナスに即して読み替えると、【資料2】ですね。レヴィナスに『時間と他者』という、面白いが難解な本があるのですが、ここではレヴィナス本人が晩年にインタビューを受けて、自著の解説をしているところから引用しました。「『時間と他者』は他者との関係を時間という要素を持つものとして考究したものです。時間そのものが超越であるということ、時間こそがすぐれて他者および他者性一般に向かった開かれであるという着想が兆したのです。このテーゼでは超越を時間の非連続性[隔時性]として考案したものです。」これはすごく面白い。私

は旅の時間論を、一言でキャッチフレーズ的にいってしまうと、旅の問題を dia-chronie あるいは ana-chronism ともいえますけども、時間の感覚が飛んでしまう、時間が逆流してしまうような、むしろ時間というものがそこから生成してくるような、それはドゥルーズもそういうことを書いていますけど、旅の時間がどう生成してくるのかを考えたいと。ただ、今日こうやってお話ししてきても、けっきょく何を言っているのかわかってもらにくい、私自身がまだよくわかっていなくて、今日は「助走」と書いていますが、ほとんど準備体操に近い状態で、こんなことを妄想しはじめているというところです。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（天）

ありがとうございました。しかし、清水先生のお話のコメントを私に振るかという印象で（笑）。清水先生の講義を15限くらい聞いてからでないと、コメントのきっかけもつかめないというのが正直なところですよ。

ツーリズムの存在に関して3つの要件があると思います。まず動機があり、続いて時間、予算という順番だと思いながらお話を伺いましたが、その程度のことしか思い浮かびませんでした。また、浦島太郎と桃太郎は、ツーリズム研究において並論的に扱うとおもしろいことになるのかなとぼんやり考えていました。

旅の文化論については、昨日に西川先生がおっしゃったハイ・カルチャーにも通じるテーマだろうと思います。しかし、私はずっとツーリズムの現場に身を置いてきた人間で、清水先生のおっしゃるまさにハイ・カルチャー的な旅の文化論は、私には手に余るというところで、申し訳ありませんがコメントを終えたいと思います。

コメンテーター2：花岡

私からは2点、感想があります。まず資料の3

枚目、水をめぐる清水先生の論考の中で、荒川修作の作品が取り上げられている点です¹。岐阜県に荒川修作とマドリン・ギンズの「養老天命反転地」という、彼の世界観を訴えかけるテーマパークのような広大な作品があるのですが、そこに行くと、本当に自分が自分の人生を旅のように追体験するような、旅と人間、清水先生の言葉を借りれば時間論の中の、不死、死なないということ、身体で感じる体験ができます。荒川は直接的ではないにしろ、「旅」というものを表現していて、現代作家達は時としてこうした美術作品も多く創っているのではないかと、清水先生の話を聞きながら感じました。そして、私たちとしては、アーティスト達がモチーフとして扱っている「旅」についても、観光創造の分野から、特に清水先生の哲学的な議論の中で解明していくと、現場レベルでも面白いヒントが得られるのではないかと感じました。それが1点目で、これは人間的な視点で私が清水先生と接点を感じたところです。

そしてもう1点目は同じ資料の中に書かれている方丈記についてです。ここで清水先生は自然現象に関するくだりを引用されていますが、私は元々都市計画や建築が専門なので、この方丈記の中で鴨長明が、まずは四畳半くらいの建物の中から、自分の人生を追体験するとか、人生を旅に見立てて振り返るとか、どちらかというと、方丈という建築、物質的な環境の中から、考えることを始めているという点に興味を置いて読ませて頂きました。小屋の中に入って人生をもう一度振り返る旅に出る、という鴨長明の様子から、方丈という建築もまた、人間に旅を考えさせることのできる作品だなと感じたところです。清水先生の論考からはこのような2点、考えさせられました。私自身は方丈記をめぐる人生の旅についての発想と、ギンズと荒川修作のアート作品から発せられる旅との関連性、どちらも観光創造を捉え直すことのできるテーマだと感じました。

回答：清水

お二人の先生、ありがとうございます。限られた時間という以上に、こちらがまとまっていなかった話をそのままぶつけてしまったので、私自身も十分に理解していないことを話しているので、聞いている方には大変であったかと思います。申し訳ありませんでした。

花岡先生からは、非常に嬉しいコメントをありがとうございます。荒川修作については、ここでは三鷹の住宅を例に挙げていますが、天命反転地は自然の中にあり、水という問題と絡めてもなんの違和感もないと思うのですが、「天命反転住宅」と水を絡めるというのは、自分でも不十分なところがあるかなと思いつつ書き、それでも絶対にそうだと、自分では思っていて、これは得意の論というか観点で、天命反転という身体的に体感されるようなものですね、そういうパフォーミングアーツというようなものは、発展して考えていけば旅というものにつながってくると思うんですね。それは観光と音楽ということでもそうですけど、いわゆる観光全般にわたっていえと、昨日の石森先生の言葉でいえば、アートとツーリズムは相同なんだろうと私は思っています。これを強く表明するのが課題でもあります。

コメント：石森

清水先生ありがとうございます。私にとって、清水先生が観光創造専攻にいてくださるのは非常にありがたいと常日頃から思っています。今日のお話も楽しみにしていました、清水先生のお話を聞きながら、30数年前の自分を思い出していました。当時、観光研究に踏み込んでまだそれほど経っていませんでしたが、私は「遊び論」という大きな枠組みの中で「観光」をいかに位置づけるか、ということで悩んでいました。私は観光研究にシフトする前は、民族学や文化人類学の研究をしていました。とくに、1978年から80年にかけて、ミクロネシアの絶海の孤島でフンドシ1本になってフィールドワークを行いました。そのときに私は島の人々のコスモロジー（宇宙観）について調べ

ていました。当時すでにキリスト教に集団改宗されてから30年ほどが経っていましたので、人々のコスモロジーのあり方が大きく変化していましたが、私は運よく島の中で最高齢の長老からいろいろなことを教えてもらいながら、コスモロジーの再構成を試みました。

私は梅棹忠夫先生の弟子であり、20歳代半ばの頃から梅棹先生が主宰する共同研究会に参加した経験があります。そのさいに学んだことのひとつが「人間にとって・・・とはなにか？」という本源的な問いかけの重要性です。そのために、私はいまでもつねに「人間にとって観光とはなにか」ということを自問自答し続けています。そして、民族学、文化人類学から観光研究にシフトした当初は観光と宗教の関係性について考えており、その一環で「遊び論」の枠内で観光を考えようとしていました。

ところがやがて「新・観光学運動」の旗手になり、さまざまな世俗的・実学的なことを手掛けているうちに、どうしても「世の為、人の為」に役立ちうる観光研究に力を入れるようになり、ともすれば「人間にとって観光とはなにか」という本源的な問いかけを疎かにしがちでした。

本日、清水先生の発表を聞きながら、あらためて「人間にとって観光とはなにか」という原点に立ち返って物事を考えることの大切さを強く感じた次第です。私は北大で大学院観光創造専攻を開設するためにみんなでいろいろと議論をしている中で、「世の為、人の為」に貢献できる実践的な研究・教育と共に、その一方で「人間にとって観光とはなにか」という本源に立ちかえっての研究・教育の大切さを強く意識しました。いわば、観光創造専攻の原点を清水先生の話をとおして再認識できたわけです。日頃多忙なために、ついつい忘れてしまいがちな観光研究・教育の原点を再認識できるのも、まさに共同研究会の1つの意義ではないかと思います。ありがとうございます。

コメント：真板

今のお話を聞いていて、私の勤務する大学には大沢池があって、これは 1200 年前の造形物としては唯一京都の中に残っていて、観光の 1 つの名所になっています。その時に、どうしてそれが残ってきたかと考えると、前に民博の研究会でお話ししたこともあります。あの報告書を読んだ住職に呼ばれてですね、この中に 1 つ落ちていることがあると。なぜ人は大覚寺に詣でるのかというと、嵯峨天皇がつくったということだけは潰れると。それは、嵯峨天皇というのが一介の人間であり、その時点で終わっていると。しかし権威はそれだけでは伝わらない。伝わる理由は、先生がおっしゃった語りですね。要するに、時間人びとに認識させる宗教というものが、大覚寺こそが、離宮に大覚寺という寺の宗教性を帯させたことによって継承されてきたと言います。だから、常に、思想というか宗教というものによって、思想と時間を上に乗せて、そこに嵯峨天皇という実体あるものが合わさることで、そこに 1 つのなんというんですか、時間をかけて人びとが 1000 年詣でるという仕掛けがあるのではないかとわれ、驚いたことがあります。今、お話を聞いていて、語るということと、先生はさっき、絶えず繰り返すということで時間の問題を克服したというけれど、これは観光に重要ではないかなと思います。余談になりますが、この 3 ページ目の〈天命反転〉としての旅というところにヘレン・ケラーの話が出てきますけど、water と指文字で綴ったと書いてありますが、これを読んでいてもしかしてと思ったんですけど、実はこの大沢池復活の話をですね、大覚寺でこういうことがあったと母に話したときに、母は昭和 6 年に大覚寺に卒業旅行で行ったんですね。その時に、あなたより私のほうが大覚寺に行っていると、綺麗な蓮が咲いているのを見た。その時に、一緒に行った相模女子大学の前身なんですけど、その時の先生がですね、向こうから歩いてくる人に、うちの母の手を引いて連れて行って、この人と握手しなさいと言ったと。この人は誰ですかというと、ヘレン・ケラーです。ヘ

レン・ケラーがある女性に連れられて、池の天神島に渡る橋のところでうちの母に会ったんですけど、その時に、ヘレン・ケラーは池の僅かな池の流れも含めて、京都で水の感覚というのを感じているんですよね。water という水のエピソードから思い返しました。

回答：清水

先生方ありがとうございます。石森先生にそう言われて、非常に恐縮しておりますけども。ただ、文学研究をやっているときから、人間にとって文学とは何か、表現とは何か、とそんなことばかり考えてきまして、人類史の中でというようなことばかり考えていると、観光創造に来て、相変わらずそういうかたちで人を考えてしまうというのか、そういうことを考えないとやっていけないというところがあるんですね。

それから真板先生、大覚寺のことは、すみません、私はそのエピソードそのものはあれですけど、仰っていることは非常に重要だと思います。宗教、それは宗教というかたちでなくてもいいんですが、思想といえますか、人間が思索したことが、語られて、しかもその時に、良くも悪くも実体的な形というのか、そういうものになり、ある種手触りをもった、もしくは温度をもったかたちになって伝わり、そしてまた語り直されて、話がつながっていくというのが、旅にとっても重要なのだと改めて感じました。

¹ 清水賢一郎「水という旅——生命のみなもとを遡って」(『まほら』68号<特集=アクアツーリズム>、旅の文化研究所、2011)を当日資料として配布した。

旅の時間論への助走

清水 賢一郎

1. 取り組んでいる研究領域・プロジェクト

(1) 中国・台湾をフィールドとしたメディア社会文化史

博士論文「明治日本および中華民国におけるイプセン受容——恋愛・貨幣・国民国家のドラマ」

(2) 中国(中華民国期 1920年代～1940年代)におけるマス・ツーリズムの歴史的展開

科研費 平成22～23年度 挑戦的萌芽研究「中国旅行社・『旅行雑誌』に関するメディア社会文化史的研究」

(3) 北大大学院メディア・コミュニケーション研究院内共同研究プロジェクト

「拡張現実の時代における〈場所〉と〈他者〉に関する領域横断的研究」

(4) 宇治の文化的景観の価値づけ <萬福寺を中心とする黄檗地区> 茶 禅浄双修 風水

2. 観光創造学に対する考え、あるいは自らの貢献の可能性

◇旅の時間論 cf.場所論

◇旅の物語論 みやげ話

◇旅の生命論 cf.情報論

◇中国的生命観(自然観・宇宙観・世界観)から捉え返す旅/観光の思想

旅游 風水 「社会」

「学而時習之、不亦説乎」(論語)

3. 旅の時間論への助走

(1) 「浦島」の旅(物語)の不可思議さ

・報恩譚 + 異郷譚 → 宝物 (英雄として帰郷) cf.「舌切り雀」「笠地蔵」

＜二つの世界 → 「間」「はざま」 → 反転＞

空間/時間 空間移動 → 時間移動への反転

故郷/異郷 異郷の超時間性

(2) かたり vs. はなし

・「<はなし>のほうは、より素朴、直接的であり」、「<かたり>のほうは、より(二重化的)統合、反省、屈折の度合いが高く、また、日常生活の行為の場面からの隔絶、遮断の度合いが高い。」

・「<かたり>のほうは明確な筋立て(プロット)をもち、起承転結などの構造を備えており、日常世界の地盤からの離脱の度合いに応じて「意識の屈折をはらみ、誤り、隠蔽、欺瞞さらには自己欺瞞にさえ通じる可能性」をもつ(坂部恵『かたり』)

＜かたり> → 「騙り」 (主体の二重化)

(3) 物語の3つの特徴

①視点の二重性 … 物語を語る = 2つの世界(コンテキスト、脈絡)を《分離》+《連関》させる

②出来事の時間的構造化 … 区切り、選択と配列(→意味・方向性) ← 一定の視点(仮構)

③他者への志向 … 他者に投げかけられる(他者からの応答 = 価値観の差異の乗越え・共有へ)
聴き手(受け皿)への期待、つながり(受容・承認)への欲望
← 一定の社会・共同体[相互作用態](前提)

(4) <あいだ>としての自己

・自己のパラドクス … 語りの<あいだ>に姿をかいま見せる存在(現象)

同一性(identity)と差異性のはざままで引き裂かれ且つ同時につながりとめられる

葛藤 → 未決性(宙づり、揺らぎ、振るえ) <距離/遅れ>

逸脱 自己超出 cf.「兌」の系譜

A・ランボー「わたしは一個の他者である」(『見者の手紙』)

(5) 旅の時間論へ

・みやげ話(旅物語) = 「私」が「私」自身の<出来事>(体験)を語るということ

・出来事 = 境界線を踏み越える《時・場》に発生する → 物語 象徴的な<死>と<再生>

・絶えず(繰り返し)推敲され、語り直される(重ね書きされる)旅物語

じぶん/世界 人生 life-course 持続的な関わりとその累積(→時間的次元)

自己変容(回心、救済、治癒、出家…)とそれを支援する社会的な仕掛け cf.お伊勢参り
お遍路さん

(6) 同行二人

【どうぎょうにん】 四国巡礼の遍路などがその被る笠に書きつける語。弘法大師と常にともにあるという意(『大辞泉』)

→レヴィナス『時間と他者』によって読み換えると……

旅の時間論への助走（清水）

【資料 1】 白川 静「遊字論」(『文字逍遥』平凡社ライブラリー、1994)

●遊ぶものは神である 遊は絶対の自由と、ゆたかな創造の世界である

遊ぶものは神である。神のみが、遊ぶことができた。遊は絶対の自由と、ゆたかな創造の世界である。それは神の世界に外ならない。この神の世界にかかわるとき、人もともに遊ぶことができた。神とともにというよりも、神によりてというべきかも知れない。祝祭においてのみ許される荘嚴の虚偽と、秩序をこえた狂気とは、神に近づき、神とともにあることの証しであり、またその限られた場における祭祀者の特権である。

遊とは動くことである。常には動かざるものが動くときに、はじめて遊は意味的な行為となる。動かざるものは神である。神隠るというように、神は常には隠れたるものである。それは尋ねることによって、はじめて所在の知れるものであった。

* * *

遊とは、この隠れたる神の出遊をいうのが原義である。それは彷徨する神を意味した。

その字形は、旗をもつ人の形に示されているが、旗は氏族の標識を示す。氏族の標識としての旗は、その旗のもとに、呪器としての矢をしるすが、矢は族盟のしるしである。氏族というとき、氏は祭肉などを切り取って刺すフォークの形であり、これは族盟としての共同聖餐を意味する。そして族が、氏族の標識としての旗のもとに、呪器としての矢を用いる族盟の方法を示す字であるとすれば、この旗は、観光の団体の先頭に掲げられている旗とは意味を異にするものであろう。それは氏族の霊の宿るものであり、氏族神の表象に外ならない。

* * *

遊は中国の精神史的伝統において、その骨格の一部をなしている。

【資料 2】 エマニュエル・レヴィナス『倫理と無限』(ブログ「内田樹の研究室」2005年11月27日エントリー「素晴らしき日曜日(承前)」<http://blog.tatsuru.com/archives/001394.php> により引用。但し西山雄二訳、ちくま学芸文庫[p.65]を参照して一部修改)

●隔時性(*dia-chronie*)としての他者

『時間と他者』は他者との関係を時間という要素を持つものとして考究したものです。時間そのものが超越であるということ、時間こそがすぐれて他者(*autrui*)および他者性一般(*l'Autre*)に向かつての開かれであるという着想が兆したのです。このテーゼは超越を時間の非連続性[隔時性](*dia-chronie*)として考案したものです。

【資料 3】 内田伸子『想像力の発達:創造的想像のメカニズム』(サイエンス社、1990)

●子どもが いかにして「おなはし」を《語り》能力を身につけていくか——《語り》の(お話を)つくる行為とは、経験の解体と並べ換え(再構築)を通しての想像＝創造のプロセスなのではないか

まず想像世界をつくる素材として、それまで見たり聞いたりした経験から印象を準備し、それを加工する過程が始まります。この加工過程はきわめて複雑なものであると考えられますが、細部ははっきりしません。少なくとも、知覚した印象を諸要素に分解し、それを修正し、次にその修正した諸要素

を連想の働きによってつなげ、統合していきます。その結果、頭の中にはぼんやりとした表象(イメージ)が浮かんできます。

この表象はからだやことばを手段にして表現され外化されることになりますが、外化にともなって、変形を受けたり、修正されたり、他の素材を探しだしてきてつくりなおしたりといった過程が起こるものと思われます。この段階では、個々の諸形象を統合し、体系化する過程が続き、次第に、表象自体が洗練され、はっきりとしてきます。それにともない、頭のなかにつくりあげられる表象は、はじめのうちはぼんやりとしたものだったとしても、具体的な像として自覚できるようになります。

最終段階では、この表象がことばやからだを使って表現され、外から目に見える形になります。ことばで記述した文学作品や、からだとことばを通して外化する演劇、さらに、絵画や音楽、創作ダンスなどのような作品の形に表現したときに想像世界の生成は終了するのです。

【資料 4】 瀬田貞二『幼い子の文学』(中公新書、1980)

●子どもたちの喜ぶお話(遊び)には一つの構造上のパターンがあるのではないか → 行って帰る

幼い、いちばん年下の子どもたちが喜ぶお話には、一つの形式というか、ごく単純な構造上のパターンがあるんじゃないだろうかということを、このあいだうちからだいぶ考えていたものですから、今日はそのことを話してみたいと思います。で、その構造上のパターンというのは、「行って帰る」ということにつきるのではないか、それがぼくの立てた仮説なんです。

「行って帰る」——それをぼくは生意気に英語を使って、“there and back”とひそかに言ってみたりもするんですが、“there and back”というのは、じつはトールキンの『ホビットの冒険』[一九三七](瀬田貞二訳 岩波書店)の副タイトルに出てくるんですね。あの本の原題は、*The Hobbit* ですね。そして「行きて帰りし物語」(*or There and Back Again*)という副題になっている。この「行って帰る」とうことは、トールキンの全体験の中から一つの結びとして出た哲学だろうという気も、久しくしています。

人間というものは、たいがい、行って帰るもんだと思うんです。それは幼児体験のほうに行って戻ったり、さまざまあるでしょうが、小さい子どもの場合は、単純に、自分の体を動かして行って帰るという動作がとても多いわけですね。子どもの遊びを見ても、「花いちもんめ」なんて、こうずっと寄って行っては帰ってくる。そういう型のものが、単純な遊びのなかにはずいぶんあるように思います。

そんなふうに、しょっちゅう体を動かして、行って帰ることをくり返している小さい子どもたちにとって、その発達しようとする頭脳や感情の動きに即した、いちばん受け入れやすい形のお話ということになりますと、ただ一つ所でじっとしているんじゃ、こりゃ話になりません。とにかく何かする、友だちの所へ行ったり冒険したりする。そしてまた帰ってくる。そういう仕組みの話を好むのは、当然じゃないでしょうか。

【資料 5】 文部省唱歌「浦島太郎」(明治 43 年[1910] 国定教科書『尋常小学読本』)

- 1 むかしむかし浦島は たすけた亀につれられて 竜宮城へ来てみれば 絵にもかけない美しさ
- 2 乙姫さまのごちそうに 鯛やヒラメの舞い踊り ただめずらしく面白く 月日のたつのも夢のうち
- 3 遊びに飽きて気がついて お暇乞いもそこそこに 帰る途中の楽しみは みやげにもらった玉手箱
- 4 帰ってみれば こはいかに もといた家も村もなく 路に行きあう人びとは 顔も知らない者ばかり
- 5 心細さに蓋とれば あけて悔しや玉手箱 中からぱっと白煙 たちまち太郎はおじいさん

【資料 5】 坂部 恵『かたり:物語の文法』『文庫版へのあとがき』(ちくま学芸文庫、2008)

●さまざまな対人関係のメロディがポリフォニック(多声音樂的)に重なりあう物語＝《かたり》
多声的なトランスポジションを幾重にも《かたどり》ながら生きる存在としての人間

概していえば、ひとが生き人間形成をする対人関係の場は、通常両親との関係を出発点として、文字通りポリフォニックなトランスポジションの場にほかならない。あるひとに向けられた情が、他のひとに〈うつり〉、〈移り〉、〈映り〉、そこに時に外傷体験〔トラウマ——引用者補注〕などもからんで、不具合や障害が起こりもする。いわば多くのペルソナが去来し重なりあう生活史の場は、こうして、さまざまなメロディが重なりあうポリフォニア、多声音樂の場である。

【資料 6】 モーリス・ブランショ『終わりのなき対話』(Maurice Blanchot, *Entretien infini*, Gallimard, 1968, pp.581-2 未邦訳→ブログ「内田樹の研究室」2008年5月19日エントリー「X氏の生活と意見」http://blog.tatsuru.com/2008/05/19_1253.php より引用))

●複数的語り co-authorship としての他者≡自己

「どうして同じ一つのことを言うためには二人の人間が必要なのだろう？」

「それは同じ一つのことを言うのがつねに他者だからだ。」

【資料 7】 ポール・ヴァレリー『カイエ』23・790-91 (恒川邦夫訳『現代詩手帖』1979-9, p.108)

●複数的語り co-authorship としての他者≡自己 他者を中継にして自身に語りかけること

人は他者と意志の伝達をはかれる限りにおいてしか自分自身とも通じ合うことができない。それは他者と意志の伝達をはかるときと同じ手段によってしか自らとも通じ合えないということである。かれは、わたしがひとまず「他者」と呼ぶところのものを中継にして——自分自身に語りかけることを覚えたのだ。自分自身との間をとりもつもの、それは「他者」である。

【資料 8】 高橋源一郎「解説 もう一つの物語」(大塚英志『物語の体操:みるみる小説が書ける6つのレッスン』朝日文庫、2003)

●人に生きうることの可能を教える 人が変わりうるという希望をもたらす

「小説」だけが「物語」を必要としているのではない。また「物語」は作者の求めに応じて簡単に出現してくれるものでもない。ぼくの、古い物語やお伽話の愛読者としての信仰によれば、「真の物語」(このような陳腐な表現が許されるのなら)は、その出現を激しく願うこと、その真正な祈りを通じて出現するのである。

もっとも簡易で、かつ原初的な「物語」とは、子どもが大人になる「物語」、成長する「物語」だ。もっといふなら、どこかに「行って帰る」ことによって主人公が変化する「物語」だ。それ以上の「物語」を、人間は発明しなかった。作り出す必要がなかった。いまと違う自分がありうることだけが、人に生きうることの可能を教えるのである。その意味で、その意味でだけ、「小説」や「文学」に意味があるのだ、とぼくは考える。それは、時間潰しのために存在するのではない。それは、人が変わりうるという希望を棄てられないために存在するのだ、とぼくは考える。

◆研究発表 8

観光と近代～英国を例にとって

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

西川克之

前近代の時間、近代の時間

私の研究者としての出発点はイギリスのロマン主義文学なのですが、先ほど清水先生が物語は境界線を超えたところに始まると仰っていましたが、ロマン主義文学もそのような性格が強くて、いくつかの詩作品において主人公や語り手は、まず現実世界から離れて想像的なあるいは超自然的な世界に入り込んでいき、日常と異なるそこでの幻想的な体験を経て再び現実世界に戻ってくる、そういう軌跡を描くのが典型的なパターンとしてあります。例えばコールリッジの「老水夫行」という詩などは、若かったころの語り手が遠洋へ航海に出掛けて、気まぐれでアホウドリを石弓で射殺してしまう。そこから苦難の旅が始まって、べたなぎの日照りが続く中で仲間の船員が次々と倒れていき、ついには「死中の生」を目の当たりにするといった超自然的な体験を経て、故郷の港町という現実世界に帰ってくるという軌跡を描く。それを考えると、観光研究と遠からずのことをやってきたのかなとも思うのですが、いずれにせよ私が観光研究に取り組み始めたのは7年前に観光創造専攻に関わるようになってからのことであります。

今日お話しすることは、昨日の論者のみなさんがお話しされたような観光研究の実践的な貢献の可能性ということからかけ離れた概念的な議論に終始してしまうかもしれませんし、西山先生がお話しされた観光創造学マップ上で私の研究がどこに位置付けられるのか非常に心もとないところがあります。ひょっとすると、観光創造研究の主流に対するちょっとしたノイズとして響くのかなとも思います。ただ、ピュアな音のみから構成された和音は必ずしも人の心に訴えるように響かないこともあるのではないかという心意気で、今日は

お話しさせていただきたいと思います。

タイトルは「観光と近代」、これは以前にお示したとおりなのですが、今日は「disembedding から(re)embedding へ」という副題を加えさせていただきます。disembedding というのはイギリスの社会学者ギデنزの理念を借りたものです。本日の私の趣旨は、近代がもつばら disembedding の方向に進んできたのだとすれば、観光を通して(re)embedding の可能性を探ることができないかということであります。(re)embedding の括弧の意味については後で触れたいと思います。

さて、先ほどの清水先生のお話は旅を普遍的なものとして捉える立場を採られていましたけれど、私の場合は、観光、あるいは tourism という英語を用いた方が正確かもしれませんが、これは極めて近代的な事象であるという前提に立ってお話したいと思います。たとえば、ジョン・アーリは「観光客であるということは、近代的であるということの決定的な特徴の1つである」と述べていますが、私もそれに倣って、観光を考えることを通して近代とは何かを考えてみたい、あるいは、観光というものに内在する近代性を振り返って、今度は逆に観光創造の可能性を照射できればと考えております。副題に示した disembedding についてですが、先ほども申し上げたように、これはアンソニー・ギデنزの『近代とはいかなる時代か』という本の中で展開されている議論です。ギデنزはまず、近代の特質は時間と空間の分離 separation of time and space にこそあると言います。すなわち、近代以前の社会においては

大多数の人びとにとって、日々の生活の基盤をなす時間の測定は、つねに時間を場所に結び

つけるかたちでおこなわれていた[……]他の社会的空間的標識にまったく言及せずに、誰も一日の時間の経過を口にするにはできなかった。(ギデンズ 1993)

とされます。時間の意識は何かの場所あるいはそこでの関係性に言及しないでは成立し得なかったということです。つまり、近代以前の社会においては、時間というものは決してそれ自体で計測されて、1 時間、2 時間といった単位で測られるものではなくて、他者との関係、あるいは環境との関わりにおいて経験され、どこで何をしていたのかというストーリーとともに、切れ目なく続いて流れていくものとして認識されていたということでしょう。すなわち、時間は有益であろうがなかろうが、それが流れていく環境としての場所や具体的な他者との関係を抜きにして理念化されることのない、常に何らかの物語を伴ったものとしてあったはずです。こうして、場所や関係や物語の要素で満たされていない空白の時間がイメージされることは近代以前にはなかったでしょうし、また、ある量の労働時間とある長さの余暇時間としてあらかじめ切り分けられたものでもなかったはずです。たとえばマイケル・マラスは、近代以前の社会における労働とそれ以外の時間のあり方について、聖月曜日のように本来休みではないのに勝手に休んでしまうことに加えて、さまざまな非労働時間の活動がもちろんあったけれども、それは労働と截然と分節されることなく 1 日の生活のなかに組み込まれていたのだと述べています。こうした活動はまた同時に、伝統的な共同社会における特定の文脈の中に組み込まれて初めて意味を為すものでもありました。

聖月曜日(労働者の中には週の初めを勝手に休日と決めて飲んで過ごすものもいた)に加えて、さまざまな非労働的活動—歌ったり、飲んだり、踊ったり、うわさ話したり—が一日の労働に当たり前のようには含まれていた[……]こうし

た活動は伝統的な共同社会の生活の一部であり、それ以外では意味をなさなかった[……]伝統的な社会はキリスト教的であり、田舎風であり、ヒエラルキー的であり、慣習によって支配されていた。(Marrus 1974)

ディ・グレイジアという研究者も似たようなことを言っています。近代以前の社会の靴屋を例にとって、彼には決まった労働時間があったわけではなく、仕事をしながら手を休めたり、飲み屋で噂話に花を咲かせたりといったふうに時間が流れて行ったのだと。

靴屋は好きな時に起きて好きな時に働き始めた。何か面白そうなことが起これば、作業の手を休めて見に出かけた。飲み屋でうわさ話に花を咲かせるのに時間を費やし過ぎた日があれば、翌日は夜中まで頑張って遅れを取り戻した[……]靴屋には作ったり修理したりすべき靴があった。飲み屋でカードをしているときは靴を作っていなかったが、いずれにせよ彼は「自由な時間」を過ごしてはいなかった。近代的な意味での時間に従って生きてはいなかった。彼には作るべき靴があり、飲むべきビールがあり、遊ぶべきカードがあったが、そのどれをも彼は「労働と余暇」という言葉を必要とせずに行っていた。(de Grazia 1962)

こうして靴を直すという仕事が時間単位で区切られるということはなく、当時の靴屋は現代に生きる我々が常識としているような意味での時間に従って生きてはいなかったというふうにディ・グレイジア述べています。伝統的な共同体では、たとえ働いていない時間であっても、場所や他者との関係性に束縛されていたわけあり、その意味において共同体での生活に時間が埋め込まれていたといえるでしょう。生産とか奉仕に費やされる以外の時間であっても、個人の裁量に委ねられた自由な時間とは捉えられていなかったはず。そ

れが、やがて社会が近代化され、労働が規律化され、また時間が単位当たりで計測されるようになると、時間はもはや切れ目なく流れていくものではなくて、一定の長さをもった労働時間と自由時間に線引きされていくようになります。

それに対して、[工場で]10 時間労働に従事する労働者が手にしたのが「自由時間」、すなわち、以前は手にしたことがなかった「無為の集中」であった。労働時間と自由時間はこうして分けられ、それが現代まで続くことになった。(de Grazia 1962)

こうした時間の分節化と、具体的な場所や社会関係からの解放を可能にしたのは、クロック・タイムが制度化されていくことであるとギデنزは述べます。

機械で動く時計の発明と、事実上すべての人びとへの機械時計の普及は、時間の空間からの分離にとって重要な意味をもつ出来事であった。時計は、「空白な」時間という均一の次元を表示し、その結果[...]時間を定量化していった。(ギデنز 1993)

空白な空間 empty space の成立と

脱埋め込み disembedding

さて時間が具体的な場所から離れ、時計の文字盤になぞらえて定量化された、空白な帯としてあたかも物理的に認識されるようになったのと同時に、空間と場所の分離というものが、近代を特徴づけるまた別の事態として現れてきます。ここで言う空間というのは space であり、場所は place です。空白な空間 empty space というものが、具体的な行為とか関係を具えた場所から遊離しはじめるとギデنزは述べます。近代以前であれば、場所と空間は一致していたはずであり、具体的な社会的活動が生起する場所と、理念的なイメージとしての空間は、ほぼ同義であったと捉えられま

す。つまり、日常の生活で移動する範囲が、頭の中でイメージされ意識化される空間の範囲とほぼ重なっていたことになるでしょう。ところが近代化が進んでいくと、実際の生活の領域をはるかに超えて、いわば認識対象としての空間がどんどん極大化していくということになります。つまり、近代化が始まると、位置的に遠いところにあり実際には顔を合わせたことのない不在の他者 absent-others との関係が、今この現場で我々が顔を付き合わせているような対面的相互関係の環境とは異なる空間の中でどんどん促進されていく。多くの人にとっては依然として目の前の存在との関係が支配的であるように見え、不在の他者との関係は把握しにくいままであるにも関わらず、その影響が現実の生活圏に徐々に及び始めていきます。こうして、空間は場所から切り裂かれ、具体的な関係で隙間なく満たされていたはずの地域的な場所 locale に、遠く離れたところとの諸関係が影響を与え始める。遠く離れたほかの地域や場所が発見されその情報がもたらされることによって、個々の地域的場所は相対化され、それぞれが空間的单位として置き換え可能になっていくと言います。私を社会的諸関係に縛りつけている「ここ」は、私にとって唯一絶対の場所なのではなく、いわば「そこ」や「あそこ」と同質であり、等価の空間なのかもしれないという意識を人は持ち始めることになります。ヨーロッパにおいては 16 世紀以降探検家、冒険家が他の大陸に出掛け、そこで得た情報をもとにしていわば平板化・抽象化されたかたちで世界地図がつくられていくことによってこうした状況は促進されます。つまり、その世界地図の上では、特定の場所とか地域の社会関係や物語が脱色されたような空間イメージが成立していくことになります。かつてのどこか高いところから俯瞰されたような実体感あるリアルな場所の感覚が一方にあるとすれば、たとえば地勢図とか土地利用図といったような情報に還元される、いわばバーチャルな場所のイメージが近代以降重ねられていくことになるのでしょうか。

さて、このような時間の空間からの分離、さらに空間の場所からの切り離しを背景として、脱埋込み *disembedding* が生じてくるとギデنزは言います。

脱埋め込みという言葉で私が言いたいのは、場所性を有した相互関係のコンテクストから社会関係が「遊離すること」、時空間の非定型的な広がりを貫いてそれが再構造化されることである。By *disembedding* I mean the "lifting out" of social relations from local contexts of interaction and their restructuring across indefinite spans of time-space. (ギデنز 1993)

この *disembedding* という言葉で示されているのは、我々が目の前にいない他者とであっても、時計の目盛で刻まれた時間を共有し場所から切り離された空間に共在することで相互に関係し合うようになることでしょう。卑近な例でいうと、センター試験において相互に出会ったこともない数十万の受験生が、同じ時間にそして同じようにイメージ化された空間で競争を余儀なくされる状況を挙げられるでしょうか。ある種、このような受験生の総体も、1つの「想像の共同体」であると言えるかもしれません。また、具体的な場所と結び付いて成り立っていた労働は、切り取られ計量化された時間と、たとえば工場のように規格化された空間の中に再編成されたひとつの作業に転化することになるでしょう。そしてこの近代的な時間と空間の中に再編された事象の1つの典型例が時刻表であるとギデنزは言います。つまり、時計で刻まれた時間に合わせて、それぞれの場所、空間において特定の決まった出来事が起こっていくことが1つの表に書き込まれている。考えてみれば私たちはこのような時刻表を頼りに、さらにまた具体的な場所性が書き込まれることのない地図、そこに埋め込まれているはずの関係性が捨象された地図を手にも、均質化された時空間を貫くシ

ステム、たとえば国際的ホテルチェーンなどの旅行に関する諸サービスやトラベラーズチェックといったような、均質化された時空間を貫いているシステムを信頼して、近代的な観光に出かけるようになったとっていいかもしれません。こうして昨日の敷田先生のお話にもあったように、人やモノの移動は時空間の再編によって急激に膨張し、近代的観光は脱埋め込みによって加速度的に拡大してきたはずです。またこうした脱埋め込みというものはいわゆるグローバル化した社会状況を生み出す1つの社会的契機でもあったはずです。

公共圏の成立と「観光のまなざし」

こうして、近代化の特徴の1つとして脱埋め込みというものが考えられるわけですが、次にもう1つ、観光と関わる近代の特徴の1つとして、ハーバマスに依拠したのですが、商品化した文化が市場で流通し趣味や価値判断が社会的に共有されるようになっていくプロセスについて概観してみたいと思います。この舞台になるのが18世紀以降のヨーロッパの近代化した市民社会であるわけですが、先ほど申し上げた言い方を重ねれば *disembedding* によって場所の束縛から解放され、平準化された時間の尺度が採用された無限定に拡大する空間において展開をする市場を背景として、自由で平等な立場での交換によって資本を蓄積していく市民が主役として登場してくることになります。彼らはやがて、公共的な言論空間、外に開かれた対等な立場で議論を交わすような言論空間、ハーバマスはこれを市民的公共圏 *bourgeois public sphere* と言いますけども、それを形成する。そうした活動の現場になるのがリアルな空間ではコーヒーハウス、バーチャルな空間では定期刊行物、いわゆる雑誌になるわけです。その例として *Spectator* という18世紀のはじめ頃にイギリスで刊行された雑誌について簡単に触れてみたいと思います。*spectator* という言葉は観察者という意味であり、つまりこの雑誌のタイトルは一市民が観

察者となってロンドンの文化や流行・風俗についてコメントを述べるということを含意するわけですが、それは社会批評のはしりであると同時に、そのような観察を共有し合う空間が成立していったことをも示します。こうして芸術や文化あるいは道徳に関する公衆の議論を通して、いわば普遍的な判断基準とか価値基準が形成されることになります。たとえば、1711 年にこういう文章が書かれています。

豊かさ(riches)が作法(manners)に与える影響以上に普遍的なものがあるだろうか？[…]あらゆる階層の人びとが[…]服装、調度品、家、家具、娯楽などにおいて特徴を打ち出したいと強く願っている。[…] [中流層の家庭では]その食卓は、100 年前の大貿易商のそれと同じような食事が並び、住居も立派で装飾がほどこされ、家具は前の時代から見違えるほど改善した。服装の点では、飾り小物でめかし込んだ若い男女を見ればよい。(Berg 2007 に引用)

この時代にはガラス製品とか金属製のバックルやさまざまな装飾品が普及し、中流家庭の室内は調度品とか絵画で飾られていくようになりますが、そのような慣習が共有されるべき文化として社会一般に広がっていくことになります。そして、そのような教養を備えた立派な市民の間に共有される趣味の 1 つとして、18 世紀終わりころに行われたピクチャレスク・ツアーを挙げることができるでしょう。ウィリアム・ギルピンが書いた『ワイ川および南ウェールズの地域に関する観察：主にピクチャレスク的美の関連から』という本を契機に、実際にこのワイ川を下るツアーが、と言いましてもトマス・クックによるパッケージツアーとは様相が大きく異なりますけども、いずれにせよある程度制度化されたツアーが始まっていくわけです。このツアーでちょっと面白いのは、クロード・ロランやサルバトル・ロサ等の絵画に描かれているような風景を探してツアーに出掛けると

ということです。その時に持っている小道具がクロード・グラスというものなのですが、その言いはクロード・ロランの描いたような色合いで風景を見せてくれることにあります。つまり、旅行者はこれを持って行って鏡に写して風景を見る。つまり風景に背を向けて鏡を覗くとクロード・ロランの絵にあったような風景に出会えるという仕儀となります。こうして見るとピクチャレスク・ツアーは「観光のまなざし」のはしり、イメージ先行の観光、観光の大衆化に端緒を開いたものであるとも考えられますが、このピクチャレスク的な理念について、とある研究者はこう言っています。

イギリスのありきたりな自然風景に美を与えることによって、ピクチャレスク理念は多数の国民に美的判断というものは特権的な少数の才能なのではなく、誰にでも身につけることができ、ほとんど何にでも適用できるのだという認識を与えたのだった。ピクチャレスク理念の最も重要で確固たる影響は、中流の人びとに生活を美的に見る態度を促したことだ。というのも、ピクチャレスク理念は、人びとに自然を一枚の絵画であるかのように見ることを教えて、特別な景観や絵画に対してだけでなく、慣れ親しんだ場面や物—都市景観、建築物、庭園、動物、家具、陶器、織物、ドレス—に対しても向けるよう訓練された目利きの視線を習慣づけたのだから。(Birmingham 2010)

こうして趣味判断能力というものが、当時の社会においてドミナントな階層として台頭しつつあった中流一般市民の間に文化的素養として共有されるようになっていきます。

re-embedded な記憶や物語

としての観光の可能性

さて最後に若干の考察に入りたいのですが、脱埋め込みとか価値の社会的共有がもたらしたものは、伝統的な共同体の束縛から人を解放しつつ、

効率的な生産や迅速な情報とモノの流通を可能とするように時間と空間を再構成 restructure する、あるいは人を再配置 relocate する、特に田舎から都会へ労働力を移動させるというかたちでの社会の近代化の推進であります。もちろんそのような近代のシステムが浸透することによって、たとえば私のような人間でも公共圏という言論空間の一隅に身を置いて、今日こうやってお話しできるような文化とかある種の教養というものを身につけることができるようになったでしょうし、何よりもまず社会全体が豊かになり、そしてたとえば多くの人が観光に出掛けることができるようになっていった。しかし一方でまた、そのような脱埋め込みというものは、具体的な土地とか場所に根ざした安定した社会関係から人を切り離し、さらなる効率を求めてたえず再構成され続けなければならないような流動化した時空間に身を委ねざるを得ない状況を意味するわけでもあります。これが近代の宿命であるとすれば、観光もそのような状況と切っても切れない関係にあるでしょうし、効率性や流動性の追求が昂進していくと、時としてたとえばラスキン、シベルブシュ、ブーアスティンらによって観光はまがい物であると批判されることになります。

このような disembedding に始まった近代的な観光の制度化、あるいはその浸透というものを逆に照射して考えてみると、観光創造の可能性の 1 つが見えてくるかもしれません。ここで言う観光とはもとより近代的ツーリズム tourism としての観光ではありません。むしろ観光創造が指向するような、観光を契機として土地や場所と実体的にかかわり、それに根差して生きられた社会関係を経験し、計測化され計量化されるのではない、途切れなく継続していく時間に身を置くこと、あるいはそのような経験や時間を通して、authentic な、つまり本日副題に掲げた言い方で申しますと re-embedded な、ただし現代においては disembedding の状況が常態化しあるいはそれ避けがたく宿命づけられているのだとすれば常にカ

ッコ付きの(re)embedded であるかもしれないですが、いずれにせよ re-embedded された記憶や物語を刻み込み、あるいは昨日のお話で石森先生が用いたイメージをお借りすれば他者の関係とか場所にハグされたような感覚を残してくれる、そうした観光の可能性が見えてくるように思えます。いずれにせよ、こうした観光を通して、グローバル化した社会においてますます透徹してくるような近代性、それを揺るがすある種のノイズ、いい意味でのノイズとして観光創造は可能性をもっているのではないかという風に考えています。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター 1：真板

すごく面白かったのですが、しばし理解に、もうちょっと自分自身の知識をつけないと理解しきれないところもあったのですが、僕、先生が最後に、ひっくり返して、観光創造の可能性を逆説的に言うと、このように観光創造の可能性があるのではないかと、先生はお話しになりましたけど、僕も、先生の話聞きながら、これは、今僕らが進めているエコ・ツーリズム、着地型観光とどういう関係があるんだろうか、あるいはどういふうに見えるんだろうかと、ずっと頭の中でぐるぐる考えていたんですが、1 つはですね、前から日本で思っていることがあって、それは、今、僕はよく着地型観光といって、地域が主体だと考えますよね。その中で最近一番問題になっているのが、どこでもそば体験なんですよ。どこでも同じようなことをするんです。でもそれは、体験型ツアープログラムであることは間違いありません。ところが、着地型観光の中で、地域が提供する体験型プログラムの社会的意義が必要です。どういう理念に基づいて、どんなプログラムを提供するかという、理念とか、基準、考え方が曖昧だったんですね。僕もそれは悩んでいまして、地元の人たちが体験してきたものを、要するに誇りと思えば出せばいいと、そういう抽象的な言い方をしてい

たのですが、それを言えば言うほど、みんなそば体験、きこり体験です。すごくショックだったんです。でも今日のお話を聞いたときに、まさに、時間と空間に切り離されて、1つの与えられた価値を、逆に自分で勝手に作って、地域の中に無理矢理求めて押しかけて入っていき、写真を撮って帰っていく。この様な地域の空間の歴史性や時間を無視した行為に対して、土地や場所と実態的にむしろ関わると、それに根差して生きられる社会関係、まさに地域の人、僕からすれば、語りとか、その人たちが現在まで生きてきた1つの歴史とか、そういうものを追体験することによって、自分を見直す事が出来るようになる。すなわち、計量化され切り離された日常生活に対して、途切れなく継続していく時間に身を置くことによって、自分の心をリフレッシュし、自分が置かれている場所を客観的にもう一度見る事ができるようになる。すなわち、そこに人の愛を感じることができて、石森先生のようにハグしたくなると。そういう部分を、まったく最後のところを読んで、曖昧模糊としていた部分を、着地型プログラムに対する社会的意義というものに対して、非常に明確になったので、申し訳ありませんが、使わせていただきます。ありがとうございました。

コメンテーター2：平

お話ありがとうございました。近代では「時間が切り離され、空間が拡大していった」とのこと、そして観光創造の可能性はその「逆照射」にあるという先生のご指摘に対して、現在の私たちの生活の中で「時間の切り離し、空間の拡大」の反対側にあるような過ごし方は存在しているのかと考えていました。私は茶道をやっているのですが、茶道はまさしくそれに当てはまるように思えます。茶室がある空間に咲いている花を生け、亭主がその土地や季節を表すような道具を揃えて、客と対峙して語る。まさしく場所の限定性がそこには存在しています。一方で、もちろん茶室には時計は置きませんし、太陽の光が差し込む窓も小さいと

ころが多いので、時間を正確に把握することはありません。そこには絶えず流れる無限の時間が存在するようなものです。そう考えると、お茶という文化は、西川先生がおっしゃっていた「途切れなく継続していく時間」であったり「実態的な土地と場所」に通じるものがあるのではないのでしょうか。そして茶道は私たちが昔から実践し、一応今日まで続いてきた文化ですから、観光創造を考える上で私たちにはそういうことをできる素地があるのではないかと思います。

回答：西川

まず、真板先生ありがとうございます。私が本日こんなお話をした1つのきっかけは、実は西山先生と竹富島にご一緒したりとか、あるいは、先日白川郷にも同行させていただいたり、観光学高等研究センターと連携している美瑛町に行ったりとかして、本当に本日最後にお示ししたような感覚を与えられたことにあります。特に竹富島の時間の流れ方は環境とともにゆったりと進んでいく、それで、自然と顔がほころんでしまうんです。体から、いろいろなものが抜け落ちて、芯まで軟らかくなってしまふような。美瑛に行ったら美瑛に行っただ、あの景観の美しさが、やはり農業という土地との密接な関わりの中から出来ている。これは、2月の公開講座の時にも申し上げましたが、美瑛町出身の学生が、確かに美瑛町は観光客にとっては丘のまちだけれど、私からすると谷のまちなんですよと言うんですね。そうだったのかと。あの景観は実は、農業をする人たちにとっては本当に生活の、営々と築き上げてきた生活の場所であり、そういう事実を踏まえた上で観光客は景観の美しさをおすそ分けしてもらいたいだろうと。僕らが失ってしまったかもしれない豊かな時間や関係性、土地との結びつきをおすそ分けさせてもらう。僕らは disembed され続けているのかもしれない、グローバル化の波に洗われているのかもしれないけれど、カッコ付きで地域や土地の中に（再）埋め込み的な体験をさせてもらった気がし

たことが本日のお話のきっかけになっております。

平さんのおっしゃったことは、まさにそんな感じがします。僕は、茶道については何も知らない無粋な人間ですが、おそらく、知っているだけのことで言うと、千利休は余計なものを削ぎ落として、核になっているものだけを残して、そこで流れている時間と、他者との関係、その狭い空間の中での他者との関係に預けるということだったのかなと、今のお話を伺って感じました。

コメント：小林（英）

すごく面白いお話をありがとうございました。先ほどの清水先生のお話とも繋がる場所が多いと感じましたが、時刻表を事例に取られるのは、非常にわかりやすかったです。要は予定調和の中に、本当の旅の面白さはないのではないかと、改めて感じました。先ほどの清水先生の話にもつながりますが、我々は決められた時間というものを正しいと思い込んでいますが、人の感覚によって時間の流れは違うわけですから、私なりの勝手な解釈をすると、やっぱりスケジュール旅行から自分の感覚時間を楽しむ旅に戻ろうと、そういう話に繋がるのかなと思いました。旅行会社は、予定調和ということを中心としたツアー商品を作ってきた、私も 30 数年やってきましたが、そこではいろんなものを削ぎ落としてしまって、一番大事な意味まで削ぎ落としたのかなと感じます。つまり、偶然起こることが一番面白いことなのに、偶然起こることを避けてしまって、偶然起こる楽しさを楽しむというチャンスまで取ってしまった。それが、先ほどの時刻表に非常に現れていて、観念的に時間と場所を捉えてしまったことに問題があるなど。これは先ほどの清水先生のお話にも関わりますが、見ることに重きを置きすぎた近代観光の反省になるのではないかと思います。つまり、時の流れというのは一定ではなくて、本来そういうものをもっと楽しむのが観光であったはずなのに、見るという瞬間の意味にしか問わなくなってしまうところがある。そこに人間性や場所性までを

も、排除してしまったということがあるのかなと思って、お二人の話を非常に、面白く聞きました。特に、清水先生のお話では、自己変容というのがキーワードかなと思っていて、自己変容を起こすことが 1 つの大きな目的だとすれば、自己変容はどうして起こせるのかということは、西川先生のお話をもとにすれば、予定調和の中では自己変容は起こらないということだし、清水先生に倣えばそれがどういう仕掛けの中にあるのか、茂木健一郎さんの本など読んでみると、脳は 0.2 秒で変わると。シナプスが、繋ぎを変えることで人間は変わるんだと。実はその体験というのは、時間の長さではなくて、自分が深い気づきを起こすとき、それが 0.2 秒だと。そうすると、時間というのは長ければいいということではなく、時間の質を考えるべきなんだということを含めて、お二人のお話は非常に面白かったです。ありがとうございました。

コメント：西山

最初に清水先生のお話を伺ったとき、一瞬ちょっと難しいという印象があったかもしれません。しかしこうして連続して、理論系の先生方のいろいろな解釈や他の研究に対する理解というものを述べていただいて、どんどん話がわかってくるようになりました。竹富島の話も頂きましたが、私などは、逆に何も考えずにがむしゃらにただやってきただけですが、それを後でこのように意味づけしていただくというような関係がもし、もっと建設的に、創造的に進んでいけば、こんな幸せな環境で研究できることはないと感じました。どうもありがとうございました。

【引用文献】

Berg, Maxine

2007 *Luxury and Pleasure in Eighteenth-Century Britain*, London: Oxford University Press.

Bermingham, Ann

2010 The Picturesque and Ready-to-Wear Femininity. In S. Copley and P. Garside (eds.) *The Politics of the Picturesque*, London: Cambridge University Press.

de Grazia, Sebastian

1962 *Of Time, Work, and Leisure*, New York: Kraus International Publications.

ギデنز, A.

1993 『近代とはいかなる時代か—モダニティの帰結—』松尾精文・小幡正敏訳, 東京: 而立書房。

Marrus, Michael R.

1974 *The Emergence of Leisure*, London: Joanna Cotler Books.

観光と近代—イギリスを例にとって ～disembedding から (re-embedding) へ

2013年11月24日
西川 克之

1

本日の私の論述の前提: 観光 tourism = 近代的事象

～観光者であるということは、「近代的」であるということの決定的な特性のひとつ(アーリ『場所を消費する』)

→ 観光をよすがとして近代とは何かを考える
あるいは
観光の近代性を振り返って観光創造の可能性を探ってみる

○アンソニー・ギデنز 『近代とはいかなる時代か』 (Anthony Giddens, *The Consequences of Modernity*)における議論

・近代の特質としての時間と空間の分離 separation of time and space

近代以前:

大多数の人びとにとって、日々の生活の基盤をなす時間の測定は、つねに時間を場所に結びつけるかたちでおこなわれていた・・・他の社会空間的標識にまったく言及せずに、誰も一日の時間の経過を口にすることはできなかった

2

From Michael R. Marrus, *The Emergence of Leisure*

聖月曜日(労働者の中には週の初めを勝手に休日と決めて飲んで過ごすものもいた)に加えて、さまざまな非労働的活動—歌ったり、飲んだり、踊ったり、うわさ話したり—が一日の労働に当たり前のように入っていた…こうした活動は伝統的な共同社会の生活の一部であり、それ以外では意味をなさなかった…伝統的な社会はキリスト教的であり、田舎風であり、ヒエラルキー的であり、慣習によって支配されていた

From Sebastian de Grazia, *Of Time, Work, and Leisure*

彼らが知っていた生活は時間にうるさくなく、無駄話が多いものだった。靴屋は好きな時に起きて好きな時に働き始めた。何か面白そうなことが起これば、作業の手を休めて見に出かけた。飲み屋でうわさ話に花を咲かせるのに時間を費やし過ぎた日があれば、翌日は夜中まで頑張って遅れを取り戻した…靴屋には作ったり修理したりすべき靴があった。飲み屋でカードをしているときは靴を作っていなかったが、いずれにせよ彼は「自由な時間」を過ごしてはいなかった。近代的な意味での時間に従って生きてはいなかった。彼には作るべき靴があり、飲むべきビールがあり、遊ぶべきカードがあったが、そのどれをも彼は「労働と余暇」という言葉を必要とせず行っていた。

3

それに対して、[工場で]10時間労働に従事する労働者が手にしたのが「自由時間」、すなわち、以前は手にしたことがなかった「無為の集中」であった。労働時間と自由時間はこうして分けられ、それが現代まで続くことになった。

From *The Consequences of Modernity*

機械で動く時計の発明と、事実上すべての人びとへの機械時計の普及は、時間の空間からの分離にとって重要な意味をもつ出来事であった。時計は、「空白な」時間という均一の次元を表示し、その結果…時間を定量化していった。

・空白な空間empty spaceの成立

～ 場所placeから空間spaceが遊離する

近代以前:

場所と空間は一致していた 具体的な社会的活動が生起する場所と理念的なイメージとしての空間はほぼ同義であった

4

近代化のはじまり:

不在の他者 absent others—対面的相互関係の環境から位置的に遠いところにある他者—との関係の促進によって、空間が場所から切り裂かれる

→ 地域的な場所 locale に、遠く離れたところでの諸関係が影響を与え始める

遠く離れた地域の発見による地域的場所の相対化と、空間的単位の置換可能性

探検家・冒険家の情報をもとに、平板化・抽象化された世界地図が作成される

→ 特定の場所や地域の社会関係や物語りを脱色した空間の確立

5

脱埋め込み disembedding:

社会関係が、場所性を有した相互関係のコンテキストから引き離され、時空間の非定型的な広がりを通して再構造化されること

By disembedding I mean the "lifting out" of social relations from local contexts of interaction and their restructuring across indefinite spans of time-space.

遠く離れた地域の発見による地域的場所の相対化と、空間的単位の置換可能性

探検家・冒険家の情報をもとに、平板化・抽象化された世界地図が作成される

→ 特定の場所や地域の社会関係や物語りを脱色した空間の確立

6

○商品化した文化の流通と趣味や価値判断の社会的共有

18世紀以降の近代化した市民社会

＝場所の束縛から解放され、平準化された時間の尺度が援用された無限定に拡大する空間において展開する市場を舞台とした、自由で平等な立場での交換によって資本を蓄積していく市民が主役

彼らはやがて公共的な言論空間(市民的公共圏 bourgeois public sphere)を形成していく

その舞台:

コーヒーハウス / *Spectator* のような定期刊行物

Spectator: リチャード・スティール (1672-1729) とジョセフ・アディソン(1672-1719)によって1711年3月 から1712年12月まで発行された雑誌。1714年アディソンにより復刊

Spectator (=観察者)という著者が、がロンドンの文化や流行・風俗を観察して、礼儀作法、道徳、文学などに関わるエッセイを発表する。

芸術や文化あるいは道徳に関する公衆の議論を通して、「普遍的」な判断基準や価値基準が形成されるようになる

7

'Of the Manners of the Age, as Refined by Luxury' (1711)

・・・豊かさ(riches)が作法(manners)に与える影響以上に普遍的なものがあるだろうか?・・・あらゆる階層の人びとが支出を増加させ、その度合いにおいて上流の人びとと競い合うまでになっている。・・・そうした人びとは、服装、調度品、家、家具、娯楽などにおいて特徴を打ち出したいと強く願っている。・・・[こうしたことは]・・・豊かさの一般的な影響・・・[によって]・・・洗練された作法が伝わる。・・・[中流層の家庭では]その食卓は、100年前の大貿易商のそれと同じような食事が並び、住居も立派で装飾がほどこされ、家具は前の時代から見違えるほど改善した。服装の点では、飾り小物でめかし込んだ若い男女を見ればよい。・・・こうした人の娯楽について見てみれば、芝居を見に行ったり、知り合いを訪ねてはお茶を飲んだりカードに興じたりしている。

社会的に共有された趣味の具体例:ピクチャレスク・ツアー

William Gilpin (1724-1804) が1782年に『ワイ川および南ウェールズの地域に関する観察:主にピクチャレスク的美との関連から』を出版したことが契機

～18世紀の終わりには、5版を重ねるほどに広く読まれ、英国におけるピクチャレスク・ツアー流行に火をつける

8

From Ann Bermingham, "The Picturesque and Ready-to-Wear Femininity" in *The Politics of the Picturesque* (1994)

イギリスのありきたりな自然風景に美を与えることによって、ピクチャレスクの理念は多数の国民に美的判断というものは特権的な少数の才能なのではなく、誰にでも身につけることができ、ほとんど何にでも適用できるのだという認識を与えたのだった。ピクチャレスク理念の最も重要で確固たる影響は、中流の人びとに生活を美的に見る態度を促したことだ。というのも、ピクチャレスク理念は、人びとに自然を一枚の絵画であるかのように見ることを教えて、特別な景観や絵画に対してだけでなく、慣れ親しんだ場面や物—都市景観、建築物、庭園、動物、家具、陶器、織物、ドレス—に対しても向けるよう訓練された目利きの視線を習慣づけたのだから。

○脱埋め込みと価値の社会的共有がもたらすもの

伝統的な共同体の束縛からの解放

効率的な生産や迅速な情報とモノの流通を可能とするように時間と空間を再構成restructureし、あるいは人を再配置relocateする

一方でまた、具体的な土地や場所に根差した安定した社会関係から切り離され、たえず再構成され続けなければならない流動化した時空間に身を置くこと

9

○観光創造の可能性(のひとつ)?

観光を契機として・・・

土地や場所と実体的にかかわり、それに根差して生きられた社会関係を経験

計測化され計量化されるのではない、途切れなく継続していく時間に身を置く

そのような経験や時間を通して、authentic = (re-embedded) な記憶や物語りを刻む ～ 他者との関係や場所にハグされた感覚を残して

グローバル化した社会において透徹していく近代性を揺るがすようなノイズとして

◆研究発表 9

観光創造の他者論～「他者との出会い」の観点から

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

山田義裕

現在の研究領域について

今日は、初回というか第 0 回の顔合わせで、何をお話しようかと思案しておりました。最初に思いついたのは、清水先生たちと行っている共同研究のさわりをお話しすることですが、よくよく考えて、観光創造専攻が設置された年に最初の概論の講義で話した内容をご紹介させていただこうと思い直しました。この概論の講義は、少しずつ形を変えて今でも続けています。私にとっての初めての観光関連の講義で、非常にナイーブな議論なのですけれど、名刺代わりというのであれば、それを紹介するのが一番よいのかなと考えた次第です。

私は石森先生と出会うまでは、認知科学分野で言語学やコミュニケーション論の研究をしていました。認知科学というのは 1950 年代半ばに、人間精神の研究のパラダイムシフトの結果誕生した学説です。それを引っ張ってきた研究者の一人に、ノーム・チョムスキーという言語学者がいます。私の研究フィールドは、チョムスキーが築き上げた生成文法という言語理論でした。人間の本質 (human nature) を、言語を通して分析する、そういう研究を続けていました。といっても漠然としていますので、もう少し具体的にお話しします。認知科学の重要な仮説の 1 つに、精神のモジュール観というものがあります。私たちの精神は単一の汎用システムではなくて、いくつかのサブシステム、それぞれ独立した機能と構造をもったサブシステムが相互に関係するモジュール型システムであるという仮説です。そのサブシステムの 1 つに「心の理論」、すなわち「人の心を読む能力」があると仮定している研究者がいます。私もその一人です。「人の心を読む能力」が精神のサブシステ

ムの 1 つとして存在すると仮定して、その能力と言語機能の相互関係を研究していました。それが今から 7, 8 年前の状況です。そんな中で石森先生と出会い、ツーリズム研究を始めることを決意しました。「山田さん、観光言語学というのをやったら!？」という石森先生の言葉に驚愕、それはいったいなんだろう (笑)。正直、大変なところに来てしまったなと思いました。

観光創造専攻の所属に変わった後は、言語研究からはひとまず少し距離を置いています。最近行っている研究は、1 つは「ポスト虚構の時代のリアリティ」に関するものです。社会学者の見田宗介が、ある論文で戦後日本社会の人々のメンタリティの移り変わりについて論じていますが、その中で見田さんは、「現実」の反対語を用いて、その時代の精神性を明らかにするという分析手法を取っています。見田さんは、戦後すぐの時代においては、現実の対概念は「理想」であった。高度経済成長期は「夢」、そしてその後に高度経済成長が終わって 1975 年くらいからは、人々のリアリティは「虚構」へと変化したと仮定しています。見田さんはこの論文を 1990 年に書いているのですが、その後日本人のメンタリティはどう変化したのかという問題を、見田さんの弟子筋にあたる人たちが考察しています。何人かの研究者が、いくつか異なる概念で 1990 年以降の時代を特徴づけようとしています。私はとりあえず「ポスト虚構の時代」とニュートラルな名前と呼ぶことにしています。現在の私の研究テーマの 1 つは、この「ポスト虚構の時代」のリアリティの在り方について、主に若い人たちのコミュニケーション様式の変容を通じて考察することです。

もう 1 つ、ごく最近の研究として、清水先生が

研究代表者として進めている「拡張現実の時代における<場所>と<他者>に関する領域横断的研究」があります。これを発展させる目的で、来年度の科研費を何人かの先生と共同で、「拡張現実の時代のツーリズムの領域横断的研究」という研究課題で申請しました。なぜこのような拡張現実とツーリズムを結びつけて研究するのか。申請書の一部をご覧くださいながら、ご説明したいと思います。

申請者は、ネット上でのコミュニケーションや創作活動が若者のリアリティのあり方にどのように影響を与えているのかという問題意識のもと、「メディアの若者言説に対する批判的メタファー分析」という研究課題で科学研究費補助金（平成 23～25 年、基盤研究(C)）を受けて研究を続けている。若者の言語コミュニケーション研究を進める中で、彼らのネット空間に対する認識が、「閉じられた仮想空間」という仮想現実（Virtual Reality）から「ネット空間の現実空間への浸透」という拡張現実（Augmented Reality）的なものへと変化していることに気がついた。ネット空間でのコミュニケーションや創作活動が仮想現実という閉じられた仮想空間に留まらず、現実空間へと浸透し始めたということは、これらの事象についての研究は、否応なく人の物理的移動と身体的交流を対象とするツーリズム研究の色彩を帯びてくることになる。すなわち、観光学と一見関係が薄いように見えていたネット空間のコミュニケーションや創作活動が、ツーリズム研究の新たな射程に入ってきたのである。申請者はこういった着眼点から、現在の若者のリアリティの在り方についてのメディア・コミュニケーション研究を、彼らの<場所>のリアリティの変容に焦点を当てたツーリズム研究へと進化させようと考えた。これが本研究の着想である。

この研究課題には、たとえば山村先生が発掘した聖地巡礼の研究も当然入ってきます。今まで私

たちは、オタクに代表される若者たちは、仮想現実というファンタジー・ワールドに閉じこもって、ネット空間の中でのみ活動していると分析していました。それが 1990 年代の状況です。それがなぜか今、彼らが仮想空間から現実空間に降り立つことで、彼らの活動ががぜんツーリズムの色彩を帯び始めているのです。この変化が何時どのように始まったのか、これは非常に面白い研究になるのではないかと考えています。

旅／観光の意味を「他者との出会い」から捉える ～「支配の欲求」と「出会いの欲求」

今述べた 2 つが、現在の私の研究テーマです。さて、話題を観光創造専攻の初年度の概論へと戻します。8 年前に石森先生と出会い、私はどんな観光研究に取り組むべきかを悩んでいた時に、「他者との出会い」というキーワードを思いつきました。観光創造の他者論こそ私のテーマだと「閃いた」のです。思いついたきっかけは、神崎宣武の『文明としてのツーリズム』を読んだことです。CATS と観光創造専攻の立ち上げの際に、私なりに観光分野の研究について少し勉強をしたのですが、神崎さんの本に「観光の旅とは、異民族、異文化との出会いの中で、新しい自分を見出すことである」とありました。「これだ！」と直感し、私は、「他者との出会い」でいこうと決意したわけです。それ以来、他者との出会いというテーマが、私の観光創造の研究の柱の 1 つとなっています。

この後の残りの時間で、概論の講義で扱っている次の 2 つ課題を取り上げたいと思います。1 つは、「人間にとって旅／観光とは何か」という問題を「他者との出会い」を切り口に考えること。そしてもう 1 つは、「他者との出会い」をキーコンセプトとする観光創造研究が、現代社会が抱える問題に対して何ができるかという課題です。現代社会を「巨大な転回の局面」と見田さんは分析していますが、現代社会における social innovation に関するものが 2 つ目の課題です。

まず 1 つ目の課題「人間にとって旅／観光とは

何か」について考えてみましょう。私は、この旅の原的問題を考察するのに、「出会い」の概念を鍛えることでアプローチしようと試みました。先ほど見田さんが戦後社会の精神性を分析するとき、「現実」の反意語を使って人々のリアリティを捉えようとしたとお話ししました。私はそれを応用して、「出会い」の反意語を考えることでこの概念を鍛えようと試みたのです。私は、「出会い」に対して次の3つ概念を対置させました。まずは「孤独」、2つ目は「出会いそこね」、そして最後は「支配」を出会いと対置させました。最後の、なぜ支配が出会いの対概念になるのかは分かりにくいと思いますので、後ほど詳しくご説明致します。概論の講義では主に3つ目の「支配」と対置される「出会い」に注目しているのですが、最初の2つに関しても、観光創造研究を進める上で非常に重要であると考えています。この三種類の対概念について、1つずつ、ごく簡単に触れたいと思います。

まず1つ目の「孤独と対置される出会い」について考えてみましょう。ネット空間が肥大化したゼロ年代以降のコミュニケーション状況を考える際には、この孤独と対比される出会いに最も注目すべきでしょう。北田暁大という社会学者は、「つながりの社会性」という概念で日本の現代社会を捉えています。つまり、人とつながるということに過度な期待を抱くのが現代社会である、というのが北田さんの基本的考えです。そういう中で、「出会い」という言葉がどういうふうに使われるかというと、例えば「出会い系〇〇」という風俗的な文脈、例えば最近では出会い喫茶が話題となっていますね。この出会い系の関係の特徴として、社会学者の富田英典さんが面白いことを言っています。つまり、知らない人と親密になるというのが最近の出会い系の人間関係の特徴だと分析しているのです。対面の人間関係では普通あり得ない「匿名なのに親密である」という関係がネット社会では成り立つ。代表的なものにネット心中がありますね。ネットで自殺志願者を募って、見知らぬ人

たちが一緒に集団自殺する。ゼロ年代以降の日本社会を象徴する社会現象です。こういう親密性と匿名性が一緒になった他者関係を、富田さんは intimate stranger という卓抜な表現で特徴づけています。

続いて、出会いそこねを乗り越える出会い。これはポストコロニアリズム研究などでよく用いられる出会いの概念です。関連する重要なコンセプトとして、たとえばテッサ・モリス＝スズキの「連累」(implication) という概念があります。本橋哲也さんは連累について、次のように解説しています。「今の自分が過去や未来と、あるいは他者が生きていた時間と無関係には存在しえない」、この認識が連累です。たとえば、植民地主義時代の宗主国と植民地の間での人間関係をどう捉え直すのか、こういうことを考える際に非常に重要な認識です。日本の東アジアへの侵略に関して、自分が直接関係していなかったから責任を感じる必要はないと考える人がおります。それとは逆に、直接は関係しなかったけど、その不正義の結果生まれた今の社会で生きていると考える人もいます。後者の認識を、モリス＝スズキさんや本橋さんは連累という概念で説明しています。本橋さんは、『ポストコロニアリズム』という本の中で、「出会いそこね」と「出会い」を対比して、次のように述べています。

植民地主義と戦争暴力による被害と加害の溝、それを埋めるにはどのようにして可能なのだろうか。そもそもこの圧倒的な力の差による溝を「埋める」ことなどできるのか。敵と味方に、支配者と被支配者に、生者と死者に引き裂かれた者たちが、つまり、いったん同じ人間として出会いそこねてしまった者たちが、その後の何十年、あるいは何百年にわたる暴力と搾取の日々を経て、ふたたび人間として出会う道はあるのか。(本橋 2005)

これが「出会いそこねを乗り越える出会い」と

いうコンセプトです。

では、「支配と対置される出会い」とは何か。私はこれに着目してツーリズム研究を始めました。この話に直接入る前に、神崎さんの旅の類型についての考えを確認しておきましょう。『文明としてのツーリズム』の中で神崎さんは、旅をいくつかのタイプに分け、その中で「食わんがための旅」と「楽しまんがための旅」に注目して議論しています。「食わんがための旅」と「楽しまんがための旅」の動機は何なのでしょう。なぜ人は旅をするのかを考えると、旅とはまさに生きること、Life is a Journey というメタファーがありますけれど、旅の動機は生への衝動からくるのだと仮定しましょう。では、人間行動の原初的な動機は何か。エーリッヒ・フロムは、生理的欲求と精神的欲求の 2 つがあると言っています。旅の根源的な動機も、この 2 つの欲求に対応しているのではないかと私は考えました。原初的な旅の動機は、飢え、渇きという生理的欲求を満たすもの。観光の旅は、外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすため、ととりあえず仮定することができます。しかし、外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすためであれば、なにも旅に出なくても日常生活の中で他者は存在し、私たちは外界と関係を結んでいる。なのに、人は何故わざわざ旅に出るのでしょうか。

観光の旅の動機について、「支配」と「出会い」を対概念として考えてみましょう。見田さんが真木悠介というペンネームで書いている『気流の鳴る音』という本がありますが、その中でほんの数ページですが、「他者と関係するときに抱く欲求の 2 つの相」について議論しています。1 つは他者を支配する欲求。この欲求においては、他者は手段もしくは障害であり、他者が固有の意思をもつ主体として存在することは、状況のやむをえぬ真実として承認されるにすぎない。この欲求は、いわば他者を自己に同化する欲求ですね。これは私たちを「支配－従属」という安定してはいるが固定化した他者関係へと導きます。もう 1 つが、他者

との出会いへの欲求。これは、自らを絶えず他者へと異化することを欲するものです。自らを他者へと異化することで、当たり前だと思っていた世界で自明だと思っていた自分の姿が全く違って見えてきます。観光の旅というのは、まさにこの「出会いの欲求」に駆動された人間の行動だと私は考えています。観光の旅とは、「他者と出会う」ことで自己を世界に位置づけ直す人間行動の様式だというのが、今の私のとりあえずの仮説です。

信頼の構築と深化による課題解決

～ソーシャル・イノベーションとしての観光創造の可能性

さて次に、出会いの研究としての観光創造が現代社会の諸問題の解決に向けて何ができるかという問題に移りましょう。たった今申し上げましたように、他者関係構築の 2 つのオリエンテーションには、支配の欲求に基づくものと出会いの欲求に基づくものという 2 つのタイプがあります。社会問題解決のアプローチもこの 2 つに対応するタイプがあると考えられます。管理や規律の強化、システムの整備・利便性の追求により、社会問題を解決するというのが 1 つですね。もう 1 つは、出会いの欲求に方向づけられた関係構築によって問題を解決するアプローチです。自由や人権の尊重、他者への信頼、自立的共存というものを頼りに社会問題を解決するアプローチです。国際紛争、安全保障、環境問題、教育問題といった、さまざまな問題が現代社会には山積しているわけですが、いずれの問題にもこの 2 つのアプローチが可能です。たとえば国際紛争の場合、1 つには国際機関による武力介入によって解決する方法があります。それとは逆に、たとえばペシャワール会などがそうですが、自立を支援することで解決するアプローチをとることもできます。安全保障に関しては、たとえば米国の 9.11 のテロ事件の直後に、1 ヶ月程で当局による盗聴や電子メールをのぞき見を許すような法律（米国愛国者法）が成立・施行されました。セキュリティを強化しつつ安全

を保障するアプローチが採用され、これにより市民的自由の尊重が阻害されるというデメリットがあるわけですが、アメリカ国民自身はこれを支持しました。この2つのアプローチがあるときに、私たちの社会はどうしてもシステムの整備・充実に問題解決を委ねてしまうという傾向があります。それは支配の欲求に基づく問題解決です。そうではなくて、出会いの欲求に駆動されるような問題解決のあり方、つまり人への信頼の構築・深化を活用した問題解決が必要ではないかと私は考えます。現状ではアンバランスになっている問題解決の方策を、出会いの欲求の力でバランスを保つことが重要ではないかと考えています。

ただ、こうした「出会いの欲求」や「他者への希望」を基盤とした社会構想というのは理論化や体系化は難しい。「出会いの欲求」や「他者への希望」を基盤とした社会構想は、体系化を試みた途端にシステム整備のアプローチに回収される罠に陥りがちです。まずは、個々の実践や試行錯誤のプロセスを見つめることが重要なのではないかと思います。概論の授業では、実践例として、ペシワール会の中村哲さんの活動や竹富島や由布院のまちづくりと観光を事例として取り上げて議論してきました。

人間関係的な新たな幸福を求めて

もう1つ、三年程前の概論の授業から、観光創造研究にとって「幸福」とは何かという課題を取り上げています。他者との出会いが私たちにもたらす幸福とは何か。ピーター・メンツェルさんという人が『地球家族』という写真集を出しています。彼は世界30カ国をまわって、家の中の家財をすべて外に出してくださいとお願いし、これらを写真に収めました。ボタンは非常に幸福度の高い国として知られていますが、家財道具はスライドでご覧のとおりほんのわずかです。日本はどうか。日本の写真には私も驚きましたが、さまざまな小物がたくさんあって、よくぞここまで詰め込んだなと。ここまで多いのは、世界でも珍しいで

すね。戦後の日本社会の幸福を考えると、このモノの多さは象徴的です。戦後日本の幸福について、2005年8月16日付けの朝日新聞の特集に見田宗介さんと写真家の藤原新也さんが寄稿していますが、戦後の幸福は物質的豊かさの追求であったというのがお二人の共通認識です。見田さんは「消費することの幸せ」、藤原さんは「モノに囲まれる幸せ」と表現しています。こうした幸せは、基本的に経済システムの整備や充実によってもたらされるものです。それに対して、これからの幸福とは精神的豊かさの追求である、とお二人は口をそろえて言っています。人間関係の幸福、あるいは生きることを楽しむ、という方向で幸福の追求を行う必要がある。経済システムの整備や充実というのは、いわば社会学分野の研究テーマですよ。近代の社会学が行ってきた研究です。では、「他者への希望」や「他者への信頼」をベースにして幸福を追求するのは、どの分野の研究か。私は、それは観光創造において他にはないと考えています。

最後に、大阪大学総長を務められた哲学者の鷲田清一さんの「幸福とは何か」についてのお話を紹介したいと思います。これは、実は大阪大学の卒業式の式辞です。これを紹介して、本日の私の話を締めくくりたいと思います。

幸福とは何か？この問いは、逆説的にも、失ったものの大きさに比例して深まっていきます。あるいは、他者が失ったものへの想像力の密度に比例して、深まっていきます。そういう意味で、みなさんにいつも持ち合わせてほしいのは、この＜他者への想像力＞です。明治期の終わり、1911年に大阪毎日新聞慈善団が発足した折り、当時の毎日新聞社長であった本山彦一さんが語ったこんな言葉を思い出します。「一本の指のうずきは、同時に、全身の苦痛である。社会の一隅に、生活に疲れ、病に苦しむ者の存することは、すなわち、社会全体の悩みでなければならない」と、本山さんは人びとに語りかけました。

＜他者への想像力＞とは、ふつう思いやりと言われますが、要するに他者を他者のほうから理解しようとすることです。その意味では、想像力とは、じぶんが抱いているイメージをさらに広げることではなく、じぶんをここではなく別の場所から見る力のことだと言うべきです。(鷲田 2011)

このように、他者の重要性ということを私は常々考えているのですが、現代社会において、他者問題というのはますます先鋭化しています。現代社会の他者問題とは、結局のところどういうことでしょうか。「他者を希求しながら他者を畏れる」というアンビバレントな気持ちが前景化しているのが現代の他者問題の特徴だと社会学者の大澤真幸さんは言うわけですが、こういう他者問題にどう対処するのかについて、ツーリズム研究としても今後考えていく必要があると思います。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（英）

山田先生ありがとうございます。なかなか難しい問題で、簡単にコメントできるようなことではないと思いますが、私は、人の欲求と旅行の動機を調べたことがあります。その時に、人間が旅にもっている欲求と、旅行会社が提供している旅はすごく乖離しているということが分かりました。なぜ乖離するかというと、旅行商品で満たそうとする欲求は、ほとんど個人に還元される話なのです。ところが海外旅行に何度も出かけている旅行者の動機を調べると、他者との関係、社会との繋がりのようなものをものすごく求めている。旅行商品では、そのような欲求にほとんど配慮されていない。旅行者本人が美しいものを見て感動するとか癒されるとか、個人的に完結する思いだけで、そこに終わってしまっている。そういう意味で、先生の他者と出会うという視点から観光を考えるというお話は、ものすごく面白いなと思って聞い

ていました。

たとえば、旅行商品でそういう他者との関係を意識しているなと思えたのは、調べた中ではクラブ・ツーリズムしかありませんでした。この場合の他者は、仲間や他国の同好の士ですが。では、それをどう旅行企画に落とし込むのかというのはまた難しい問題なのですが、それを落とし込まないと、本当の滞在型旅行にはならないと思っています。日本人は滞在型が苦手だとか、出来ないという議論をしてしまいがちですが、そうではなくて、他者との関係を繋ぐという視点が無い旅行商品だから、長く滞在ができない。唯一、1ヶ月1都市滞在という旅行商品を売り出して成功している例をみると、いかに地域に馴染むか、地域とどういう人的関係を作れるかということにすごく力を入れていて、これで、はじめて1箇所に1ヶ月滞在できる。この商品は、今年もすごく売れています。その事例からも、旅行における他者との関係をどうするかはものすごく大事で、これはこれまでの観光産業に欠けていた部分だと思っています。今日の山田先生のお話を聞いて、改めてその大切さに気付かされた気がしています。

もう1つ面白かったのは、ポスト虚構の時代では何がリアリティなのか。この仮説について、聞き逃しがあつたのかもしれませんが、少なくとも今、先生がどんな仮説を持っているのかということを知りたい。もう1つは、ゲームの研究の中で感じたのですが、リアリティのとらえ方が変わってきている。例えば我々の少年時代はテレビが出た時代ですね、テレビというものが、空間を超えて、現場を場所と切り離してお茶の間に持ってきたわけです。それが、ゲームが出てきて、今の若者は子どもころからこれに接する時代になり、バーチャルとリアリティの境が、我々のように明確に分かれているのではなく、我々がテレビによって空間を超えたように、バーチャルとリアリティの境を超えたような感覚で捉えているのかなと思うんです。捉え方が違うということを前提に考えていかないとなかなか理解が難しい。つまり、

バーチャルの中にリアリティを入れ込むことを楽しんでいる、融合させる面白さに気づいているんだなというのが、研究を通して思ったことです。ここでも、リアリティを観念的に考えないで、若者がどのように身体感覚として捉えているのか、を把握してみるのも面白いと思います。

そういうところを含めて、先生のやっておられる研究はとても面白いなと思いました。以前、NHKのヒューマンという特集でやっていましたが、なぜホモ・サピエンスがネアンデルタール人に勝ったのか。1対1では体力的に負けるではないか。そこで、ホモ・サピエンスは集団化する、繋がることに、つまり頭脳を集団化したことによって勝ったのだという仮説が立てられているのです。そういう意味で、ホモ・サピエンスは、もともと繋がることで生き延びてきたのだから、繋がるということを前提にものを考えないと、そこは避けて通れない。つまり、我々が人間とは何かと考えるときに、繋がるものであるとすると、先生の研究されている領域は、本当に人間そのものは何かということに至る視点だなと思って聞いていました。

いずれにしても、観光、旅行が果たす役割を、個人で完結する話からもっと広い社会との関係の中で見ていくという話であり、極めて大事な視点を指摘されているわけで、今後の研究がとても楽しみです。

回答：山田

コメントありがとうございます。ポスト虚構の時代のリアリティに関して、私がどんな仮説を持っているのかというご質問ですが、実はその質問をお待ちしておりました。ポスト虚構の時代が進む中で、虚構のあり方が変わっているということを、何人かの研究者や評論家が指摘しています。キャッチコピー的に言うと、虚構の在り方が「仮想現実」(virtual reality)から「拡張現実」(augmented reality)へと変化しているのです。ポスト虚構の時代に入り、インターネットが急速に普及した結果、若者がバーチャル・リアリティ

の中に閉じこもるといようなことが社会現象として広まります。インターネットのアニメやゲームのサイトにはまり、その前の時代でしたらマンガもそうですね、独自のファンタジーの世界に閉じこもり、バーチャル・ワールドのみで自足するというメンタリティを持った人たちが一時期増えたわけです。しかし、ゼロ年代の終わり頃から、この状況は次第に変化しつつあります。ごく最近の若い人たちのリアリティを一言で述べると、拡張現実的なリアリティです。バーチャルな世界でさまざまな創作活動を行いながら、それを現実世界に結びつけずにはいられないというリアリティの在り方が、ごく最近の若者に特徴的に観察されています。

コメンテーター2：麻生

山田先生ありがとうございます。今回、共同研究会に参加させていただいて、昨日から議論されている体系化の資料をみると、私自身は観光デザイン研究のところにどっぷり浸かっており、問題ありきでものを考えてしまっているところがあります。今回、清水先生、西川先生、山田先生のお話を伺ったときに、言い方が適切かわかりませんが、羽をもらったというか、普遍的な時間であったり場所であったり、出会いという概念で考えることで、デザインの枠がふわっと広がるような、もっと出来ること、可能性があるのではないかと感じました。体系化の資料において、どの部分を中心において研究するのかというスタンスはあっても、行き来することが必要であると今回強く考えさせられました。

そういった中で、山田先生のお話された「出会い」と、自分の研究を結びつけたときに、実感することがあります。白川村で自分には何ができるのかということを今でも悩んでいます、よくここまで飽きずに研究を続けられるねと言う方も多くいらっしゃいます。その理由が、やっぱり白川村に出会い続けているからなのかなと感じました。研究対象として白川村で起こっている現象を捉え

るとか、分析すること以上に、そこで本当に色々な価値観考えをもった人達や、雰囲気に出会っているから続けられる、研究者と地域という関係以上のものがそこはあると強く感じています。その中で、可能性を具体的に感じたのは、「出会い損ねを乗り越える」という部分で、「いったん同じ人間として出会いそこねてしまった者たちが、ふたたび人間として出会う」というところです。観光の研究を考えたときに、ホストとゲストという関係や、地域と観光客という関係性で捉えると、おもてなしをよくしようとか、お互いのニーズをすりあわせましようとか、そういう話が大事になってくるけれど、最終の到達点は人間と人間の出会いなのではないかと気づかされました。そこにはウチとソトもなく、人間として関わっていくということが、本来の目指すべき場所なのではないかと思います。白川村ではおもてなしの向上が課題として取り上げられますが、過去と今の何が違うのかというと、そこに人間としての出会いがあるか否かであり、原点に立ち返ることが大事ではないかということを、山田先生のお話を伺っていて感じました。

コメント：西山

ありがとうございます。他にご質問がないようでしたら、少しだけ私の方から。

先ほど、山田先生がお作りになった対比表がありました。私が昨日お話しさせていただいた、エコツーリズムが 21 世紀のパラダイムという話ですが、これは客観的に起こっていることで、柵を作って遺産を守るのではなくて、遺産の価値に触れさせることで遺産を守っていくという考え方です。つまり、出会って愛したものを、惚れ込んだものを大勢の人が守るということ、そういう本当の出会いを、きちんとつくるのがエコツーリズムの理念であって、これが従来の観光のあり方、先ほど小林先生がおっしゃったようなあり方と決定的に違うのではないかと考えています。ただ、そこまでしか考えられていなかったのですが、この

ご説明が、まさに理論的というか、我々がなんとなくダメだと思っていた観光と、本当の観光の違いを説明してくださったのではないかと感じました。

回答：山田

麻生先生が先ほどおっしゃった、出会い続けるということはすごくいいことなんだと改めて思いました。出会って終わりではなく、出会って終わらず、という関係がその度に改変していく状況ですね。ホストとゲストの関係は、基本的には固定的な「支配の関係」ではなく「出会いの関係」です。ホスピタリティという語も、その原義はラテン語の hospes で、ホストとゲストの両方の意味をもっています。ホスピタリティの語源を辿ったときに、この「ホスト／ゲストの関係が入れ替わり」というのがすでにこの言葉に埋め込まれているというのは、ホスピタリティというのはまさに関係の可変性なのではないかと思わせる重要なポイントです。これは非常に重要なことであって、だからこそ人は出会い続けることができる、繰り返し出会うことができるのだと、麻生先生のコメントを伺って改めて思った次第です。

【引用文献】

本橋哲也

2005 『ポストコロニアリズム』東京：岩波書店。

鷺田清一

2011 「平成 23 年度大阪大学総長告辞」大阪大学ホームページ (Internet, 22th November 2013, http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/ja/guide/president/files/kokuji_h23.pdf)。

現在の研究の関心

0 言語学／コミュニケーション論

- ・Generative Grammar(生成文法)
- ・A Theory of Mind(心の理論)

1 ポスト虚構の時代のリアリティについての研究

2 拡張現実の時代のツーリズムの領域横断的研究

1

他者と出会う

～観光創造の他者論～

山田義裕
2013年11月24日

観光/旅とは往還を通じての他者との出会いである

観光の旅とは「異民族・異文化との出会い
の中で新しい自己を見いだす」ことである。

神崎宣武

4

他者と出会う

- 今日の発表の目的:
 - 1 「人間にとって旅/観光とは何か」という問題を「**他者との出会い**」を切り口に考える。
 - 2 「他者との出会い」をキーコンセプトとする観光創造研究が、現代社会(巨大な転回の局面 見田 2009:9)が抱える問題に対して何ができるか(**Social Innovation**)を考える。
- キーワード:
 - － 他者との出会い、支配の欲求vs.出会いの欲求、システムの充実vs.信頼の構築、コンヴィニアンスvs.コンヴィヴィアリティ、資源とコモンス、ペシャワール会、「仲間」から「みんな」へ、

「出会い」とは？

➤ 「孤独」と対置される「出会い」

＝他者と「つながる」ための出会い

cf. コミュニケーションの過剰--「繋がり社会性」（北田 2005）

➤ 「出会いそこね」と対置される「出会い」

＝「出会いそこね」をのり越える「真」の出会い

cf. ポストコロニアリズムの「連累」

（本橋 2005, モリス＝スズキ 2002）

➤ 「支配」と対置される「出会い」

＝ 自己変容の契機としての出会い

cf. 他者関係の二つの欲求の相（真木 2003）

6

他者とつながる契機としての「出会い」

この10～20年の「出会い系」ブーム

- ・テレクラなどの「電話風俗（宮台 2000）」（1985～）
- ・出会い系サイト（1995～）
- ・出会い喫茶（2000～）

「出会い系」の関係性の特徴：

匿名性と親密性（富田英典の“intimate stranger”）

時代背景：

共同体（地域・家族）の空洞化→個人の砂粒化

社会の「学校化」→若者の「第四空間」への流出（宮台 2002）

情報化・消費化→コミュニケーション形態の変容

「出会いそこね」を乗り越える「出会い」

「連累」(implication)というコンセプト

- ・「過去との直接的・間接的関連の存在と、(法律用語で言うところの)「事後共犯 (an accessory after the fact)」の現実を認知する」こと(モリス＝スズキ 2002: 56)
- ・「今の自分が過去や未来と、あるいは他者が生きていた時間と無関係には存在しえない」(本橋 2005: v-vi)という意識

例: 日本の侵略の歴史に対する認識

1. 直接関与していないのだから責任は感じる必要なし
2. 直接関与しなかったが、その不正義の結果生まれた社会で生きている

「植民地主義と戦争暴力による被害と加害の溝、それを埋めることはどのようにして可能なのだろうか。そもそもこの圧倒的な力の差による溝を「埋める」ことなどできるのか。敵と味方に、支配者と被支配者に、生者と死者に引き裂かれた者たちが、つまり、いったん同じ人間として出会いそこねてしまった者たちが、その後の何十年、あるいは何百年にわたる暴力と搾取の年月を経て、ふたたび人間として出会う道はあるのか。」(本橋 2005: iii-iv)

8

「支配」と対置される「出会い」とは？

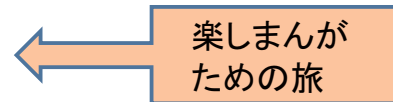
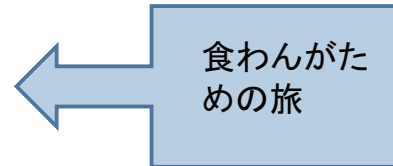
旅とは？その形態は？

旅とは何か？

古代から、どの社会・文化でも見られる人間行動の一様式である。

旅の形態 神崎(2005:8-9)

- a. 狩猟・採集の旅
- b. 行商・交易などの旅
- c. 祈祷・遊芸などの旅
- d. 零落・厭世などの旅(漂泊の旅)
- e. 巡察・赴任などの旅(公務の旅)
- f. 修業・布教などの旅(悟道の旅)
- g. 登拝・巡礼などの旅(信仰の旅)
- h. 侵略・征圧などの旅(軍事の旅)
- i. 修学・留学(研修の旅)
- j. 遊山・観光の旅



10

「何故人は旅をするのか」に対する予備的考察

ガイドライン

- ・旅とはまさに「生」きること(Life is a Journey)
- ・旅の動機は生への衝動からくる

人間行動の第一の動機 (フロム 1951: 24-25)

- ・生理的欲求(飢え・渴き・睡眠)
 - 満たされない場合は肉体的「死」
- ・精神的欲求(外界と関係を結ぶ欲求、精神的孤独を避ける欲求)
 - 満たされない場合は精神的「破滅」

旅のという人間行動の根源的動機

- ・ 原初的旅の根源的動機: 飢え・渴きという生理的欲求を満たすため
- ・ 観光の旅の根源的動機: 外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすため

私たちは何故「他者」を必要とするか？

「他者」が担う二つの決定的役割

➤「鏡」としての他者：

私たちの自己認識には「他者」が鏡としての重要な機能をもつ
→ 「他者の他者」としての自己

➤「目」としての他者：

私たちは無意識のうちに「他者の視点」を借りて世界を眺めることがある→他者への視点の移行

12

「観光の旅」の動機についての仮定への素朴な疑問

観光の旅の根源的動機：

外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすため



日常生活の中に既に他者は存在し、私たちは外界と関係を結びながら生きているのでは？なのに何故、わざわざ旅に出るのか？



観光の旅は日常生活では得難い
「他者関係」に満ちている

<出会い>

他者関係の二つのタイプ

他者と関係する時に抱く欲求の二つの相

(真木 2003: 216-219)

➤ 他者を支配する欲求:

他者は手段もしくは障害であり、他者が固有の意思をもつ主体として存在することは、状況のやむをえぬ真実として承認されるにすぎない(他者を自己に同化することを欲する)

➤ 他者との出会いへの欲求:

他者の自由とその主体性こそが欲求される(自己をたえず他者へと異化することを欲する)



異質な他者と出会うことで自分が変わる喜び

15

観光の旅とは？

なぜ人は観光の旅に出るか？

- 「外界・他者との関係」は二通り:「**支配**」と「**出会い**」。「今ここ」の世界で既にいる他者との関係は、「支配の欲求」に方向付けられている関係が圧倒的。
- もう一つの他者関係、すなわち「出会いへの欲求」に導かれる外界・他者との関係を人は希求する。
- これを可能にするのが観光の旅である。人は「**新しい他者と出会いたい(出会いの欲求)**」という衝動に駆られて観光の旅に出る。

観光の旅とは何か？

観光は「他者と出会う」ことで自己を世界に
位置付け直す人間行動の様式

「出会い(⇔支配)」の研究としての観光創造は、**現代社会**の諸問題の解決へ向けて何ができるか？

他者関係構築の二つのオリエンテーション

- 「**支配の欲求**」に方向づけられた関係構築
→ 秩序・規範の遵守(拘束)
- 「**出会いの欲求**」に方向づけられた関係構築
→ 秩序・規範からの逸脱(解放)

社会問題解決への二つのアプローチ

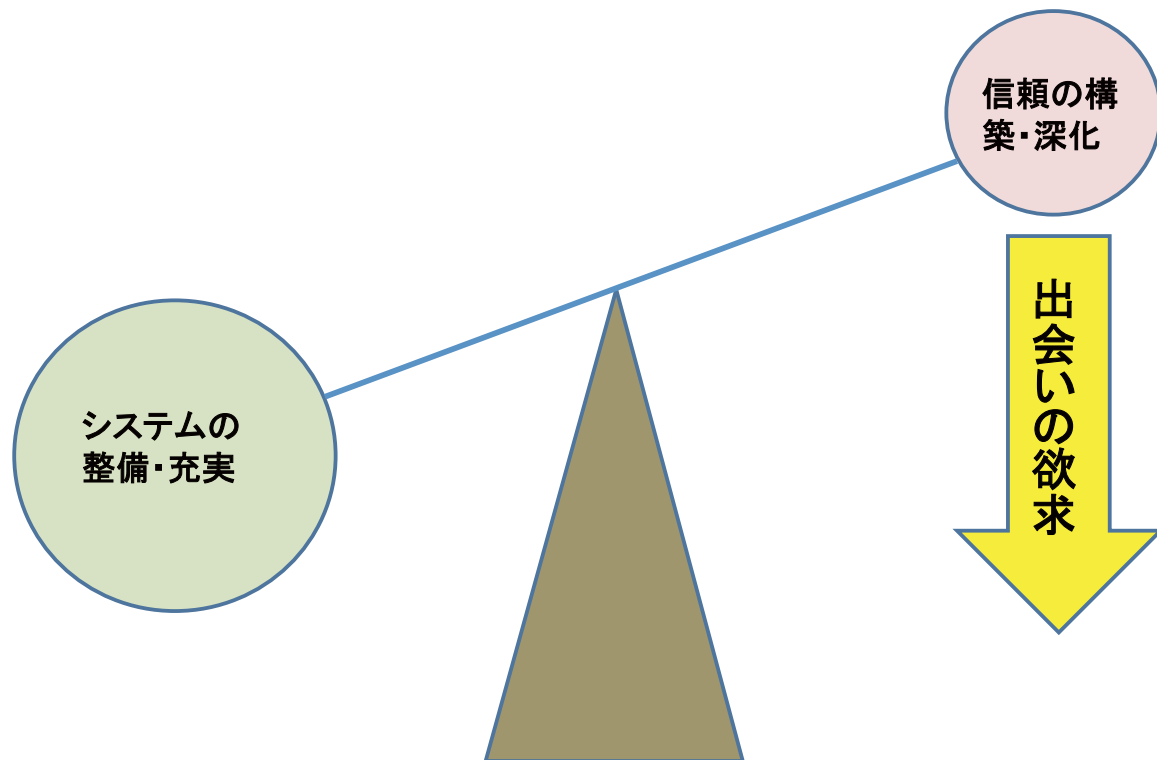
- **管理や規律の強化・システムの整備・利便性**(convenience)
→ 支配・従属 : システムの内部に住まう人々の発想
- **自由や人権の尊重・他者への信頼・自立的共生**(conviviality)
→ 出会い : システムの周縁に住まう人々の発想

17

社会問題解決への二つのアプローチ

	問題解決のためのアプローチA	問題解決のためのアプローチB
国際紛争	介入による解決	自立を支援
安全保障	セキュリティの強化	個人の自由の尊重
環境	資源として開発	コモンズとして共同利用
教育	管理・指導の徹底	ゆとりと個性の重視
	システムの整備・充実 ＜支配＞の欲求	人への信頼の構築・深化 ＜出会い＞の欲求

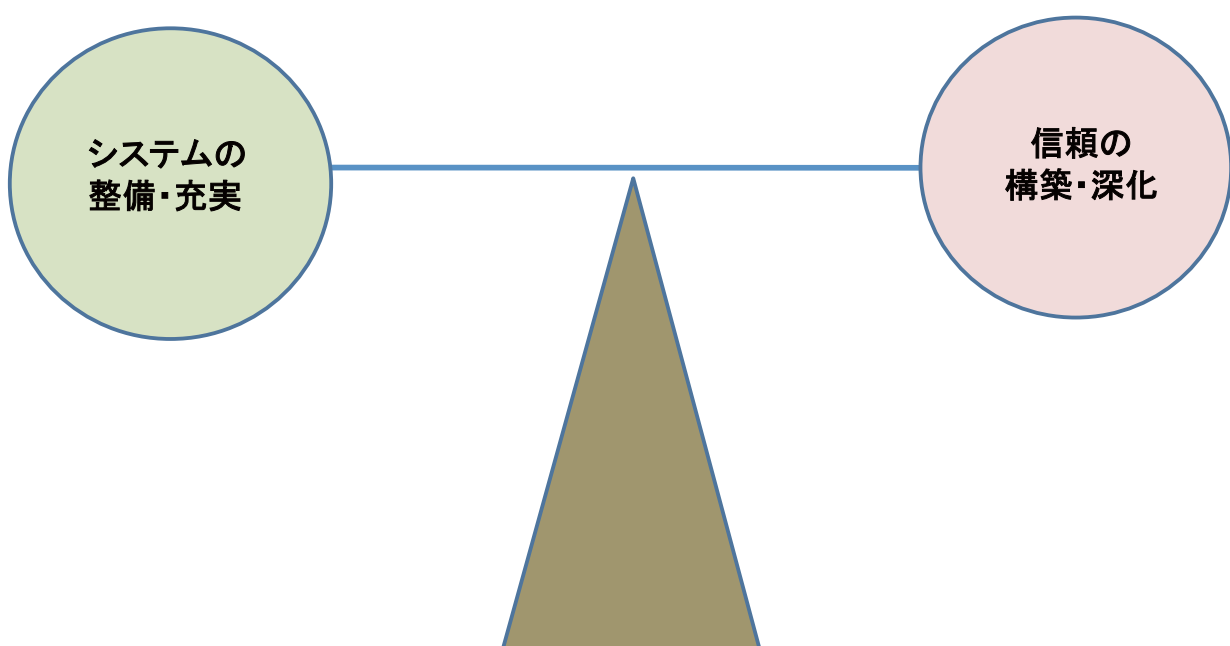
システム整備から信頼構築へ



21

システム整備から信頼構築へ

制度への「期待」から他者への「希望」へ(イリイチ)



| 124

「出会いの欲求」・「他者への希望」を基盤 にした社会構想

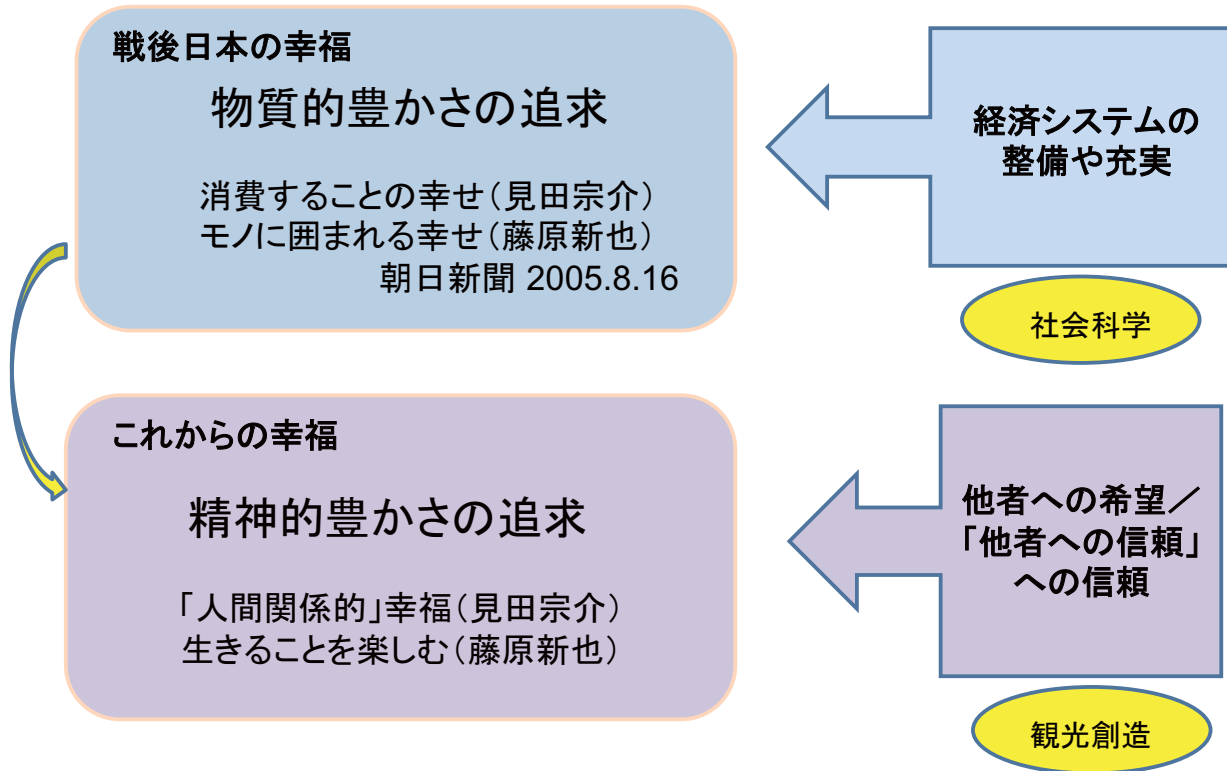
- 理論化や体系化は時期尚早
 - 「他者への希望」は「制度への期待」へ回収されがち
 - 個々の実践の試行錯誤のプロセスを見つめること
- 実践例
 - ペシャワール会・中村哲氏の活動
 - 竹富島のまちづくりと観光
 - 湯布院の平和運動と観光

23

観光創造研究にとって「幸福」とは何か？

「他者との出会い」が私たちにも
たらす幸福とは何か？

幸福とは何か？



27

「幸福とは何か？」この問いは、逆説的にも、失ったものの大きさに比例して深まっていきます。あるいは、他者が失ったものへの想像力の密度に比例して、深まっていきます。

そういう意味で、みなさんにいつも持ち合わせてほしいのは、この《他者への想像力》です。明治期の終わり、1911年に大阪毎日新聞慈善団が発足した折り、当時の毎日新聞社長であった本山彦一さんが語ったこんな言葉を思い出します。「一本の指のうずきは、同時に、全身の苦痛である。社会の一隅に、生活に疲れ、病に苦しむ者の存することは、すなわち、社会全体の悩みでなければならない」と、本山さんは人びとに語りかけました。《他者への想像力》とは、ふつう思いやりと言われますが、要するに**他者を他者のほうから**理解しようとすることです。その意味では、想像力とは、じぶんが抱いているイメージをさらに広げることではなく、じぶんをここではなく別の場所から見る力のことだと言うべきです。

平成23年度 大阪大学入学式 総長告辞

観光創造研究は現代的「他者問題」に どう対処するか？

- ・ 背景 1 : 「大きな物語」の凋落
 - 「他者の他者性」の前景化
 - 島宇宙内部の他者性の脱色
 - 島宇宙の乱立に伴う暴力状況 (宇野 2011)
- ・ 背景 2 : 伝統的共同体の空洞化
 - 「アトム化／砂粒化」の進展
 - 「繋がり社会性」 (北田 2005)
 - “intimate stranger” (富田 2009)

29

現代的他者問題の解決の糸口としての Emmanuel Levinasの他者論 ～オデュッセウスの主体とアブラハムの主体～

- ・ オデュッセウスの主体 (全体性を志向する私)
 - オデュッセウス (Odysseus) の冒険: 「未知なもの」に出会い、それを自分の中に取り込み、「より包括的な全体性を構築する」(内田2001:71) 試み
 - オデュッセウスの主体が会おうく他者>: 主体にとって同化・吸収の対象である「他なるもの」(l'autre)
 - 「他なるもの」: オデュッセウスの主体が世界を「享受」するための「糧」(nourriture)であり、「他なるもの」は主体とともに一つの全体性を構築する
- ・ アブラハムの主体 (無限性を志向する私)
 - アブラハム (Abraham) の神との対峙: 何の前触れもなく名指されて故郷を棄てること、そして息子を生贄にささげることを神から命ぜられる
 - アブラハムの主体が会おうく他者>: 「他なるもの」でなく、「絶対的に他なるもの」(l'absolument autre) すなわちレヴィナスの意味での「他者」(Autrui)
 - 「他者」: 「私はこの人を認識することも知解することもできない」という無能の覚知に至るときはじめて「他者」は私の前にその姿を現す(内田2001:78)

＜参考文献＞

- イリイチ、イヴァン(1991)『生きる思想---反=教育/技術/生命』藤原書店
- 内田樹(2001)『レヴィナスと愛の現象学』せりか書房
- 宇野常寛(2011)『ゼロ年代の想像力』ハヤカワ文庫
- 大澤真幸(2008)『不可能性の時代』岩波新書
- 北田暁大(2005)『嗤う日本の「ナショナリズム」』NHKブックス
- Giddens, Anthony (1991) *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford Univ. Press. (『モダニティと自己アイデンティティー後期近代における自己と社会』秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也訳, ハーベスト社, 2005)
- 神崎宣武(編著)(2005)『文明としてのツーリズム---歩く・見る・聞く、そして考える』人文書簡
- フロム、エーリッヒ(1951)『自由からの逃走』(日高六郎訳)東京創元社会
- 真木悠介(2003)『気流の鳴る音ー交響するコミュニン』ちくま学芸文庫
- 見田宗介(1996)『現代社会の理論ー情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書
- 見田宗介(2006)『社会学入門ー人間と社会の未来』岩波新書
- 見田宗介(2009)「現代社会はどこに向かうかー世界の有限という真実・＜持続する現在＞の生へ」『朝日ジャーナル・創刊50年』
- 見田宗介・大澤真幸(2009)「名づけられない革命をめぐってー新しい共同性の論理」『atプラス 02』大田出版
- モーリス=スズキ、テッサ(2002)『批判的想像力のためにーグローバル化時代の日本』平凡社
- メンツェル、ピーター(1994)『地球家族』TOTO出版
- 本橋哲也(2005)『ポストコロニアリズム』岩波新書
- 山田義裕(2008)「他者と出会うー支配の欲求から出会いの欲求への転回」石森秀三編『大交流時代における観光創造』北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 研究叢書70, 249-266

◆研究発表 10

観光立国時代の観光の六次産業化と必要人材

北海道大学観光学高等研究センター

白井冬彦

観光を切り口にしたまちおこしの実践

今日話すテーマは、観光創造という視点から 2 つ述べたいと思います。六次産業化について私が考えていることと、観光立国における人材育成についての 1 つの見方についてです。

最初に、観光立国とは何なのかということに触れてみたいと思います。観光をするために必要なものとして、まずお金と時間があります。その 2 つが満たされなければなかなか観光は難しいのですが、実は、それ以外にも大事なものがあります。

若い人にとっては時間があるがお金はない、社会人であればお金はあるが時間はない。その両方が満たされる年代になると身体が言うことがきかなくなってしまう。実はこれは自分だけの問題ではなく自分の家族にも関係があります。3 年間私自身が思うように旅行ができなかったのはこのためです。家族とは配偶者や親の問題も含まれます。そういう意味では旅が盛んになるためには、お金の余裕があつて、時間にも余裕があつて、自分の家族が健康でなければなりません。観光立国とはいろいろな数値目標は別にして、もし日本という国で旅が盛んになるとしたら、素晴らしい国になっていることを意味します。その国の国民がもっと自由に、もっと伸びやかに、頻度多く旅が盛んになるということは、おそらく結果としてすごく恵まれた良い国になっているのだろつと言えます。観光立国はそのようなことも意味しているのではないかということを書いておきます。

観光を切り口にしたまちおこしを標榜しています。地域で雇用の問題や、地域でどうやって食べていくかという問題についてですが、「自分たちで飯の種を作りましょう」ということを目標にして活動をしています。地域に入って、自分たちの飯

の種を自分たちで作っていきこうということで、観光ベンチャーと称しています。そのためにはお客さんに売れるものを作らなければいけないし、どうやって自分たちのビジネスを継続していくかということが重要です。マーケティングとどうやってお金勘定をしていくかということでファイナンス、この 2 つを中心に地域ならではのビジネスを起こしていこうという活動をやらせてもらっています。

私は観光創造学の学を語る人間ではなく、地域の飯の種を作りましょうという部分を主にやっています。活動紹介ということで、この 2 年半、北大に来てからの主な動きだけ紹介します。ここにあげたのは、短くて 2 日、長くて 10 日くらいの長さで地域で研修として行ってきたものです。今年はニセコ町と京都の和束町での活動の二つです。

京都の和束町には 5 年ほど関わっています。宇治茶の生産地としてのお茶のまちです。宇治は各地の茶葉をブレンドしているだけで、この和束町は宇治茶の約 4 割を生産しており、鎌倉時代からの茶葉のまちです。

地域での研修プログラムには、いろいろなカリキュラムのプログラムがあり、地域内の個人が地域の資源を活かした形でこういうことをやりたいというアイデアのレベルから、どうやってビジネスとしての形にもちこめるかという、ビジネスプランに落とし込むまでの教育・研修をやったりしています。

六次産業化の課題と

コーディネーターとしての観光関係者の役割

次にお話したいのは、まず六次産業化についての話です。六次産業化は法的には、「地域資源を活

用した農林水産業者等による新事業の創出および及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律」、通称六次産業化法とよばれているものです。これはこれで面白いテーマであり、1 つの在り方として重要だと考えています。

この法律に基づいて、今年数千億円の予算がつけられますが、正直うまくいかないのではないかと考えています。その大きな理由は、農商工連携がうまくいっていないのと同じ理由です。農商工連携に年間何千億単位かの予算を使いながらも、ほとんどの地域でうまくいっていない現状を見ると、一緒のことが起きるのではないかと考えています。

たとえば、農商工連携でうまくいっていない 1 つの理由として予算は開発予算しか手当てができないことがあげられます。いわゆる地域の特産品を作るとことには助成金が出るが、販売には出ないのです。作るまでの助成であって、販売には一切助成はおりません。地域は何をしているかというと、毎年のように 3~5 品の特産品を作って道の駅に置き続けるのですが、やっぱり思うように売れない。どうやって売るかに対してはチャレンジができない仕組みになっています。

六次産業化法には、六次産業化プランナーという制度があり、いわゆる流通や加工の専門家を地域に派遣することになっていますが、そのプランナーと言われている人を見てみると、これはうまくいかないのではないかと考えています。同じように作ること是一所懸命やるけどやっぱり売れないのではないかとこのことを感じているからです。

私は職人の子供であり、メーカー育ちの人間として作ことは大好きなのですが、残念ながら良いものを作るだけでは商売にならないことも分かっています。売ることも一所懸命考えていかなければいけません。

問題は、六次産業化を本当に進める人間は 1 次産業者で良いのだろうかということです。私は無理だと思っています。1 次産業者は作ることが命であり、それにフォーカスすべきであると思って

います。もし私の職人の父に、「職人として良いものを作っているだけではなく、売ることも考えなければいけない」と言ったら、父に殴られていたでしょう。父は職人としてモノを作る人間であって売る人間ではありませんでした。

では、六次産業化の精神としては良いのですが、農業をやっている人や水産業をやっている人に六次産業化をやりなさいって、この人たちに要求して良いのだろうか疑問に思っています。

私は、六次産業化の精神の中で誰がそれを進められるかというと、観光事業者、自治体関係者を含め、地域の観光に携わっている人間がプロデューサーになるべきだと考えています。1 次産業者が誰にどんなものを作り、加工し、販売していくかなんてやらせていいのだろうか考えると無理ではないかと思っています。逆に、観光業者は自分たちを 3 次産業のサービス業だと思っていますが、地域の観光事業者や観光行政担当者は、自分たちの地域はどんなものをもっているか、1 次産品だけではなくてどのような加工業者がいて、どのような商売をやっているかということを認識しておかなければなりません。このことを踏まえて、その地域に来てくれるお客さんは、何を望んでこの地域に来るのか、需要と供給の両方の観点から、訪れてくれる人たちと提供する側の地域をどのように組み合わせたら一番喜んでもらえるかを考えることが観光だと考えるべきです。

その意味で、地域の観光事業者や観光行政担当者が六次産業のプロデューサー、コーディネーターとしてやっていくべきです。現在観光に携わっている人が、これができるかできないかは別次元の問題ですが、そちらを目指していくべきです。

どうやってお客さんを呼ぶか呼ばないかというレベルの観光ではなくて、自分たちの地域でどのようなものを提供できるか、1 次産品、2 次産品、販売まで含めて、それを担うのは地域の事業者・観光行政担当者が六次産業という形でコーディネートすべきなんだろうということを話しています。私なりに地域に関わっている時にやっている仕事

は全部その延長の中で、最後まで自己完結するビジネスをしなければいけないと主張しています。規模の問題ではなく、そのために何をしなければいけないのか、何を身に付けなければいけないのか、何を勉強しなければいけないのか、を議論しながら教育してきました。

地域の六次産業化を進めるうえで大事な考え方として、LCR (Local Content Ratio) という言葉を使っています。ローカルコンテンツという言葉は、他の産業の中では違う使われ方をしていますが、観光の場合の LCR は、観光客を増やす・観光を盛んにすることと地域が潤うことは全く別だという考え方に基づいています。

消費者が観光に使っている消費額全体の中で地域側の取り分は、どうなっているかという問題です。10 億円の公共事業があったときに地域に落ちるお金は三割で、七割は別のところに行っています。公共事業が、大規模になればなるほど、都会の業者が儲かり、地元には落ちるのは 3 割くらいです。観光も観光客が来るけど地域側に落ちている取り分が少ない場合があります。規模が大きくなればなるほど地域に落ちる分が減るというおかしな現象が起こります。一番わかりやすい話が、ホテルでも大規模になればなるほど地域での食材提供ができなくなってしまうです。

地域の取り分をどれだけ大きくするかを考えるにはローカルコンテンツはどれくらいあり、地産地消の比率はどれくらいあるのかと考えることが必要です。例えば、お土産屋さんでいうと、お土産を地域で作っていないケースがあります。よその地域から仕入れて販売しているお土産屋さんはいっぱいあります。地域が潤うための観光のあり方をローカルコンテンツという言い方で考え、この比率の多いプログラムにしなければいけないのです。

この話を念頭に置いて地域でプログラムを考えよう、人が来ることだけではなく、お金を落としてもらっただけではなくて、歩留り分が多いビジネスのしくみを作り上げられるかということを大事

にしています。ここまでの六次産業化に関して私が地域に関わって何をやろうとしているかの話です。

入口としての観光創造士制度

ここからテーマが変わります。私が地域で研修をやらせてもらっている中で、地域の観光の担い手はどうなのかなってという話と、石森先生が言われている観光創造士の話、文科省の観光の中核人材育成の話など、いろいろ議論されていますが、その人材像や制度についてなかなか話がまとまらず、難しさを感じています。その中で 1 つのアナロジーとして、貿易立国という言葉で起きたことを考えてみたいと思います。一時期、貿易立国という言葉が使われており、そのときに行われた貿易立国の人材育成活動を紹介して、そのアナロジーで観光立国の人材育成について考えてみます。

私の最初の仕事は民間の会社の輸出本部での仕事でした。貿易マンとして育ちなさいということでした。その流れで、20 代の前半に、富士宮にある貿易研修センターで研修を受けました。今は仕分け対象となってしまう、キャンパスはなくなっていますが、民間企業から計 5700 人が 1 年コースまたは 3 か月コースに派遣されました。貿易立国という国の目標の中で、貿易のできる人間を育てなければいけないという趣旨のもとに設立されたものです。商社からは来ていませんでした。製造業からの派遣が中心でした。商社は自分のところで育てられるからでしょう。

大きな問題意識としては、商社を経由した貿易だけでは日本の貿易は大きくならない、いわゆる商社の都合で全部仕切られる貿易をやっているといけないという認識のもと、製造業者自ら貿易をしろ、間接貿易だけではなく直接貿易もすべきで、製造業自らお客さんを見つけ、海外で販路を作り、貿易ができるようにという趣旨のもとに、製造業の従業員を相手に貿易を教えていた機関です。

これまでの旅行のしくみもこれと同様に、旅行

業者が全部仕切る旅行プログラムをやってきました。地域側はサプライヤーであり、それをとりまとめてコーディネートして商品化するのは旅行会社でした。それは製造業と商社の関係と同じであり、結局商社が全部仕切るのか、メーカーが自らやるのかが問われたのです。着地型商品がどうのこうのといわれますが、着地型商品のエッセンスは売るところまで自分たちでやれるかどうかだと私は思っています。

貿易立国という考え方の中で、どういう人材が必要とされていたか、どういう教育をしてきたか、新しい観光立国という中で、地域から見た場合の地域の観光の担い手が何かと考えると、似たところがあるのではないかと思います。

観光立国という言葉で、目指している方向は2つのようです。インバウンドをどうやって盛んにするかということと、観光で地域をどうやって元気にしますかという二つです。

観光による地域振興にからんで、人材育成を議論しているなかで、時間軸をグレーなままになっているように思っています。明日の話、明後日の話、5年後、10年後、20年後の話まで一緒にして議論しているから人材像が描けないのではないのでしょうか。

当時の貿易研修センターの本を読んでもたら国際取引をできる人材を育成すると書いてあります。貿易研修センターでありながら、その趣旨は国際取引ができる人材を育てると書いてあるのです。70年代当時国際取引とは何かというと貿易だったのです。つまり、国際取引のできる人材＝貿易のできる人材でありましたが、国際取引とはどんどん段階が進むものです。60～70年代に日本で国際取引をやろうということは貿易を意味し、商社を通した間接輸出のことでありました。それではないので、直接輸出の形でメーカー自らが輸出しようというのが70年代の動きでした。

本当に国際取引が進んでいくと、直接現地で売ろうという形で販売会社を作ります。貿易できる人間ではなく、現地で販売できる人間が必要にな

ってきます。現地に対するカスタマイズやローカライズをしていかなければならないので、現地仕様の商品を開発しなければならず、研究組織の人間が海外に飛ぶことになります。研究施設を作ることにもなります。さらにその後の為替の問題やローカルコンテンツの話があったりして製造拠点を海外に移さなければならぬことも起こります。

当然それらの業務をできる人材と貿易ができる人材とは異なります。さらにホールディングカンパニーみたいな形で一体運営していかなければならず、どんどん現地で人を雇っていき、経営トップも現地化せざるを得ないようになります。最後は資本も現地化していきます。このように国際化の新しいステップが進んでいきます。

スタートはあくまで輸出、貿易をできる人間を育てるということでした。観光立国の人材育成・観光創造士とは、この表の1から7～8までくらいのイメージを全部観光創造士という言葉で表現しようとしていないかと思っています。

観光立国の中の観光人材として何をやらせるのかというのが明確でないと感じています。しかも地域での活動が難しい一つの理由として、進んでいる地域とそうでない地域があり、ある地域は3を、ある地域は6を要求します。これを製造業の話で考えると、これらすべてを一人でできる人間はいません。そのフェーズごとに必要な人材スキルは変わってきます。観光創造士にすべてを要求されてもできないと思います。地域の違いがあって要求も違いますが、どの段階をやりたいのかによって最低限のスキルだけ身につけていればいいのであって、スーパーマンのような人材は育たないし、教育することもできません。最低限の部分を教育・理解した中で実務に入ってやっていけば、必要なスキルや能力は各々の段階で育っていくのだらうと思います。

観光創造士に過大な要求をしないで、地域の中で六次産業化の意識を持ちつつ、地域開発と観光開発はどういう関係があるのかを考えることが入り口です。あとは地域のビジネスをどう考えるか

というところを育てるだけで、そこから先のところまで資格という形で要求しなくてもいいのではないのでしょうか。いわゆる貿易研修センターも元々は貿易ができる人材を育てれば良いと、そこからはメーカーの国際化が進展していく中で、組織の中でそれよりも先の人材を教育研修させていくという形だったのではないのでしょうか。入口のところだけの資格と教育でいいのじゃないかと考えているのです。そこから先の 10 年後の人材の議論は、その地域で勝手に進めればいいのではないかと思います。そうしないといつまで経っても観光創造士に望まれるスキルや能力は何かという議論が永遠に続けられることになると思います。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（天）

ありがとうございました。ようやく私のワールドの話題が来たかと感じました（笑）。お話にはほぼ全面的に賛同です。これを第一に申し上げて、順を追って感想をお話しします。

まず、観光の動機、時間、お金、健康というお話がありました。この中では、基本的には動機をどう作るかをしっかりやっていかなければならないと感じます。2 番目の、地域の飯の種作り＝観光ベンチャーに関しては、長崎県小値賀島の話をしたいと思います。今年の 3 月、私のゼミの学生 26 名を連れて、五島列島の北にある小値賀島に 10 日間滞在して全住民の意識調査を行ないました。なぜ小値賀島に注目したかというと、最近話題になっている所で、「オーライ！ニッポン」特別賞やエコツーリズム大賞を獲った取組みを進めている島だからです。50 年前は人口 12,000 人でしたが、現在はわずか 2,800 人にまで減っています。国立社会保障・人口問題研究所の予測では、あと 20 年も経たないうちに 1,250 人まで減る見込みで、ほとんど望みのない状況です。これに対して、島の人たちはどう考えているのか。住民の大半は 60, 70, 80 歳代で、80 歳以上となるとほとんどが一

人家庭です。学生が島を回って調査してわかったことは、人口減少の原因は、島の人々が希望を捨てたからだということです。島の人たちは仕方ないことだと思っています。親たちは子どもたちに対して、こんな何もないところから早く出ていけと言います。親たちは、自分の住んでいるところに価値を感じておらず、早く島から出て食いぶちを探してほしい、農業漁業ではやっていけないので都会に出ていってほしいと思っています。島に残りたい子どもたちはたくさんいますが、泣く泣く島を出ていくしかないという状況でした。

皆さんも同じようなことをお考えでしょうが、地域の観光を考える際には、明治からの価値観を壊して、親と教員の再教育から始めなければいけません。子どもたちに新しい価値を伝えなければいけませんが、子どもにもっとも密着しているのは親と教員です。親と教員は、地域の宝を無視して外に出て行けと言っているのです。高校生は毎年島から出て行って、ほとんどが島には戻ってきません。その価値観の問題から入らなければ、六次産業化法の話も噴飯ものでしかないと感じています。

マーケティング論の観点からいえば、地域をしっかり把握し直して、商品をしっかり作って、それをどのように販売促進して、利益はどうかかが問題になります。しかし、とてもそのレベルまではいかず、お年寄りも諦めてしまっています。いくら中央官庁が綺麗なことを言っても意味がありません。やはり価値観の再編成を全面的に推し進めていくしかない。日本だけではなく世界的に同じ傾向にあります。

LCR と、メーカーの直接貿易理論をツーリズムに当てはめてご説明いただいたところも、非常にわかりやすかったです。日本の観光庁の施策、あるいは日本をどう外国に売るか JNTO の施策は、マーケティング理論などあったものではなく、硬直した組織論だけで動いているところがあります。この点についても、一度施策を壊して考える必要があるのではないかと思います。

コメンテーター2：松本

白井先生の話は2種類の宿題を提起していると思います。1点目は「観光立国のための人材育成はどうあるべきか」という点で、これはお話の中で述べられていることをふまえて考える必要があるでしょう。2点目は、「観光創造“学”を担う人材育成をどうすべきか」という点です。我々は観光創造学のパイオニアになるべくこの研究会に集まっていますが、今後、観光創造学の骨格が見えてきて本格的に動き出した時、観光創造学を誰がどういう形で引き継いでいくか、学問的な観点の人材育成も考える必要があると思います。もちろん基本的には北大大学院が担うことになりますが、今の時代それだけで良いのか、様々な形で情報発信をしたり、「観光創造士」という資格を学問の継承という観点からも考えていくなど、様々な方法を検討すべきではないでしょうか。

またこれは白井先生に質問ですが、「六次産業化のコーディネーターは観光関連の人間がすべきだ」という話は我々からみれば納得できる部分も大いにあります。しかし先ほどの製造業の例でいいますと、製造業の人は注文が減るとか、倒産を避けるなど目先の利害がハッキリしているのに比べて、観光関連の人に六次産業化の話をして、「なんで俺たちがやらなきゃいけないのか」といった当事者意識のなさや、動機付け（インセンティブ）を持たせて説得するのに苦労されたのではないかと思います。その点についてお話しただけないでしょうか。

回答：白井

松本さんの質問に対してですが、当事者意識の問題は、地域がこのままではいけない、旅行会社を中心とした日本の旅行の仕組みの中で地域の観光振興は無理だと気付いているところが多くあるのですが、なにもできていないのが実情です。努力をしているところもありますが、どうしていいのかわからず苦労しているところもあって、少し

でも私たちが役に立てばいいと思ってやっています。地域は大変だと感じていますが、小林先生もおっしゃったように、だから出ていけという話になってしまっています。

地域内でうまくやればビジネスとして完結できるという話をすれば、やりたい人も出てくるので、それに賭けているつもりですが、それに反応しない地域もあり、その地域には関わっても仕方ないと割り切っています。救える地域と救えない地域があるのではないかと。地域がどこまでやりたいかにもよると思います。しかし、1度は議論をするようにしています。その中で地域の危機感は感じています。

私は日本のことを勉強したいと思い、もうビジネスをやりたくない、もう英語での生活をやりたくないと思ってここに来ましたが、結果的に地域の観光という分野でビジネスの手法を伝えることが大事だと佐藤先生から教えて頂きました。地域に連れ出されて、地域の人たちが何を苦しんでいるかということ、生業をどうやって起こすかであって、それなら自分も役に立てると思いました。それに気づくまでは、観光を通して日本の勉強をすればいいだけと思っていたのですが、観光の切り口から地域に役に立てると思いました。地域というものに気付いて、その中で自分の役割も感じられるようになり感謝しています。

コメント：西山

どうもありがとうございます。私も少しだけ、感想を述べさせていただきます。

観光立国の目標・方向性として、インバウンド振興と観光による地域振興が大きく掲げられていますが、観光に依って立っている国に求められるものはこれだけではないはずです。観光が将来の日本を支える力になっている姿を、我々はビジョンとして描ききれていないのではないかという感覚をもっています。「貿易立国」は良くも悪くも完全に成り立っています。もちろん、観光だけで国を支えるということはありませんが、狭い範囲で

のインバウンドと地域振興だけではなくて、もう少し観光に依って国が立っている姿とは何かを、我々は簡単ではないながらも見出していくべきだと思います。今のお話を伺っていて、改めて観光創造学の存在意義・目的意識を感じました。

そして、臼井先生がお作りになった「製造業の国際化プロセスとその必要人材」という表について、ぜひ観光立国とその必要人材という観点で観光創造士バージョンを作ってほしいと思います。観光立国のビジョンがなければこれは書けないと思いますので、もちろん臼井先生にすべて書いてほしいというものではありません。こうしたことを我々は議論しないといけないのだと改めて考えさせられました。ありがとうございました。

観光立国時代の「観光の六次産業化」とその必要人材

北海道大学
観光学高等研究センター
特任教授
臼井 冬彦

自己紹介

- 研究フィールド
 - 「観光を切り口にしたまちおこし」
 - ー地域の小規模ビジネス並びに産業の育成
 - ー観光ベンチャーの育成・起業
 - ベンチャーマネジメント、マーケティング、ファイナンス（事業収支・損益計算）
- 観光創造学に対する考え方
 - 観光を地域活性化のための手段としてとらえる
 - 地域ならではの小規模ビジネス、産業を起こすことで地域の雇用創造を行い、地域活性化に役立てる
 - 「学」の立場から何ができるかを考えるとともに、小規模ビジネスを立ち上げるための教育プログラムの作成とともに実際の人材育成に励む

過去3年半のフィールドワークの例

2010年

- ・ 秋田県観光人材育成研修 （能代市、横手市）
- ・ ニューツーリズムによるまちおこしに関する調査研究
（北海道市町村振興協会）

2011年

- ・ 地域資源を活かしたニューツーリズムによるまちおこし ― 実践編
（北海道市町村振興協会：留萌市、知内町）
- ・ 秋田県観光人材育成研修 （秋田市）
- ・ 富良野・美瑛広域観光圏プラットフォーム支援事業研修（18コマ）

2012年

- ・ 京都府和束町：観光による地域作り構想力養成講座、観光商材開発力養成講座、観光事業経営力養成講座
- ・ ニセコ地域資源活用ビジネスコースⅠ（全6回）
- ・ ニセコ地域資源活用ビジネスコースⅡ（全6回）

2013年

- ・ ニセコ地域資源活用ビジネスコース（全5回）
- ・ 京都府和束町：観光による地域作り構想力養成講座、観光商材開発力養成講座、観光事業経営力養成講座

今日のトピック

- ・ 「観光」の六次産業化
- ・ 「貿易立国に向けての人材育成」との比較で見た場合の「観光立国に向けての人材育成」の一つの視点

農業の六次産業化

- 今村奈良臣
- 一つの有効な考え方
- 「六次産業化法」
 - （地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律）
- では、「農商工連携」（農商工等連携促進法）との違い・関連は？

農商工連携で起きていること

- 継続的な特産品開発
- 「道の駅」での販売
- 1～2年での販売中止



六次産業化法での試み
六次産業化プランナー制度

本当にこのプランナーの派遣だけでうまくいくのか？

観光の六次産業化

- 一次産業労働者の本当の役割と価値
 - 季節とともに生き、日々の天候、土地と作物の状況を見ながら、いいものを作る（取る）ことに専念する
- 地域の資源（産業資源含む）の評価とともに、都市住民の要望、期待を理解しているべきなのはだれか？



- 地域の観光事業者、地域の観光行政担当者こそが、本来的には一番ふさわしい立場にあるべきではないか

観光の六次産業化

観光の六次産業化のためのKPI：LCR

- KPI: Key Performance Indicator
- 観光の六次産業化が地域でどこまで進んでいるかを示す指標
- LCR: Local Content Ratio
 - 消費者が消費する旅行関連消費額の中で、実際地域にどれだけの割合が消費金額として落とされ、また、残されるかの比率
 - 地域で行われる観光関連のハード、ソフト事業の投資に対し、実際地域に落とされ、残りうる金額の割合

L C Rの具体的留意点

- ローカルコンテンツ

- 消費・購入されているアイテムの地産比率
 - ・ 食材の地産地消比率は？
 - ・ 観光プログラムの一環としてふさわしい地域産の特産品は、土産品は？
 - ・ 宿泊施設で賄われている様々なアイテムの産地は？
- 施設の建設資材はどこから、建設工事はだれが受注し、誰が実施するのか
- 観光プログラム・企画運営者はだれか？
 - ・ 地域発の提案(企画・提案・交渉能力)
- 経営主体はだれか？
 - ・ 運営施設・プログラムの運営はだれが管理運営しているのか
- サービス提供者はだれか？
 - ・ 現地雇用

観光立国に向けての人材育成について

貿易立国に向けての人材育成施策の一つ

- 貿易研修センター（IIST）
- 1967年に「貿易研修センター法」のもとに設立された組織
- 海外取引、海外投資、貿易実務を担える人材の育成を目的に、富士宮キャンパスで本科（1年）、実務（3カ月）の二本のプログラムを実施（異文化理解、国際ビジネス、貿易実務、英語）
- 製造業が中心に社員を派遣（総合商社は社内教育による育成）
- 1986年に、貿易研修センター法が廃止されるまでに、のべ5,700人を輩出
- 現在は、一般財団法人に改組

IISTの裏の狙い

- 製造業者自らによる販路の開拓・貿易、さらには海外事業の推進を行えるための人材育成
- 大手総合商社のみに貿易を任すのではなく、製造業者自らが自主的に行えるようにすること

この論理を旅行業界のアナロジーで考えると、

- ・ 日本の手旅行会社と
- ・ 旅行素材のサプライヤーである地域

この関係をどのように考えるか

- ・ 大手旅行会社はある面で、総合商社の役割
- ・ 地域側は製造業とも言える

問題意識（１）

- ・ 製造業が自ら海外ビジネスを行えるための人材育成施策が国策として「産官学」との連携で大規模に行われた
- ・ それを行うための人材育成の方針、方向性、プログラムも完備されていた
- ・ 観光立国の目標、方向性として下記の二点：
 - （１）インバウンド振興
 - （２）観光により地域振興
- ・ 二つの目的に対し、明確なイメージと到達点までの時間軸およびプロセスとその人材育成の方針・方向性・プログラムが意識されているか

製造業の国際化プロセスとその必要人材

I	間接輸出 商社を通した輸出	販路開拓	英語 海外取引の初歩的理解
II	直接輸出 自社での輸出	販路開拓 海外取引契約	英語 貿易実務 海外の商慣習
III	海外販売会社の設立 ディストリビューター リーテラーの整備	会社設立・運営 海外の営業系契約 販売会社管理	英語 会社経営力 (特に、マーケティング、労働法規)
IV	海外研究施設・技術施設の設置	拠点の運営・管理 技術移転・指導	英語、異文化理解 経営力全般・法務(特に、労務)
V	海外製造施設の解説	製造技術指導 大規模労務管理	英語、異文化理解 経営力全般(特に、労務、財務)
VI	海外販売会社・製造施設の統合	持ち株会社運営	英語、異文化理解 経営力全般 (特に、労務、財務、税務)
VII	マネジメントの現地化	本社・子会社間運営 人事管理	英語、異文化理解 財務、税務
VIII	資本の現地化	グローバル経営	英語 経営戦略、財務、税務、法務

問題意識（２）

- 異なる知識・スキルとその人材育成
 - 国際取引のプロセスごとに必要とされる知識・スキルは異なる
 - 各々の知識・スキルの習得には、5ー10年以上は必要であり、継続的な人材育成が行われる
- 「観光立国」の掛け声のもと、
 - 観光立国にふさわしい、地域自らの意思において、観光を切り口にしたまちおこしを取り仕切るために必要な人材像、方針、方向性、プログラムが明確か

観光のプロの育成のためには、現状把握とともに、時間軸を踏まえた国・地域の将来像とそのための人材のイメージを共有化することが不可欠

◆総合討議

観光創造学と観光創造研究会のあり方について

西山

それでは、総合討論に入りたいと思います。
まず、全体に対するコメントや、あるいは観光創造研究会へのご提案などをお聞きしたいと思います。杓谷先生、お願いできますでしょうか？

杓谷

参加させていただいて、ありがとうございます。実は今週、たまたま勤めている大学が推薦入試のため1週間ほど講義がありませんでした。そこで、来年お世話になりますと西山先生にご挨拶に伺ったら、たまたまこの土日に研究会があるというお話で、ひょうたんから駒のように参加させていただくことになりました。先ほど小林先生から、予定調和でない偶然の面白さというお話がありましたが、まさにそれを一番享受したのは私かもしれません。

私はもともと、国立民族学博物館の大学院で学んでおまして、民博の共同研究会の最後の方に参加させていただいておりました。あの時代は、石森先生は観光文明学とおっしゃっていたのですが、北海道で観光創造という言葉が使われるようになった。実は、その意図するところに対して半信半疑という気持ちもあったのですが、今回参加させていただいて、その思いが晴れたように思えます。観光は平和を前提として成り立つといわれてきましたが、観光によってすべての人を幸せにするという考え方があり、それは非常に進んだ考え方だということを感じます。石森ワールドといいますか、それを受けての、今回発表された皆さんそれぞれの立場からの心意気のようなものを感じる発表でした。本当に参考になりました。

そして、今日の清水先生、西川先生、山田先生のご発表では、普段使っていない頭を使う機

会になりました。本当にインスパイアされました。私はもともと古代遺跡の公園化とその観光という分野を研究しておりますので、特に「時間」という観点については、非常に感じるものがありました。まさにこういうことも含めて議論する会こそ、観光創造学をつくり上げる過程になっているんだと。そのような意味で非常に刺激的な会でした。

西山

どうもありがとうございます。次年度からどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、今回「ご意見番」としてご参加いただきました、真板先生、小林英俊先生、小林天心先生にそれぞれコメントを頂きたいと思います。

真板

石森先生が退官されるときに、西山先生も交えて話し合いをしていました。文化遺産をどう継承するのかという話題になった際に、私たちは次の世代や22世紀にどんな世界遺産を創れるのかということが課題だと西山先生がおっしゃった。そうでないなら、変な話ですが、私たちは常に遺跡を追いかけているということになるわけですね。新しい価値を創っていくということが観光創造の課題なんだと言われて、私は目から鱗が落ちました。石森先生のおっしゃっている観光創造というのはこういうことなのかと、開眼したわけです。

いろいろな所でお話をするのですが、明治の半ばに市町村制度が出来た時に、全国には約7万1千くらいの市町村がありました。その町村には、今日皆さん方からのお話にもありましたように、人と自然の関わりの中でさまざまな文

化の継承がありました。外国人が当時の日本に
来た時に、日本は本当に黄金の国だと言うよう
な。人と自然の関わりが、時間と空間の区切り
なく継承された世界だったわけです。それが今
や、市町村の数は 1,700 となり、市町村の統廃
合の中でそういうものが失われているだろうと
思います。

そんな中でまさに観光立国が叫ばれたわけ
です。日本をいったいどのように再生させるのか
という大きな課題があると私は思っています。
どのような遺産を残せるのかという視点でお話
しすると、私は 1 つの危機感をもっています。
それは、山村先生の研究にも関係することで、
決して批判ではないのですが聞いていただきたい
んです。だんだん社会が閉塞的になっていく
中で、市民社会に大きな変化が起こっている
ということがあります。言葉として表現すると、
「趣味縁とリアル化」という問題です。この趣
味縁というのは、趣味で人々がつながるとい
うことです。趣味がなくなれば、また別につな
がっていく中で、自分のもっている趣味縁をつ
なげてリアル化を確認するのですが、嫌になっ
たらすぐに止めてグループやサークルをすっ
と抜けてしまう。その過程で起こっているのは
何かというと、価値の持続性がなくなって、
極めて短命化しているんです。もし、市町村
が 1,700 になった中で埋もれてしまった価値
を発掘して、観光手段と考えるならば、趣味
縁とリアル化の社会で、せっかく日本人が何
千年という歴史の中でつくってきた価値とい
うものが、短命なものとして消費化されてし
まう。結局、次から次へと捨てられていっ
て、もしかしたら観光が日本を潰すことにつ
ながる可能性があるのではないかという危機
感すらもっています。

そういう視点で今日のお話をずっと聞いて
いたのですが、今回刺激になった 4 つのキー
ワードがあったかと思っています。1 つは、
ツーリズムにおける「価値」とはいったい何
なのかということです。たとえば単なる遺跡・
遺産を見せる

ことなのか。何人かの先生のご発表の中で、
価値についての問題が出ていましたが、ツー
リズムにおける価値というのを 22 世紀に向
けて何だと捉えるのかと。何をもって観光の
価値とするのかが、1 つの大きな課題かと思
いました。

2 つ目は、その価値をどうやって持続的に
継承するかという問題があるかと思っています。
「持続性」ですね。先ほど申し上げた趣味縁
とリアル化の世界の中で、地域というものを
舞台として、日本の歴史を舞台にして、ある
いは今を生きている人たちの創造価値の中
から生まれた、いわゆるコンテンツというも
のが、一過性に終わることなく、未来に向
けて継承されていくための持続的な仕組み
づくりとは何なのか。これを考えないこと
には、観光も単なる一種のイベントやお祭
りに終わってしまうのではないかという問
題があります。

それから 3 つ目は、生み出された観光価
値の役割とはいったい何なのか。これはや
はり山村先生のお話の中にもありました、
海外との交流ですが、それによって何が
紹介され、どういう交流が起こり、そこに
新しい平和や楽しみが生まれてくるのか。
たとえば、日本なのか、ある地域なのか、
日本人なのか、あるいはそうではなくて……
といういくつかのレベルがあるはずです。
それぞれの役割というものをどう考えて
いくのか。

4 つ目は、今申し上げたようなことを未
来に向けて繋げていく仕組みというものを、
21 世紀ではなく 22 世紀タイプとして考
えていくということです。現在の社会の中
において、価値を形成してきた要素が激減
しているのだとしたら、それに代わるもの
を私たちが独自に形成できないかと思
います。持続性を含めた仕組みづくりを
ベースにものを考えていく必要があるの
ではないかなと思っています。

こうした内容を踏まえると、今後の 1 つ
の研究テーマとして、これからの観光にお
ける価値

とは何かという問題があります。これを私たちは真剣に捉えて論じていくというが必要だと思います。今日のお話の中では、事象的なものもあれば、時間の流れや使い方そのものの自身を観光の価値の中で論じるという、比較的抽象的なものもありましたし、あるいは有形／無形の問題もあったと思います。それらを真剣に捉えて、観光地における観光価値とは何なのかを、どこかで整理して論議したいと思います。

2 つ目は、その価値をどのように持続して継承するかという仕組みづくりの問題です。この中には、いろいろな考え方、やり方、宗教性の問題、いろいろとあると思うのですが、仕組みというは必ずしも形あるものだけではありません。理念や、あるいは人びとに喜びを与える思想などもあるかと思います。今日のご発表では、お二方の先生が価値論の問題をお話してくださいました。あのお話を聞くだけで私は地域の中に対するイメージが湧いてくる。もっと地域の人に伝えられるという意識が湧くわけですが、そういうエネルギーを湧かせることができると思いますので、そういう意味での持続・継承の仕組みというのを、ハード／ソフトでつくって考えるということは、今後のテーマではあると思いました。

西山

ありがとうございます。観光の価値、そして持続性、それから果たす役割、仕組みづくりというキーワードを頂きました。では続いて、小林英俊先生、お願いいたします。

小林（英）

観光とは何か、いろいろな言い方があると思いますが、1 つの答えとして「観光とは時代を映す鏡だ」と思っています。観光の研究をしていると、社会のあり方、家族のあり方、働き方、いろいろなものが見えてきます。観光は時代を映す鏡であるとすれば、我々がやることは、今

をどう読むか、あるいはこれからの世の中をどう読むかということです。今回の先生方の発表を聞いていると、1 つの時代の曲がり角の中で、観光をどう位置づけてどう考えるかということが、ずっと意識の底辺にあるのだなという印象を受けました。石森先生が問題提起してくださいましたが、我々が今生きている時代は、文化が経済を引っ張っていく時代になっています。経済が文化を引っ張るのではない時代にもう変わっています。観光を文化活動とすれば、観光が経済を引っ張れるんだという、強い認識と覚悟をもたなければいけないというのが、今回皆さんのお話を聞いていて思ったことです。今の文脈でいえば、観光が人と地域を良くできるというのは、文化が人と地域を引っ張っていくとすれば当然のことなんだと思っています。

では、観光創造とは何か。ご存じのとおり、観光業という言葉は産業分類表にないんですね。なぜないのかといえば、今の分類表では分けられないからだと考えています。我々がやっていることは、今の分類表で分けられるものを融合させること。単なる足し算ではなく、掛け合わせる、融合されることで新しい価値を生んでいるのが観光だから、分類できないのだと、大学の講義では学生に話をしています。とするならば、これも石森先生が言われたように、観光とは融合させて新しい価値を生むことなんだと考えられます。観光創造という言葉はすごくいい言葉だと思っていて、新しく創り出すことに意味があるというメッセージをもっています。観光を創り出すのではなく、観光を使って新しい価値を創り出すことに意味があると思うわけです。それぞれが「世の為人の為」にどう役に立つのかという観点から価値を創り出したときに初めて、我々の役割というのがわかってくるのだらうと思って、この2日間のご発表を聞いておりました。

先ほどの真板先生の話にもつながりますが、持続性や、地域を元気にするとは何かと考えた

際に、1つのことをずっと守るのではなくて、常に新しいことを創り出す仕組みや人がいることが肝心なのだと思います。そうした仕組みや人を地域に根づかせるということが、私たち観光創造を実践する者の仕事であろうと。結果としては、地域に蓄積された知恵やヒントを、やる気のある人たちが1つの集団としていく仕組みを創ることなのではないかなと思います。そうすると、新しいアイデアが生まれてくる。そのレベルまで持っていければ、我々が地域に入り込んで観光創造をやっているんだと、自信をもって言えるんだと思います。

もう1つ、今日の午前中のお話を聞いていて勉強になったことがあります。私たちは、楽しい、元気、豊かなどの言葉を、お互いにわかった上でやり過ぎしてしまうことがあります。しかし、時間とは何か、楽しいとは何か、元気とは何か、生きるとは何か。当たり前の言葉の先々を考えると議論をすることで、それは本質的に何なのかわかってくると思います。「地域が豊かになることが私たちの目的ですよ」「そうだよね」で終わってしまって、豊かという概念がそれぞれに違っていれば何も生まれません。常に「それって何？」と概念を問い直していく。そこから新しい何かが生まれてくるのかと思っています。

共同研究の意味は、自分たちのもっている知見をぶつけ合うことで、気づきや新しいことが生まれてくることです。そういう意味では、こうした研究会は必須という気がしました。今回、立ち上げから参加できたことは、すごくありがたいことだと思いますので、ぜひ皆さんと一緒にこれを続けていければと思っています。

西山

ありがとうございます。真板先生からは価値、持続性、仕組み、人、そして、時間や豊かさというお話がありました。小林先生からは、それ自体を問い直していかなければいけないという

こと、それを議論する意味というものをお話いただきました。

それでは、小林天心先生お願いいたします。

小林（天）

7年前、石森先生から観光産業の戦略論をやってほしいと拝命を受けまして、7年間観光創造専攻で講義を受け持たせていただきました。確か最初の頃の研究会で、宮下先生がキティちゃんの話をしていました。そういう切り口からの観光へのアプローチがあるのかと驚いたことがありましたが、それから7年経ち、昨日今日とお話を伺っている中で、観光創造の進化・深化を感じました。北大の観光創造のステイタス、実績はすごいんだと改めて感じた次第です。2日間、本当に勉強になりました。

結論をまず言うと、皆さんのお話を伺って、観光は本当に何でも横断してしまえるんだと感じました。まさに融通無碍です。それだけに、いったい観光学の核になるものは何か。いつも言うとおりに、玉ねぎの皮をむいたら何にもなくなってしまう、では少し寂しいですね。昨日も少しお話ししたように、私は観光学の一般原理とは何かをずっと考えて、大学院生にも投げかけているところです。

さて、もう観光立国と言い出して10年経ちました。今までの旧態依然の考えが残っている観光立国ではなく、まったく新しい観光立国論を我々で考える必要があるのではないかと、先ほど遠藤先生と話をしておりました。交流、歴史、文化というお話が、昨日今日と出てきていますが、やはり基本になる石森先生が仰っていた「世の為人の為」という大志。Lofty Ambitionとおっしゃいますけど、それをベースに幅広くかつ具体的な話をしていかなければいけないと思っています。

今日の先生方の発表は、相当に頭を回転させないと付いていけないもので、かなり強烈に考えさせられるところがありました。たとえば西

川先生のお話を聞いていて、頭に浮かんだのがスマートフォンを持った猿です。24時間スマホに使い回されているような、バーチャルとリアルを混同して、時間と空間をまったく無視したような若い人たちのあり方というものがあると思います。自分についていけない議論があるのだなと改めて感じました。

それから、私の観光産業戦略論という講義の中で大学院生に話していることがあります。お金になるから、日本というものを輸出できるからと、インバウンドが叫ばれますが、インバウンドとセットになるアウトバウンドも、同時進行的に考えていかなければならないということです。その中で、振り返ってみると1996年の旅行業法の改正というものが、実は今のツーリズムの有り様、特にアウトバウンドの有り様に、ネガティブな影響を与えている気がします。小林英俊先生から、意味をそぎ落とすかたちの観光というお話が何回も出てきました。旅行業法には3つの原則がありまして、1つは旅程管理です。いかに予定した旅行の行程を正確に実施していくかという問題です。それから2番目に、旅程保証というものがあります。これは約束したホテルを使わなかったら、1軒につき旅行費用の1%を返金しなければいけない、約束した飛行機が変わったら2%返金しなければいけないというもの。実に馬鹿らしい、世界では類を見ない旅行業法の規定が出来ました。3番目は保険制度です。旅行業者の責任がある／ないに関わらず、事故が起きた時にはこのくらい払わなければいけないという制度です。現在の旅行業界を縛っている、これら旅行業法のあり方の原点は不逞旅行業者の取締りです。観光の文化的側面をまったく無視して、いかにマス・ツーリズムを安全安心に運行するか。安全安心というのが唯一の念仏になっています。1996年に新しい旅行業法が施行された時に、海外旅行をする人は1,800万人でした。それまでは毎年倍々ゲームのようでしたが、急ブレーキがか

かりました。この15年間で、1,600万人くらいまでに下がってしまったんです。これはなぜかという、旅行業法の不逞業者取締りという観点が前に出すぎて、旅行業全体の手足を縛ってしまったからです。つまり新しいことに対するチャレンジや、質的な旅行の意味をまったくそぎ落とした段階で、安全安心を100%約束したものを渡せばいいという旅行会社だらけになってしまったんです。大中小すべての旅行業者のプランナーは何をやったか。クレームがつくのが怖いので、安全パイだけを握ろうとしました。つまり、大都市周遊型の商品、大規模ホテルの利用、そしてビーチリゾート滞在型の商品といったようなところに落とし込まれてしまった。そして各社の旅行の日程の作り方を見ても、去年やったとおり、一昨年やったとおり、あるいは売れ筋だけ、というようにところに集中していきました。新聞広告を見ておられる方はわかりだと思いますが、10年、15年、20年前とほとんど同じような商品しか出てきていません。結果的に、質的な変化がなければ価格競争に走るしかないんです。だから、29,800円で北海道3泊4日というようなツアーがどんどん出てきて、朝5時に起きて7時にはバスに乗って、夜の5時や6時まで引っ張りまわされて1日500km走る。そして、行った・見た・帰った・くたびれた、もう行かないということになる。日本国内のマス・ツーリズムもそうですが、外国旅行においてさらに同じパターンが繰り返されています。その最たるものが、阪急交通社のトラピックスであり、JTBの旅物語であり、H.I.SのChao!などに代表されるようなメガ・ブランドです。小林英俊先生がもっとも嫌う部分の商品造成ですね。それが現状のマス・ツーリズムのヘゲモニーをつくっています。ですから、私がこの観光創造のテーマの1つに掲げていただきたいのは、マス・ツーリズムの研究です。マス・ツーリズムと言った途端に嫌な顔をされることも多いです。しかし、観光立国や産業論な

ど、経済的な側面からツーリズムのあり方を分析するということでは、現状のマス・ツーリズムをどう質的に進化させていくかという点が重要です。それを迂回していったのでは、ツーリズムの進化はありえないと思います。いろいろな現象をいろいろなかたちで捉えて、あるいはいろいろな切り口でツーリズムを捉えていただくのは結構ですが、全員に押さえていただきたいのは、いかにマス・ツーリズムを進化させるかということです。

そして、私は前から鎖国 DNA という言い方を、いろいろなところでしています。日本人の今の価値観やものの考え方、特に外国との付き合いという場面では、この DNA が顕著に表れます。1640 年の鎖国成立から、実質的には 1964 年の海外渡航自由化までのほぼ 330 年間は、一般の大衆にとっては実質的な鎖国状態にありました。これが、日本人特有の精神構造を際立たせたかたちで作ってきたと思います。この鎖国 DNA をどうするのか、非常に気になっているところです。現在、ツーリズムの総需要の限界があり、それを補うほどインバウンドが伸びないという理由で、日本の旅館・ホテル、特に旅館が赤字経営を余儀なくされています。ほとんどが先が見えないというところまで追い込まれているわけですが、ほぼ 5 割に近い旅館の経営者が、外国人のお客は要らないと言うわけです。これはありえないことなのではと思うわけですが、もういいやという諦めがあるんです。無理やり新しいビジネスを獲得にいくこと、つまり外国人のわけのわからない、面倒くさい人たちを相手にするよりも、もうこのまま旅館を閉めた方がいいと思っている人が 5 割いるということです。これは実に驚くべきことではないでしょうか。これも鎖国 DNA の 1 つの側面だと思うのですが、鎖国が残した遺伝子へのチャレンジという課題は、国際交流の側面からすると、大きなテーマとして残っているのではないかと思います。

以上の 2 点が、特に申し上げておきたいことです。さて、今日の山田先生のお話を面白いなと思いながら伺っていました。その後で、小林英俊先生から人類学的なフォローアップのお話がありました。それを聞きながら、頭に浮かんだ本のタイトルがあります。この中で、ジーン・アウルというアメリカ人の女性を書いた『始原への旅たち』という本をお読みになった方はいらっしゃるでしょうか。実に面白い本です。時代背景は、ネアンデルタール人からクロマニヨン人へ移行する中で、エイラという女性が当時のユーラシア大陸をベースに、だんだん大人になっていくプロセスを描いた作品です。ビルドゥングス・ロマンというか、非常に面白いストーリーです。旅をしながら火の使い方に習熟し、弓矢の技術を身に付け、動物たちを家畜化するということをしながら、彼女はだんだん大人になっていく。まさに始原への旅立ちというところですが、この本を読みながらツーリズムをもう一度、オリジナルなところまで返ってレビューすることがとても面白いと思います。

そして最後に、「一本の指の痛みを全身で感じられる」という山田先生のお話を聞きながら思ったことです。どこかで私が読んだ本で、今の日本の風潮は「今だけ・金だけ・自分だけ」ということになっていると書かれていました。このままだと日本は滅びるという言い方で、それはそうだろうなと思っています。研究会の冒頭で石森先生が話された Lofty Ambition というところに帰っていくんですけども、こうしたループの中で、ツーリズムがだんだんと新しい役割を果たせるようになれば、とてもいいなと思いました。観光創造への新しいこれからの 10 年に向けて、ぜひ頑張ってくださいたいし、及ばずながら若干でもお手伝いをさせていただけるフィールドがあれば嬉しいと思います。

ともあれ、7 年間のこうした機会を与え下さった石森先生に御礼を申し上げますとともに、皆さまにもありがとうございましたと申し上げ

て、私のコメントとしたいと思います。

西山

ありがとうございます。1 つ目のご指摘がマスの研究。マス・ツーリズムをいかに深化させるかということこそ、我々が取り組むべきではないかというご指摘がありました。それから、鎖国 DNA へのチャレンジ。私も先ほど言いかけてましたが、観光立国の目的や将来像とは何かを考えた時、インバウンドで外国人観光客を呼ぶ、あるいは地域の観光事業者の意識を高めることが大事だとよくいわれます。しかし、アウトバウンド、もっと海外に旅行すべきだという政策がない限り、観光立国は成り立たない。はじめからインバウンドばかりになっていて、本当の観光立国の半分しか考えていないという危機感は私ももっています。それから、石森先生がおっしゃる「世の為、人の為」。こうした大きな方向性を、この研究会としても常に見失わないようにというご示唆を頂きました。

それではここからは、すべての共同研究員によるフリー・ディスカッションを行ないたいと思います。今後の研究会の進め方や、こういうテーマにもっと着目してやるべきではないかなど、自由なご意見を頂きます。真板先生や石森先生などからお話いただいた、価値や仕組みづくりという大きなテーマもあります。また、もう少し具体的に、次回からどのような研究会を展開するかということもお話しいただきたい。ちなみに、申し上げましたように、できれば年度内にもう一度この研究会を開催したいと思います。今回は第 0 回ですが、第 1 回は私の責任でテーマを決めなければならないと思っております。しかし次年度以降は、共同研究員の先生方が、こういうテーマでやりたいと手を挙げていただいて、内部だけではなく外部からも人を呼んでいただく。コメントを頂く研究員の方も、学内外からお呼びして展開したいと考えております。皆さまの「こんなテーマでやりたい」と

いう自分のことでも結構ですし、他の方のことでも結構ですし、自由にディスカッションできればと思います。

また、この研究会で言い残したことがあるという内容でも大丈夫です。少しは私が申し上げたことについてもコメントを頂きたいのですが、どうぞ自由にご発言ください。

西川

私はちょっと視点を変えてお話しします。観光創造専攻ではただいまカリキュラムの見直しを進めています。演習科目を価値共創、地域協働、国際貢献という 3 つのグループに分けようというものです。先ほどから議論いただいていることは、我々の研究だけではなくて、教育にも直接還元できるものであろうと考えております。ひいては、観光創造士という、次の世代に我々の理念・考え方を受け継いでいくようなシステムの構築・構想にも関わってくるのかと考えています。

西山

観光創造士に関しては、先ほど臼井先生から、高いフェイズで話せる人ではなくて、免許証のような基礎的な知識の証明でもよいのではというお話がありました。一方で小林天心先生からは、実際に世の中の観光を良くしていくためには、マス・ツーリズムを正面からいい方向に向けていかなければいけないというお話がありました。このお話と、観光創造士の基礎的な能力の話は、実は関わってくるように思えます。

臼井

もう 1 つ、私なりにずっとこの観光という舞台に関わった中で、取り上げなくてはいけないなと思っていることがあります。今のマス・ツーリズムのお話にも関わりますが、キーワードでいえば「アーバン・ツーリズム」です。私は来年の 4 月から、小規模住宅が重なる地域で

暮らし始めるわけですが、そうした都市にはやはり人がたくさんいます。また、都市住民は都市住民として、ツーリズムの範疇に入らないかもしれませんが、どうやって楽しんで生きていくかと日々苦勞しているわけです。私自身も、地域というキーワードを大切にしてきましたが、都会の人たちが都会の中でどう暮らしていくのかという観点があります。遠くに行くツーリズムだけでなく、都会の中で楽しむツーリズムという部分は、今まではあまり意識されてきませんでした。山田先生の研究分野と重なる部分もあるのかもしれませんが、真正面からその問題を捉えないと、これだけ都市住民が多い日本の中でツーリズムを語れないのではないかと思います。

西山

観光創造士、あるいは今展開しつつある話題で、ご意見のある方はいますか。

山田

西山先生の体系化の議論についてです。昨日、山村先生がコメントされましたが、上の3つは現象分析ではないかということでした。私には、下の3つは設計、上の3つは企画、そういった社会の仕組みづくりを目指しての研究に見えるんです。非常に重要なのは、これらの背後にある現象、現在の社会がどうなっているのかという、社会現象についての分析です。今回の発表では、石森先生が1860年の第1次観光革命から観光が社会現象としてどういう経緯をたどってきたかということをお話しされました。西川先生からも、近代が始まり現代に至るまで、私たちの世界の見方がどう変わってきたのかというお話がありました。私も少しだけですが、戦後日本のことについてお話しさせていただきました。当然、マス・ツーリズムが盛んであった近代と今では社会情勢がまったく違って、人びとの価値観が異なる。その中で新しい価値

を生み出そうとしたときに、今求められている、あるいは将来に必要な価値とは何なのか。価値の意味が変わってきているということ、やはりもう少し確認する必要があるのではないかと思います。

近代においては、共同幻想としての国民国家や科学技術が人々の間でリアリティをもっており、政治にしてもある種の共通前提が共有されていたといわれます。しかし、近代も後半になると、近代的理念のリアリティも薄れてきます。たとえば、歌はかつて世相を反映していましたが、今や紅白歌合戦にしても家族みんなが観て楽しめる番組ではなくなった。近代的な価値が相対化されて、価値観が多様化しているのが現代です。伝統的な価値がだんだん失われているという、先ほどの真板先生のご指摘はその通りだと思いますが、それではこれをどうやって後世へと継承していくのか。これは、観光創造研究にとって非常に大きなテーマだと思います。たとえば趣味縁のお話がありましたが、趣味縁でつながる若い人たちが、その関係を長く続けることはおそらくありません。その一方で、彼らは複数の趣味縁に所属して、時と場合で関係を使い分けるといった生き方をしているわけですね。そういう友達関係を、今の若い人たちは重視して生きています。こうした時代の変化の中で、価値の共有も近代とは異なる形を取らざるを得ないかもしれません。価値とはそもそも何なのか、価値を継承するとはどういうことなのかについて、根本的なところで問い直すことが重要になると考えています。

敷田

方法論のお話が少し出ましたので、連想してお話しさせていただきたいと思います。古典的な社会科学の方法論だと思いますが、方法論は無限にあるわけではなく、ある程度限られています。それに賛同される先生方は多いと思います。山田先生がおっしゃった、社会を説明する

ような分野というのは、おそらく実証的な社会科学 positive social science でしょう。経済学などが得意とする、データに基づいて現象を説明していくことだと思います。観光の分野では、このデータを取れる範囲が限定され、データですべてのパターンを一般化することが非常に難しいので、おそらくモデルを作るということが、観光分野では旬な仕事になっていくと思います。

一方で、今日の午前中の発表に多かったように、意味を説明するという解釈的な社会科学があります。数量的な説明ではなく、解釈を指向するものです。このように、2つの方向性は違うのですが、3つ目のアプローチもあります。批判的な社会科学 critical social science といえいいのでしょうか。これは批判するだけではなく、社会的課題を解決することを目指す社会科学でもあります。このような、実証的、解釈的、批判的という3つの社会科学のアプローチは、おそらく観光研究の分野でも成立するのではないかと考えています。ただ、これが観光創造学の体系化と直接にはつながらないという問題がありますが、整理の一助にはなると思います。

続いて、少し別の見方を紹介します。私はたまたまこの2年くらいの間で、お医者さんとお付き合いが深くなってきました。その時に一番よく考えてきたのは、医療のシステムと観光のシステムは相似形であるということです。よく考えてみますと、医療サービスと観光サービス、患者と観光客という関係には非常に類似性があります。たとえば、私たちは医療サービスを病院に受けに行ってそれを消費して帰ってきます。もちろん、違いもあります。観光サービスの場合は必ず戻ってきますけど、医療サービスは戻ってこないかもしれません（笑）。もう1つは、医療では身体を扱うのですが、観光では身体や皮膚の外、つまり考え方や行為を主に扱うという差があります。こうした差はありますが、医療と観光は非常に似ているので、観光創造学の

体系化の議論で、先行している医療の体系化を参照する必要性があるのではないかと考えています。

観光創造学、観光創造というものを突き詰めていくと、もう1つ生じてくる問題があります。観光創造のことを一生懸命に議論しているときに別の見方を提起するのは、多少申し訳ないところもありますが、お話しさせていただきます。医療の例で考えますと、「医療創造」といった場合に、皆さんは「創造的な」医療をサービスとして受けていますか？私はNOだと思います。私たちが受けてたいのは primary care といって、一次医療、つまり町医者が安定的に行なう医療サービスです。これは、小林天心先生が先ほどおっしゃったマス・ツーリズムにかなり近いものです。それが基本的なニーズであると思います。ただし、それで解決できない医療のケースもあるので、2次、3次……と、国際的なレベルの医療を受ける選択肢もあるだろうと思えます。では、我々はどのレベルの観光創造を提案していくのか、それを誰に対して提供していくのかということを確認しないと、おそらく観光創造学の体系化が出来たとしても、それを受けたい、見たい、体験したい、学びたいという人に対しての説明が不十分になる可能性があると考えています。この点を整理するのはいかがでしょうか。

関連した内容を申し上げますと、医療というのは、本来は自分の持ち物である身体に他者の介入を許すことです。自分で自分のお腹を切るとは医療法で禁止されていますが、他者には切らせることができるという不思議な仕組みで、観光も同じように他者への関与を正当化していく1つの手段という性質があります。人の所へ勝手に入っていくって許されるのは観光だからであり、ひとつ間違えれば犯罪になりかねないことも、観光だからといってかなり大目に見てもらっている。これは医療行為も同じで「医療行為だからこれは食べてはいけない」とお節介を

働くことができる社会の仕組みだと思います。このあたりのことも考えていかなければいけないと考えています。もちろん、こうした特性は医療行為だけではなく、たとえば格闘技、戦闘などの類似行為はあると思います。しかし、きわめて私たちの身近にあって考える参考になるのは医療の問題ではないでしょうか。

つきましては、次の研究会をどうしたいのか。出来るとしたら、お医者さんに来ていただいて、医療の歴史と最新動向について基調講演していただいた後で、観光の議論をすると、ダイナミックな議論ができるのではないかという無謀な提案をさせていただきます（笑）。

池ノ上

体系化の話に関連させて話します。小分類に位置づけられている「ライフスタイル・イノベーション研究」は、むしろ全体にかかわる研究ではないでしょうか。「ライフスタイル・イノベーション」に含まれるであろう、社会の仕組みや人びとの生き方は、観光まちづくりではむしろ観光研究における大前提であると思います。同じ並びになっている「地域イノベーション研究」では、このような前提に基づいて、地域はどのようにイノベーションをするのか、まちづくりをしていくのかということを考えます。

山田先生からは、現象を捉えるという基礎的な観光創造研究というお話がありましたが、私の言いたい前提というのはこれに近い考え方かもしれません。つまり、大分類の「観光イノベーション研究」と「観光デザイン研究」とは別に、前提としての「ライフスタイル・イノベーション研究」があるのかなと思います。

もう1つはデザインという言葉の使い方についてです。私は、九州芸術工科大学で学んでおりました。そもそも九州芸工大は梅棹忠夫先生が設立メンバーに入って、1960年代になって出来た新しい大学です。もうすでになくなってしまったのですが。その九州芸工大では art と

technology とを融合した言葉を design として表現していました。art と technology の語源はもともと一緒だといわれますが、もう一度この2つを一緒に考えようと。人の考え方や理念を表現する art と、近代において工業や大量生産のシステムに結びつく概念である technology を、人を中心に捉えることで学問としてもつなぎあわせようという試みです。そう考えると、デザインは単なる技術やシステムではなくて、理念や論理を前提にしなければいけないのではないのでしょうか。西山先生の体系化試案では、理念、論理や世の中の現象などを前提にする構造にはなっていないので、そういうカテゴリーを一番上に1つ作るのがいいのではないかと思います。

山村

私も池ノ上先生と似たようなことを考えていました。小林英俊先生が、体系化試案の上の部分（「観光イノベーション研究」）と下の部分（「観光デザイン研究」）をつなぐ何かが必要ではないか、とおっしゃいました。これがずっと私の頭の中に引っかかっていた。私は、上は現象を分析する分野で、下はデザイン・応用分野ではないかと考えていました。しかし、先ほどからの各先生のご発言を踏まえると、上は理論や現象を分析していく部分で、下はそれを地域に応用するコンサルティング的な部分になるのかなと思います。そして、両方をつなぐもの、基礎になければいけないものは、「人間」という分野ではないかと思いました。今日の先生方のご発表の中で、いくつか関連するキーワードが出てきました。宗教、道徳、理念、倫理、思想、神、死、巡礼、聖なるもの、他者との関係性…つまり、人間にとって観光とは何かという議論が、非常に重要だと改めて気づかされたわけです。振り返ってみると、これまでの観光学がなぜ良くなかったのかといえば、人間不在の観光学だったからではないかと思っています。それに対して、我々はあくまでも人間中心の観光創造

学を作るべきではないのかと強く感じました。今後目指すべき方向としては、関連分野、あるいは一見関連しないような分野を統合していく中で、その接点を見いだすことを通して、人間にとって観光とはどんな意味をもつのかということをしっかりと考えることではないでしょうか。こうした考察をコアに置いた上で、現象を分析し、かつそれを応用的に確認するというアプローチを取るべきではないかと。間をつなぐというよりは、池ノ上先生がおっしゃるようにベースとなる部分であるのかもしれない。

それからもう1点お話しします。先ほど真板先生と山田先生から、価値に関するご提言がありました。これは私も非常に重要なことだと思います。価値について我々がアプローチすべき方法には2つあります。1つは、我々自身が研究を通して目指すべき価値というものを先駆けて掲げていくというものです。もう1つは、実際に現場で起きていることを価値づけるというものです。事実は小説より奇なりと申しますが、今の現場で新しく生まれてくる価値が、我々の学問分野では想定しえなかったところで、1つの答えを出しているのかもしれない。そういうものを丁寧に価値づけていく、つまり我々が説明をしていくという作業が必要になるのかなと思っています。

たとえば先ほどの趣味縁の問題があります。趣味縁の儚さ、持続性のなさという特徴は確かにあると思います。しかし現場を見ていると、趣味縁の儚さにすでに気づいている若者たちがいます。こうした人たちが、具体的な場所や地域につながりはじめています。小規模ながら、そこに新しい動きが生まれている例があるわけです。それを我々なりの評価をしていくことで、何らかの新しい形が見えてくるのではないかと。そして、昨日小林天心先生から問題提起いただきました、ポピュラー・カルチャーとトラディショナル・カルチャーの関係性の問題。趣味縁の中から新しい文化が生まれてくるかもしれま

せんが、それを今後の文化遺産にしていくためには、どういうプロセスと仕組みが必要なのか。その際に重要なのは、人そのものと、文化を育てていくインキュベーターとしての場所です。これらが実は、ツーリズム研究に課せられた重要な課題になると思います。

そして創造性に関して、創造都市論でよく提起されることとして、創造性を担保するためには多様性が必要であるという考えがあります。cultural diversity がそもそも必要であり、そしてそれを受け入れる寛容性が大事である。このあたりも重要な論点になってくると思います。先ほど小林天心先生からも鎖国 DNA というお話がありましたが、とりわけ日本では社会の閉鎖性といいますか、自分たちの中に閉じこもるという性格が強いと私も思っています。その中で、コミュニティの閉鎖性を打破する仕組みとしてのツーリズムというものを考えていく必要があるのではないのでしょうか。そもそも bio-diversity の観点では、たとえばサルの集団では、若いオスザルはコミュニティを追い出されてよそに行くわけですね。それが遺伝的な多様性を担保するために、自然に生み出されている仕組みであり、そのアナロジーとして cultural diversity というものを、いかにツーリズムを通して認められるようにするか、そこから creativity を生んでいくのかという創造論も重要かと思っています。

西山

ありがとうございます。この分類表は叩き台に過ぎないので、よりよい形にしていければと思います。ぜひともお考えいただきたいのは、これが「研究」の体系化であるという点です。基礎研究が必要だからといって、「基礎研究」とこの表に盛り込むのか否か。たとえば大分類の「観光デザイン研究」はまさに実践そのものであるようにみえながらも、それは単なるコンサルティング的な仕事ではありません。つまり、

ここで研究をしなくてははいけません。実践は研究の手段であるともいえます。もちろん社会の要請を受けての実践という意味では、実践には違いありませんが、ただ言われてやるなら、コンサルタントに頼めばよいということになります。研究として何をやるのかということ、くれぐれもお考えいただきたいのです。排他性、つまり研究の次元や具体的なフィールドの次元で、それぞれ行なうべきことが重ならないかが重要です。「人間とは何か」を考える基礎研究、またはマス・ツーリズムの研究を試案に盛り込むと、どんどん柱ばかりが増えてしまいます。増やしていく方向よりも、より排他性を確保しつつ、どこでどのような研究を行なっているかがわかる。具体的に何の研究をするのかということと連動していきながら、ぜひこれを組み替えて、体系化にチャレンジしていただきたいと思います。

池ノ上

そういう意味では、大分類に「観光創造論研究」のような言葉が入るかもしれません。皆さんでもう少し議論しないといけないかもしれませんが、小分類に入っている「ライフスタイル・イノベーション研究」のようなものは、そこにプラスされるとして分類表に入ってもいいのではないかと思います。

イノベーション研究そのものは、ツーリズム産業イノベーションと、地域イノベーションに区分できるかと思います。この2つは現象を見ているというよりは、むしろどのようにイノベーションを起こすかという戦略を考える研究ではないかと。

西川

考え方は多様な方がいいと思い、あえて申し上げます。池ノ上先生がおっしゃった、それぞれの領域の「理念」の部分については、それらの領域の中に含み込められていることを、我々

自身が前提としてもいいのかなという気もします。西山先生のお作りいただいた表の土台になっているのは、自律的観光の枠組みということだったと伺っています。そう考えると、観光創造学が総花的になってはまずいのだろうと思います。私も観光という現象はまったく多様であると思うのですが、ある意味での Lofty Ambition をもちつつ、総花的にならずに我々の軸足をどこかに据えてやっていくというような合意が、ある程度できればいいのかなと思います。

さて、少し細かくなりますが、西山先生の表では小分類の一番上のところで、カッコ付きで「都市民の」レクリエーション研究とありますが、なぜ都市民なのかという疑問があります。

西山

きちんと説明しきれていなかったのかもしれませんが。カッコの内は、かつての研究分野の名称です。たとえば、都市民の余暇レクリエーション研究というのは1960年代からずっとありましたが、今はこれを研究とするという言い方すらない。いまやライフスタイル・イノベーションという研究に発展してきているという意味で、イコールという意味ではまったくありません。同じように、地域イノベーションがまちづくり研究だという意味ではないです。

小林（英）

西川先生のご意見に賛成です。基本は人間研究をしなければいけないという池ノ上先生のご指摘はその通りです。しかしそれは、観光創造を研究する者にとって共通の話ではないでしょうか。石森先生が観光創造という名称を付けられたのは、何々を創造しようという意味、つまり観光そのものをどう使うかという意味だと理解しています。人間研究と言ってしまうと、すべての分野に関わりが生じます。ですが、ここで西山先生が考えられたのは、「何々を創造する」

ということを見えるようにしようということだと理解しています。ですから、基礎として人間とはそもそも何かという話を研究しなければいけないとなると、話題がどんどん拡散してしまいますので、こうした形の方がわかりやすいかと思います。

さて、現象を分析するというのは非常に重要ですが、今の観光研究の多くは現象の分析で終わっていることが多いですね。我々としては、現象の分析で終わってしまうような分析はやめた方がいいと思います。問題発見、問題解決が創造につながるのであって、レビューをして、表にして綺麗に見せることはできても、創造というところにはなかなか至らないだろうと思います。我々が観光創造学でやろうとすることは、問題解決なんだという方向性を、共通認識としてもっていた方がよい。研究していくものの意味が出てくるのではないかなと思います。つまり、最後はこれをもって観光の何々を創造しようとしているのだというストーリーの中で現象を分析するのはいいのですが、現象分析を専門にしてはいけないという意味です。

山田

小林英俊先生はあえておっしゃってくださったと思うのですが、現象分析とは、単にデータをとって検証するだけのものではありません。今に起こっていることを、正しくその時代の社会的文脈の中に位置づけるという試みです。重要なのはその視点であり、その中で新しい何かが発見されていくということなのではないかと思っています。

この話に関連させますと、小林英俊先生がサスティナビリティのプロセスをご説明くださいましたが、私もその通りだと思います。現代では、新しい消費化の流れが生まれていますし、山村先生はそうした分野を研究されています。昨日のご発表では、どんなコンテンツが日本のサブカルチャーの中で重要なのか、あるいはど

んなコンテンツが国際的に評価されているのかというお話もありました。私は、現在のコンテンツをめぐる現象を、よりダイナミックにとらえる必要があると考えています。どういうことかという、コンテンツ自体よりも、コンテンツをめぐる n 次創作、つまりコンテンツをみんなで共有して作り変えていくという活動、すなわちコンテンツをネタにしたコミュニケーションが盛んになってきています。国際的評価として受容されているのは、まさにこの新たなコミュニケーションの仕組みです。コンテンツをめぐる n 次創作、コミュニケーション自体に、世界の若者たちが興味をもって参入してきているという実態があります。やはりこういった新しく出現した現象を、より深く掘り下げていくということが必要で、たとえばこの考察から価値の持続性についての新たなコンセプトが生まれてくるのではないかと思います。

西山

少し話を戻して申し訳ないのですが、そもそもなぜ観光創造学を体系化するのかというお話をします。昨日、建築学と観光学に関する科研費の表をお見せしました。建築学の場合は、建築学会の中の構成をそのまま表しているんですね。ですから、もし観光創造学会というものを作って、それぞれの専門分野をもつ人が一定程度の役割分担をしていきながらその学を構成していくと考えた時に……という現実的なことを念頭に置いてこれを作りました。これは整理上の体系ではなく、あらゆる観光研究者が排他性と横断性の双方をもちながら、どの区分からも溢れない枠組みをつくれないう意味で作ったということもご理解ください。

私は、科研費における観光研究の分野が情けないのです。情けないというのは、つかみどころがなく、今の時代の観光分野で使われているキーワードがただ並べられているだけに見えるのです。「あなたたちはまだ全然体系化されて

いないから、どこの芽が出るかわからないけど頑張ってるね」と言われているように見えるんです（笑）。1つのものの見方として、何度も申し上げるとおり叩き台として出したものなので、ぜひ対案を出していただいて議論したいと思います。その時に初めて、どのような理由のもとで体系化に関する基本的なシステムを構想しているのかについて議論していくことが大事かなと思います。その意味では、敷田先生が医学のお話をしていただいたのは非常に大事なことです。そういういろいろなものを参照しないといけないと思います。私は建築学にしましたが、それは偏った見方かもしれません。また、この研究会だけではなく、もう少し日常的に学内でも議論していきたいと思いますので、よろしくご協力いただければと思います。

今後の研究会のキーワードとしては、観光の価値の問題、継続する仕組みの問題、人を育てる問題、マス・ツーリズム、アーバン・ツーリズム……こういうものが出てきていますが、他にご提案のある先生はいらっしゃいますか。昨日今日と、非常に議論の盛り上がったコンテンツ・ツーリズムについてもテーマになりうると思いますが、山村先生や鎗水さんいかがでしょう？

山村

機会があればぜひ次年度、コンテンツ・ツーリズムで研究会を出来ればと思います。そもそも、昨日もご意見がありましたが、コンテンツ・ツーリズムという呼び方は、我々が発信する概念として適切なのかどうか。もっと本質的な意味を捉えた上での体系化が出来れば、それが一番いいのではと思っています。

先ほど山田先生からご指摘がありましたが、我々が今後扱っていくべきは、今回の研究会で出てきた言葉でいえば、新しい価値の創造と継承、ストーリーの共有などです。コンテンツを共有することで、人びとにどんなコミュニケー

ションや交流が成立しうるのか、そこをフォーカスしていくべきではないかと思います。今の時代においては、インターネットなどを用いた2次創作、3次創作が早いスピードで広まるようになっていきます。しかしツーリズムの本質は、文化資源や地域のもつストーリーをいかに共有して大事にしていけるのか、今までつながらなかった人たちがつながっていけるのか、ということではないかと思っています。昨日の言葉でいうと pop cultural なツーリズムをスタート地点にしながらも、たとえばヘリテージ・ツーリズムと共有できる部分はないのか。私の頭の中では1つの筋が通っているように感じるのですが、まだ上手く説明できずにいます。そういった意味での汎用性をもった、普遍的な議論に進化させる機会を頂ければなと思っています。具体的には、今いろいろな分野で、コンテンツ・ツーリズムと称する研究を始めている方々を呼んで、この場で意見を拝聴し、理解を深めていければと思います。

鎗水

コンテンツ・ツーリズムについてということでお振りいただきましたが、これまでのお話を伺っていて、コンテンツ・ツーリズムとは関係のないところで、今は純粋に学生という立場で参加しているのは私だけになりので、ちょっと学生の立場からコメントさせていただきます。

観光創造学の体系化というお話を伺っていて、大変おもしろい、興味深いお話だったのですが、博士課程の学生としてどう自分の立ち位置を見つければいいのか、なかなか難しいところだと思いました。既存の観光学がちゃんと体系化されているのかはよく分かりませんが、その中に今から立ち入っていかなければいけないのは学生の立場にいる人間です。今から「博士（観光学）」という学位を取得したとして、そこからこの学問の世界でどう身を立てていけばいいのか。観光創造学というものと今までの観光学の間に

ひずみ・ねじれがあり、ある意味では一番それを体感する立ち位置にいるというか、その最前線にいるのが、この博士課程の学生なのではないでしょうかという気がしています。この学院で学ぶ学生として期待もあると同時に不安もあるというか、いったいどうすればいいのかなというところです（笑）。大変勝手な意見を思い浮かべて聞いていたのですが、現実的な問題としてそういったところも考えながらやっていければと思いました。

西山

まことにその通りで、鎗水さんが納得できる議論をしていかねばならないわけですね。ただ、観光創造専攻を立ち上げるときに、石森先生が趣旨に書かれた一節があります。そもそも観光創造学というディシプリンはない、あらゆる分野の学問を総動員して……と。先ほど池ノ上先生がお話しになった九州芸術工科大学の環境設計学科でも、同じようなことを言っていたんです。募集要項に、「建築学でも農学でもない、環境設計学というものを作るのはあなたです」という書き方をしているわけです。学生がその中で新たな環境設計士というものを確立するという言葉は、非常に格好いいのですが、それを背負わされた学生はなかなか大変という面もあります。まだ観光創造専攻は始まって10年経っていないという中で、鎗水さんが不安になるのも仕方がないし、鎗水さんも待っていては間に合わないということとは思いますが、逆に言うと、そういう創造期に参画できているということ面白くも思ってもらいたいです。ただし、我々でも将来無くなってしまうことのないようにしなければいけません（笑）。まさに持続性をどう担保するか。創造的な研究を行なう中で結果的に持続するということを、私たちが議論していかなくてはいけないと思います。

西川

かつて少しだけカルチュラル・スタディーズを研究したことがあります。カルチュラル・スタディーズでもまったく同じような議論がありました。ある研究者は彼らにディシプリンが出来てはいけないんだと言います。つまり、既存の学問体系に見られるような囲い込みや、既得権益づくりにチャレンジするのが、カルチュラル・スタディーズのそもそもの意義であるというふうに彼らは考えています。観光創造というものも、おそらく似たような要素を含んでいると思います。だからこそ、観光にとっての価値は何なのか、価値を創りだしていく、我々が見いだしていくという議論の場にいることこそが、観光創造の意義なのかもしれません。昨日今日とこのような場にいることに、私自身も興奮していますし、観光ルネッサンスという意気込みを新たにいたしました。私は観光創造専攻の入試説明会などの場で、「とにかくここで何かが起こっているということだけは確信をもっている」と繰り返し言っています。逃げるわけではありませんが、ぜひそういう意識をもっていたきたい。学生の皆さんも、不安な気持ちと闘いつつ、その不安を私たちと共有しつつ、協働関係を大切にしてやっていければと思っています。

麻生

私は世界遺産や文化財、景観の研究をしてきました。白川村にずっと関わっていますが、文化遺産の限界、閉塞感のようなものを感じることがあります。

山村先生は中国雲南省の麗江の研究をされていて、そこから更に発展してコンテンツ・ツーリズム研究を進めていらっしゃると思います。今回の山村先生のお話を伺っていて考えたのは、文化遺産を資源とした観光は、人びとは文化遺産、つまり「本物」がある地域を訪れて観光します。それに対し、コンテンツ・ツーリズムは世界中どこでも価値を共有できる自由度があるように

思えます。そのような簡単なことではないかもしれませんが、コンテンツのもつこうした可能性と、今の私がもっている閉塞感に関係性があるのか気になります。こうしたテーマも研究会で議論をできればいいのなと思いました。

山村

今の麻生先生のご指摘は重要で、私も常々考えていることです。私は、価値のコアは場所や地域がもつ「本物」であるということは共通していると思います。ヘリテージ・ツーリズムとコンテンツ・ツーリズムの違いは、その入口とアプローチの仕方です。これは私の解釈ですが、ヘリテージ・ツーリズムは昔のものを見に行く、そして究極的には今そこに生きている人びとを理解するというベクトルにあります。入口は昔にあって、それをいかに今に引っ張ってくるかということですね。コンテンツ・ツーリズムは逆です。今流行しているものを入口にしながら、どうやってその地域に結び付けて、その地域がもっている一番大事なもので引っ張っていいのか。その大事なもののゲートとアクセスのチャンネル、つまり、どこからどうやって引っ張っていくのかという手法の問題に集約されると思っています。実は、その議論はコンテンツ・ツーリズムでもできるのではないかと。具体的には、Outstanding Universal Valueなどの価値へのアクセスの問題、価値へアクセスするためのメディアの問題、そしてそこにどのようなコンテンツや情報が乗るかという問題。私が常々考えていたのは、ヘリテージとは古いものですよね。リビング・ヘリテージではない場合ですが、古ければ古いほど今を生きている私たちとの間にギャップがあって、なかなか自分のこととして理解をしづらいと思うんです。それをどうやって自分のこととして共感させられるのか、その仕組みをずっと麗江で考えていました。今はまったく逆のベクトルではあるのですが、昔からのアプローチと今からのアプローチの接点

を考えたいという思いがありましたので、ぜひ次年度の機会があればと思います。

西山

ありがとうございます。時間も迫ってまいりましたので、まとめていきたいと思います。いろいろなキーワードを頂きましたし、今の山村先生と麻生先生のやり取りの中からも、今回の研究会の1つのあり方を示唆していただけたと思います。

ちなみに私は、年度末に第1回目の研究会をやるとすれば、発表者がどういう方になるのかは別として、コミュニティ・ベースド・ツーリズムがテーマかと考えています。コミュニティというものは私たちみんなに共通するテーマであり、これをキーワードに出来ないかと思っております。またいろいろ先生方にご相談したいと思います。

最後に、石森先生にコメントを頂きたいと思っています。

石森

皆さん本当にありがとうございました。皆さんのお話を伺いながら、昔のことをついつい思い出してしまいました。2005年9月15日に、北大の言語文化部長、企画部長と東京オフィスの所長の3名が民博に来られて、北大に大学院を創りたいので協力してもらいたいというお話を受けました。その背後では清水先生が精力的に情報収集役を務めておられたので、清水先生は大学院の生みの親のようなところがあります。それで、10月上旬にこちらに参りまして、当時の中村総長や副学長や事務局長、今いらっしゃる宮下先生、山田先生、西川先生、清水先生ともお会いしました。そして、いろいろな段取りが出来て、CATSを創設させていただきました。

今でも覚えていることがあります。2006年4月1日に着任する前、2006年3月25日に文部科学省に呼び出されました。その時から北大と

して大学院の創設準備をしていたのですが、専攻名称は観光学専攻でした。私は観光創造専攻を提唱していたのですが、当時実際に準備を進めておられた幹部の先生方はあくまでも観光学専攻が妥当であろうと判断しておられました。そんな中で私はまだ北大の教員ではありませんでしたが、何度も文科省との事前協議に同席しました。文科省の担当官は観光学専攻の大学院構想案に対して、「これで北大は本当にいいのですか？」と何度もおっしゃった。文科省は北大に対して高い期待をもってくれていました。旧帝大の一つが観光学を制度化しようとすることを評価してくれていたわけです。しかしその段階では名称は観光学専攻であり、これでは立教大学の大学院と同じではないかというわけです。「観光立国政策が本格化する中で、北大として本当にそのような構想案でいいのですか」と、2時間半にわたってかなり厳しく問題点の指摘がありました。私は担当官の厳しい指摘を聞きながら、おっしゃるとおりだと思っていましたが、私の横には北大の幹部の先生方にいたので、なんともいえない立場でした。そのときに宿題ともいえるたくさん問題点を指摘され、事前協議を終えて、別室に戻ったときに幹部の先生方は「書類提出までに3ヶ月しかないけれども、大丈夫ですか？」と言われました。その年の6月末に設置審議会へ書類を出さないといけないためです。そこで私は「だからこそ私が北大の専任教授として招かれるので、今後は私に任せてください」と言い切りました。

2006年4月に北大観光学高等研究センター長に就任してから、まずはじめに専攻名称は観光創造専攻にすべきであると主張しました。そうすると、例の幹部の先生方は「日本観光創造学会はありますか？」と質問してきました。要するに、観光創造学会もないのに、大学の専攻として認められるわけがないと強く主張されました。それはまあそうだろう、だけど現実になんもないものはない（笑）。されど、現代日本において

一番必要なのは観光創造であり、それを担う人材を育てることこそが大切であると主張しました。

さまざまな議論の末に、危険な賭けではあるけれども専攻名称を「観光創造専攻」にして書類を完成させて6月末に提出しました。8月末くらいに設置審議会の事前審査結果が届きました。幸いにもほぼ100点満点の評価でした。そして早くも9月20日に認可が下りました。これも極めて異例な早さでした。

このように、観光創造専攻は非常に大きな期待を受けて創設された大学院です。最初はよちよち歩きでしたが、今日ここに、これだけのメンバーが集まって、高度なレベルの議論がなされているのは本当に素晴らしいことです。

ただ、いまだに観光学に対して強い偏見があります。山村先生は、コンテンツ・ツーリズム研究を推進しておられますが、いろいろな誤解を受けていると思います。いま小樽ではロリカワ観光が盛んになっています。私自身にとっても、すぐに理解が可能ではありませんが、いずれにしても観光をめぐる世界は大きく変わりつつあります。

山田先生は、巨大な転換の時代が到来していると指摘されました。ポスト虚構の時代、拡張現実の時代であり、社会は様々なカタチで大きなうねりを受け、転換点を迎えています。その中で、今後、観光をいかなるカタチで発展させていくのかという課題が重要になります。

小林英俊先生のご指摘にもありましたように、観光業は日本標準産業分類の大分類にはありません。産業として大分類されていないということは、国家の産業政策において不利なことです。実はこの点は日本の観光立国政策において根幹に関わる問題です。だからこそ、白井先生が指摘されている「触媒としての観光」という視点が重要になります。北大における観光創造研究も、触媒の役割を果たして新たな価値を生み出す必要があります。

西川先生や清水先生などからご指摘がありましたが、新しい自己との出会いという面も大切です。私は昨日、「開発（かいほつ）」「発光」という話をしましたが、一人の個人として考えた時に、観光を通して人間が変わるということがありえます。

国のレベルでは、観光立国という課題があります。私は 2003 年に観光立国懇談会のメンバーの一人として首相官邸に呼ばれて、観光立国の理念を起草しました。当時の小泉純一郎首相は観光立国懇談会の提言を受けて、2003 年 7 月の国会における施政方針演説の中で観光立国宣言を行いました。それから 10 年が経ちました。私はいま、日本はもはや「観光立国」ではなく、「観光創造立国」こそを推進すべきであると提唱し始めています。

北大の観光創造専攻が生み出すものには多重的な意義があります。ただし、私はすでにセンター長を西山先生にバトンタッチしたので、とやかく言える立場にはありませんが、年長者として感じるがあります。今後の CATS と大学院観光創造専攻は、一方でアカデミックな業績を積み重ねていくはずで、この点は今回の皆さんの議論の中で明らかになっています。もうすでに多くの学術的成果が生みだされていますし、今後いろいろな成果が北大の観光創造研究グループから出てくると確信しています。

しかし、もう 1 つの重要な方向性があります。それは社会貢献、地域貢献、産学連携などがあります。今後このような方向性をいかに進めていくか、という点も重要になります。中国の大学においても観光学が展開されはじめています、清水先生がお話してくださいました。ただそれが欧米風の観光学であって、中国なればこそその観光学ではなさそうだということでした。現在、アジアの中で観光学分野でのナンバーワンは香港理工大学です。欧米の大学でホスピタリティ・マネジメント、ツーリズム・マネジメントやホテル・マネジメントなどで博士号を取得

した教授陣が頑張っておられる。そこでの観光学研究・教育は、アジアの大学でありながら、ほとんど欧米流のようです。

そういう状況の中で、北大の観光創造学は、アカデミックな面はもちろんのこと、アカデミックな成果をいかに社会貢献や地域貢献や産学連携などの面でも役立てていくかという課題に取り組んでいく必要があります。「世の為、人の為」などということをやあまり軽々に言わない方がいいのですが、私はいつも観光創造学が「世の為、人の為」の学問になりうるか、ということをや自問自答し続けています。

私はこれまでに数多くの新しいコンセプトを提起してきました。例えば、観光革命、文明の磁力、観光ビッグバン、自律的観光、宗教と観光のホモロジー、ライフスタイル・ツーリズムなど、少々大仰な提起の仕方をしてきました。その理由は、日本における観光があまりにも軽んじられ、蔑視され続けていることに対するアンチテーゼのような意図で提起してきました。北大の観光創造学についても、日本の保守的な学界の中で頑張らないといけないので、アカデミックな面で業績を積み重ねると共に、社会貢献、地域貢献、産学連携などの面でも頑張らないといけません。

今回の西山先生の体系化の試案の中でも、観光イノベーション研究と観光デザイン研究が分けられています。観光デザイン研究の方が実践的と捉えられますが、この点については、文科省や観光庁はとくに今年度になって、北大の提唱している観光創造士制度について高い関心をもってくれています。ここにおられる先生方にも、ぜひとも北大として文科省と観光庁の期待にどう応えるかということを考えていただきたい。観光創造学について、アカデミックな面とノン・アカデミックな面の両面で、北大としての特色を打ち出していく必要があります。

と主張することは簡単ですが、実現していくことは簡単ではありません。アカデミックな面

で観光創造学という新しい学問領域を確立していくことは容易ではありません。同様に、実践面についても、西山先生は九州大の頃から教えておられ、麻生先生の先ほどのお話の中にも実践の問題がありました。実践に力を入れていると、時として心が折れることがあります。現実というのは甘くないので、実践の裏付けとしてアカデミックな理論づけをしながら、されど地域の人々と協創していくことが大切になります。

観光創造学という新しい旗印を掲げて頑張ることは重要ですが、若い研究者や院生たちが観光創造学を研究することによって人生が成り立つようにしていかないといけないので、大学等でのポストが必要になりますし、研究資金も必要になります。

いろいろな困難を抱えていますが、これだけ数多くの研究者や院生が観光創造学という新しい学問領域について議論できるのは素晴らしいことであり、私もこの2日間で多くのことを学ばせていただきました。皆さん方のお話に触発されて、また老骨に鞭を打って、1年先輩の小林天心先生とともに頑張っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

西山

石森先生ありがとうございます。これをもって、第0回観光創造研究会をお開きとしたと思います。どうも皆さまありがとうございました。

日本の観光地域はサービス・イノベーションを創出できるか

～デスティネーション管理論とサービス・イノベーション研究の統合に向けて～

内田 純一

1. はじめに

サービス・イノベーション研究が盛んである。これは従来型のモノ製品を中心としたイノベーション研究ではなく、サービスを対象にイノベーション研究を行うものであり、研究の進展はサービス業の一分野である観光サービスにも大きな影響を与えられとされる。しかしながら、観光サービスを対象にしたサービス・イノベーション研究はまだほとんど行われていないのが現状である。

モノ分野のイノベーション論では、企業や事業を研究対象とした技術経営論の立場から行われるミクロ的な研究だけでなく、地域イノベーション論の立場から行われるマクロ的な研究として、産業クラスター（Porter 1990）やトリプルヘリックス（Etzkowitz 2008）の研究がある。観光サービス業ではモノこそ生産しないものの、サービス提供のオペレーションを効率化あるいは革新するためには技術経営論の視点は役立つ。また、観光を基幹産業とする国・地域は世界中に存在しており、観光サービス業が集積する地域のイノベーション論の発展は地域経済の活性化や地域産業の創出につながると考えられる。しかしながら、そのいずれの研究も決して盛んに行われているとは言えない。わずかに、トリプルヘリックスを観光地域に適用すべきという主張が観光経営論の入門書（Page 2011）に見られる程度である。

そこで本研究では、サービスと観光に関わる経営学分野の先行研究を地域の文脈で整理しなおすことによって、観光地域を対象としたサービス・イノベーション研究の発展可能性を展望する。

2. サービス・イノベーション研究の現状

サービス研究に先鞭を付けたのは多国籍 IT 企業の IBM である。彼らは SSME（Service Science, Management and Engineering）と名付けた総合分野的なビジョンを提唱し、サービス・サイエンス（サービス科学）における国際的なイニシアティブを握った（Stauss *et al.* [Eds.] 2008）。IBM は 2009 年時点で SSME に関する学位プログラムあるいはサーティフィケート・プログラムを 50 カ国 250 大学に提供していた。それら欧米を中心とした大学にサービス・サイエンス研究機関ができ、研究を駆動している。なお、これら機関では、SSME という名が示すように、経営学と工学の融合した研究がおこなわれており、現在のサービス・イノベーション研究も文理融合型で学際的に進められている。

サービス・イノベーション研究は当初、金融サービス産業が主要研究分野であった（近藤 2012）。SSME は IBM が主導していることからわかるように、インフォマティックスの要素が強く、IT をサービス・オペレーションの管理に用いたり、IT を用いた全く新しいサービスを開発することに重点がある。最近、オープン・イノベーションを提唱する論者によるサービス・イノベーション研究書がまとめられた（Chesbrough 2011）が、一部に KLM オランダ航空の事例が引用されているほかは、製造業のサービス部門、金融サービス業、そしてネット小売りなどの WEB サービス業の分析が主である。レストラン企業のオペレーションをミクロ視点で捉えたサービス・ブループリントの考え方など、観光に関する記述も一部に含まれるが、観光地域に示唆を与えるようなマクロ視点は持っていない。

また、我が国において 2008 年から文部科学省事業として国内大学 13 校に委託推進された「サービス・イノベーション人材育成推進プログラム」においても、金融サービス、医療・福祉、医薬分野など具体的なサービス産業を対象にした事業が一部に見られたものの、それ以外は産業分野を特定しないサービス産業全般を対象としており、観光産業や観光地域を対象にしたものはなかった。

このように観光サービス業や観光地域という対象は、サービス・イノベーション研究がまだあまり手をつけていない分野であると言える。

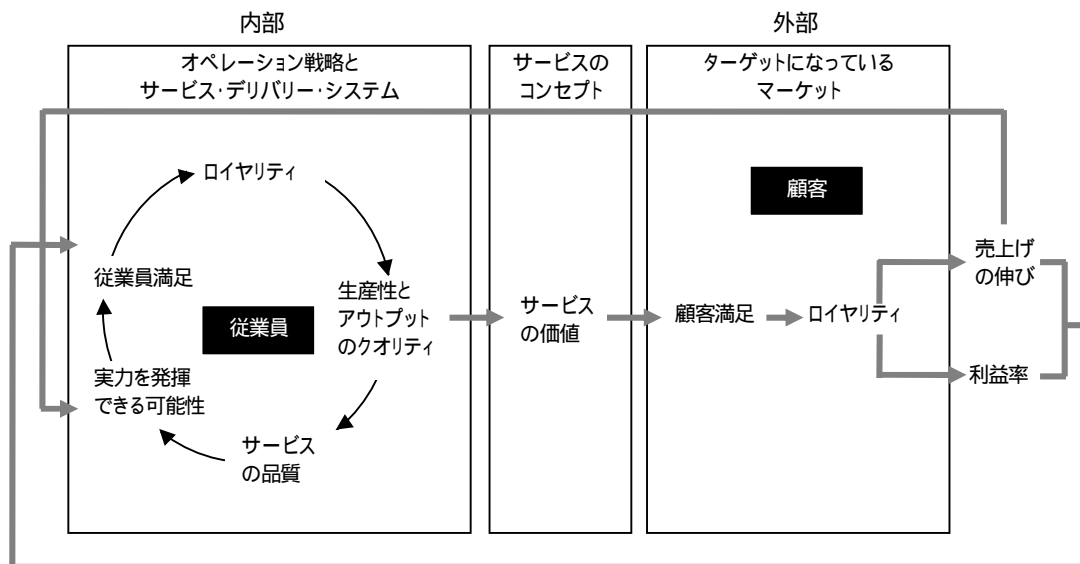
3. サービス経営学の観光地域への適用

サービスにおける最も基本的な公式の一つに「サービス品質＝サービス実績－事前期待」というものがある。すなわちサービスを消費した側にとっての価値の大きさ（品質）とは、実際のサービスがもたらした成果（実績）から、消費以前に期待していた価値の大きさ（期待）を減じたものである。例えば、ある観光地に訪れた二人（AとBとする）がそこで実際に受けたサービスは同じであっても、Bが事前に抱いていた期待が大きすぎれば、Aよりも満足感は少なくなってしまう。事前期待がなさ過ぎてはその地に観光客は訪れないが、事前期待が大きすぎでは不満につながる。ここまでは当然の話である。

しかし、観光地が提供するサービスは複数の事業者が同じ観光地の名の下で提供している。ある温泉地の中で、一つの温泉旅館だけが企業努力に励んでも、他の旅館が手を抜けば、温泉地全体の印象が悪化し、観光客が来なくなってしまうこともある。事前期待の作り方にしても、温泉地共通の期待感をマーケットに訴えることは難しい。熊本県の黒川温泉などはこれを巧妙に行った例であろう。

サービス経営学が上述したような問題への対応に使うことができる枠組みを持っているかどうかについて言及しておく。企業の売上げや利益の視点と、サービスによる顧客満足結びつけた視点として、図1のサービス・プロフィット・チェーンの考え方（Heskett *et al.* 1997）がある。

図1 サービス・プロフィット・チェーン



出所：Heskett *et al.* (1997)

この図1は、観光地域がサービス管理する際にそのまま参考にできる。サービス・プロフィット・チェーンの左側にある内部を地域内、右側にある外部を地域外と読み替え、さらに従業員を観光地において企業の枠を超えて存在するサービススタッフと考えると、観光地がある一定のサービス価値のコンセプトを持ち、その「サービスの価値」を顧客に対して提供しようとする際に「オペレーション戦略とサービス・デリバリー・システム」を地域内において調整することが必要ということになる。結果として右端にある売上げの伸びと利益率は、地域内部のサービス・デリバリー・システム（サービス運用のための仕組み）の充実化のために再投資されるという具合である。

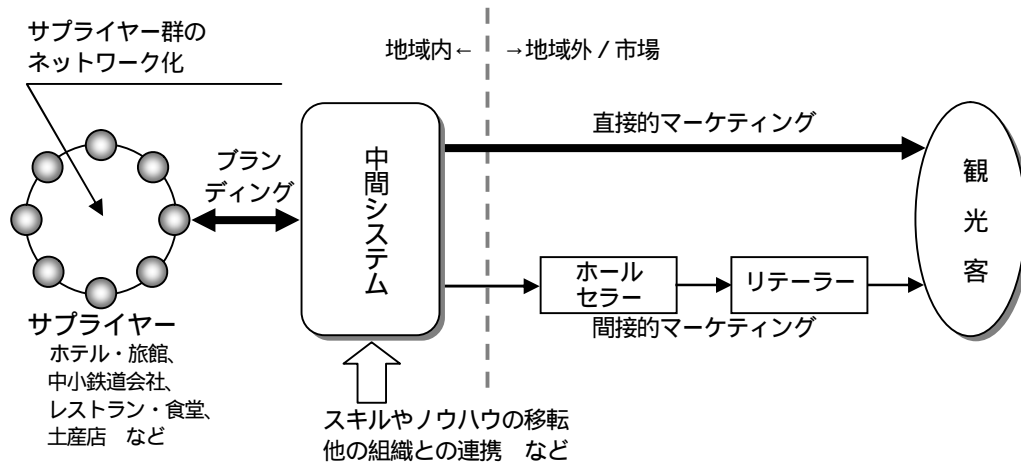
このような考え方によって地域の文脈を反映する試みとしては、沖縄の宿泊ホスピタリティ産業にサービス・プロフィット・チェーンの枠組みを適用した宮城（2013）の先行研究がある。しかし、宮城の研究は、単独のホテル企業の分析に使用されており、同一業種の企業群や関連事業者をサプライヤー・ネットワークの中に考慮しているわけではない。

4. 観光地域ブランディングによるサービス品質のコントロール

内田（2009）は、地域内にある同一業種や関連事業者のサプライヤー・ネットワークと、地域外のマーケットとの連結が考慮されている。地域内にあるサプライヤーは、何らかの調整機能がなければ本来

はバラバラな存在である。ところが、地域に存在する独自の観光資源を用い、複数の事業主体がそれぞれ一定レベル以上の品質を維持するには中間的な別の主体が必要である。図2ではこれを中間システムとし、地域内に向けて多様なサプライヤーを調整する機能をブランディングとしている。この図はマーケティング能力の弱いサプライヤーに代わってスキルを吸収し、それを一括して担うというモデルであり、着地型観光の取り組みを進めるいくつかの地域事例によって実証的に説明されている。

図2 観光地域ブランディングとマーケティング・モデル



出所：内田（2009）

図2における中間システムが、地域内のサービス品質を管理しようとする場合、図1のサービス・プロフィット・チェーンの中心にあるサービス・コンセプトと同様に、内部に向けてはサービス価値を高める方向に、そして外部に向けてはサービス価値を事前期待として正しく伝えることが求められる。サービス公式である「サービス品質＝サービス実績－事前期待」を多主体にわたってコントロールすることである。従来の観光地域においてその役割を果たしてきたのは、地域外の主体であるホールセラーか、その関係会社であることが多い現地ランドオペレーターであった。しかし、そうした主体に任せる場合は、サービス品質を地域側で管理できない。また、サービス・プロフィット・チェーンの図1が示しているように、売上げの伸びを別の地域資源に再投資することもできないし、利益率も自らが管理できないことになる。

つまり、地域内に中間システムの機能を持たせることによりサービス品質のコントロールが可能になり、ひいてはサービス・プロフィット・チェーンというツールを観光地域の側が手にすることにもつながるということである。なお、中間組織ではなく中間システムという用語をあてている理由は、サービス工学において、サービス・デリバリーの連鎖体系の媒介を、代理業者のような組織だけではなく、情報技術すなわちシステムが中継エージェントとなることを想定している点（新井・下村 2006）を考慮したものである。

5. まとめ：デスティネーション管理論とサービス・イノベーション研究の統合

世界の観光地に目を向けると、中間システム的な役割は、DMO（Destination Marketing Organization）と呼ばれる組織がその一翼を担っている（Pike 2008）。DMOは政府組織であることが多く、観光地としての広報・宣伝活動だけでなく、海外の旅行代理店向けに営業活動を行う場合もある。また、外向きのマーケティング機能だけでなく、内向きの管理機能を持っている。例えばオーストラリアなどでは州政府によって設置され、タスマニア州政府観光局のように地域内の観光だけでなく、食やワインのブランド管理を含めて統合的なブランド管理を行う場合もある（山脇 2009）。

また、民間企業がDMOに似た役割を果たす場合もあり、DMC（Destination Management Company）と呼ばれる企業が、地域の競争力を向上させるブランド・コンサルティングなどを行っている（Baker 2007）。これらデスティネーションに関わる経営学的な視点はデスティネーション管理論と総称できる。

デスティネーション管理論には、上述したマーケティングやマネジメントのノウハウが含まれており、

近年は地域ブランディングの視点を合わせ持つ。実践事例についても欧米やオセアニアを中心に豊富に蓄積しつつあるが、我が国にはDMOと呼べる事例はほとんどない。現在の日本でDMOに近い機能を持っていると思われるのが、着地型旅行会社と呼ばれる小規模企業や、いまだ少ないものの徐々に地方に登場しつつある国内ランドオペレーターである。しかし、デスティネーション管理論にもサービス経営学の視点はほとんどない。そのためか、観光地域のサービスを管理するという機能を持ったDMOやDMCについての研究報告も見あたらない。

観光地域においてサービス・イノベーションの活性化を目指す場合、一企業のレベルでその取り組みを活発化させるならば、サービス・イノベーション論のうち、技術経営論的なミクロ視点があればよいだろう。その上で、地域の事情を考慮に加えて行われる研究にも意義がある。とはいえ、日本の温泉街のように、地域内サプライヤー全体を調整(ネットワーク化)しながら、温泉地独自の魅力を形成している例(内田 2011)もある。この調整がサービス管理の面で行われれば、温泉地としてのサービス品質も創出できる。デスティネーション管理論にも、地域全体でTQMを導入するような研究は存在する(Kozak & Baloglu 2011)。しかし、サービス・イノベーション研究の神髄は全く新しいサービスを創出していく点にこそあり、そのような研究は見あたらない。いずれにしろ、観光分野のサービス・イノベーション論においては、モノ分野で主流のミクロ視点だけではなく、地域イノベーション論的なマクロ視点を導入することが必要であるし、そこに研究としての独自性もあるだろう。

結論としては、デスティネーション管理論に不足するサービス創出型の研究を、ミクロ視点とマクロ視点を含む形で進展させる必要がある。こうした研究は、日本の地方部のように小規模サプライヤーの集合体からなる地域に多くの実践的示唆を与えると考えられる。観光地域を対象にしたサービス・イノベーション研究は、デスティネーション管理論と統合しながら発展していく可能性が高い。

【参考文献】

- 新井民夫・下村芳樹(2006)「サービス工学」,『一橋ビジネスレビュー』,54-2,52~69頁。
- 内田純一(2009)「地域ブランディングとマーケティングの戦略」,敷田麻実・内田純一・森重昌之編著『観光の地域ブランディング』,学芸出版社,147~158頁。
- 内田純一(2011)「地域温泉旅館のサービス・マネジメント・システムに関する一考察」,『観光情報学会第3回研究発表会講演論文集』,61~66頁。
- 近藤隆雄(2012)『サービス・イノベーションの理論と方法』生産性出版。
- 宮城博文(2013)『沖縄観光とホスピタリティ産業』晃洋書房。
- 山脇亘一(2009)「政府観光局による地域マーケティング戦略」,敷田麻実・内田純一・森重昌之編著『観光の地域ブランディング』,学芸出版社,129~138頁。
- Baker, B. (2007), *Destination Branding for Small Cities*, Portland: Creative Leap Books.
- Chesbrough, H. (2011) *Open Services Innovation*, San Francisco: Jossey-Bass. (博報堂大学ヒューマンセンタード・オープンイノベーションラボ監修・監訳『オープン・サービス・イノベーション』阪急コミュニケーションズ,2012年)
- Etzkowitz, H. (2008) *The Triple Helix*, New York: Routledge. (三藤利雄・堀内義秀・内田純一訳『トリプルヘリックス』芙蓉書房出版,2009年)
- Heskett, J. M., W. R. Sasser Jr., and L. A. Schlesinger, (1997), *The Service Profit Chain*, New York: The Free press. (島田陽介訳『カスタマー・ロイヤルティの経営』日本経済新聞社,1998年)
- Kozak, M. and S. Baloglu (2011) *Managing and Marketing Tourist Destinations*, New York: Routledge.
- Page, S. (2011), *Tourism Management: An Introduction, 4th edition*, Oxford: Elsevier.
- Pike, S. (2008), *Destination Marketing*, Oxford: Elsevier.
- Porter, M. E. (1990), *Competitive Advantage of Nations*, New York: Free Press. (土岐坤・中辻萬治・小野寺武夫・戸成富美子訳『国の競争優位』ダイヤモンド社,1992年)
- Stauss, B., K. Engelmann, A. Kremer and A. Luhn [Eds.] (2008), *Service Science*, Berlin: Springer-Verlag. (近藤隆雄・日高一義・水田秀行訳『サービス・サイエンスの展開』生産性出版,2009年)

内田純一 資料篇

- ・現在の研究領域と研究プロジェクト（3頁～）
- 観光創造に対する考えと貢献可能性（5頁～）
- ・研究発表資料（7頁～）

1

現在の研究領域

- ・現在の研究領域
 - －サービス経営学、観光目的地のマーケティング、産業論（IT、ツーリズム関連産業）、ブランド論
- ・科研費プロジェクト
 - －サービス・イノベーションを生み出す地域企業のコア形成に関する研究
- ・札幌市大学連携型共同研究

現在の研究プロジェクト①

- 科研費プロジェクト
 - サービス・イノベーションを生み出す地域企業のコア形成に関する研究
 - 個人研究プロジェクト
- 札幌市大学提案型(産学官)共同研究
 - 『「創造都市さっぽろ」のシンボルエリア創出に向けた円山地区のブランド化のための調査・研究』
 - 北翔大&北大、民間事業者、札幌市・市長政策室との共同研究事業

3

現在の研究プロジェクト②

- 学内連携(URAステーションとの共同研究)
 - MICE観光促進のための「観光の見える化」研究
 - 国際プラザ、コンベンション札幌ネットワークの協力も得て、研究継続と研究費の獲得を模索中
- 「観光情報学」教科書執筆プロジェクト
 - 観光情報学標準テキストの出版準備(ゲラ段階)
 - 観光情報学会主要メンバーによる執筆

4

観光創造学に対する考え

- 観光創造という用語を説明するために、内田は2006年に以下文面を専攻パンフ用に作成した
 - － 観光学は確立されたディシプリン(学問分野)ではない。(中略)あらゆる学問分野を総動員し、観光という現象の解明に取り組んできたというのが、今までの観光学の現状なのである。
 - － ただし、観光学が未成熟であるからといって、観光に関する教育が全く発展してこなかったわけではない。事実、(中略)観光教育が、既に内外の大学において行われてきている。ところが、現代においては、(中略)新たな観光の形が顕在化し、従来型の観光教育だけでは、多様化する観光現象に対応仕切れなくなっている。
 - － そもそも激変する社会にあって特定の状況への対応を目指す教育システムは、常にブラッシュアップされ続けなければならないという宿命を背負っている。しかしながら、果たして大学教育というものが、状況に対応するだけの処方箋を出し続ける存在であり続けることには問題はないのであろうか。変わりゆく社会に対して後追いをするのではなく、自ら社会を変えたり、新たな現象を創り出したりすることこそ、これからの大学に課せられた使命ではないのだろうか。
 - － 北海道大学に誕生した観光創造専攻は、まさにこのような創造志向の研究・教育を行うことを旨として発足した。端的に言えば、新たな観光を創る場としてスタートしたのである。したがって、観光創造専攻で学ぶ学生は、単一のディシプリンに沿って勉強するのではなく、自ら研究課題を見つけ、それに応じた研究方法論を選択し、必要な知識を身につけながら、その課題の解決を目指していかねばならない。このような経路を経ることによって、学生たちは将来、職業人・研究者それぞれの舞台において、観光に関わる創造的な仕事を展開していくものと我々は信じている。
- 現在も、観光創造という用語に対する考え方に基本的な変化はない

5

観光創造学への貢献可能性

- 観光の創造とは、私の専門分野に即しつつ、詳しく説明するならば、
 - － 「観光」サービス事業の新たな「創造」である
 - 創造するには組織的な仕組みが必要であり、従来の経営学にはない「観光地における組織論」というものが求められている
 - 観光サービスの高度化のためには、イノベーションが必要であり、発展しつつあるサービス・イノベーション論に対して観光の文脈からの接近が求められる
 - － いずれも内田の現在の研究分野の一部である

6

日本の観光地域は サービス・イノベーション を創出できるか

～デスティネーション管理論とサービス・イノベーション研究の統合に向けて～

内田 純一

1. サービスへの着目①

- サービス経営研究
 - 経営学の中で比較的新しい分野(欧米の20年遅れ)
 - 日本ではサービス・イノベーションに関する研究が2007年より開始されたばかり
 - (「サービス・イノベーションを推進する人材育成プログラム」などの文科省委託事業)
- 日本の新経済成長戦略(2007～)がサービス生産性向上を目標に設定
 - いわゆる「ホスピタリティ産業」だけでなく、製造業においても「モノ+サービス」のサービス部分に、勝ち組企業となるカギがある(例: 米アップル社)

(以上、近藤, 2007)

1. サービスへの着目②

- 観光研究
 - 日本の観光研究には、経営学的な要素は少ない
 - 前述の文科省事業を受託した大学も観光系ではない
 - 経営学におけるサービス研究
 - 経営学系の学部・学科にサービスの研究グループが設置されることは少ない
- 観光研究とサービス経営研究は分離
- ✓ 観光地域に貢献するイノベーション研究が必要

9

資料1①

「サービス・イノベーションを推進する人材育成プログラム」2007年度採択テーマ・大学

テーマ名	大学名(代表者)
サービス・イノベーション・マネージャーの育成 ーサービス・セクターの生産性管理のための人材育成ー	東北大学大学院 (経済学研究科・吉田浩)
顧客志向ビジネス・イノベーションのためのサービス科学に基づく高度専門職業人育成プログラムの開発	筑波大学大学院 (システム情報工学研究科)
社会的サービス価値のデザイン・イノベーター育成プログラム	東京工業大学大学院 (価値システム専攻・木嶋恭一)
サービス価値創造マネジメント	京都大学 (経営管理教育部・小林潔司)
高付加価値を生む、シミュレーション・マインドを持ったミドル・マネージャー育成プログラムの構築	西武文理大学 (サービス経営学部・小玉武生)
サービス・イノベーションの真髄を把握し、活用する人材育成プロジェクト	明治大学大学院 (グローバルビジネス研究科・近藤隆雄)

2007年は35大学が申請・採択は6大学、2008年は40大学が申請・採択は7大学

上記のうち「所期の目的以上の成果があがった」と評価されたのは東京工大のみ。
その他は「所期の目的以下(一部目的以上)」とされた明治大を除き、「所期の計画が達成」と評価。

出所:文科省サイト

10

| 171

資料1②

「サービス・イノベーションを推進する人材育成プログラム」2008年度採択テーマ・大学

テーマ名	大学名(代表)
ビデオ教材によるサービス・マネジメント教育	神戸大学 (経済経営研究所・伊藤宗彦)
データ・マイニング及びモデリングを活かしたサービス・イノベーション	関西大学 (商学部・矢田勝俊)
医薬分野におけるサービス・マーケティング	京都大学 (薬学研究科)
情報科学及び知識科学を基盤とするサービス・イノベーション	北陸先端大 (知識科学研究科・小坂満隆)
インターンシップと文理融合を組み合わせたサービス・イノベーション教育	慶應義塾大学 (理工学研究科)
教育用シミュレーターを活用した金融サービス人材育成	早稲田大学 (ファイナンス研究科)
イノベーションを生み出す「心の習慣」と「イノベーション評価能力」の養成	滋賀大学 (経済学部・只友 景士)

上記のうち「所期の目的以上の成果があがった」と評価されたのは神戸大、関西大のみ。
 その他は「所期の目的以下」とされた滋賀大を除き、「所期の計画が達成」と評価。

出所: 文科省サイト

11

2. サービス・サイエンス

- ・ グローバルIT企業・IBMによる「Eビジネス」の提唱(2000年代)が嚆矢
 - 以降IBMはPC事業売却(現在シェア一位のHPも?)
- ・ 米・競争力協議会「イノベート・アメリカ」発表(2004年末)
 - 別名パルミザーノ・レポート(作成議長は、IBMの会長であったサミュエル・パルミザーノ)
- ・ IBMによるSSME(Service Science, Management, and Engineering)の提唱とイニシアティブ(Stauss, *et.al.* [eds.], 2008)

12

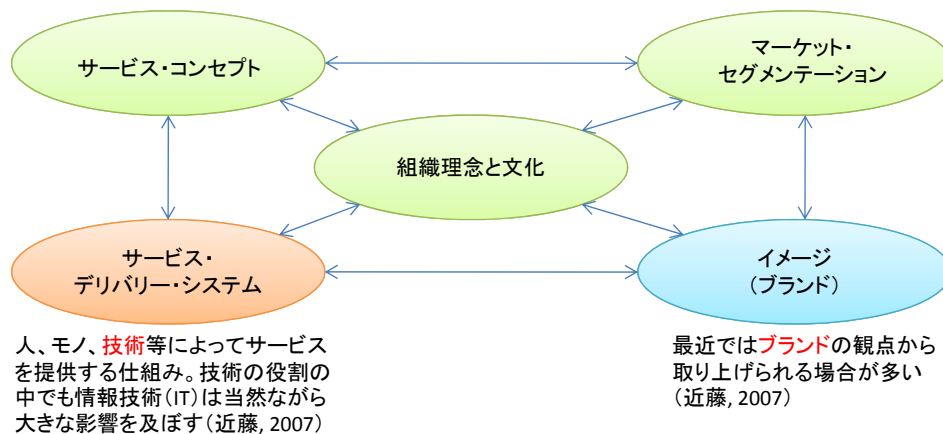
| 172

3. サービスの構成要素

- サービス経営学

- サービス・デリバリー・システムでの技術の重要性

Normann(1991)によるサービス・マネジメント・システムの概念



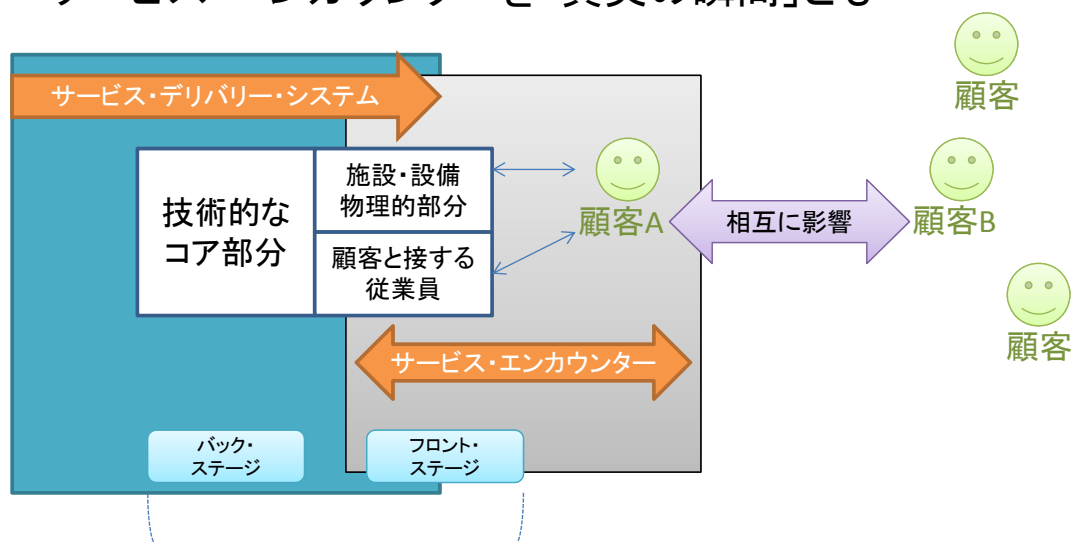
13

資料2

サービス・デリバリー・システムとサービス・エンカウンター

- 顧客価値提供の仕組み = Servuction Framework

- サービス・エンカウンターを「真実の瞬間」とも



出所: Langeard, Bateson, Lovelock & Eiglier (1981)

サービスの劇場アプローチ (Fisk, Grove & John, 2004)

14

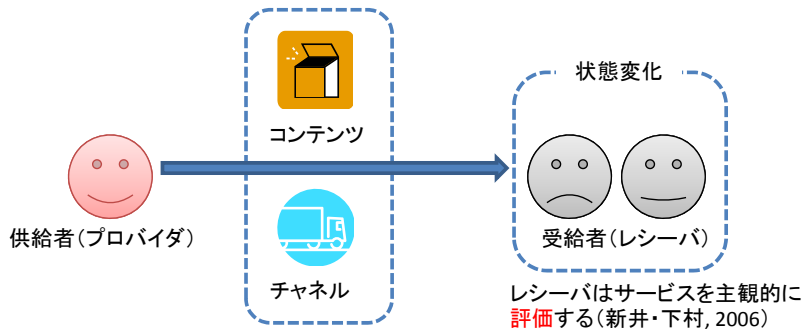
| 173

4. サービス工学

• サービス工学

- 「サービス工学は、サービスを表現し、解析し、評価し、設計するための体系」(新井・下村, 2006)

新井・下村(2006)によるサービス工学におけるサービスの定義

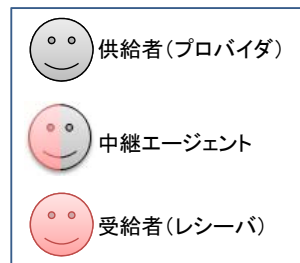


* 行為全体がサービスと定義されている

15

資料3

- サービスの拡大定義(新井・下村, 2006)
 - サービス行為の連鎖も「サービス」



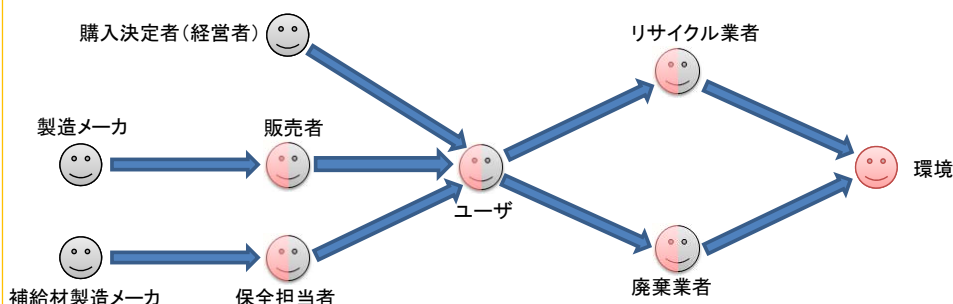
(a) 供給者と受給者の関係(サービスの基本定義)



(b) 中継エージェントの存在(サービスの拡大定義)



(c) 多数のステークホルダーがかかわるサービスの連鎖(パソコンの場合)



16

| 174

5. 先行研究の検討①

- サービス公式 (Heskett, Sassor, and Hart 1990)
 - 「サービス品質＝サービス実績－事前期待」
 - 事前期待は大きすぎても小さすぎてもいけない
- 顧客満足をもたらすのは、「サービス価値」に「サービス満足」を感じ、それを従業員の満足に結びつける仕組み
 - サービス・プロフィット・チェーンの連鎖の必要性 (Heskett, Sassor, and Schlensiger 1997)

17

資料4

サービス・プロフィット・チェーン

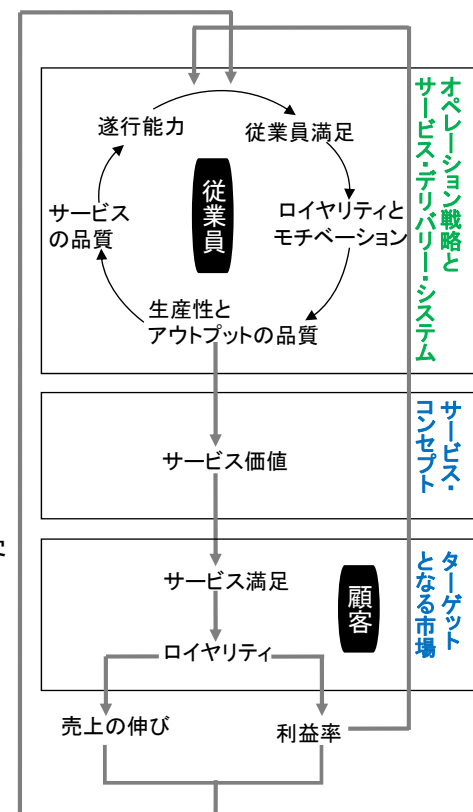
「オペレーション戦略と
サービス・デリバリー・システム」がカギ

例1) サウスウェスト航空

- 機体はボーイング737に特化
- 服装は伝統的にカジュアル
- サプライズ型の「もてなし」

例2) アメリカン・エクスプレスの旅行ビジネス

- メンバーシップ・トラベル・サービスのターゲットは商用客 (エージェントとしての最上級サービスを会員に提供)



出所: Heskett, Sassor and Schlesinger (1997)

18

| 175

5. 先行研究の検討②

- サービス・プロフィット・チェーンによる分析を地方部の観光地に適用することの限界
 1. 観光地は独力でターゲットを開拓できているとはいえない(顧客満足フィードバックを活かしたサイクルが回っていない)
 2. 観光地の顧客満足度は観光地全体が提供するサービスに左右される(ひとつの施設・ツアーが単体でサービス評価を得るわけではない)

19

6. 着眼点

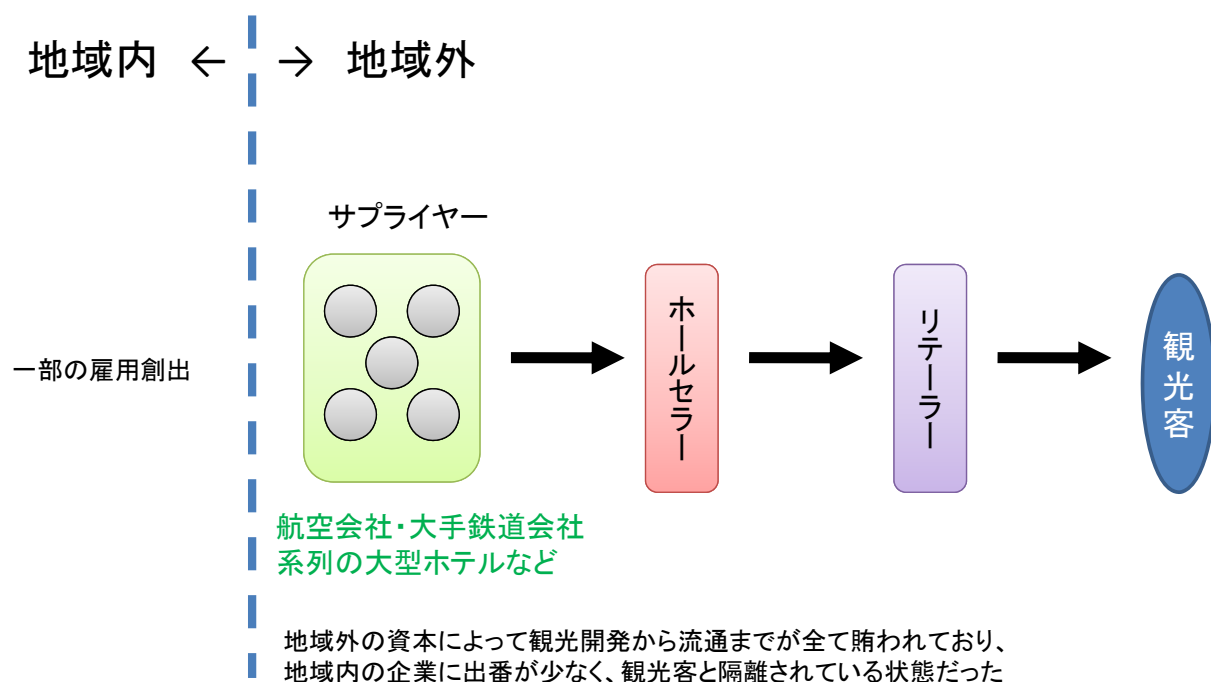
- 地域型観光業(サプライヤー)のボトルネック
 - 中継エージェントの必要性
 - 例えば、中間システムという用語は学術用語「中間組織」でも、業界用語「代理店」でもなく、人工物(WEB等)が中継する可能性に着目している(内田, 2009)
 - いま期待される機能は調整とネットワーク化
 - 観光サービス業の場合、旅行の行程全体を商品化する特性がある。よって、観光客に対して、サービス品質を一定に調整するDMOのような組織的仕掛けが必要
- サービスにおけるブランディングの重要性
 - ✓ 消費者の意思決定を単純化する(Keller, 2008)

20

| 176

資料5

マスツーリズムの流通モデル

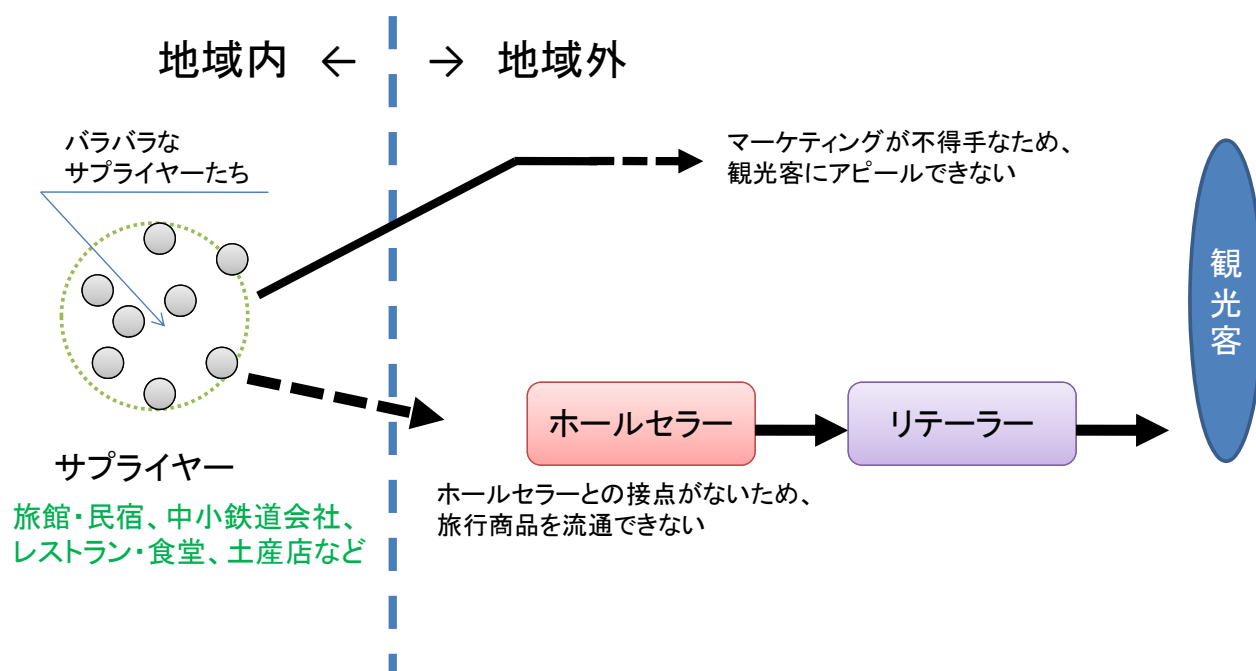


出所：内田（2009）

21

資料6

ニューツーリズムの流通課題

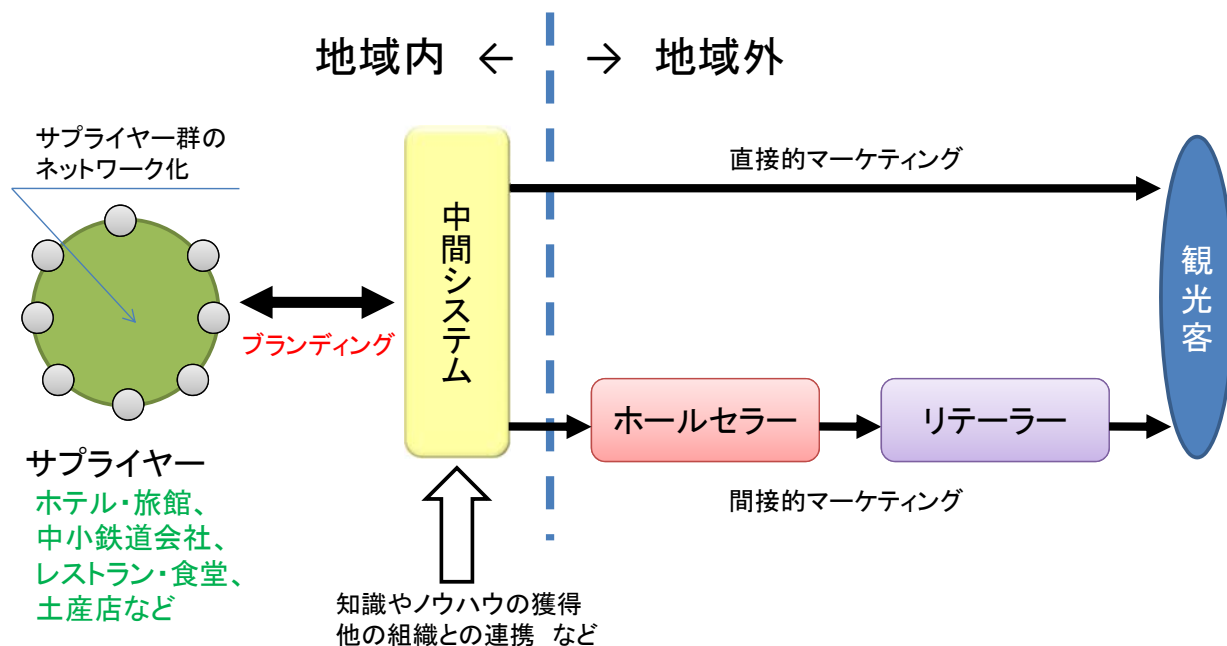


出所：内田（2009）

22
| 177

資料7

DMO型の流通手法



出所: 内田 (2009)

23

9. 観光地のビジネスモデル分析

- ISOがオペレーションの要
 - マニュアル化しないタイプの運営スタイルも多い
 - 宿泊業などではISO9001が求める文書化徹底で解決
- 地方のITシステムは標準の枠を超えない
 - 例えば、インターネット直販部門の設置などで、地方から直接的マーケティングに対応すべき
- サービス・デリバリー・システムとITが融和
 - ✓ サービス経営が主張するコンセプトやターゲットの明確化によって、地域内にサービスの行為や活動が連鎖される体系をつくりあげられるはず

24

| 178

10. 地域エコシステム分析

- 地域全体のブランディング
 - サプライヤー群のネットワーク化を実践
- 観光協会をマーケティングの担い手にする
 - 利害調整組織でなく直接・間接にマーケティングを行おうとする点で着地型旅行会社というより、DMO型に近いタイプが求められる
- 地域ブランドを作る中核的企業の役割
 - ✓ 地域からイノベーションを生むためには、主体的（かつ中間システムの的）な動きをする企業が必要

25

11. 今後の課題

- 本発表は、地域全体のサービス品質の向上あるいはサービス・イノベーションの創出には中間システムとなる主体（例えばDMOなど）が必要だと主張しているに過ぎない
 - それをどのような手法・方法論で行うのかが課題として残されている
 - ミクロ・マクロ・リンケージをどう整理するかについては産業論において最近提唱される地域エコシステム論を取り入れる。ただし、地方の観光産業はサービスの面で未成熟なため、観光以外のサービス産業（ITESなど）の文脈で研究を進める必要があるかもしれない

26

参考文献(予稿掲載以外のもの)

- ・陳彦丞(2011)「観光組織のナレッジ・マネジメントに関する研究—鶴雅グループの事例を中心に—」, 北海道大学修士論文
- ・Fisk R. P., S. J. Grove and J. J. John, 2004, *Interactive Service Marketing*, 2nd edition, Houghton Mifflin Company. (小川孔輔・戸谷圭子監訳(2005)『サービス・マーケティング入門』法政大学出版局)
- ・Heskett, J. L., W. E. Sasser and C. W. L. Hart, 1990, *Service Breakthrough*, Free Press.
- ・Keller, K. L., 2008, *Strategic Brand Management*, 3rd edition, Pearson Education, Inc. (恩蔵直人監訳(2010)『戦略的ブランド・マネジメント(第3版)』東急エージェンシー)
- ・近藤隆雄(2007)『サービス・マネジメント入門(第3版)』生産性出版
- ・Langeard, E., J. E. G. Bateson, C. Lovelock & P. Eiglier, 1981, *Service Marketing*, Marketing Science Institute.
- ・Norman, R., 1991, *Service Management*, 2nd edition, John Wiley & Sons. (近藤隆雄訳(1993)『サービス・マネジメント』NTT出版)

27

北海道大学観光学高等研究センター共同研究会

「観光創造研究会」設立準備会

「観光創造学を考える」研究会録

2013 年 11 月 23 日, 24 日

北海道大学遠友学舎にて開催

2014 年 7 月 1 日 発行

編集：北海道大学観光学高等研究センター センター長 西山徳明

研究会録編集委員 池ノ上真一 高松郷子 平井健文 青木陽介 川本雅也

発行：北海道大学観光学高等研究センター

〒060-0817

北海道札幌市北区北 17 条西 8 丁目

TEL 011-706-5382